

寺町旧域（妙満寺跡・本能寺跡）

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一六―一八

寺町旧域
（妙満寺跡・本能寺跡）

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

寺町旧域（妙満寺跡・本能寺跡）

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、新庁舎整備事業に伴う寺町旧域の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

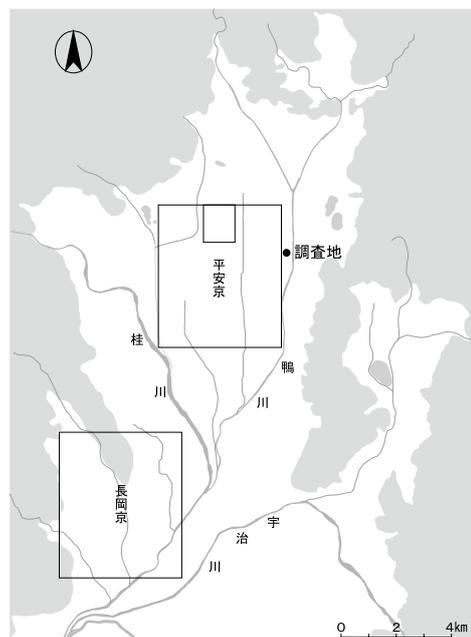
平成30年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 寺町旧域（京都市番号 15 S 071）
- 2 調査所在地 京都市中京区押小路通河原町西入榎木町450番1
京都市中京区寺町通御池上る上本能寺町488番地ほか
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2015年9月8日～2017年3月30日
- 5 調査面積 5,019㎡
- 6 調査担当者 小檜山一良・関広尚世・伊藤 潔・辻川哲郎・三宮昌弘・後川恵太郎
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「御所」・「三条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 1区は1001から、2区は2001から、3区は3001から、4区は5001から、5区は9001から通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。ただし、柱列は別に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 小檜山一良・後川恵太郎・上村和直
- 14 執筆分担 小檜山一良：1、2、3-(2)～(9)、4-(1)・(2)・(5)～(8)、5
後川恵太郎：3-(1)・(3)～(9)、4-(4)・(7)、5
上村和直：4-(3)

- 15 備 考 付章：北野信彦・関 晃史
上記以外に調査・整理ならびに
本書作成には、調査業務職員及
び資料業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 発掘調査の経過	2
2. 調査地の位置と環境	5
(1) 位置と環境	5
(2) 周辺の調査	7
3. 遺 構	11
(1) 基本層序	11
(2) 検出遺構の概要	13
(3) 北調査区第6面の遺構	13
(4) 北調査区第5面の遺構	17
(5) 北調査区第4面の遺構	20
(6) 北調査区第3面の遺構	25
(7) 北調査区第2面の遺構	31
(8) 北調査区第1面の遺構	38
(9) 南調査区の遺構	46
4. 遺 物	49
(1) 出土遺物の概要	49
(2) 土器類・土製品	50
(3) 鎌倉時代以前の瓦類	66
(4) 近世の瓦類	75
(5) 銭貨	90
(6) 金属製品	90
(7) 石製品	91
(8) ガラス製品	92
5. ま と め	93
(1) 古墳時代以前（第6面）	93
(2) 平安時代（第6面）	93
(3) 鎌倉時代から室町時代（第5面）	93
(4) 桃山時代から江戸時代（第4～2面）	96
(5) 江戸時代末から明治時代（第1面）	99
付章 出土銅製品の材質調査	100

図 版 目 次

- 図版 1 遺構 調査区配置図 (1 : 1,000)
- 図版 2 遺構 北調査区 第 6 面遺構平面図 1 (1 : 300)
- 図版 3 遺構 北調査区 第 6 面遺構平面図 2 (1 : 300)
- 図版 4 遺構 北調査区 第 5 面遺構平面図 1 (1 : 300)
- 図版 5 遺構 北調査区 第 5 面遺構平面図 2 (1 : 300)
- 図版 6 遺構 北調査区 第 4 面遺構平面図 1 (1 : 300)
- 図版 7 遺構 北調査区 第 4 面遺構平面図 2 (1 : 300)
- 図版 8 遺構 北調査区 第 3 面遺構平面図 1 (1 : 300)
- 図版 9 遺構 北調査区 第 3 面遺構平面図 2 (1 : 300)
- 図版 10 遺構 北調査区 第 2 面遺構平面図 1 (1 : 300)
- 図版 11 遺構 北調査区 第 2 面遺構平面図 2 (1 : 300)
- 図版 12 遺構 北調査区 第 1 面遺構平面図 1 (1 : 300)
- 図版 13 遺構 北調査区 第 1 面遺構平面図 2 (1 : 300)
- 図版 14 遺構 北調査区 西壁断面図 1 (1 : 80)
- 図版 15 遺構 北調査区 西壁断面図 2 (1 : 80)
- 図版 16 遺構 北調査区 南壁断面図 (1 : 80)
- 図版 17 遺構 南調査区 遺構平面図・東壁断面図 (1 : 250)
- 図版 18 遺構 北調査区第 5 面 井戸 8121・4420・8113・8009 実測図 (1 : 50)
- 図版 19 遺構 北調査区第 5 面 井戸 8010・7975・5990、石敷 2722 実測図 (1 : 50)
- 図版 20 遺構 北調査区 本堂東西セクション断面図 (1 : 50)
- 図版 21 遺構 北調査区 本堂南北セクション断面図 (1 : 50)
- 図版 22 遺構 北調査区 祖師堂東西セクション断面図 (1 : 50)
- 図版 23 遺構 北調査区 祖師堂南北セクション断面図 (1 : 50)
- 図版 24 遺構 北調査区第 4 面 本堂 I 柱列 1390、石室 3813 実測図 (1 : 50)
- 図版 25 遺構 北調査区第 4 面 廊 7665・7504、瓦組溝 7509・5700 実測図 (1 : 50、1 : 80)
- 図版 26 遺構 北調査区第 4 面 瓦組 3964、埋甕 3889、集石 6473・7095 実測図 (1 : 20)
- 図版 27 遺構 北調査区第 4 面 井戸 3396・3940・3949、石組 6655 実測図 (1 : 50)
- 図版 28 遺構 北調査区第 4 面 井戸 2140・6144 実測図 (1 : 50)
- 図版 29 遺構 北調査区第 4 面 柱列 7376・7117・2119 実測図 (1 : 50)
- 図版 30 遺構 北調査区第 3 面 本堂 II 柱列 1308・1064・1388 実測図 (1 : 80)
- 図版 31 遺構 北調査区第 3 面 本堂 II 後拝実測図 (1 : 50)
- 図版 32 遺構 北調査区第 3 面 石列 1552、石組 5400、集石 3617・6232・6485 実測図

(1 : 30、1 : 50)

- 図版33 遺構 北調査区第3面 柱列7224、石敷5680、集石7275実測図 (1 : 20、1 : 50)
- 図版34 遺構 北調査区第3面 祖師堂Ⅱ平面図 (1 : 100)
- 図版35 遺構 北調査区第3面 祖師堂Ⅱ関連遺構断面図 (1 : 50、1 : 80)
- 図版36 遺構 北調査区第3面 柱列3176、石室2704実測図 (1 : 80)
- 図版37 遺構 北調査区第3面 石列5365、井戸3950、瓦組7202、集石7333・6801実測図
(1 : 30、1 : 50)
- 図版38 遺構 北調査区第3面 石敷2054、石室2104、墓7343・7399実測図 (1 : 50)
- 図版39 遺構 北調査区第2面 柱列1039、集石5017、井戸3399・3400実測図 (1 : 50、1 : 80)
- 図版40 遺構 北調査区第2面 廊6507・石列6400実測図 (1 : 50)
- 図版41 遺構 北調査区第2面 庫裡Ⅲ実測図 (1 : 120)
- 図版42 遺構 北調査区第2面 地業2452周辺遺構平面図 (1 : 120)
- 図版43 遺構 北調査区第2面 地業2452周辺遺構断面図 (1 : 50)
- 図版44 遺構 北調査区第2面 埋甕2235・3069・3072・6708実測図 (1 : 20)
- 図版45 遺構 北調査区第2面 井戸2620・2465・3109、瓦組3110実測図 (1 : 50)
- 図版46 遺構 北調査区第2面 井戸6320・6811、石組6207・6525、瓦列2037実測図 (1 : 50)
- 図版47 遺構 北調査区第2面 瓦組6216、埋甕2039・2061実測図 (1 : 20)
- 図版48 遺構 北調査区第1面 本堂Ⅳ後拝実測図 (1 : 80)
- 図版49 遺構 北調査区第1面 本堂Ⅳ礎石据付穴群実測図 (1 : 150)
- 図版50 遺構 北調査区第1面 祖師堂Ⅳ前拝実測図 (1 : 80)
- 図版51 遺構 北調査区第1面 祖師堂Ⅳ礎石据付穴群実測図 (1 : 120)
- 図版52 遺構 北調査区第1面 祖師堂Ⅳ基壇東半実測図 (1 : 100)
- 図版53 遺構 北調査区第1面 井戸5212・6214・6241実測図 (1 : 50)
- 図版54 遺構 北調査区第1面 石組溝6321・井戸6320新実測図 (1 : 50)
- 図版55 遺構 北調査区第1面 井戸6151・6283・6771、石樋6650実測図 (1 : 50)
- 図版56 遺構 北調査区第1面 池2004実測図 (1 : 100)
- 図版57 遺構 北調査区第1面 方丈Ⅳ実測図 (1 : 100)
- 図版58 遺構 北調査区第1面 瓦列6661、石列6660・6774・2056実測図 (1 : 50)
- 図版59 遺構 北調査区第1面 井戸6139、池6769、瓦列6690、集石6145実測図
(1 : 20、1 : 50)
- 図版60 遺物 土器類実測図1 (1 : 4)
- 図版61 遺物 土器類実測図2 (1 : 4)
- 図版62 遺物 土器類実測図3 (1 : 4、157のみ1 : 6)
- 図版63 遺物 土器類実測図4 (1 : 4)
- 図版64 遺物 土器類実測図5 (1 : 4)

- 図版65 遺物 土器類実測図6 (1:4)
- 図版66 遺物 土器類実測図7 (1:4)
- 図版67 遺物 土器類実測図8 (1:4)
- 図版68 遺物 土器類実測図9 (1:4)
- 図版69 遺物 土器類実測図10 (1:4)
- 図版70 遺物 土器類実測図11 (1:4)
- 図版71 遺物 土器類実測図12 (1:4)
- 図版72 遺物 土器類実測図13 (1:4)
- 図版73 遺物 土器類実測図14 (1:4)
- 図版74 遺物 土器類実測図15 (1:4)
- 図版75 遺物 土器類実測図16 (1:4、557のみ1:6)
- 図版76 遺物 土器類実測図17 (1:6)
- 図版77 遺物 土器類実測図18 (1:6)
- 図版78 遺物 土器類実測図19 (1:4、613のみ1:6)
- 図版79 遺物 土器類実測図20 (1:4)
- 図版80 遺物 鎌倉時代以前の瓦類拓影及び実測図1 (1:4)
- 図版81 遺物 鎌倉時代以前の瓦類拓影及び実測図2 (1:4)
- 図版82 遺物 鎌倉時代以前の瓦類拓影及び実測図3 (1:4)
- 図版83 遺物 鎌倉時代以前の瓦類拓影及び実測図4 (1:4)
- 図版84 遺物 鎌倉時代以前の瓦類拓影及び実測図5 (1:4)
- 図版85 遺物 鎌倉時代以前の瓦類拓影及び実測図6 (1:4)
- 図版86 遺物 鎌倉時代以前の瓦類拓影及び実測図7 (1:4)
- 図版87 遺物 鎌倉時代以前の瓦類拓影及び実測図8 (1:4)
- 図版88 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図1 (1:4)
- 図版89 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図2 (1:4)
- 図版90 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図3 (1:4)
- 図版91 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図4 (1:4)
- 図版92 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図5 (1:4)
- 図版93 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図6 (1:4)
- 図版94 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図7 (1:4)
- 図版95 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図8 (1:4)
- 図版96 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図9 (1:4)
- 図版97 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図10 (1:4)
- 図版98 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図11 (1:4)
- 図版99 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図12 (1:4)

- 図版100 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図13 (1 : 4)
- 図版101 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図14 (1 : 4)
- 図版102 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図15 (1 : 4)
- 図版103 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図16 (1 : 4)
- 図版104 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図17 (1 : 4)
- 図版105 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図18 (1 : 6)
- 図版106 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図19 (1 : 4、瓦246のみ1 : 6)
- 図版107 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図20 (1 : 6)
- 図版108 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図21 (1 : 4)
- 図版109 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図22 (1 : 4)
- 図版110 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図23 (1 : 4)
- 図版111 遺物 近世の瓦類拓影及び実測図24 (1 : 4、刻印1 : 2)
- 図版112 遺物 銭貨拓影 (1 : 1)
- 図版113 遺物 金属製品、ガラス製品実測図 (1 : 4、金4～11は1 : 2、ガ1は1 : 1)
- 図版114 遺物 石製品実測図 (1 : 4、石13～18は1 : 8)
- 図版115 遺構
- 1 北調査区 南西部 第6面全景 (東から)
 - 2 北調査区 第6面 井戸5966 (東から)
 - 3 北調査区 第6面 溝群2223 (北から)
- 図版116 遺構
- 1 北調査区 北西部 第5面全景 (北西から)
 - 2 北調査区 北東部 第5面全景 (南東から)
- 図版117 遺構
- 1 北調査区 第5面 井戸4420 (北から)
 - 2 北調査区 第5面 井戸5990 (南から)
 - 3 北調査区 第5面 墓3817 (北西から)
 - 4 北調査区 第5面 石敷2722 (東から)
- 図版118 遺構
- 1 北調査区 南東部 第4面全景 (北西から)
 - 2 北調査区 第4面 本堂I (北西から)
- 図版119 遺構
- 1 北調査区 第4面 井戸3396 (南西から)
 - 2 北調査区 第4面 井戸3949 (南西から)
 - 3 北調査区 第4面 井戸2140 (北西から)
- 図版120 遺構
- 1 北調査区 第4面 瓦組3964 (東から)
 - 2 北調査区 第4面 井戸6144 (東から)
 - 3 北調査区 第4面 塔頭 (東から)
- 図版121 遺構
- 1 北調査区 北東部 第3面全景 (南東から)
 - 2 北調査区 東中央部 第3面全景 (南東から)
- 図版122 遺構
- 1 北調査区 南東部 第3面全景 (北から)

- 2 北調査区 第3面 本堂Ⅱ（北西から）
- 図版123 遺構 1 北調査区 第3面 本堂Ⅱ太鼓堂3430（北から）
2 北調査区 第3面 祖師堂Ⅱ周辺（西北西から）
- 図版124 遺構 1 北調査区 第3面 祖師堂Ⅱ、方丈Ⅱ（北から）
2 北調査区 第3面 祖師堂Ⅱ基壇（北西から）
- 図版125 遺構 1 北調査区 第3面 石敷5680（北から）
2 北調査区 第3面 石列5365（北西から）
3 北調査区 第3面 石室2704（北から）
- 図版126 遺構 1 北調査区 第3面 井戸3950（東から）
2 北調査区 第3面 石敷2054（東から）
3 北調査区 北東部 第2面全景（南東から）
- 図版127 遺構 1 北調査区 南東部 第2面全景（南東から）
2 北調査区 第2面 祖師堂Ⅲ（西北西から）
- 図版128 遺構 1 北調査区 第2面 祖師堂Ⅲ石列6400、廊6507（東から）
2 北調査区 第2面 鐘楼6420（北から）
- 図版129 遺構 1 北調査区 第2面 庫裡Ⅲ（南東から）
2 北調査区 第2面 方丈Ⅲ地業2452（西から）
3 北調査区 第2面 埋甕3069・3072（北東から）
- 図版130 遺構 1 北調査区 第2面 井戸2620（西から）
2 北調査区 第2面 埋甕2039（北から）
3 北調査区 北西部 第1面全景（北西から）
- 図版131 遺構 1 北調査区 南東部 第1面全景（北から）
2 北調査区 第1面 本堂Ⅳ後拝北西角（北西から）
- 図版132 遺構 1 北調査区 第1面 祖師堂Ⅳ（西北西から）
2 北調査区 第1面 祖師堂Ⅳ前拝（北西から）
3 北調査区 第1面 祖師堂Ⅳ前拝南西隅（南東から）
- 図版133 遺構 1 北調査区 第1面 池2004（東から）
2 北調査区 第1面 池2004（南東から）
- 図版134 遺構 1 北調査区 第1面 石組溝6321、井戸6320（北東から、左：新段階・右：古段階）
2 北調査区 第1面 方丈Ⅳ（東から）
- 図版135 遺構 1 北調査区 第1面 塔頭中央部石列6760・6674（東から）
2 北調査区 第1面 塔頭東部石列2056（東から）
- 図版136 遺構 1 南調査区 第1面全景（北から）
2 南調査区 井戸9001（南から）
3 南調査区 石列9020（南から）

- 図版137 遺物 平安時代から鎌倉時代の土器類
- 図版138 遺物 室町時代から江戸時代の土器類
- 図版139 遺物 江戸時代の土器類1
- 図版140 遺物 江戸時代の土器類2
- 図版141 遺物 江戸時代の土器類3
- 図版142 遺物 鎌倉時代以前の軒丸瓦
- 図版143 遺物 鎌倉時代以前の軒平瓦・緑釉丸瓦・緑釉熨斗瓦
- 図版144 遺物 近世の軒丸瓦
- 図版145 遺物 近世の軒平瓦・軒棧瓦
- 図版146 遺物 金属製品、石製品
- 図版147 絵図 中井家文書「美濃守様御本陣妙満寺絵図」
- 図版148 絵図 「天明焼失前之古図」
- 図版149 絵図 「天明類焼後元治兵燹前之古図」
- 図版150 絵図 「現在絵図面」

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,500）	2
図3	北調査区北西部（1区）調査前全景（南東から）	3
図4	北調査区南東部（2区）調査前全景（南東から）	3
図5	北調査区北東部（3区）調査前全景（北西から）	3
図6	北調査区南西部（4区）調査前全景（北東から）	3
図7	南調査区（5区）調査前全景（南東から）	3
図8	作業状況（南西から）	3
図9	中学生チャレンジ体験（東から）	3
図10	第2回現地説明会（南西から）	3
図11	「寛永十四年洛中絵図」部分	6
図12	「増補再板京大絵図」部分	6
図13	周辺調査位置図（1：2,500）	7
図14	基本層位図（1：40）	11
図15	第6面 井戸5824・5966・8135実測図（1：50）	14
図16	第5面 墓3817実測図（1：20）	19
図17	第1面 土坑5220実測図（1：20）	40

図18	井戸9001実測図（1：50）	46
図19	井戸9003・9032実測図（1：50）	47
図20	妙満寺軒瓦及び菊丸瓦法量分布図	87
図21	北調査区遺構変遷図1（1：1,000）	94
図22	北調査区遺構変遷図2（1：1,000）	95
図23	南調査区遺構変遷図（1：800）	95
図24	銅製品拡大写真1	101
図25	銅製品拡大写真2	102
図26	据付型蛍光X線分析結果1	103
図27	据付型蛍光X線分析結果2	104

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	8
表2	遺構概要表	12
表3	遺物概要表	49
表4	鎌倉時代以前の軒瓦 出土数量表	67
表5	鎌倉時代以前の軒瓦 遺構別出土数量表	68
表6	近世の瓦 主要遺構別出土数量表	76
表7	近世の刻印瓦集計表	84
表8	妙満寺屋瓦構造の変遷	87
表9	可搬型蛍光X線分析結果	102

付 表 目 次

付表1	土器類観察表	105
付表2	鎌倉時代以前の軒瓦観察表	119
付表3	近世の瓦観察表	126
付表4	銭貨観察表	140
付表5	金属製品観察表	141
付表6	石製品観察表	142
付表7	ガラス製品観察表	142

寺町旧域（妙満寺跡・本能寺跡）

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

今回の調査は、京都市中京区押小路通河原町西入榎木町450番地1他で実施した京都市新庁舎整備事業に伴う第1期埋蔵文化財発掘調査である。

調査地は、寺町旧域（妙満寺跡・本能寺跡）にあたる。寺町は豊臣秀吉によって洛中の外郭線である御土居の内側、寺町通の東側に沿って築かれた寺院街であり、平安京の東京極大路のさらに東側に位置する。

妙満寺（顕本法華宗）は、天正十一年（1583）に四条堀川から、当地の寺町二条に移転して以来、昭和四十三年（1968）まで本堂・祖師堂・方丈などが建ち並ぶ伽藍があった。また、本能寺（本門法華宗）は妙満寺の南に隣接し、天正年間に四条坊門西洞院から現在地に移転している。

新庁舎建設工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）から発掘調査の実施が必要との指導がなされた。これを受けて公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が文化財保護課の指導の下、発掘調査を実施した。調査は、寺町の状況を確認することと、当地の歴史の変遷を考古学的に解明することを目的とした。

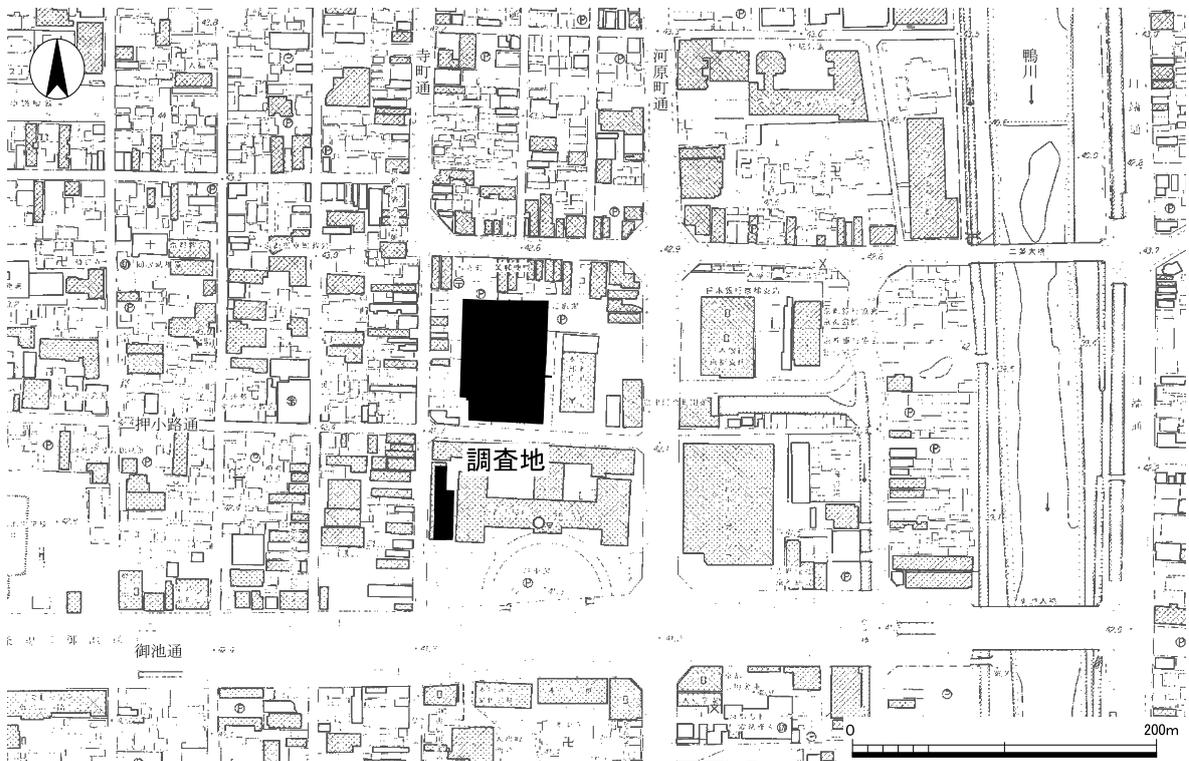


図1 調査地位置図（1：5,000）

(2) 発掘調査の経過 (図1～10、図版1)

調査区は、京都市行財政局総務部庁舎管理課との協議および、文化財保護課の指導により設定した。京都市役所本庁舎の北に北調査区(1～4区)、西に南調査区(5区)が位置している(図版1)。調査面積は、2区で方丈の東端部と4区で鐘樓の南西部を確認するために拡張したことにより、最終的に5,019㎡となった。敷地内で使用していた会議室棟や駐輪場の解体などの調整と、残土仮置き場確保のために2・4・5区では調査区を2分割して調査を実施した。

2015年9月7日から調査に先立って、外周フェンスの設置、事務所設置などの準備工を行った。9月8日から調査地の南東隅にあたる2区南半部の重機掘削を開始し、地表下約0.6mまでの近現代層を除去した。以降は人力で掘削作業を進め、第1面の元治元年(1864)火災後、第2面の天明八年(1788)火災後、第3面の天明火災以前、第4面の天正十一年(1583)移転期、第5面の鎌倉時代から室町時代、第6面の平安時代以前の遺構面を順次調査した。それぞれの面で全景写真・個別写真を撮影し、平面図・断面図などの図面を作成した。また、遺構の状況に応じてオルソ測量も併用した。その後、砂礫層の断割りを行い下層の堆積層を記録した。南半部の調査終了後、北半部

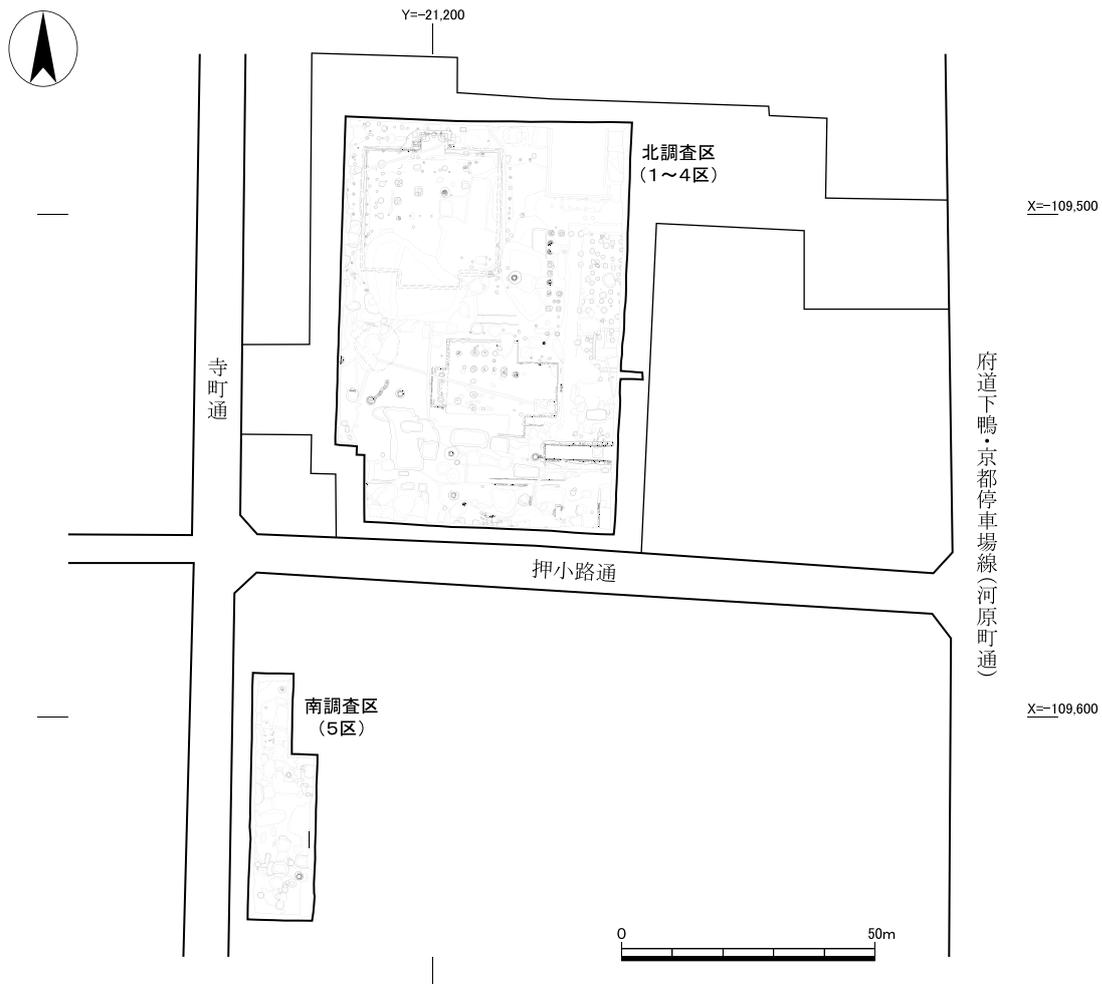


図2 調査区配置図 (1 : 1,500)



図3 北調査区北西部(1区)調査前全景(南東から)



図4 北調査区南東部(2区)調査前全景(南東から)



図5 北調査区北東部(3区)調査前全景(北西から)



図6 北調査区南西部(4区)調査前全景(北東から)



図7 南調査区(5区)調査前全景(南東から)



図8 作業状況(南西から)



図9 中学生チャレンジ体験(東から)



図10 第2回現地説明会(南西から)

に仮置きしていた掘削土で埋め戻しを実施した。

11月10日から2区北半部の重機掘削を開始し、各遺構面の調査を行った。以後、期間を重複しながら、1区・3区・4区北半・5区北半・5区南半・4区南半の順に調査した。5区は、西庁舎の基礎が地中深くまでおよび、遺構が破壊されていたため1面だけの調査となった。なお、調査期間中には適時、アスファルトや出土したコンクリートガラ・旧埋設管類・石材などを場外に搬出して処分した。

2017年3月30日には、すべての機材を撤収し、調査地を引き渡した。

調査中は適宜、文化財保護課の臨検を受け、さらに、國下多美樹検証委員（龍谷大学）、若林邦彦検証委員（同志社大学）により現地検証を受けた。

また、2016年6月8日、11月9日には、中学生チャレンジ体験を受け入れ、2016年8月3・5日には京都市考古資料館の夏期教室を受け入れた。

さらに、発掘調査の成果を公表するために、事前に広報発表を行ったうえで、2016年2月27日と11月5日には現地説明会を開催した。ともに約400名の市民の参加があった。

調査及び報告書作成にあたり以下の方々からご教示を得た。記して感謝する次第である。

芦田淳一（総持寺寺史編纂調査研究員）、網 伸也（近畿大学）、市川 創（大阪府教育庁文化財保護課調査事業グループ）、上原真人（京都大学）、大藪由美子（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）、北野信彦（龍谷大学）、佐伯純也（一般財団法人米子市文化財団）、西山良平（京都大学）、能芝 勉（かながわ考古学財団）、平尾政幸、豆谷浩之（大阪歴史博物館）、山本 琢（京都府立京都学・歴史館資料課）、湯原正純（総本山妙満寺）、吉住恭子（京都市歴史資料館）

（五十音順、敬称略）

2. 調査地の位置と環境

(1) 位置と環境 (図11・12、図版147～150)

調査地は、京都盆地の中央東側にあたり、鴨川が形成した北から南に緩やかに傾斜する扇状地に位置し、現在の鴨川西岸からは約300m西にあたる。

平安時代には、平安京左京の東外側約40mに位置し、北調査区は左京三条四坊十六町の東、南調査区は同十五町の東にあたる。

文献によれば、十五町には、平安時代前期に参議藤原綱継「山井里第」¹⁾、中期には右大臣藤原定方「山井殿」があり、その後、山井殿は藤原道長の手に渡り、その妻の源明子と娘の藤原寛子の邸宅となる²⁾。後期には「山井殿」・高階宗章「京極押小路亭」³⁾の宅地となっている。十六町は、鎌倉時代に関白藤原道家の「南町第」⁴⁾や牛童丸という人物の家⁵⁾があり、また、中宮御匣殿里亭⁶⁾もあつたとされる。

桃山時代には、豊臣秀吉の京都改造により、御所の整備と公家町の新設、聚楽第と武家町の新設、短冊型の地割施工、御土居の築造など大土木事業が行われたが、鴨川に面する御土居の内側には、京内に散在していた寺院を集中して寺町が新設され、当地は大きく変貌する。その際、妙満寺は、天正十一年(1583)に四条堀川から寺町二条に移転する。「寛永十四年洛中絵図」⁷⁾(図11)によれば、妙満寺の北に要法寺、南に本能寺が建ち並んで寺町の寺院街が形成されている。妙満寺の寺域は、北は二条通、東は御土居、南は押小路の南、西は寺町通の範囲であった。また、「増補再板京大絵図」⁸⁾(図12)によれば、宝永五年(1708)の大火後には北側の要法寺は移転し、跡地は町家に代わっていることがわかる。

妙満寺は、寺史『妙満寺志稿』⁹⁾によれば、宝永五年(1708)・天明八年(1788)・元治元年(1864)の大火の際に延焼したとされる。境内の伽藍配置は、中井家文書「美濃守様御本陣妙満寺絵図」¹⁰⁾(図版147)及び、同寺史の古絵図、「天明焼失前之古図」(図版148)、「天明類焼後元治兵燹前之古図」(図版149)、「現在絵図面」(図版150)に記されており、寺町通に面した西側に門があり、中央に西向きの祖師堂、北に南向きの本堂、東に庫裡と方丈が位置する。北側・南側・東側には十数院の塔頭が建ち並び、南東隅には墓地が広がっていたことがわかる。

明治二年(1869)に寺域北東部に「上京第三十一番組小学校」が建設される。明治八年(1875)に小学校は「銅駝校」として河原町通の東側に移転し、跡地には明治二十八年(1895)に「島津製作所標本部」が建設される。しだいに寺域外周は、町家地となっていく。

昭和四十三年(1968)に妙満寺は岩倉に移転し、跡地は京都市の駐車場・駐輪場・会議室棟となった。

本能寺は、秀吉の命で四条坊門西洞院から天正年間に現地に移転している。天正二十年(1592)には本堂・大書院・客殿・祖師堂・開山堂・塔頭十数院が完成した。その後、妙満寺と同様に天明八年(1788)・元治元年(1864)に大火で類焼する。

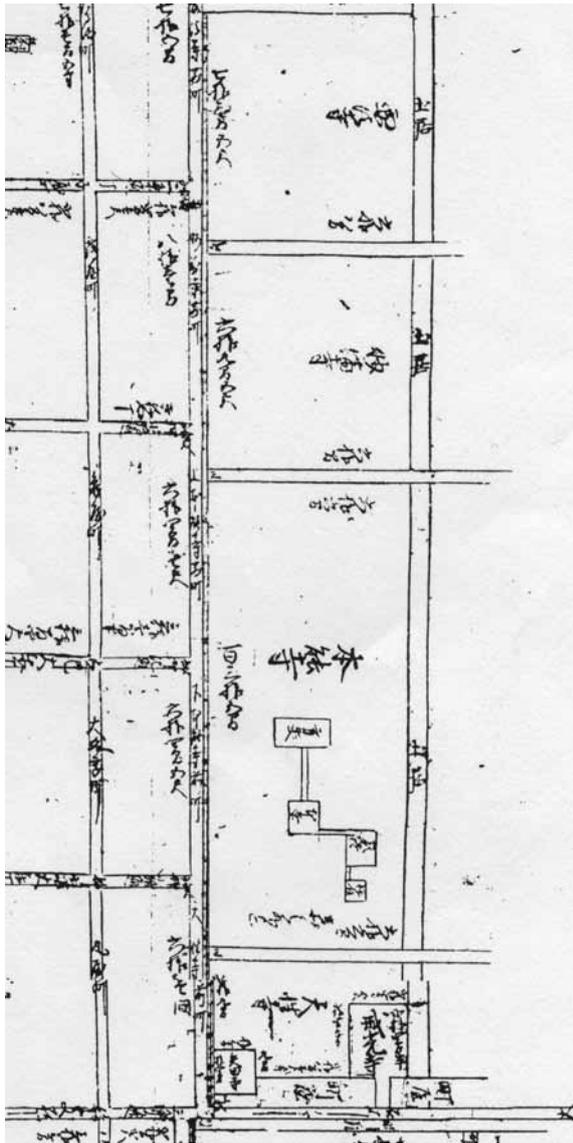


図11 「寛永十四年洛中絵図」部分（中井家旧蔵
宮内庁書陵部蔵）『慶長昭和京都地図集成1611（慶長
16）～1940（昭和15）』 柏書房より転載した。



図12 「増補再板京大絵図」部分（寛保元年：1741）
『慶長昭和京都地図集成1611（慶長16）～1940（昭和
15）』 柏書房より転載した。

明治時代には政府の上地により、明治六年（1873）に境内北部が京都府栽培試験場となり、後に明治二十八年（1895）京都議事堂が建設され、明治三十一年（1898）に京都市役所が設置された。なお、寺町旧域は平成十九年三月に遺跡地図に記載され、周知の遺跡となっている。

(2) 周辺の調査 (図13、表1・2)

調査地の寺町旧域が遺跡指定されたのが平成十九年三月であるため、周辺ではまだ考古学的な調査が多く実施されていない。調査例は、立会調査や試掘調査が若干あるのみである。一方、調査地西側の平安京左京三条四坊十五・十六町では、発掘調査は実施されていないが、試掘・立会調査例が多くある。ここでは、試掘・立会調査の成果を概観する。

十五・十六町では、平安時代後期の土坑・遺物包含層が16箇所検出されている(調査3・5・8・10~12・14・17・18・24~26・29・31・37・40)。鎌倉時代から室町時代の土坑・遺物包含層は18箇所検出されている(調査1~3・8~10・12・16・17・20・21・24・29・31~33・39・41)。さらに、桃山時代から江戸時代の土坑・遺物包含層などは22箇所検出されている(調査3~8・11・13~15・17・19・23~25・27・28・32・33・38・41・43)。この周辺は、平安京の東端にもかかわらず、平安時代から近世までほぼ継続して土地利用されていたことがわかる。

さらに、条坊街路関連でも調査成果がある。東京極大路推定地では、平安時代後期の路面と西側

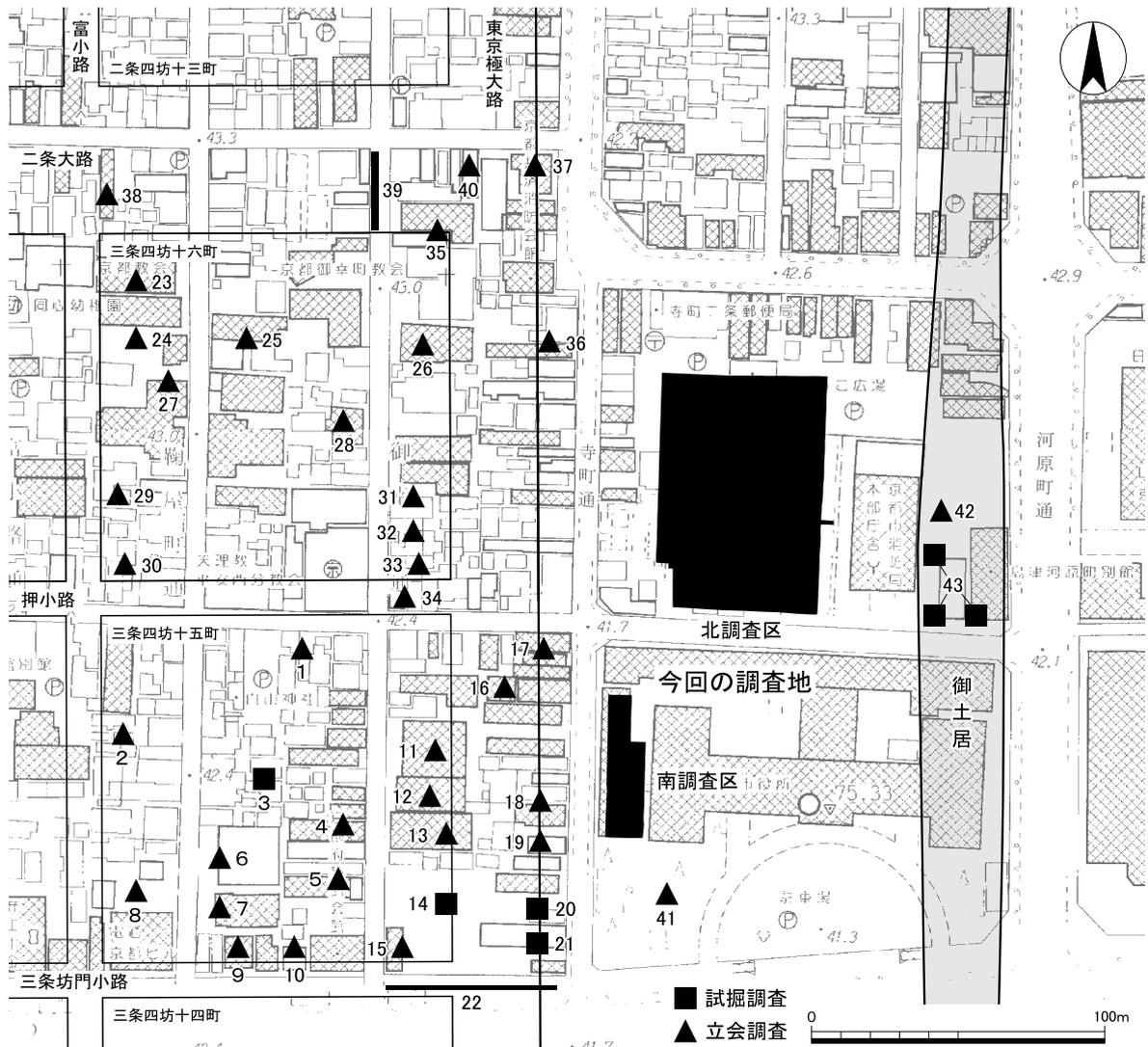


図13 周辺調査位置図 (1 : 2,500)

表1 周辺調査一覧表

No.	調査記号	調査方法	遺跡名	調査概要	文 献
1	HL141	立会	三条四坊十五町	No.1 : GL-1.8~2.6mまで室町の包含層(土師器皿)。以下褐灰色泥砂層。No.2 : -1.9~2.1mまで室町の包含層(焼締陶器)。-2.2mまで時期不明の包含層(土師器皿)。以下オリブ黄色砂礫と灰色泥砂の地山。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016年
2	HL267	立会	三条四坊十五町	GL-1.1mで中世の土坑状遺構(土師器皿)。-1.4mで黄褐色砂礫。-1.8~2.1mで暗灰黄色粘土質シルト(炭混)。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』京都市文化市民局 2017年
3	15H567	試掘	三条四坊十五町	GL-1.2m以下で中・近世~平安までの遺構・遺物を確認。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成28年度』京都市文化市民局 2017年
4	HL6-201	立会	三条四坊十五町	GL-0.3m以下、江戸末期の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
5	HL6-100	立会	三条四坊十五町	GL-2.1mで平安後期の包含層を切って土坑4、平安後期2・江戸1、時期不明11。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
6	HL099	立会	三条四坊十五町	GL-0.2m以下、近世の包含層。-1.7mで時期不明の包含層(土師器皿)。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
7	HL089	立会	三条四坊十五町	GL-0.7mで近世の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
8	13H572	試掘	三条四坊十五町	現代盛土層以下、近世の遺物包含層、中世の整地層、平安後期の整地層、地山。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
9	HL6-83	立会	三条四坊十五町	GL-1.4mで室町の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
10	HL128	立会	三条四坊十五町	GL-1.8mでオリブ黄色シルトの平安の整地層。この層を切って平安~室町の土坑4(土師器皿・杯)。時期不明の東西方向柱穴。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016年
11	HL411	立会	三条四坊十五町・東京極大路	東京極大路の路面と側溝を確認。No.1 : GL-1.1m以下、近世の包含層、時期不明の路面2。-1.9m以下、流れ堆積。No.2 : -1.6m以下、路面2。No.3 : -2.3mで平安後期の南北溝(西側溝)。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
12	HL168	立会	三条四坊十五町・東京極大路	GL-1.9mで平安末~鎌倉の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
13	HL550	立会	三条四坊十五町・東京極大路	GL-1.0mで近世以降の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
14	00H563	試掘	三条四坊十五町・東京極大路	GL-1.7mで桃山の包含層。-2.2mで平安末頃の包含層。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成13年度』京都市文化市民局 2002年
15	HL004	立会	三条四坊十五町・三条坊門小路	GL-0.9mで江戸の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
16	HL6-116	立会	東京極大路	GL-1.7mで室町の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
17	HL031	立会	東京極大路	No.1 : GL-0.4m以下、平安後期・江戸の包含層。-2.0m以下、流れ堆積。No.2 : -1.0m以下、平安・室町の包含層。GL-1.0m以下暗灰黄色砂礫の無遺物層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
18	HL328	立会	東京極大路	GL-1.1mで平安後期の土坑。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
19	HL017	立会	東京極大路	GL-0.5mで明赤褐色泥砂(炭・焼土多量混)の江戸末期の包含層。GL-0.8~0.9mで黄灰色砂礫。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』京都市文化市民局 2017年
20	07H234	試掘	東京極大路	GL-1.4mで鎌倉末~室町前期の土坑3。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成13年度』京都市文化市民局 2002年
21	HL087	試掘	東京極大路	GL-1.1mで時期不明の包含層。-2.2mで室町の土坑1。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
22	HL6-230	立会	三条坊門小路	GL-1.2m以下で推定三条坊門小路路面5。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
23	HL6-181	立会	三条四坊十六町	GL-1.5m以下江戸の包含層2。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年

No.	調査記号	調査方法	遺跡名	調査概要	文 献
24	HL242	立会	三条四坊十六町	GL-0.9m以下、平安～室町の包含層、江戸の落込み、桃山～江戸の土坑、天目椀10個体、唐津、志野。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』京都市文化市民局 1996年
25	HL6-39	立会	三条四坊十六町	GL-1.6mで平安末期・江戸の土坑各1。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
26	HL6-63	立会	三条四坊十六町	GL-1.5mで平安末期の土坑。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
27	HL094	立会	三条四坊十六町	No.1 : GL-0.2m・-0.6mで近世以降の包含層2。 -0.7mで時期不明の包含層(土師器)。 No.2 : GL-1.6mで時期不明の包含層(土師器)。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
28	HL213	立会	三条四坊十六町	GL-1.3mで江戸の包含層(埴塙)。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
29	HL027	立会	三条四坊十六町	GL-1.6mで平安～鎌倉の土坑(土師器、緑釉陶器碗、瓦器碗)。-2.0m以下、暗灰黄色細砂の地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
30	HL314	立会	三条四坊十六町	GL-0.6mまで盛土・焼土層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
31	HL091	立会	三条四坊十六町	GL-1.3mで時期不明の包含層(土師器)。-1.5mで時期不明の包含層(土師器皿)。-1.3mで室町の包含層(土師器皿、瓦器)。-1.7mで平安の包含層(土師器、緑釉陶器碗、須恵器蓋)。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
32	84HL108	立会	三条四坊十六町	GL-0.2m以下で包含層3、室町1、江戸2。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
33	HL359	立会	三条四坊十六町	No.1 : GL-1.5m・-1.6mで江戸前期の包含層(土師器皿、輸入明染付皿、平瓦)2。No.2 : -1.1mで江戸末期の包含層。No.3 : -1.0mで室町末期の湿地状堆積(土師器皿)。-1.3mで室町後期の包含層(土師器皿)。-1.5mで時期不明の包含層(土師器)。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
34	HL6-34	立会	三条四坊十六町・押小路	GL-1.3m以下で推定押小路路面3、室町以降。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
35	HL304	立会	三条四坊十六町・二条大路・東京極大路	GL-1.4m以下、路面、二条大路と東京極大路の交差点、平安後期の包含層、東京極大路路面。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』京都市文化市民局 1996年
36	91HL38	立会	東京極大路	平安後期の東京極大路路面と東側溝を検出。東側溝は推定位置より5m西に位置。	『平安京左京三条四坊』『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
37	HL409	立会	東京極大路	GL-1.4～2.2mで時期不明の路面2(東京極大路)。平安後期の土坑。-2.2m以下、流れ堆積。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
38	HL117	立会	二条大路	GL-0.4mで江戸初期の包含層(輸入明染付皿、施釉陶器唐津碗・美濃)。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成21年度』京都市文化市民局 2010年
39	HL6-115	立会	二条大路	GL-0.7m以下室町・鎌倉・時期不明の包含層各1。 -1.15mで路面、推定二条大路。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
40	HL6-191	立会	二条大路	GL-1.3mで平安後期の土坑1、-1.3m以下平安前期・時期不明の包含層各2、路面3、平安前期1、時期不明2。推定二条大路延長線に位置。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
41	RT101	立会	寺町旧域	No.2 ; GL-1.3mで近世包含層(染付)、-1.5mで鎌倉包含層(土師器皿、瓦器、瓦)、-1.7mで黒褐色粗砂層。 No.3 ; GL-2.7mまで盛土、-3.0mまで河川堆積の褐色粗砂(混礫)。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016年
42	RT062	立会	御土居跡	No.1 ; GL-0.9mで灰黄褐色砂礫の氾濫状堆積。 No.2 ; GL-2.5m以下、にぶい黄褐色細砂の地山。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 2012年
43	10S286	試掘	御土居跡	GL-1.1mで近世の土坑墓6基。土師器皿、土師質壺、陶器碗、墓石、銭貨など。	『Ⅲ-6 御土居跡 No.73』『京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011年

溝（調査11）、路面と東側溝（調査36）が検出されており、東側溝は推定位置より5 m西の地点で見ついている。さらに、二条大路との交差点部分でも路面（調査35・37）など計4箇所に関連遺構を検出している。二条大路推定地では、複数の路面（調査35・39・40）を検出している。押小路推定地では、複数の路面（調査34）、三条坊門小路推定地でも複数の路面（調査22）が検出されている。

御土居跡の調査例は少ないが、鎌倉時代の遺物包含層（調査41）が確認されている。さらに近世の遺物包含層、土坑墓や墓石の出土があり（調査41・43）、近世に入って早い段階に墓地として利用されていたことがわかっている。

註

- 1) 「22巻 禁秘抄考註・拾芥抄」『改訂増補 故実叢書』 明治図書出版 1993年
- 2) 『小右記』万寿二年二月二日条 『増補 資料大成』 増補資料大成刊行会編 臨川書店
- 3) 『中右記』大治二年一二月九日条 『増補 資料大成』 増補資料大成刊行会編 臨川書店
- 4) 『明月記』寛喜二年閏正月二日条 『国会刊行会叢書』 国会刊行会
- 5) 『明月記』建歴二年十月二八日条 『国会刊行会叢書』 国会刊行会
- 6) 『明月記』建久九年正月一日条 『国会刊行会叢書』 国会刊行会
- 7) 「寛永十四年洛中絵図」『慶長昭和京都地図集成1611（慶長16）～1940（昭和15）』 柏書房 1994年
- 8) 「増補再板京大絵図」『慶長昭和京都地図集成1611（慶長16）～1940（昭和15）』 柏書房 1994年
- 9) 『妙満寺志稿』 妙満寺蔵 明治25年（1892）
- 10) 中井家文書「美濃守様御本陣妙満寺絵図」

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図14)

北調査区は妙満寺の寺域に設定した調査区である。調査前地表面の標高は42.1～42.7 mで、南西側が最も低く、全体に緩やかな勾配をなす。地表から約0.2～0.9 mまでが第1層とした現代盛土である。第2層は暗褐色～褐色泥砂で、元治元年火災後の整地層である。この層を基盤として元治元年火災後から昭和43年岩倉移転までの遺構面(第1面)が成立する。第3層はにぶい黄褐色泥砂で、天明八年火災後の整地層である。この層を基盤として天明八年火災後から元治元年火災までの遺構面(第2面)が成立する。第4層は灰黄褐色泥砂で、江戸時代中期の整地層である。この層を基盤として江戸時代中期から天明八年火災までの遺構面(第3面)が成立する。第5層はにぶい黄褐色泥砂で、寺町整地層である。この層を基盤として、妙満寺の天正十一年寺町移転後から江戸時代中期までの遺構面(第4面)が成立する。第6層は暗褐色泥砂で、平安時代から室町時代の遺物を含む整地層である。この層を基盤として、主として鎌倉時代から室町時代の遺構面(第5面)が成立する。なお、第5層と第6層の間には、東側を中心に耕作土が部分的に挟在する。耕作土は青灰色砂泥で、下面で耕作関連の溝を検出した。第7層は褐色砂礫で、古墳時代以前の河川堆積物である。この層を基盤として、主として平安時代の遺構面(第6面)が成立する。第7層の下は、にぶい黄褐色砂礫の地山になる。

今回調査した範囲では、宝永五年火災に関連する焼土層は、明確に確認することができなかつ

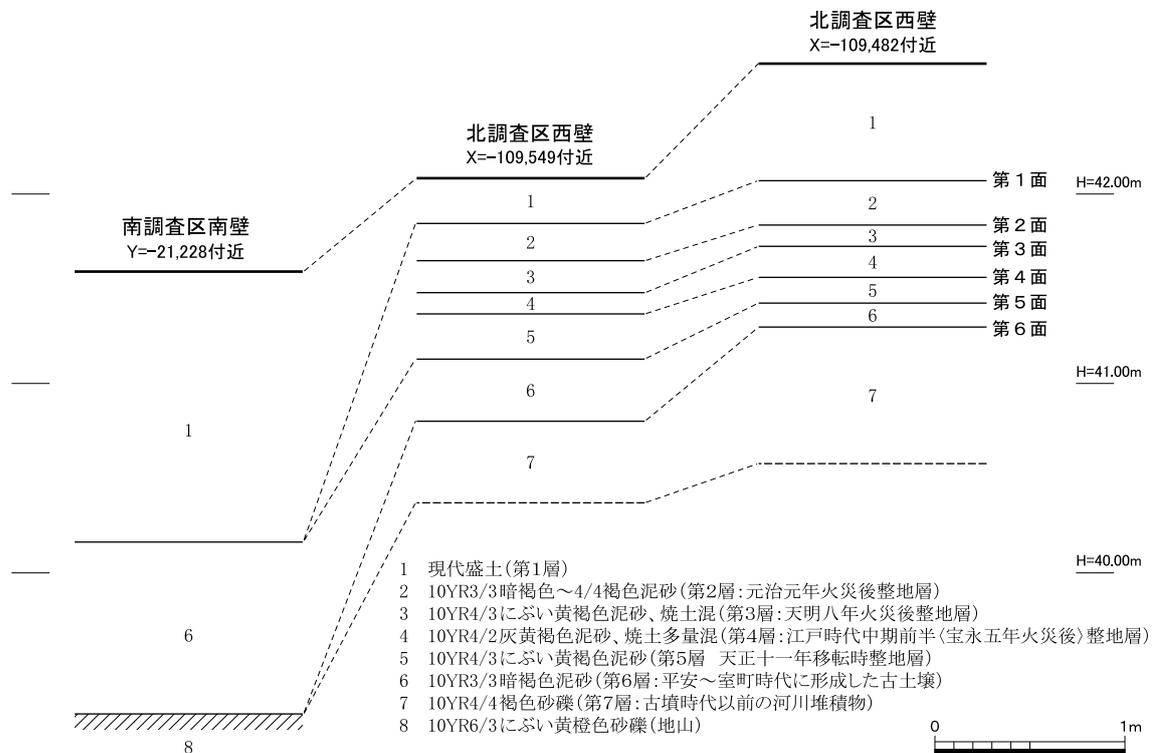


図14 基本層位図 (1 : 40)

た。調査地の北側及び北西側（妙満寺の本堂北側及び北西側）で、層位的な検討により、宝永五年火災後の火災瓦礫層に対比可能な層を一部確認したに留まる。

南調査区は本能寺の寺域北西部に設定した調査区である。調査前地表面の標高は約41.6mである。近現代以降の攪乱が調査地全体に及んでおり、地表から0.7～1.5mまでが第1層とした現代盛土である。その下は、北調査区の第2～5層に対比できる層はなく、第6層の暗褐色砂泥が位置する。南調査区では、この第6層の上面で、平安時代から近代の遺構を検出した。この層の下は、にぶい黄褐色砂礫の地山となる。

表2 遺構概要表

時代	遺構		
	北調査区	南調査区	
弥生時代 ～古墳時代	第6面	流路8065、土坑1625・8085	土坑9006
平安時代	第6面	土坑1645・1646・1650・4255・4394・5488・5519・5952・6081・6537・7888・8011・8029・8032・8060・8099、溝1510・4266・4353・8097、溝群2223、井戸5824・5966・8135、柱穴2756、石列4270	井戸9001
鎌倉時代 ～室町時代	第5面	土坑3959・4260・4403・5448・5497・7208・7351・7895・7900・7910・8134、溝1485・1489・1594・5478・8014、溝群7976、井戸4420・5990・7975・8009・8010・8113・8121、柱穴4368、柱列2709、石敷2722、墓3817、落込み4326	石列9020
桃山時代～ 江戸時代前期	第4面	本堂Ⅰ（柱列1390）、土坑1440・1506・3695・3719・3963・4004・5520・5878・5882、溝4037 祖師堂Ⅰ（廊7504・7665）、土坑5958・7400・7818、瓦組溝5700・7509、集石6473・7880 方丈Ⅰ、庫裡Ⅰ、土坑2610・4110・4166・4172・4196・5797・5898・5940・5946・5962・7670・7672・7687、井戸2140・2708・3396・3940・3949、柱穴3935・4197、石室3813、瓦組3964、埋甕3889 塔頭 土坑2190・7087・7101、井戸6144、柱列2119・7117・7376、石組6655、集石7095	土坑9018・9035・9038、井戸9032、石列9065
江戸時代中期	第3面	本堂Ⅱ（柱列1308・1064・1388、後拝）、土坑5399、柱穴3681・3716、石列1552、集石3617、太鼓堂3430、廊3445・5328、石組5400 祖師堂Ⅱ（石列7150・7151・7547、瓦組溝7212、溝7460・地業7629、前拝、北入口）、土坑6598・8119、集石6232・6485 方丈Ⅱ（柱列7224・石列5365）、庫裡Ⅱ（柱列3176）、土坑2300・5777、井戸3950、石室2704、石敷5680、集石7275 塔頭 土坑6775、柱列2121・6219・7118・7301・7324、石室2104、石敷2054、瓦組7202、集石6801・7333、墓7343・7399	
江戸時代後期	第2面	本堂Ⅲ（柱列1225・1039、後拝）、土坑1310・3705・3845・5182・5190・5243・5477、井戸3399・3400、柱穴1072・3206・3342・3483、集石5017、廊3844 祖師堂Ⅲ（石列6400）、土坑5746・6452・7352、井戸6320、柱穴6925・7157、集石6483、廊6507、鐘楼6420 方丈Ⅲ（地業2452、石列6850）、庫裡Ⅲ、土坑2013・2107・2262・2369・3498・5635・6825・7178・7626、井戸2465・2620・3109、石組6842、瓦組3110、埋甕2235・3069・3072・6708 塔頭 土坑2155・6586・6611、井戸6811、柱穴2126・2166・6572・7029、集石2057、石組6207・6525、瓦組6216、瓦列2037、埋甕2039・2061	土坑9034、井戸9003
明治時代	第1面	本堂Ⅳ（柱列1174・1244、石列1035、後拝）、土坑1006・1144・3017・3032・3037・3214・3481・3582・5095・5096・5113・5220・5277、溝5015、井戸5212、石組1001、集石3002、礎石据付穴群 祖師堂Ⅳ（石列6361、前拝）、土坑2011・6197・6244・6260・6406・6768・7423、石組溝6321、井戸6151・6214・6241・6283・6320新・6771、池2004、石樋6650、礎石据付穴群 方丈Ⅳ、土坑2234・2238・2438・3130 塔頭 土坑2003・2041・6142・6143・6206・6540・6623・6627・6657、井戸6139、池6769、石列2056・6660・6774、瓦列6661・6690、集石6145、墓7350・7435	

(2) 検出遺構の概要

今回の調査で検出した遺構の時期は、古墳時代以前、平安時代、鎌倉時代から室町時代、桃山時代から江戸時代、明治時代に分けられる。江戸時代の遺構が大半を占め、次いで鎌倉時代から室町時代の遺構がある。平安時代の遺構は多くない。

北調査区は妙満寺の寺域内にあたり、南調査区は本能寺旧境内の北西隅の部分にあたる。

北調査区では6面の遺構面を調査した。

第1面では、明治時代の遺構の調査を行い、元治元年大火後に再建された建物群を検出した。遺構には、本堂・祖師堂・方丈・鐘楼・塔頭・井戸・放生池・境内通路などがある。

第2面では、江戸時代後期の遺構の調査を行い、天明八年大火後に再建された建物群を検出した。遺構には、本堂・祖師堂・方丈・庫裡・鐘楼・太鼓楼・塔頭・井戸・境内通路などがある。

第3面では、江戸時代中期の遺構の調査を行い、天明大火以前に再建された建物群を検出した。遺構には、本堂・祖師堂・大方丈・小方丈・庫裡・鐘楼・塔頭・井戸・境内通路などがある。

第4面では、桃山時代から江戸時代前期の遺構の調査を行い、天正十一年移転後の建物群を検出した。遺構には、本堂・祖師堂・方丈・塔頭・井戸・境内通路などがある。

第5面では、鎌倉時代から室町時代の遺構の調査を行った。遺構には、土坑・溝・井戸などがある。また、耕作関連の小規模な溝がある。

第6面では、平安時代以前の遺構の調査を行った。遺構には、平安時代の井戸・土坑・溝などがある。さらに、弥生時代から古墳時代の遺物を包含する北東から南西方向に向かう流路がある。

南調査区では、既存建物の基礎が深くまで達しており、1面の調査となったが、平安時代から明治時代までの遺構を検出した。

以下、時代の古い順に各遺構面に分けて遺構を報告する。なお、遺構の時期決定の基準となる土器類の編年については、平安京・京都I期～XIV期の編年案を準用した¹⁾。

(3) 北調査区第6面の遺構 (図版2・3・115)

流路8065 調査区北東から南西方向の自然流路である。肩部が明瞭でない箇所があるが、およその幅は北部で20m以上、南部で約8m、深さは0.3～0.6mある。堆積土はにぶい黄褐色砂礫を主体とする。弥生土器、円筒埴輪、古式土師器壺などが出土した。

土坑1625 北西隅で検出した土坑である。規模は南北約1.0m、東西約0.9mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。古墳時代の土師器甕が出土した。

土坑8085 南東部で検出した土坑である。規模は南北約2.6m、東西約1.9mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。古墳時代の須恵器杯身が出土した。

井戸5824 (図15) 北東部で検出した井戸である。後世の遺構に削平され、底部のみが遺存する。掘形は南北約1.7m、東西約1.8mの隅丸方形を呈する。掘形埋土は暗灰黄色砂泥で礫を多量含む。底部中央に一辺約0.8m、深さ約0.3mの方形の窪みがあり、方形木枠組みであったとみられる。

検出時の深さは約0.6m、底面の標高は39.9mである。土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦などが出土した。平安京Ⅱ期古段階に属する。

井戸 5966 (図15、図版115) 中央北寄りで検出した円形石組井戸である。掘形は南北約1.3m、東西約1.2mの歪な円形を呈する。掘形上層の埋土は暗褐色砂泥で礫、炭、焼土を含む。底部から径0.05～0.15mの河原石を積み上げて、内径約0.5～0.9mの上方に開く挿鉢状の井筒を設ける。深さは約1.0m、底面の標高は40.2mである。土師器、灰釉陶器などが出土した。平安京Ⅳ期に属する。

井戸 8135 (図15) 中央南寄りで検出した円形石組井戸である。掘形は南北約2.1m、東西約2.0mの歪な円形を呈する。ほとんどの石材が抜き取られている。掘形埋土は黒褐色砂泥で礫を少量含む。底部には径約1.1m、深さ約0.3mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。径0.2～0.3mの

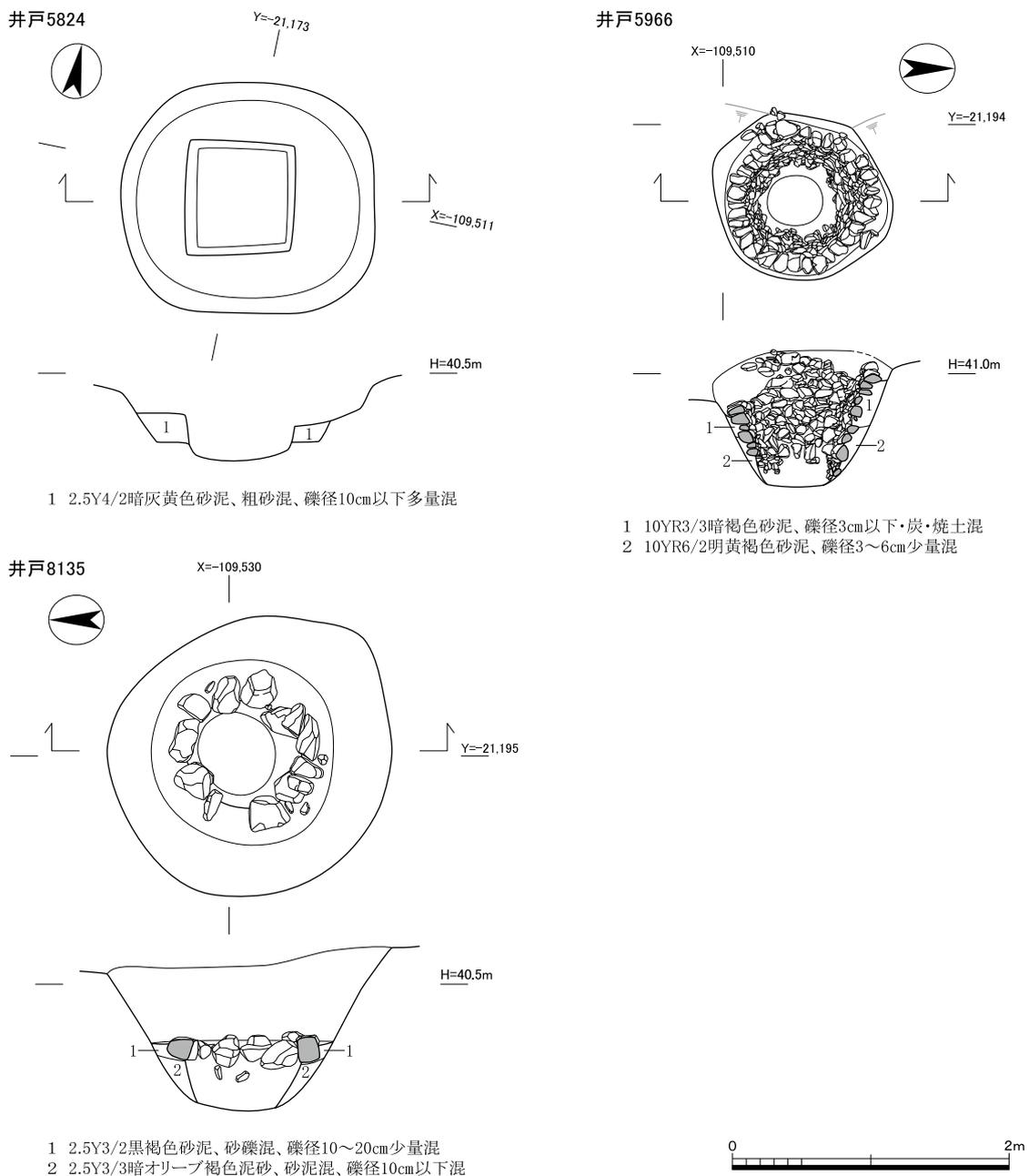


図15 第6面 井戸5824・5966・8135実測図 (1 : 50)

河原石を積み上げて、内径約0.7mの井筒を設ける。石積みは1段のみ遺存する。深さは約1.1m、底面の標高は39.6mである。土師器、須恵器、瓦器などが出土した。平安京Ⅴ期古段階に属する。

土坑8060 南西部で検出した平面形が方形の土坑である。東半は後世の遺構に壊されており、規模は南北約1.1m、東西0.6m以上ある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。平安京Ⅱ期に属する。

土坑4255 北端東寄りで検出した土坑である。北側は調査区外に延びる。規模は南北0.6m以上、東西約1.3mある。埋土は褐色泥砂である。土師器、須恵器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。平安京Ⅱ期に属する。

土坑8032 西端南寄りで検出した土坑である。西側は調査区外に延びる。規模は南北約0.9m、東西0.3m以上ある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、灰釉陶器、緑釉陶器などが出土した。平安京Ⅱ期に属する。

土坑8011 西端南寄りで検出した土坑である。西側は調査区外に延びる。規模は南北約1.7m、東西1.8m以上ある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。平安京Ⅱ～Ⅲ期に属する。

土坑6081 中央北東寄りで検出した土坑である。南側の一部を他の遺構に壊されるが、規模は南北約0.8m、東西約1.1mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦などが出土した。平安京Ⅲ期新段階に属する。

土坑8099 南半中央部で検出した土坑である。西側を後世の遺構により壊される。規模は南北約0.4m、東西0.2m以上ある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。平安京Ⅲ期新段階に属する。

土坑1650 北西部で検出した土坑である。規模は南北約1.2m、東西約3.2mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。平安京Ⅳ期新段階に属する。

土坑5952 北東部で検出した土坑である。北側を後世の遺構に壊されるが、規模は南北約1.4m、東西約1.3mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、須恵器、輸入陶磁器などが出土した。平安京Ⅳ期新段階～Ⅴ期古段階に属する。

土坑7888 南西部で検出した土坑である。規模は南北約1.3m、東西約2.6mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。平安京Ⅳ期新段階～Ⅴ期古段階に属する。

土坑5488 北西部で検出した土坑である。規模は南北約1.4m、東西約1.6mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。平安京Ⅴ期古段階に属する。

土坑6537 南西部で検出した土坑である。東側を後世の遺構により壊される。規模は南北約1.3m、東西0.7m以上ある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、瓦器、瓦類などが出土した。平安京Ⅴ期古段階に属する。

土坑1645 北西部で検出した土坑である。規模は南北約1.0m、東西約1.1mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。平安京V期古段階に属する。

土坑5519 西端北寄りで検出した土坑である。西側は調査区外にのびる。規模は南北約3.0m、東西1.3m以上ある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、瓦などが出土した。平安京V期古段階に属する。

土坑8029 南西部で検出した平面形が円形の土坑である。規模は南北約2.2m、東西約2.4mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、瓦などが出土した。平安京V期中段階に属する。

土坑4394 北東部で検出した大型の土坑である。北側と南側を後世の遺構により壊される。規模は南北約5.5m、東西約6.8mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。平安京V期中段階に属する。

土坑1646 北西部で検出した平面形が円形の土坑である。規模は南北約0.7m、東西約0.8mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、瓦などが出土した。平安京V期中段階に属する。

柱穴2756 北東部で検出した柱穴である。掘形は円形で、径約0.7mある。埋土は黒褐色泥砂である。土師器、須恵器などが出土した。平安京V期古段階に属する。

溝1510 北西部で検出した南北方向の溝である。規模は南北約18m、幅約0.6mである。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、須恵器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。平安京Ⅲ期に属する。

溝4353 北東部で検出した東西方向の溝である。西側を後世の遺構により壊される。規模は東西3.8m以上、幅約1.1mある。埋土はにぶい黄褐色泥砂である。土師器、須恵器などが出土した。平安京V期古段階に属する。

溝4266 北東部で検出した東西方向の溝である。両側を後世の遺構により壊される。規模は東西8.8m以上、幅約1.1mある。埋土はにぶい黄褐色泥砂である。土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。平安京V期中段階に属する。

溝8097 中央部で検出した南北方向の溝である。規模は南北約22m、東西約0.9mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、須恵器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品などが出土した。

溝群2223 (図版115) 南東部で検出した北東から南西方向の溝群である。規模は幅0.2～0.3m、深さ0.05mである。埋土は暗褐色泥砂である。0.2～0.5mの間隔を空けて平行しており、畑の畝間溝とみられる。灰釉陶器が出土した。

石列4270 北端東寄りで検出した弧状に4つの石が並ぶ石列である。石材の大きさは、長径0.7～0.9m、短径0.15～0.4mである。据え付けられた石材の間隔は、西から0.6m、0.8m、0.9mである。各石材は長軸を弧の中心方面に向け、東側には高さのある石材が据えられている。石列の南側がやや低くなる。石材はチャート。庭の景石などの可能性がある。

(4) 北調査区第5面の遺構 (図版4・5・116)

井戸8121 (図版18) 南西部で検出した円形石組井戸である。掘形は直径約2.3mの円形を呈する。掘形上層の埋土は暗褐色泥砂で礫を多量、炭を少量含む。底部には径約0.9m、深さ約0.4mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。中位から径0.1~0.2mの河原石を積み上げて内径約1.0mの井筒を設ける。石材はすべて砂岩。深さは約0.9m、底面の標高は39.8mである。土師器、須恵器、瓦器などが出土した。京都VI期に属する。

井戸4420 (図版18・117) 北東部で検出した円形石組井戸である。掘形は南北約1.8m、東西約1.7mの楕円形を呈する。掘形上層の埋土は黒褐色砂礫である。底部には径約0.6m、深さ約0.4mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。中位から径0.1~0.3mの河原石を積み上げて、内径約0.5~0.8mの播鉢状の井筒を設ける。深さは約1.1m、底面の標高は39.4mである。土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などが出土した。京都VII期古段階に属する。

井戸8113 (図版18) 西端南寄りで検出した円形石組井戸である。掘形は南北約2.1m、東西約2.6mの隅丸方形を呈する。掘形埋土は黒褐色砂泥で礫を少量含む。底部には径約1.1m、深さ約0.5mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。東西両側に径0.5mと0.7mの河原石を据え、南北の面には径0.2~0.5mの河原石を積み上げて、内径約0.9mの井筒を設ける。深さは約1.2m、底面の標高は39.5mである。土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器などが出土した。京都VI~VII期に属する。

井戸8009 (図版18) 西端南寄り、井戸8113に隣接して検出した円形石組井戸である。掘形は南北約1.9m、東西約2.0mの楕円形を呈する。ほとんどの石材が抜き取られている。掘形埋土は黒褐色泥砂で礫を多量含む。底部には径約0.5m、深さ約0.4mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。径0.1~0.2mの河原石を積み上げて、内径約0.6mの井筒を設ける。深さは約1.3m、底面の標高は39.7mである。土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、軒瓦などが出土した。京都VII~VIII期に属する。

井戸8010 (図版19) 西端南寄り、井戸8113の南東で検出した円形石組井戸である。掘形は径約2.0mの円形を呈する。掘形上層の埋土はにぶい黄褐色泥砂で礫を多量含む。底部には径約0.8m、深さ約0.4mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。径0.1~0.3mの河原石を積み上げて、内径約0.9mの井筒を設ける。深さは約1.9m、底面の標高は39.1mである。土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器などが出土した。京都VII~VIII期に属する。

井戸7975 (図版19) 南半中央部で検出した円形石組井戸である。掘形は径約2.0mの歪な円形を呈する。近世の遺構に壊され、ほとんどの石材が抜き取られている。掘形埋土は褐色泥砂で礫を多量、炭を少量含む。底部には径約0.8m、深さ約0.3mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。径0.1~0.3mの河原石を積み上げて、内径約0.9mの井筒を設ける。深さは約1.7m、底面の標高は39.6mである。土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都VIII期新段階~IX期古段階に属する。

井戸5990 (図版19・117) 中央北寄りで検出した円形石組井戸である。掘形は径約1.5mの円形を呈する。掘形上層の埋土はにぶい黄褐色砂泥で礫、炭、焼土を含む。底部には径約0.4m、深さ約0.4mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。径0.1～0.2mの河原石を積み上げて、内径約0.4～0.6mの挿鉢状の井筒を設ける。深さは約0.8m、底面の標高は40.0mである。土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器などが出土した。京都Ⅸ期に属する。

柱穴4368 北半中央部で検出した柱穴である。掘形の平面形は一辺約0.9mの隅丸方形である。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅵ期中段階に属する。

柱列2709 中央東寄りで検出した南北方向の掘立柱列で、8基の柱穴が並ぶ。柱間は0.9～1.6mである。柱掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は径0.4～0.8m、深さ0.4～0.5mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器が出土した。

土坑7895 南西部で検出した土坑である。平面形は歪な円形を呈し、南北約2.6m、東西約2.3mある。埋土は灰褐色砂泥である。土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、焼締陶器、瓦などが出土した。京都Ⅵ期中段階に属する。

土坑7351 西端中央部で検出した土坑である。規模は南北1.7m、東西約2.2mある。埋土は灰黄褐色泥砂である。土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅶ期古段階に属する。

土坑7900 南西隅で検出した土坑である。南側と東側を後世の遺構により壊される。規模は南北1.4m以上、東西3.5m以上ある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅶ期古段階に属する。

土坑7910 南西隅で検出した大型の土坑である。西側と南側は調査区外に広がる。規模は南北5.4m以上、東西2.4m以上ある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅷ期古段階に属する。

土坑4403 北東部で検出した土坑である。平面形は南北約2.5m、東西約3.0mの円形を呈する。埋土は暗オリーブ褐色砂泥である。土師器、瓦器、焼締陶器、瓦などが出土した。京都Ⅷ期新段階に属する。

土坑5448 西端北寄りで検出した土坑である。西側を後世の遺構により壊される。規模は南北約2.6m、東西1.6m以上ある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。京都Ⅷ期新段階に属する。

土坑7208 南西隅で検出した土坑である。南端は調査区外へ延びる。規模は東西約3.0m、南北1.2m以上ある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、須恵器、施釉陶器、輸入陶磁器などが出土した。京都Ⅸ期新段階に属する。

土坑3959 東端北寄りで検出した土坑である。規模は南北約0.7m、東西約1.9mある。埋土は褐色泥砂である。土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、瓦などが出土した。京都Ⅹ期古段階に属する。

土坑4260 北半中央部で検出した。規模は南北約2.3m、東西約2.3mある。埋土は暗褐色泥砂である。土師器、須恵器のほか、瓦がまとまって出土した。

土坑8134 中央部南寄りで検出した。規模は南北約2.3m、東西約2.6mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

土坑5497 西端北寄りで検出した。西側は後世の遺構に壊される。規模は南北約2.2m、東西1.0m以上ある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

溝1485 北端で検出した東西方向の大規模な溝である。西端は南北溝1495の手前で止まり、東は調査区外へ延びる。規模は東西33m以上、幅1.6～3.9mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅶ期古～中段階に属する。

溝8014 南西部で検出した南北方向の溝である。規模は南北27m以上、幅1.4～2.4mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅶ期新段階に属する。

溝1489 北西隅で検出した南北方向の溝である。規模は南北6.3m以上、幅0.6～0.9mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅶ期新段階～Ⅷ期古段階に属する。

溝1594 北西隅で検出した南北方向の溝である。北は調査区外へ延びる。規模は南北約11m、幅0.5～2.2mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅷ期新段階に属する。

溝5478 西端で検出した南北方向の溝である。溝1594の南に続く溝である。規模は南北29.5m以上、幅1.3～2.1mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、土師質土器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅷ期新段階に属する。

溝群7976 南半中央部で検出した溝群である。北東から南西方向の溝群で、規模は幅0.2m、深さ0.03～0.05mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。第4層と第5層に挟在する耕作土の下面遺構で、耕作関連の溝と考えられる。遺物は出土しなかった。

墓3817 (図16、図版117) 北東部で検出した平面形が隅丸方形の土坑墓である。規模は南北約0.7m、東西約0.65m、深さ約0.3mある。埋土は黒褐色砂泥で小礫、炭を少量含む。頭蓋骨・下顎骨・歯・肋骨・左右不明橈骨などが出土した。²⁾ 骨の大きさから小児とみられる。土師器、瓦器、瓦などが出土した。京都X期に属する。

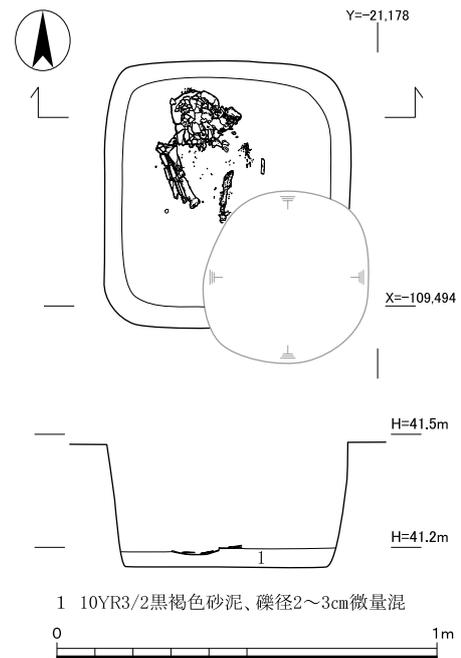


図16 第5面 墓3817実測図 (1:20)

石敷2722 (図版19・117) 北東部で検出した石敷である。掘形の平面形は隅丸長方形で、南北約1.3m、東西約0.9mある。径0.1mの石を平坦な面を上に向けて並べる。土師器が出土した。

落込み4326 中央部で検出した。規模は南北約35.3m、東西約9.0mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

(5) 北調査区第4面の遺構 (図版6・7・118)

妙満寺が当地に移転してきた時期(天正十一年)以後、江戸時代中期までの遺構面である。検出遺構と寺院内施設の同定については、「天明焼失前之古図」(図版148)を参考にした。

本堂周辺の遺構

本堂I (図版20・21・118) 北西部で検出した礎石建物とその基壇である。基壇盛土とその上面で本堂Iの束柱礎石の可能性のある柱列1390を検出した。基壇の規模は東西約22m、南北14.5m以上ある。盛土の厚さは、本堂IIの段階で積みなおされた盛土との判別が困難である部分もあるが、0.15～0.3mあり、整地面からの高さは約0.2mとなる。

柱列1390 (図版24) 本堂Iの基壇上で検出した南北方向の礎石列である。柱間は北から1.9m・1.8m・1.9m・1.9mである。礎石据付穴の平面形は円形ないしは楕円形を呈し、検出面での規模は径約0.5m、深さ0.15～0.2mある。礎石の大きさは長径0.2～0.3mある。柱穴1553・1428は方形に整形した石材を用いる。掘形埋土から土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などが出土した。京都XI期に属する。

土坑5878 本堂Iの南東で検出した方形の土坑である。規模は南北約1.4m、東西約1.9mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都X期新段階に属する。

土坑5882 本堂Iの南東で検出した土坑である。南東側を後世の遺構により壊される。規模は南北約4.9m、東西約2.7mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都X期新段階に属する。

土坑3719 本堂Iの北東で検出した平面形が方形の土坑である。規模は南北約2.7m、東西約2.7mある。埋土は黒褐色泥砂である。土師器、土製品、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XI期古～中段階に属する。

土坑3963 本堂Iの北東で西側を土坑3719に削平される土坑である。規模は南北約0.6m、東西約0.6mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、瓦器などが出土した。京都XI期中段階に属する。

土坑4004 本堂Iの北で検出した土坑である。北側は調査区外に延びる。規模は南北1.3m以上、東西約6.7mある。埋土は褐色砂泥である。土師器、土師質土器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XII期古段階に属する。

土坑3695 本堂Iの北で検出した円形の土坑である。規模は南北約1.0m、東西約1.1mある。埋土は褐色砂泥である。土師器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

土坑 1440 本堂Ⅰの西で検出した楕円形の土坑である。規模は南北約0.9m、東西約0.7mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑 1506 本堂Ⅰの西で検出した楕円形の土坑である。規模は南北約2.0m、東西約1.3mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑 5520 本堂Ⅰの南西で検出した不定形な土坑である。西側は調査区外に延びる。規模は南北約5.2m、東西3.5m以上ある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

溝 4037 本堂Ⅰの東で検出した南北方向の溝である。南側は後世の遺構に壊される。規模は南北13m以上、幅は0.8～1.2mある。埋土は褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅺ期新段階に属する。

祖師堂周辺の遺構

祖師堂Ⅰ (図版22・23) 南半中央で検出した建物基壇である。基壇の規模は南北約11m、東西約13m、高さは約0.6mある。基壇上面では礎石やその痕跡は確認できなかった。盛土は基盤層に由来する土を用い、南西部を砂泥で盛土した後、北東部の砂礫を充填したとみられる(図版23のX = -109.533付近参照)。西辺には前拝が取り付く。祖師堂Ⅱ前拝の盛土を除去した段階で鎌倉時代から室町時代の整地層(基本層序の第6層)が露出し、第6層の高まりとして認識できる。前拝部では南北に並ぶ礎石据付穴を検出した。

集石 7880 祖師堂Ⅰ北面で検出した東西に長い集石土坑である。規模は東西約1.6m、幅約0.5m、深さ約0.1mある。掘形埋土は灰黄褐色泥砂で径0.01～0.1mの礫が多量に混じる。祖師堂Ⅰの雨落ち溝の可能性はある。

瓦組溝 7509・5700 (図版25) 本堂Ⅰと祖師堂Ⅰを繋ぐ廊7665の東側に並行する南北方向の瓦組溝である。いずれも溝の側面に平瓦を立てて並べる。瓦組溝7509は、南北約4.1m、幅約0.5m、深さ約0.2mある。土師器、瓦が出土した。瓦組溝5700は、南北約5.8m、幅約0.3m、深さ約0.2mである。土師器、磁器、施釉陶器が出土した。廊7665に伴う溝である。

廊 7665・7504 (図版25) 祖師堂Ⅰの北で検出した礎石据付穴群である。廊7665は本堂Ⅰと祖師堂Ⅰを繋ぐ廊下、廊7504は廊7665に接続し、方丈Ⅰとを繋ぐ廊下の礎石据付穴と考えられる。柱間は1.8～2.2mある。据付穴の平面形は隅丸方形ないしは楕円形を呈し、径0.6～0.9m、深さ0.2～0.4mある。廊7665の南端、祖師堂Ⅰの北辺と接する柱穴7631には加工した方形の礎石が残る。据付穴埋土からは土師器、瓦などが出土した。廊7665の北側、本堂Ⅰに近い部分では礎石の痕跡は確認できなかったが、柱筋で溝を検出した。

集石 6473 (図版26) 祖師堂Ⅰ前拝の西辺に接して検出した集石土坑である。北側と西側は削平を受ける。掘形は南北0.4m以上、東西0.3m以上、深さ約0.1mある。径0.01～0.05mの礫が詰まる。遺物は出土しなかった。前拝の雨落ちとみられる。

土坑 7818 祖師堂Ⅰの北辺に接して検出した楕円形の土坑である。規模は南北約0.9m、東西約2.3mある。土師器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅺ期新段階に属する。

土坑5958 祖師堂Ⅰの北側で、廊7504と重複する方形の土坑である。規模は南北約4.3m、東西約3.0mある。埋土は褐灰色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑7400 祖師堂Ⅰの南東で検出した方形の土坑である。規模は南北約2.7m、東西約3.7mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅺ期新段階～Ⅻ期古段階に属する。

方丈と庫裡周辺の遺構

方丈Ⅰ・庫裡Ⅰ 絵図から、調査区の北東部に庫裡Ⅰ、その南に方丈Ⅰが存在したことがわかるが、天明大火後再建時の整地によって削平を受けており、建物構造などは不明である。庫裡Ⅰの推定範囲では、井戸2708・3940・3949、瓦組3964などを検出した。方丈Ⅰの推定範囲の南側では、建物の縁の礎石と考えられる礎石や礎石据付穴を数基検出した。

井戸2708 北東部で検出した井戸である。掘形は南北約0.9m、東西約1.0mの円形を呈する。掘形埋土は黒褐色砂泥で礫を少量含む。底部には径0.9m、深さ約0.5mの桶を据える。底面の標高は39.0mである。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅻ期古段階に属する。

井戸3396 (図版27・119) 北東隅で検出した円形石組井戸である。掘形は南北約1.5m、東西約1.5mの円形を呈する。掘形上層の埋土は黄灰色砂泥で礫を少量含む。底部には一辺0.65m、高さ0.1～0.15mの方形木枠が据え付けられる。中央部分には窪みがみられるが、曲物は確認できない。木枠の上に径0.15～0.3mの河原石を積み上げて、内径約0.8mの井筒を設ける。深さは約1.3m、底面の標高は39.5mである。土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅺ期に属する。

井戸3940 (図版27) 北東部で検出した円形の瓦・石組井戸である。掘形は南北約1.7m、東西約1.6mの楕円形を呈する。上半部の瓦や石材は抜き取られている。掘形埋土は灰黄褐色砂泥で礫を多量含む。底部には一辺約0.5m、高さ約0.3mの方形木枠の一部が遺存する。木枠の上に径0.1～0.3mの河原石を積み上げ、上部は平瓦の端面を内側に向けて積み上げ、内径約0.6mの井筒を設ける。深さは約1.9m、底面の標高は38.8mである。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅹ期新段階～Ⅺ期古段階に属する。

井戸3949 (図版27・119) 北東部で検出した円形石組井戸である。上部の石材は抜き取られている。掘形は南北約2.2m、東西約2.3mの円形を呈する。掘形埋土は黒褐色砂泥で礫を少量含む。底部には隅部を補強した方形の木枠組みが確認できる。木枠の上に径0.15～0.3mの河原石を積み上げて、内径約1.0mの井筒を設ける。深さは約2.7m、底面の標高は38.8mである。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都Ⅺ期新段階に属する。

井戸2140 (図版28・119) 南東部、推定方丈Ⅰの南で検出した階段付きの方形瓦組井戸である。掘形は南北約2.5m、東西約2.2mの楕円形を呈する。掘形上層の埋土は暗褐色砂泥である。底部には径0.7m、深さ約0.3mの水溜施設がある。平瓦を積み上げ、奥壁は底部で内法0.7m、上部

で内法1.2mの井筒を設ける。階段は4段が遺存する。階段の内幅は約0.5mで、1段の高さは0.05～0.3mある。階段も平瓦を積み上げて作る。井戸の深さは約1.2mあり、底面の標高は39.8mである。土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都X～XI期に属する。

石室3813 (図版24) 北東部、推定庫裡Iの北西で検出した平面形が方形の石室である。西辺部のみが遺存し、東半は後世の遺構に壊される。掘形は南北約5.2m、東西1.8m以上の隅丸方形とみられる。掘形上層の埋土は灰黄褐色泥混じり砂礫である。西辺石組は南北約3.7mあり、径0.3mの割石を並べる。深さは約0.8mで、底部の1段のみが遺存する。土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都X期古～中段階に属する。

瓦組3964 (図版26・120) 北東部、推定庫裡Iの敷地内で検出した平面形が長方形の瓦組土坑である。掘形は南北約0.5m、東西約0.9m、深さ約0.7mある。掘形埋土はにぶい黄橙色泥砂である。側壁に礫と平瓦を立てて室を作り、中に径0.05～0.10mの小石を詰める。北辺には扁平な石が3石据わる。土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XI期新段階に属する。庫裡Iの出入り口もしくは蹲踞に関連する排水処理の施設とみられる。

埋甕3889 (図版26) 北東部、推定庫裡Iの西辺で検出した埋甕である。底部付近のみが遺存する。掘形は径約0.55mの円形を呈する。深さは約0.3mある。掘形埋土は黒褐色砂泥で小礫を中量含む。土坑中央に底径約0.2mの瓦質土器の甕が据わる。甕の高さは約0.2mが遺存する。甕内には径0.05～0.1mの礫が詰まる。土師器、瓦質土器、磁器、輸入陶磁器などが出土した。京都XII期に属する。便槽として使用されたとみられる。

土坑4166 北東部、埋甕3889の南で検出した不定形な土坑である。規模は南北約1.6m、東西約2.7mある。埋土は褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。京都XI期古段階に属する。

土坑4172 北東部で検出した平面形が長方形の土坑である。規模は南北約0.7m、東西約1.5mある。埋土は褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器などが出土した。京都XI期中段階に属する。

土坑5962 北東部で検出した土坑である。規模は南北約3.0m、東西約2.0mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XI期新段階に属する。

土坑2610 北東部、土坑5962の北東で検出した土坑である。西側を後世の遺構に壊されており、規模は南北約3.0m、東西約2.8m以上ある。埋土は褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

土坑5797 北東部、土坑5962の南で検出した円形の土坑である。規模は南北約1.5m、東西約1.3mある。埋土は褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、瓦などが出土した。

土坑5940 北東部、土坑5962の西で検出した長方形の土坑である。規模は南北約2.7m、東西約3.8mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

土坑5946 北東部、土坑5940の南西で検出した土坑である。西半を後世の遺構に壊されてお

り、規模は南北約1.6m、東西約0.7mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、瓦などが出土した。京都Ⅺ期古段階に属する。

土坑5898 北東部、土坑5797の西で検出した土坑である。北半を後世の遺構に壊されており、規模は南北約0.5m、東西約0.4mある。埋土は褐色砂泥である。土師器、瓦などが出土した。京都Ⅹ期新段階に属する。

土坑4196 東端北寄りで検出した土坑である。東は調査区外へ延びる。規模は南北約2.2m、東西1.8m以上ある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、焼締陶器、瓦などが出土した。

土坑4110 北東部で検出した土坑である。北側を後世の遺構に壊されており、規模は南北約1.2m、東西約1.3mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。

土坑7687 中央部東寄りで検出した楕円形の土坑である。規模は南北約3.0m、東西約2.3mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、瓦などが出土した。

土坑7670 中央部東寄りで検出した楕円形の土坑である。規模は南北約0.5m、東西約0.9mある。埋土は褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、瓦などが出土した。京都Ⅺ期新段階に属する。

土坑7672 中央部東寄り、土坑7670の西で検出した長方形の土坑である。規模は南北約1.7m、東西約0.9mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、土師質土器、瓦などが出土した。京都Ⅺ期新段階に属する。

柱穴4197 北東部で検出した掘立柱の柱穴である。掘形は径約0.9mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、焼締陶器、瓦などが出土した。京都Ⅺ期古段階に属する。

柱穴3935 北東部で検出した掘立柱の柱穴である。掘形は径約0.7mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅺ期古段階に属する。

塔頭周辺の遺構（図版120）

柱列7376（図版29） 南西隅で検出した南北方向の掘立柱列である。柱間は北から1.0m・0.4m・0.9m・1.1m・1.0mである。掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は径0.4～0.5m、深さ0.2～0.4mある。土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都Ⅺ期に属する。敷地1と敷地2の境界の柱列とみられる。

柱列7117（図版29） 南東部で検出した南北方向の掘立柱列である。柱間は北から1.2m・1.1m・1.1m・1.1m・1.1mである。掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は径0.5～0.9m、深さ0.2～0.6mある。柱穴7292は底面に長径約0.2mの石が据わる。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などが出土した。京都Ⅺ期に属する。敷地3と敷地4の境界の柱列とみられる。

柱列2119（図版29） 南東隅で検出した南北方向の掘立柱列である。2基の柱穴が近接することから2時期の可能性がある。柱間は北から0.45m・2.15m・0.35mである。掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は径0.3～0.55m、深さ0.35～0.45mある。土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都Ⅺ期に属する。敷地4と敷地5の境界の柱列とみられる。

井戸6144 (図版28・120) 南西隅で検出した階段付きの円形石組井戸である。井筒部分の掘形は径約1.4mの円形を呈する。掘形上層の埋土はにぶい黄褐色砂泥で礫を中量含む。底部には径約0.6m、深さ約0.3mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。径0.05～0.1mの河原石で内径約0.6mの井筒を設ける。階段部分の掘形は南北約0.8m、東西約1.8mで、5段が遺存する。階段の内幅は約0.4mで、1段の高さは0.2～0.4mある。階段の踏み石は径0.1～0.3mの石材の上面を平坦に据え付ける。井戸の深さは約2.0mあり、底面の標高は39.2mである。土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都Ⅻ期に属する。敷地2内の井戸である。

石組6655 (図版27) 南端中央で検出した石組土坑である。掘形は円形で、南北約1.0m、東西約1.1m、深さ約0.7mある。掘形埋土は灰黄褐色砂泥で大礫を多量含む。掘形内に径0.2～0.3mの石材で径約0.3m、深さ約0.6mの空間を作る。底部は砂礫層に達する。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅻ期に属する。敷地3内の排水施設とみられる。

集石7095 (図版26) 南端東寄りで検出した集石土坑である。北と南は攪乱を受ける。掘形の残存長は南北約0.7m、東西約0.65m、深さは約0.35mある。掘形内東側に平瓦を2枚立て、径0.15m以下の小礫を詰める。土師器、施釉陶器、磁器、瓦、ガラス製品などが出土した。敷地4内の排水施設とみられる。

土坑2190 南東隅で検出した土坑である。東側は調査区外にのびる。規模は南北約2.7m、東西1.6m以上ある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都Ⅺ期新段階に属する。

土坑7101 南東隅で検出した方形の土坑である。規模は南北約1.7m、東西約1.8mある。埋土はにぶい黄褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑7087 南東隅で検出した大規模土坑である。土坑7101と重複する。規模は南北約7.0m、東西約7.6mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、金属製品、石製品などが出土した。京都Ⅻ期中段階に属する。

(6) 北調査区第3面の遺構 (図版8・9・121・122)

江戸時代中期から天明の大火(1788)までの遺構面である。検出遺構と寺院内施設の同定については、第4面と同様、「天明焼失前之古図」(図版148)を参考にした。

本堂周辺の遺構

本堂Ⅱ(図版20・21・122) 北西部で検出した礎石建物とその基壇である。基壇は、東西約22.3m、南北約20.4m、高さは約0.2mある。基壇周囲には縁石抜き取りに伴う溝がめぐる(図版20-18・20層)。基壇上では礎石据付穴列である東西方向の柱列1308、南北方向の柱列1064・1388を検出した。基壇端から約1.8m外側では、基壇に並行するやや小ぶりの礎石据付穴列を検出した。縁を支える柱礎石の据付穴とみられる。

北辺中央部には北に突出する後拝が取り付く。前拝は絵図から南面中央にあったことがわかるが、後世の削平により検出できなかった。本堂Ⅱ南東部では、本堂Ⅱと南に位置する祖師堂Ⅱを繋

ぐ廊5328を検出した。

柱列1308（図版30） 本堂Ⅱ基壇上で検出した東西方向の礎石据付穴列である。柱間は西から3.5m・4.5m・3.6m・4.4mである。掘形は円形ないし楕円形を呈し、規模は径1.1～1.4m、深さは約0.1mある。土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都Ⅱ期に属する。本堂北面の礎石据付穴列とみられる。

柱列1064（図版30） 本堂Ⅱ基壇上で検出した南北方向の礎石据付穴列である。柱間は北から2.1m・2.35mである。掘形は歪な円形で、規模は径0.6～0.85m、深さは0.06～0.2mある。土師器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。京都Ⅱ期に属する。本堂の西面近くの東柱礎石の据付穴列とみられる。

柱列1388（図版30） 本堂Ⅱ基壇上で検出した南北方向の礎石列である。柱間は3.3m等間である。掘形は円形ないし隅丸方形を呈し、径約0.9m、深さは0.2～0.25mある。礎石は長径0.5～0.6mある。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などが出土した。京都Ⅱ期に属する。本堂の東柱礎石列とみられる。

石列1552（図版32） 本堂Ⅱの北西部で検出した南北方向の基壇縁石列である。3石、0.8m分を検出した。基壇周囲では、縁石を貼り付けた明黄褐色粘土の痕跡を確認したが、石が残存するのは3石のみである。石材は板状で、長さ0.3～0.35m、幅0.08m、高さ0.13mある。掘形は幅約0.15m、深さは約0.1mある。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都Ⅱ期に属する。

本堂Ⅱ後拝（図版31） 本堂Ⅱ北辺中央に取り付く後拝基壇である。基壇外周には、縁石の抜き取り跡と考えられる幅約0.9m、深さ約0.5mの溝が巡り、そこから後拝の基壇規模は東西約5.3m、南北約4.2mと推測される。基壇上では、東西に並ぶ礎石を2基検出した。西側の柱穴1293の石は、長径約0.7m、厚さ約0.25mある。東側の柱穴3138の礎石は、長径約0.8m、厚さは約0.3mある。柱間は約4.5mである。2石の間で3基の柱穴を確認した。掘形の平面形は円形ないしは隅丸方形で、径0.35～0.5m、深さは0.3～0.4mある。礎石抜き取り痕や柱痕は確認できなかった。

集石3617（図版32） 本堂Ⅱ北辺東寄り、後拝南東隅で検出した平面形が円形の瓦組みの集石土坑である。掘形は隅丸方形で、南北約0.8m、東西約0.9m、深さは約0.3mある。平瓦の長辺を縦にして円形に組み、内径約0.5m、深さ約0.3mの筒を設ける。筒中に径0.05～0.25mの小石を詰める。土師器、土製品、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都Ⅲ期に属する。後拝の雨落ちとみられる。

太鼓堂3430・廊3445（図版123） 本堂Ⅱの北東側で検出した礎石建物である。礎石据付穴を6基検出した。東西2間、南北2間と考えられ、柱間は1.6m等間である。掘形は円形ないし楕円形を呈し、径0.7～1.0m、深さは0.1～0.2mある。埋土は褐色砂泥やにぶい黄褐色砂である。廊3445で本堂Ⅱと繋がる。廊3445に関する礎石据付穴は4基確認でき、そのうち2基は礎石が残る。幅約1.5m、南北3.7mの廊とみられる。土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都Ⅱ期に属する。

廊5328 本堂Ⅱ東辺の南延長上に南北方向に並ぶ礎石据付穴列である。礎石据付穴を3基検出した。柱間は北から1.8m・2.1mである。掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.7～1.1m、深さ0.4～0.6mある。埋土は褐色砂泥や灰黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都Ⅱ期に属する。本堂Ⅱと祖師堂Ⅱを繋ぐ廊の一部とみられる。

石組5400 (図版32) 本堂Ⅱの約10m南で検出した石組土坑である。掘形は一辺約1.3mの方形で、深さは約0.1mある。内側に角柱状に加工した花崗岩を方形に組む。角柱状の花崗岩は長さ約0.5～0.9m、幅約0.2m、高さ約0.2mある。土師器が出土した。灯籠の土台石とみられる。

柱穴3716 本堂Ⅱの北、廊3445と重複する柱穴である。掘形は径約0.5mある。埋土は褐色泥砂である。土師器、瓦、銭貨などが出土した。

柱穴3681 本堂Ⅱの南東で検出した柱穴である。掘形は東西約0.5m、南北約0.7mある。埋土はにぶい黄橙色泥砂である。瓦が出土した。

土坑5399 本堂Ⅱの南西で検出した不整円形の土坑である。規模は東西約3.5m、南北約4.7mある。埋土は暗褐色泥砂である。土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。京都Ⅲ期中段階に属する。

祖師堂周辺の遺構

祖師堂Ⅱ (図版22・23・34・35・123・124) 南半中央部で検出した建物である。礎石建物であったと考えられる祖師堂Ⅰから「天明焼失前之古図」に示される土蔵造りに建物構造が変化したと考えられ、布掘の地業7629とその中に据え付けられた礎石を検出した。地業の範囲から、建物規模は南北約12.5m、東西約15.0mと推定される。南辺では、地業7629と並行する東西方向の溝7460を検出した。規模は幅0.3m、深さ0.04mある。埋土は灰褐色泥砂である。雨落ち溝とみられる。溝南肩部に沿って、土蔵の壁化粧と考えられる白漆喰や瓦小片がまとまって出土している。

建物の西辺中央には前拝、建物の裏手となる東辺には石列で囲われた張り出し部が取り付く。また、北辺中央では出入口と考えられる張り出し部(北入口)を検出し、北辺東寄りでは地業7629の上面で石列6400とした化粧石列を検出した。北入口の敷設に伴い、土壁を改変したと考えられる。北入口の東側は漆喰敷きの三和土となっている。

地業7629 (図版34・35) 土蔵造りの祖師堂Ⅱの基礎部分である。幅1.2～1.7m、深さ0.3～0.4mの布掘溝が南北約12.5m、東西約15.0mの範囲に巡る。厚さ約0.05mの単位で版築状に土が充填される。溝底部では、北辺・東辺・南辺で土蔵に塗り込めた柱の礎石を合わせて13基検出した。西辺は前拝が取り付いて開口部となるため、柱の基礎は別構造であったと考えられる。四隅の4基は3石の石を組み合わせる。石の大きさは長径0.4～0.6m、厚さは0.2～0.3mある。地業埋土から土師器などが出土した。京都Ⅱ期に属する。

祖師堂Ⅱ前拝 (図版34・35) 祖師堂Ⅱ西辺中央に取り付く前拝基壇である。盛土は南北約5.3m、東西約2.0m、高さ約0.1mある。外周には幅0.15～0.3mの溝が巡る。雨落ち溝とみられる。基壇上では南北方向に並ぶ2基の礎石据付穴を検出した。北側の柱穴6447は礎石が据わり、南側の柱穴6388は抜き取られる。据付穴は歪な円形を呈し、径約0.9～1.0m、深さ約0.3mある。柱間は

約3.5mである。柱穴6447の礎石は一辺約0.4の五輪塔の地輪を転用したものである。前拝の北西隅では集石6451を検出した。平面形は歪な円形で、南北約0.8m、東西約0.8m、深さは約0.35mある。径0.05～0.2mの礫が詰まる。前拝の雨落ちとみられる。前拝の西では並行して西に延びる東西方向の溝2条を検出した。灯籠の台座とみられる集石6485・6232の間を通り、前拝の前で北に延びる南北方向の溝2条と交差する。参拝路とみられる。

祖師堂Ⅱ北入口（図版34） 祖師堂Ⅱ北辺中央で検出した漆喰敷である。南北約2.7m、東西約4.2mの範囲で漆喰が敷かれた痕跡を確認した。上面を平坦に加工した漆喰が部分的に遺存する。西辺と北辺では溝6456を検出した。溝の幅は約0.3m、深さは約0.1mある。埋土は黄灰色泥砂で漆喰片を多量含む。南西隅では漆喰製で長方形の土坑6455を検出した。規模は、南北約0.7m、東西約0.4m、深さは約0.4mある。径0.05～0.15mの礫が詰まる。雨落ちとみられる。地業7629と接する部分では、東西に並ぶ礎石（柱6504・6505）を検出した。柱間は約2.1mある。入口扉の柱礎石と考えられる。

石列7150・7151・7547（図版34・35） 祖師堂Ⅱの東辺で検出したコの字状に配置される石列である。東西方向の石列7547・7151と南北方向の石列7150の3つの石列で囲われた範囲は、東西約2.7m、南北約10.7mある。石列の石材の大きさは長径0.3～0.6mあり、宝篋印塔の台座を転用するものがある。東西方向の石列7547・7151の掘形は、祖師堂Ⅱの東辺の雨落ち溝とみられる溝を削平しており、後に付け足されたものと考えられる。

瓦組溝7212（図版34・35） 祖師堂Ⅱ北東部で東辺に沿って検出した南北方向の瓦組溝である。南北約3.0m分を検出した。掘形は幅約0.3m、深さ約0.1mある。平瓦を2～4枚重ねて立て並べる。

集石6232・6485（図版32） 祖師堂Ⅱ前拝の約3m西で検出した南北に並ぶ集石土坑である。南側の集石6232の平面形は楕円形で、南北約1.1m、東西約1.2m、深さは約0.1mある。一辺0.25～0.45mの角柱状の石が平坦面を上にして据わる。北側の集石6485は南側を削平されるが、平面形は楕円形と考えられ、検出長は南北約1.0m、東西約1.1m、深さは約0.2mある。径0.3～0.4の石が平坦面を上にして据わる。石材は花崗岩である。土師器、施釉陶器、金属製品、瓦が出土した。灯籠の基礎とみられる。

土坑8119 西端南寄り、祖師堂Ⅱの西で検出した円形の土坑である。規模は東西約1.0m、南北約0.8mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、土師質土器、施釉陶器、磁器、瓦類などが出土した。京都XIII期古段階に属する。

土坑6598 南部中央、祖師堂Ⅱと塔頭の間で検出した隅丸長方形の土坑である。規模は東西約0.8m、南北約1.1mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、土師質土器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。京都XIII期中段階に属する。

方丈と庫裡周辺の遺構

方丈Ⅱ・柱列7224（図版33・124） 中央部南東寄りで検出した南北方向の礎石据付穴列である。南北に6基が並ぶ。柱間は北から1.2m・1.9m・1.9m・1.9m・1.9mである。掘形は方形ない

し楕円形を呈し、径0.4～0.7m、深さは0.2～0.3mある。柱穴7578以外は長径約0.3～0.5m、厚さ0.2～0.3mの礎石が据わる。土師器、施釉陶器、磁器、石製品が出土した。方丈Ⅱ縁先の礎石列とみられる。

集石7275 (図版33) 南東部、柱列7224の西で検出した集石土坑である。北と西は攪乱を受ける。掘形は長方形と考えられ、残存長は東西約1.1m、南北約0.8m、深さは約0.1mある。縁の部分は深さ0.2mまで掘り下げ、平瓦を立てて据え付け、内側に径0.05～0.15mの石を敷き詰める。土師器が出土した。方丈Ⅱの雨落ちとみられる。

石敷5680 (図版33・125) 中央東寄り、柱列7224の北で検出した石敷、石列、漆喰製樋、土坑5658からなる遺構群である。石敷は東西約3.0m、南北約3.0mの範囲に広がる。石は亜円礫が多く、径約0.05～0.2mある。被熱により変色する。石敷上の北寄りで、平らな面を上にして置かれた東西方向の石列を約2.0m分検出した。石材は花崗岩と砂岩で、長径0.2～0.4m、厚さは0.05～0.2mある。南側でも土坑5658と重複して上面が平らな石を1石検出している。石敷上南西部では土坑5658とそれと接続する漆喰製樋を検出した。土坑5658は東西約1.3m、南北約1.4mの歪な円形を呈し、深さは約0.2mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。漆喰製樋は、検出長約0.6m、幅約0.2m、深さは約0.1mある。先端は土坑5658に落ち込む。方丈Ⅱの玄関に関係する遺構群とみられる。

石列5365 (図版37・125) 北東部、石敷5680の北で検出した南北方向の石列である。南北約4.8m分を検出した。西側に面をもたせて南北方向に並べる。石材は花崗岩と砂岩で、石の大きさは、長径0.15～0.35mある。一部墓石を転用する。方丈Ⅱと庫裡Ⅱを繋ぐ廊の縁石とみられる。

庫裡Ⅱ・柱列3176 (図版36) 北東部で検出した東西方向の礎石据付穴列である。礎石は遺存しない。柱間は西から2.0m・1.9m・1.9m・1.8mある。掘形は隅丸方形ないしは円形を呈し、径約0.8～1.1m、深さは約0.3mある。埋土には炭、焼土が混じる。土師器、瓦が出土した。庫裡Ⅱに関連する柱列とみられる。

石室2704 (図版36・125) 北東部、庫裡Ⅱの推定範囲内で検出した平面形が長方形の石室である。南東隅を後世の井戸に壊される。掘形は南北約6.5m、東西約4.9mの歪な方形を呈する。径0.3～0.6mの割石を並べ、内径で南北約4.2m、東西約1.8mの長方形の石室を築く。深さは約0.5mあり、底部の1段のみが遺存する。土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XIII期中段階に属する。

井戸3950 (図版37・126) 北東部、庫裡Ⅱの推定範囲内で検出した円形瓦組井戸である。掘形は南北約1.2m、東西約1.4mの楕円形を呈する。掘形上層の埋土は灰黄褐色砂泥で褐色砂泥のブロックを含む。底部には円形の桶が一部遺存する。桶の上に主に平瓦の端面を内側に向け積み上げて内径約0.7mの井筒を設ける。深さは約2.6m、底面の標高は39.0mである。土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XII期新段階～XIII期古段階に属する。

土坑2300 北東部、石室2704の西で検出した楕円形の土坑である。規模は南北約1.1m、東西約0.9mある。埋土は黒褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦、銭貨などが出土した。

土坑5777 北東部、石室2704の西で検出した長方形の土坑である。規模は南北約3.0m、東西約2.4mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

塔頭周辺の遺構

柱列7301 南部で検出した東西方向の掘立柱列である。東西約41m分を検出した。柱間は不均等で、重複する柱穴もあり、作り替えがあったと推測される。掘形は円形ないし楕円形を呈し、規模は径0.4～0.7m、深さ0.3～0.7mある。埋土は黒褐色砂泥や暗褐色砂泥で、炭を含むものもある。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などが出土した。京都XⅢ期に属する。塔頭北端の柱列である。

柱列6219 南西隅で検出した南北方向の掘立柱列である。柱間は北から0.7m・0.6mである。掘形は円形ないし楕円形を呈し、径0.4～0.7m、深さ0.3～0.5mある。埋土は暗褐色砂泥やにぶい黄褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都XⅢ期に属する。敷地1と敷地2の境界の柱列とみられる。

柱列7324 南部中央西寄りで検出した南北方向の掘立柱列である。2基の柱穴間の距離は約6.9mあり、間の柱穴は後世の遺構に削平されたと考えられる。掘形は円形ないし楕円形を呈し、径0.5～0.6m、深さは0.3～0.4mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都XⅢ期に属する。敷地2と敷地3の境界の柱列とみられる。

柱列7118 南東部で検出した南北方向の掘立柱列である。柱間は北から1.7m・3.8mで、間の柱穴は後世の遺構に削平されたと考えられる。掘形は円形ないし楕円形を呈し、径0.3～0.7m、深さは0.3～0.5mある。埋土は黒褐色泥砂や褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都XⅢ期に属する。敷地3と敷地4の境界の柱列とみられる。

柱列2121 南東隅で検出した南北方向の掘立柱列である。柱間は北から1.7m・2.2m・1.0mである。掘形は円形ないし楕円形を呈し、径0.2～0.5m、深さは0.3～0.4mある。埋土は黒褐色泥砂やにぶい黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都XⅢ期に属する。敷地4と敷地5の境界の柱列とみられる。

墓7399 (図版38) 南西隅で検出した。墓坑は調査区西壁の西に延び、北側は墓7343に削平される。検出規模は南北約0.75m、東西約0.4m、深さは約0.6mある。埋土には小礫を中量、炭、焼土を少量含む。下層から人骨が出土した。ほぼ全身骨格で、成人の下顎骨が2体分ある。土師器、土製品、施釉陶器、磁器、金属製品、ガラス製品などが出土した。京都XⅡ期に属する。敷地1内の墓である。

墓7343 (図版38) 南西隅で検出した。墓坑は調査区西壁の西に延び、北側は第1面の墓7435に削平される。検出規模は南北約0.75m、東西約0.3m、深さは約0.7mある。埋土には小礫、炭を少量含む。中層から2体分の人骨が出土した。成人の頭蓋骨・下顎骨・歯・大腿骨・脛骨と幼児の頭蓋骨・後頭骨・頭頂骨・下顎・歯・左上腕骨・左大腿骨・脛骨・環椎・胸骨・肋骨・胸椎がある。土師器、土製品、施釉陶器、磁器、銭貨などが出土した。京都XⅡ期に属する。敷地1内の墓である。

墓7399・墓7343は、形状と当時の埋葬習慣から方形木棺を使用した可能性が高い。

瓦組7202 (図版37) 南部中央西寄りで検出した円形の瓦組土坑である。掘形は径約0.8m、深さは約0.3mある。掘形埋土は暗褐色粘質砂泥である。平瓦の長辺を縦にして円形に組み筒状とする。土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都XⅢ期に属する。敷地2の門の雨落ちとみられる。

集石7333 (図版37) 南部中央で検出した楕円形の集石土坑である。掘形は南北約0.8m、東西約0.9m、深さは約0.35mある。中央が1段深くなる。埋土は褐色泥砂で、径0.2m以下の礫が詰まる。土師器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XⅢ期に属する。敷地3の門の雨落ちとみられる。

集石6801 (図版37) 南東部で検出した楕円形の集石土坑である。掘形は東西約0.55m、南北約0.65m、深さは約0.4mある。径0.1m以下の礫が多量に詰まる。土師器、磁器、瓦などが出土した。京都XⅢ期に属する。敷地3内の雨落ちとみられる。

石敷2054 (図版38・126) 南東隅で検出した石敷きである。南に面をもつ東西方向の石列1条と、南北方向の並行する石列2条の間に平坦面を上に向けた石を敷き詰める。南北石列の外側にも礫を敷く。石材の大きさは径0.1～0.3mある。土師器、施釉陶器、磁器が出土した。京都XⅡ期に属する。敷地4の門と内側通路の石敷きとみられる。

石室2104 (図版38) 南東隅で検出した長方形の石室である。掘形は南北約1.4m、東西約1.1m、深さは約0.4mある。掘形埋土は暗褐色砂泥である。径0.1～0.2mの河原石を積んで、内径が南北約0.8m、東西約0.4mの長方形の石室を築く。上部は瓦組みである。土師器、焼締陶器、瓦などが出土した。京都XⅡ期に属する。敷地5内の石室である。

土坑6775 南端東寄りで検出した土坑である。南側は調査区外に延びる。検出規模は東西約3.0m、南北約3.3mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、土製品、施釉陶器、焼締陶器、瓦類などが出土した。

(7) 北調査区第2面の遺構 (図版10・11・126・127)

江戸時代後期、天明八年の大火(1788)後から元治元年(1864)の大火までの遺構面である。検出遺構と寺院内施設の同定については、「天明類焼後元治兵燹前之古図」(図版149)を参考にした。

本堂周辺の遺構

本堂Ⅲ (図版20・21) 北西部で検出した基壇と礎石建物である。後世の削平により本堂母屋の礎石やその痕跡は遺存しないが、縁束の礎石据付穴を西面で7基、北面で6基、東面で3基、南面で1基検出した。基壇は、縁石の抜き取り溝から東西約25.4m、南北約22.2mと推定され、残存高は整地面から0.1～0.15mある。北辺中央部に北に突出する後拝が取り付く。東辺中央部から廊3844により、東に位置する庫裡Ⅲと繋がる。

柱列1039 (図版39) 本堂Ⅲ基壇上西端で検出した南北方向の礎石据付穴列である。礎石は遺存しない。柱間は北から4.1m・2.1m・2.0m・2.2m・2.4mである。掘形は円形ないしは楕円形を

呈し、径0.7～1.0m、深さ0.2～0.25mある。土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都XIII期に属する。本堂Ⅲの西側縁束の礎石列とみられる。

柱穴1072 本堂Ⅲ基壇上北東部で検出した礎石据付穴である。掘形は円形で、径約0.5m、深さは約0.2mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、瓦、石製品などが出土した。

集石5017 (図版39) 本堂Ⅲの南辺東寄りで検出した歪な円形の集石土坑である。掘形は東西約1.4m、南北約1.3m、深さは約0.8mある。土坑内に径0.1～0.4mの石が詰まる。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。本堂前拝の雨落ちとみられる。

本堂Ⅲ後拝 本堂Ⅲ北辺中央部で検出した後拝の基壇である。上部は削平されていたが、本堂Ⅲ基壇の縁石抜き取り溝が北に張り出すことから後拝と判断した。縁石抜き取り痕跡から推測される規模は、東西約6.0m、南北約4.0mある。

廊3844 本堂Ⅲ東辺中央から東に延びる礎石据付穴列である。柱穴3844・3161・3084・3087から成り、庫裡Ⅲの西柱列の柱3086・3093と繋がる。南北の柱間は約2.0mある。柱3844・3087には礎石が遺存する。掘形の平面形は円形ないしは隅丸方形を呈し、径0.6～1.3m、深さは約0.2mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥で炭・焼土を含む。本堂Ⅲと庫裡Ⅲを繋ぐ廊とみられる。

柱列1225 本堂Ⅲの基壇縁石抜き取り溝の下層で検出した大規模な掘形をもつ掘立柱列である。西辺で4基、北辺で4基、東辺で4基、南辺で1基、後拝の北辺で2基の柱穴を検出した。東辺と西辺の柱穴は対称位置にあり、南辺と北辺の柱穴も対称位置になるとみられる。柱は全て抜き取られていた。柱掘形の平面形は円形ないしは隅丸方形で、径0.9～1.1m、深さ1.2～1.3mある。掘形底部には径0.15～0.4mの平坦な石や瓦が据わる。土師器、土製品、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XIII期に属する。本堂Ⅲ建立時の足場柱穴列と考えられる。

井戸3399 (図版39) 本堂Ⅲの南東で検出した円形石組井戸である。後世の遺構に上部を削平される。掘形は南北約1.6m、東西約1.5mの円形を呈する。掘形埋土は灰黄褐色砂泥で礫を少量含む。底部は径約0.8m、深さ約0.5mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。割石を積み上げ、内径約0.7mの井筒を設ける。深さは約1.0m、底面の標高は40.7mである。施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。

井戸3400 (図版39) 本堂Ⅲの南東、井戸3399に隣接して検出した円形石組井戸である。後世の遺構に上部を削平される。掘形は南北約1.5m、東西約1.7mの円形を呈する。掘形埋土は灰黄褐色シルト質粘土で礫を多量含む。底部は径約0.8m、深さ約0.2mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。割石の長径を縦方向に組み、内径約0.9mの井筒を設ける。上部は割石の小口面を内側にして積み上げる。深さは約1.0m、底面の標高は39.6mである。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。

柱穴3206 本堂Ⅲの北で検出した柱穴である。径約0.6m、深さは約0.2mある。埋土は暗褐色泥砂である。瓦が出土した。

柱穴3342 本堂Ⅲの東で検出した柱穴である。径約0.8m、深さは約0.2mある。埋土は暗褐色

砂泥である。施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。南北方向に並ぶ掘立柱列のうちの1基とみられる。

柱穴3483 本堂Ⅲの北東で検出した柱穴である。径約0.5m、深さは約0.2mある。埋土は褐色泥砂である。土師器、瓦、金属製品などが出土した。

土坑1310 本堂Ⅲの西辺に接して検出した方形の土坑である。規模は南北約4.0m、東西約3.4mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器の他、瓦がまとまって出土した。

土坑3705 本堂Ⅲの北東で検出した方形の土坑である。規模は南北約2.8m、東西約2.4mある。埋土は暗褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

土坑3845 本堂Ⅲの東で検出した隅丸方形の土坑である。規模は南北約2.6m、東西約2.0mある。埋土は褐色泥砂である。土師器、焼締陶器のほか、瓦がまとまって出土した。

土坑5182 本堂Ⅲの南西で検出した土坑である。西は調査区外に延びる。検出規模は東西3.3m以上、南北約3.0mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、土人形、瓦類、石製品などが出土した。京都XIII期新段階に属する。

土坑5190 本堂Ⅲの南西で検出した方形の土坑である。南は土坑5182に削平される。検出規模は南北約4.6m、東西1.8m以上ある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑5477 西端中央で土坑5190を攪乱する円形の土坑である。規模は南北約0.7m、東西約0.6mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、瓦などが出土した。

土坑5243 西端中央で検出した土坑である。規模は南北約1.5m、東西約1.6mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

祖師堂周辺の遺構

祖師堂Ⅲ（図版22・23・127・128） 南半中央部で検出した建物である。第3面の土蔵造りの祖師堂Ⅱをほぼ踏襲する。基壇上には束柱のものと考えられる礎石据付穴が点在する。礎石が遺存するものもある。西辺には前拝が取り付く。祖師堂Ⅱ東辺にあった石列に囲われた張り出し部は整地されてなくなる（図版22-51～56層）。北辺には東西方向の廊6507が取り付く。

廊6507（図版40・128） 祖師堂Ⅲ北辺に取り付く東西方向の礎石列である。並行する2列を検出した。柱6506～6510の5基から成り、東西柱間は約2.7mの等間、南北柱間は約1.4mである。掘形は円形ないし隅丸方形を呈し、径0.45～0.85m、深さは0.05～0.2mある。全ての据付穴に一辺0.3～0.5mの方形の礎石が据わる。土師器、施釉陶器、磁器が出土した。祖師堂Ⅲ北入口から方丈に繋がる廊とみられる。柱6506は北入口の礎石を兼ねると考えられる。

石列6400（図版40・128） 祖師堂Ⅲ北辺東寄り、地業7629の上面で検出した東西方向の石列である。10石が北に面を揃えて並ぶ。石材の北面は被熱により赤変する。検出長は約6mで、石材は花崗岩を用い、1石の大きさは径約0.3～0.5mある。北入口部分の化粧石と考えられる。地業内の柱穴7632・7633・7634の上に構築されており、断面観察（図版23-14～15層）から、土蔵の

壁を破って付け足されたと考えられる。

集石6483 (図版40) 廊6507の中央で検出した平面形が円形の集石土坑である。掘形は径約0.4 m、深さは約0.2 mある。方形に組まれた平瓦の中に、径0.03～0.06 mの礫が詰まる。廊6507が設置される前に機能した雨落ちとみられる。

柱穴7157 祖師堂Ⅲの南東で検出した柱穴である。径約0.4 m、深さは約0.3 mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、瓦、石製品などが出土した。

柱穴6925 祖師堂Ⅲの北東で検出した柱穴である。径約0.6 m、深さは約0.2 mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、瓦などが出土した。

土坑5746 祖師堂Ⅲの北で検出した隅丸方形の土坑である。規模は東西約1.6 m、南北約0.9 mある。埋土は褐色砂泥である。土師器、瓦などが出土した。

土坑6452 祖師堂Ⅲ前拝の西で検出した土坑である。東半は後世の遺構に壊されている。規模は東西約0.4 m、南北約0.6 mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦、銭貨などが出土した。

土坑7352 祖師堂Ⅲの南西部で検出した不整形の土坑である。規模は東西約1.5 m、南北約1.6 mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

鐘楼6420 (図版128) 祖師堂Ⅲの南西で検出した方形に巡る溝である。溝に囲われた範囲は、南北約6.0 m、東西約5.6 mある。溝の幅は約0.3 m、深さは0.1～0.2 mある。埋土は暗褐色砂泥である。溝周囲は黄褐色砂泥により整地される。溝から土師器、施釉陶器、瓦などが出土した。鐘楼の基壇縁石の抜き取り溝とみられる。

井戸6320 (図版46・54・134) 鐘楼6420の北で検出した円形石組井戸である。掘形は径約1.8 mの円形を呈する。掘形上層の埋土は黒褐色砂泥で礫を少量含む。底部には河原石の長径を縦方向に組み内径約0.7 mの井筒を設ける。中部は径0.1～0.2 mの河原石の小口面を内側にして積み上げる。上部の井筒内径は径約1.2 mと広がる。深さは約1.8 m、底面の標高は39.7 mである。土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XIII期に属する。後の第1面では、北東方向に石組溝6321が接続され、排水施設に転用される。

方丈と庫裡周辺の遺構

方丈Ⅲ・地業2452 (図版42・43・129) 東半中央部で検出した布掘地業された建物である。東西5列、南北1列の布掘地業から成り、地業全体の範囲は東西16.5 m以上、南北約19 mに及ぶ。布掘地業の溝は、幅1.0～2.0 m、深さは0.6～0.9 mある。北から2列目と3列目が西側に約3.5 m突出する。埋土は砂礫と砂泥を交互に突き固めて版築される。地業直上では礎石据付穴を数基検出した。据付穴は円形ないし隅丸方形を呈し、径0.7～1.0 m、深さは0.05～0.35 mある。柱穴2333・3388・2357・5073には礎石が遺存する。柱穴2333・2357の礎石は長径0.15～0.6 mの3石が組み合わされる。柱穴3388・5073の礎石は長径約0.5 mある。布掘地業から土師器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。地業2452は方丈Ⅲの礎石据付のための基礎地業とみられる。

石列6850（図版42・43） 地業2452の西で検出した南北方向の石列である。掘形は南北約10.5m分を検出した。幅は0.5～0.7mある。石は南北約6.9m分が残る。長径0.2～1.15m、短径0.2～0.3mの角柱状の石材を西側に面をそろえて並べる。土師器、施釉陶器、磁器、瓦が出土した。

石組6842（図版42・43） 地業2452の南西、石列6850の東で検出した石組土坑である。掘形は円形を呈し、径約1.1m、深さは約0.9mある。下層は砂礫や泥砂で埋め、その上に角柱状に加工した花崗岩を方形に組み、その内側に平瓦を立てて並べる。石材の大きさは長径0.6～0.8m、短径約0.2mある。土師器、施釉陶器、瓦が出土した。京都XIV期に属する。方丈Ⅲ敷地内の排水施設とみられる。

庫裡Ⅲ（図版41・129） 北東部で検出した礎石建物である。礎石据付穴を13基検出した。建物規模は東西約11.4m、南北約11.6m、柱間は1.8～4.0mの不等間である。据付穴掘形は円形ないしは隅丸方形を呈し、径0.9～1.2m、深さは0.2～0.5mある。埋土には礫が詰まる。柱穴3058・3059・3060・3085・3093は礎石が遺存する。礎石は長径0.2～0.4mの石が組み合わせられている。土師器、施釉陶器、瓦が出土した。京都XIII期新段階に属する。庫裡Ⅲの礎石据付穴群とみられる。建物南辺の柱穴3093と柱穴3057間、建物東辺の柱穴3099と柱穴3115間、柱穴3115と柱穴3061間は柱間が広く、出入口などになる可能性がある。

埋甕2235（図版44） 北東部、方丈Ⅲと庫裡Ⅲの間で検出した埋甕である。後述する埋甕3069・3072とともに南北に3基が並ぶ。掘形は不整円形で、径約0.9m、深さは約0.5mある。土坑の中央部に信楽産甕を据え付ける。土師器、施釉陶器、瓦などの他、甕内から銭貨91枚が出土した。遺存状態が悪く全点は確認できないが寛永通寶とみられる。遺物の時期は京都XIV期に属する。便槽として使用されたとみられる。

埋甕3069（図版44・129） 埋甕2235・3072と南北に並ぶ埋甕である。掘形は不整円形で、径約0.6m、深さは約0.2mある。土坑の中央部に信楽産甕を据え付ける。土師器、施釉陶器、磁器、瓦が出土した。京都XIV期に属する。便槽として使用されたとみられる。

埋甕3072（図版44・129） 埋甕2235・3069と南北に並ぶ埋甕である。掘形は不整円形で、長径約0.75m、深さは約0.5mある。土坑の中央部に信楽産甕を据え付ける。土師器、施釉陶器、瓦が出土した。京都XIV期に属する。便槽として使用されたとみられる。

埋甕6708（図版44） 方丈Ⅲの地業2452と石列6850の間で検出した埋甕である。掘形は円形で、径約0.8m、深さは約0.55mある。土坑の中央部に信楽産甕を据え付ける。甕は底部から約0.3mが遺存する。甕の口縁部が欠損した部分に平瓦を補填する。土師器、磁器、瓦、金属製品が出土した。京都XIV期中段階に属する。便槽として使用されたとみられる。

井戸2620（図版45・130） 方丈Ⅲの地業2452の北で検出した円形石組井戸である。井戸東部は調査区外となる。掘形は南北約2.0m、東西1.5m以上の不整円形を呈する。掘形上層の埋土は黒褐色泥砂で礫を多量含む。底部に内径0.7m、高さ0.4mの花崗岩製の石筒を据え付け、その上に割石の長径を縦方向に組み、内径約0.8mの井筒を設ける。井戸側中部は径0.1～0.2mの割石の小口面を内側にして円形に積み上げる。上部では径0.3～0.4mの石を積み上げる。深さは約1.7m、底

面の標高は39.6mである。土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XIII期に属する。

井戸2465（図版45） 方丈Ⅲの地業2452の北、井戸2620の南西で検出した円形石組井戸である。掘形は南北約2.6m、東西約2.3mの不整円形を呈する。掘形上層の埋土は褐色の泥砂層で礫を多量に含む。底部は径約0.7m、深さ約0.5mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。中位には河原石の長径を縦方向に組み、内径約0.9mの井筒を設ける。上部は河原石の小口面を内側にして円形に積み上げる。上部の石組は壊されている。深さは約2.3mあり、底面の標高は38.8mである。土師器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。

井戸3109（図版45） 北東隅で検出した円形石組井戸である。掘形は南北約2.0m、東西1.7m以上の円形を呈する。掘形上層の埋土は灰黄褐色砂泥で礫を中量含む。底部から径0.1～0.4mの割石を積み上げて、内径約1.3mの井筒を設ける。深さは約1.6m、底面の標高は40.0mである。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。

瓦組3110（図版45） 北東隅で検出した円形の瓦組土坑である。第4面の井戸3396の直上で検出した。東部は井戸3109に削平される。掘形の平面形は不整円形で、南北約1.5m、東西1.1m以上、深さは約0.2mある。底面の標高は40.7mである。丸瓦と平瓦を円形に組み、内径は約1.0mある。土師器、施釉陶器、磁器、金属製品などが出土した。京都XIV期に属する。井戸3396廃絶後に排水施設として利用したとみられる。

土坑5635 方丈Ⅲの地業2452の西で検出した方形の土坑である。規模は南北約2.0m、東西約2.0mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦、銭貨などが出土した。

土坑7626 方丈Ⅲの地業2452の西、石列6850の下層で検出した土坑である。北側は後世の遺構に壊される。規模は南北2.2m以上、東西約3.0mある。埋土は褐色砂泥である。土師器、磁器、施釉陶器、瓦などが出土した。

土坑6825 方丈Ⅲの地業2452の西、石列6850の下層で検出した不整円形の土坑である。規模は南北約1.8m、東西約1.8mある。埋土は暗褐色泥砂である。施釉陶器、瓦などが出土した。

土坑7178 方丈Ⅲの地業2452の南西で検出した楕円形の土坑である。規模は南北約1.6m、東西約2.8mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、焼締陶器、磁器、瓦、銭貨などが出土した。

土坑2369 東端中央部で検出した土坑である。東側は調査区外に延びる。規模は南北約1.1m、東西0.7m以上ある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦、金属製品などが出土した。

土坑2107 方丈Ⅲの南、推定方丈Ⅲ敷地南端で検出した長方形の土坑である。規模は南北約1.1m、東西約3.8mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、土師質土器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。京都XIV期古段階に属する。

土坑2013 方丈Ⅲの南で検出した長方形の土坑である。規模は南北約2.3m、東西約4.2mある。埋土は黒褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

土坑2262 庫裡Ⅲと方丈Ⅲの間で検出した円形の土坑である。径約0.7mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、瓦などが出土した。

土坑3498 北端東寄り、推定庫裡Ⅲ敷地の北側で検出した土坑である。北側は調査区外に延び、東側は後世の遺構に壊される。規模は南北3.3m以上、東西1.9m以上ある。埋土は暗褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦類などが出土した。京都XIV期古段階に属する。

塔頭周辺の遺構

瓦列2037 (図版46) 南東部で検出した東西方向の瓦列である。東側は調査区外に延び、西側は後世の遺構に壊される。東西約5.2m分を検出した。掘形は幅0.1～0.2m、深さは約0.15mある。掘形の中央に平瓦を立てて並べる。土師器、瓦が出土した。京都XIII～XIV期に属する。塔頭北側の区画施設とみられる。

柱穴6572・7029 南西部で検出した東西に並ぶ2基の礎石据付穴である。西が柱穴6572、東が柱穴7090である。柱間は約3.0mある。掘形は楕円形を呈し、径0.6～0.7m、深さ0.3～0.4mある。埋土は暗褐色砂泥やにぶい黄褐色砂泥で炭、焼土を含む。土師器、磁器などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。敷地2の門の礎石据付穴とみられる。

瓦組6216 (図版47) 南西部、柱穴6527の南西で検出した瓦組土坑である。西側を後世の遺構により壊される。掘形は南北約0.8m、東西0.45m以上、深さは約0.25mある。掘形側面に粘質シルトを貼り平瓦を立て、南北約0.5m、東西0.4m以上の方形の室を作る。焼締陶器、瓦などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。敷地2の門の雨落ちとみられる。

石組6207・6525 (図版46) 南部中央で検出した東西に並ぶ2基の石組土坑である。西が石組6207、東が石組6525である。いずれも掘形は方形で、石組6207の掘形は、南北約0.9m、東西約1.0m、深さは約0.7mある。底部は砂礫層に達する。掘形埋土は黒褐色砂泥で小礫を少量含む。掘形内に径0.15～0.3mの割石で、一辺約0.35m、深さ約0.6mの室を作る。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。石組6525の掘形は、南北約1.1m、東西約1.1m、深さは約0.8mある。底部は砂礫層に達する。掘形の埋土は黒褐色砂泥で小礫を少量含む。掘形内に径0.15～0.3mの割石で、一辺約0.35m、深さ約0.5mの室を作る。施釉陶器、磁器、土製品、石製品、金属製品などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。敷地3の門の東西雨落ちとみられる。

柱穴2126・2166 南東部で検出した東西に並ぶ2基の礎石据付穴である。西が柱穴2126、東が柱穴2166である。柱間は約2.8mある。掘形は楕円形を呈し、径0.4～0.6m、深さは0.3～0.4mある。埋土は暗褐色砂泥で炭、焼土を含む。土師器、磁器などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。敷地4内の門の礎石据付穴とみられる。

埋甕2039 (図版47・130) 南東部で検出した埋甕である。掘形は南北約0.55m、東西約0.5mの円形を呈する。深さは約0.5mある。掘形上層の埋土は黒褐色細砂である。掘形の中央に丹波産の甕を据え付ける。甕内面に灰白色の付着物がみられることから便槽として使用されたとみられる。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器が出土した。京都XIII～XIV期に属する。敷地

4内の便槽として使用されたとみられる。

埋甕2061（図版47） 南東部で検出した埋甕である。底部付近のみが遺存する。掘形は南北約0.4m、東西約0.4mの円形を呈する。深さは約0.1mある。掘形の埋土は褐色微砂である。掘形の中央に底径約0.2mの甕を据え付ける。甕の高さは約0.1mが遺存する。土師器、瓦器、焼締陶器、磁器などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。敷地4内の便槽として使用されたとみられる。

井戸6811（図版46） 南端東寄りで検出した円形石組井戸である。上半部の石材は抜き取られる。掘形は南北約1.5m、東西約1.5mの歪な円形を呈する。掘形埋土は灰黄褐色粗砂で礫を中量含む。底部から漆喰片や河原石の長径を縦方向に組み、内径約0.6mの井筒を設ける。中位は漆喰片や河原石の小口面を内側にして積み上げる。平瓦積みの部分もみられる。深さは約1.1m、底面の標高は39.7mである。施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIII期に属する。敷地4内の井戸である。

集石2057 南東隅で検出した集石土坑である。北側と西側は削平され、南側は調査区外に延びる。掘形は南北3.4m以上、東西0.6m以上、深さは約0.1mある。径0.2m以下の小礫が詰まる。土師器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。敷地4と敷地5の境界施設とみられる。

土坑2155 南東部で検出した楕円形の土坑である。規模は南北約1.8m、東西約1.3mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、土製品、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦類などが出土した。敷地4内の土坑である。

土坑6586 南西部で検出した長方形の土坑である。規模は南北約0.9m、東西約2.0mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦、金属製品などが出土した。敷地2の北端付近の土坑である。

土坑6611 南西隅で検出した円形の土坑である。規模は南北約1.8m、東西約1.9mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、瓦などが出土した。敷地2内の土坑である。

（8）北調査区第1面の遺構（図版12・13・130・131）

元治元年（1864）の大火後の遺構面である。検出遺構と寺院内施設の同定については、「現在絵図面」（図版150）を参考にした。

本堂周辺の遺構

本堂Ⅳ（図版20・21） 北西部で検出した礎石建物とその基壇である。基壇上では多数の礎石据付穴を検出した。検出した礎石据付穴から推定される建物規模は、東西約19.7m、南北約17.1mで、4面に幅約3.0mの縁が付くと考えられる。基壇は、縁石の抜き取り溝から推定東西約26.8m、南北約24.3mとみられる。第2面の本堂Ⅲ基壇の上に0.1～0.15mの盛土を行い、基壇を拡張している（図版20・21）。周囲の整地面から基壇上面までの高さは0.1～0.15mある。北辺中央部に北に突出する後拝が取り付く。

本堂Ⅳ礎石据付穴群（図版49） 本堂Ⅳの基壇上面で14基の大規模な礎石据付穴を検出した。中

央の柱穴1101・1069・1045・1057が須弥壇の礎石据付穴、その両側は脇陣の礎石据付穴と考えられる。礎石は遺存しない。掘形は隅丸方形ないしは不整円形を呈し、径0.9～2.2m、深さは0.05～0.35mある。須弥壇正面のものとみられる柱穴1045と柱穴1057は他より径が大きく、深く掘り込まれる。また、北西隅の柱穴1020も他より深く掘り込まれ、版築が行われている。柱間は中央の本陣部分が東西約5.8m、南北約5.5mある。脇陣部分の柱間は約3.5mでほぼ等間である。据付穴群からは土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都XIV期に属する。

石列1035 (図版48・49) 本堂IV北面中央西寄りで検出した基壇縁石列である。縁石の大半は抜き取られていたが、後拝西側に接する部分のみ遺存した。掘形は幅0.9～1.0m、深さは約0.3mある。長径0.4～0.8mの石材を平坦に加工した面を北に向けて据える。7石が遺存する。掘形から土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。

柱列1244 (図版49) 本堂IV基壇上北辺と西辺で検出した礎石据付穴列である。北辺と西辺で合わせて12基検出した。柱間は2.4～3.0mある。据付穴は円形ないしは楕円形を呈し、径0.35～0.55m、深さは0.2～0.4mある。北辺の柱穴1130のみ地下式礎石が遺存する。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などが出土した。京都XIV期に属する。本堂IVの縁の礎石据付穴とみられる。

本堂IV後拝 (図版48・131) 本堂IV北辺中央部で検出した後拝の基壇である。規模は、遺存する縁石と縁石抜き取り痕から東西約5.6m、南北約3.2mと推測される。基壇は版築され、高さは約0.35mある。後拝上で東西に並ぶ礎石を検出した。西が柱穴1055、東が柱穴1056である。柱間は約3.6mある。柱穴1055は、径1.6m以上、深さは約0.55mある。一辺約0.8mの方形の礎石が据わる。柱穴1056は、径1.4m以上、深さは約0.4mある。一辺0.6～0.8mの方形の礎石が据わる。柱穴1055が基壇縁石据付掘形の溝1100に切られるため(図版48 Aライン)、礎石を据え付けた後に基壇化粧を行ったと考えられる。溝1100は幅約1.1m、深さは約0.2mある。土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都XIV期に属する。

石組1001 (図版48) 本堂IV後拝の西辺で検出した平面形が方形の石組土坑である。掘形は南北約1.3m、東西約1.5m、深さは約0.8mある。底部は砂礫層に達する。掘形内には径0.05～0.4mの河原石が詰まる。上面は、長径約1.1mの角柱に加工した石材を「コ」字形に組む。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦、石製品などが出土した。京都XIV期に属する。本堂IVの雨落ちとみられる。

集石3002 (図版48) 本堂IV後拝の東辺で検出した方形の集石土坑である。掘形は南北約1.3m、東西約1.4m、深さは約0.8mある。底部は砂礫層に達する。掘形内には径0.1～0.4mの河原石が詰まる。対になると考えられる西辺の石組1001と同様、上面に石材が組まれていた可能性が高い。掘形から土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。本堂IVの雨落ちとみられる。

柱列1174 本堂IVの基壇周囲で検出した掘立柱列である。基壇から約1.5m離れてめぐり、後拝部分は輪郭と合わせて屈曲してめぐり、柱間は0.8～2.0mで不等間である。掘形は円形ないしは楕円形を呈し、径0.5～0.7m、深さは0.4～0.8mある。柱痕跡が確認できるものが多く、柱痕跡から

推測される柱径は0.2～0.3mある。埋土は暗褐色砂泥やにぶい黄褐色砂泥で炭、焼土を含む。土師器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。本堂IV建立時の足場穴とみられる。

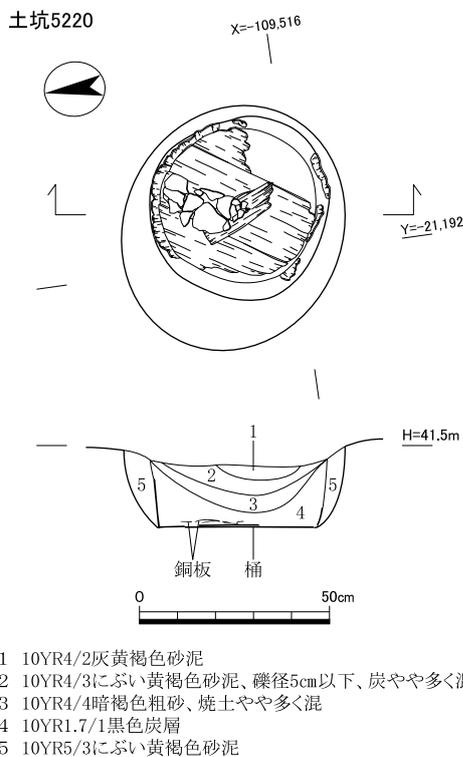
井戸5212 (図版53) 本堂IVの南東で検出した円形石組井戸である。掘形は南北約2.5m、東西約2.5mの不整形円形を呈する。掘形上層の埋土は黒褐色砂泥で礫を多量含む。底部には径0.75m、高さ0.45mの桶を据え付ける。割石の長径を縦方向に組み、内径約0.9mの井筒を設ける。上部は割石の小口面を内側にして円形に積み上げる。深さは約1.9m、底面の標高は39.2mである。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。

土坑5113 本堂IVの西で検出した土坑である。西側は調査区外に延びる。規模は南北約5.3m、東西2.6m以上ある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、銭貨などのほか、瓦類がまとまって出土した。京都XIV期中段階に属する。

土坑1144 本堂IVの西で検出した長方形の土坑である。土坑5113に削平される。規模は南北約5.3m、東西約2.4mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑5220 (図17) 本堂IVの南東で検出した楕円形の土坑である。掘形は長径約0.7m、短径約0.6m、深さは0.2mある。径約0.45mの木製桶が据わる。桶の底板直上から銅板が出土した。銅板は遺存状況が悪いものの、円形であった可能性がある。表面、裏面に文様などの加工はなかった。施釉陶器、瓦などが出土した。

土坑3582 本堂IVの東、方丈IVとの間で検出した大規模土坑である。規模は南北約4.4m、東西約4.4mある。埋土はにぶい黄褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、磁器、銭貨のほか、瓦がまとまって出土した。



- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径5cm以下、炭やや多く混
- 3 10YR4/4暗褐色粗砂、焼土やや多く混
- 4 10YR1.7/1黒色炭層
- 5 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥

図17 第1面 土坑5220実測図 (1:20)

土坑3032 本堂IVの東、方丈IVとの間で検出した楕円形の土坑である。規模は南北約3.2m、東西約4.0mある。埋土は褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑5095 本堂IVの南西で検出した円形の土坑である。規模は南北約1.0m、東西約1.2mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

土坑5096 本堂IVの南西で検出した土坑である。北西部を後世の遺構に壊されている。規模は南北約1.6m、東西約2.8mある。埋土は暗褐色砂泥である。施釉陶器、磁器のほか、瓦がまとまって出土した。

土坑5277 本堂IVの南東で検出した円形土坑である。規模は南北約1.3m、東西約1.1mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、金属製品などが出土した。

土坑1006 本堂Ⅳの北西で検出した土坑である。西は調査区外に延びる。規模は南北約3.6m、東西約3.0m以上ある。埋土は黒褐色砂泥である。施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑3017 本堂Ⅳの北東で検出した隅丸方形の土坑である。規模は南北約3.3m、東西約3.8mある。埋土は褐色泥砂である。土師器、磁器、瓦などが出土した。

土坑3481 本堂Ⅳの北東で検出した隅丸方形の土坑である。土坑3017に削平される。規模は南北約3.9m、東西約3.9mある。埋土は褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、瓦、銭などが出土した。

土坑3037 本堂Ⅳの北東で検出した方形の土坑である。西側は攪乱を受ける。規模は南北約1.6m、東西1.0m以上ある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑3214 本堂Ⅳの北で検出した大規模土坑である。規模は南北約3.8m、東西約6.0mある。埋土は褐色泥砂である。施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。

溝5015 本堂Ⅳと祖師堂Ⅳの間で検出した東西方向の溝である。東西約8.5m分を検出した。幅は約1.9mある。埋土は褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦、銭貨などが出土した。

祖師堂周辺の遺構

祖師堂Ⅳ (図版22・23・132) 南部で検出した礎石建物の基壇である。基壇規模は東西約22.0m、南北約19.0m、高さは0.2～0.3mある。第2面の祖師堂Ⅲ基壇に対し、元治元年火災後の瓦礫などを用いて全体的に拡張する。特に東側は凸条に大きく拡張される。基壇縁石は西辺、東辺を中心に部分的に遺存する。被熱したものがあり、元治元年の火災以前に祖師堂や方丈の縁石として用いられたものが転用されたとみられる。基壇上では複数の礎石据付穴を検出した。西辺には前拝が取り付く。

祖師堂Ⅳ前拝 (図版50・132) 祖師堂西辺で検出した前拝の基壇である。第2面祖師堂Ⅱの前拝基壇を南北に拡張しており、規模は南北約7.6m、東西約2.7mある。北辺と南辺には、縁石の石列6252がL字状に配される。石材は長径0.3～0.6mある。南辺の石列6252の南には、漆喰で固定した平瓦が遺存した。凹面を上に向けて並べており、雨落ちとみられる。前拝西辺には、石列6445が石列6252から約0.3m間隔をあけて並ぶ。長径0.2～0.4mの長方体の石材を用いる。前拝上で南北に並ぶ2基の礎石を検出した。北が柱穴6446、南が柱穴6387である。柱間は約4.8mある。柱穴6446の平面形は不整円形で、径約0.95m、深さは約0.3mある。径約0.5mの礎石が据わる。柱穴6387の平面形は隅丸方形で、径約1.3m、深さは約0.8mある。径約0.8mの礎石が据わる。柱穴6446と柱穴6387の間では「コ」字状の溝を検出した。溝の幅は約0.3m、深さは約0.2mある。

石列6361 (図版50～52) 祖師堂Ⅳ西辺北側と東辺、東辺の拡張部で検出した基壇縁石列である。石材は全て花崗岩である。西辺の石列は、長径0.5～0.7m、短径0.3～0.5mの石材を用いる。東辺の石列は、北側と拡張部の北辺では長径0.5～1.3m、短径0.15～0.3mの長方体の石材を用いる。東辺南側と拡張部南辺は、西辺と同様の石材を用いる。西辺と東辺南側の石材は元治元年火災以前の祖師堂縁石の転用材、東辺北側の石材は方丈の縁石などの転用材と考えられる。

祖師堂Ⅳ礎石据付穴群 (図版51) 祖師堂Ⅳ基壇上面で検出した礎石据付穴群である。20基検出した。そのうち13基は礎石が遺存する。据付穴の径が1.1m以上ある大規模なもの、径が0.7m以

下の小規模なものが混在する。小規模なものは東柱の礎石据付穴と考えられる。北辺の柱穴6331・6329は径が約0.35mとさらに小さく、縁束の礎石据付穴とみられる。据付穴は楕円形ないしは隅丸方形を呈し、径0.35～1.5m、深さは0.1～0.4mある。礎石の大きさは、長径0.25～0.8mある。北西隅の柱穴6172は礎石は遺存しないが、根固め石が残る。南側の柱穴6182は礎石が重なり、東側の柱穴6188は礎石の上に根固め石が置かれる。柱穴6159と柱穴6160は重複する。これらは、修復に伴うものとみられる。掘形から土器類、瓦、銭貨などが出土した。

井戸6214 (図版53) 南半、祖師堂Ⅳの南で検出した円形石組井戸である。上半部の石材は抜き取られている。掘形は南北約2.5m、東西約2.6mの不整形円形を呈する。掘形埋土は黒褐色砂泥で礫を少量含む。底部に径約0.8m、深さ約0.2mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。径0.1～0.3mの割石や墓石を積み上げて、内径約0.9mの井筒を設ける。深さは約1.7m、底面の標高は39.5mである。土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、ヨーロッパ陶器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。

土坑2011 祖師堂Ⅳの東で検出した不整形な土坑である。規模は南北約3.5m、東西約1.2mある。埋土は暗褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑6768 祖師堂Ⅳの南東で検出した円形土坑である。規模は南北約2.2m、東西約2.0mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦、ガラス製品などが出土した。

土坑6197 祖師堂Ⅳの南東で検出した楕円形の土坑である。規模は南北約1.4m、東西約1.8mある。埋土は黒褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑7423 祖師堂Ⅳの南東で検出した隅丸方形の土坑である。規模は南北約4.6m、東西約3.7mある。埋土は褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑6244 祖師堂Ⅳの南で検出した方形の土坑である。南側を後世の遺構に壊されている。規模は南北2.8m以上、東西約3.6mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦、金属製品などが出土した。

井戸6283 (図版55) 西端南寄りで検出した円形石組井戸である。井戸西半部は調査区外に延びる。掘形は南北約1.5m、東西1.1m以上の不整形円形とみられる。掘形上層の埋土は灰黄褐色泥砂で礫を少量含む。下部では河原石の長径を縦方向に組み、内径約1.0mの井筒を設ける。上部は河原石の小口面を内側にして円形に積み上げる。壁が崩落する危険があり、深さ約1.2mで掘り止めた。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。

井戸6241 (図版53) 南西部、祖師堂Ⅳの西で検出した円形石組井戸である。掘形は南北約2.2m、東西約2.2mの円形を呈する。掘形上層の埋土はにぶい黄褐色砂泥で礫・炭、焼土を少量含む。最下部にはモルタルで内径約0.7mの水溜施設を設ける。下部には長方形に成形した割石の長径を縦方向に組み、内径約0.8mの井筒を設ける。上部は割石や河原石の小口面を内側にして円形に積み上げ、目地には漆喰を塗り込めた上にモルタルを施す。壁が崩落する危険があり、深さ約3.4mで掘り止めた。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦、石製品などが出土した。京都XIV期に属する。

石組溝6321・井戸6320新（図版54・134） 南西部、祖師堂Ⅳの西で検出した北東から南西に向かう石組溝とそれに接続する井戸である。石組溝6321の掘形は幅0.6～0.8m、深さは約0.2mある。底は漆喰で固め、北半の底には平瓦を敷く。北端は切石、それ以外は割石を並べて側壁とする。上部は石材で蓋をする。南側は井戸6320新と接続する。井戸6320新は、第2面の井戸6320に長径1.0～1.5mの切石で蓋をしたものである。井戸6320廃絶後に石組溝を取り付け、暗渠排水としたと考えられる。石組溝6321からは土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。

井戸6151（図版55） 南西部、石組溝6321の西で検出した石組井戸である。掘形は南北約2.7m、東西約2.4mの隅丸方形を呈する。掘形上層の埋土は灰黄褐色泥砂で礫を多量含む。径0.2～0.5mの河原石や割石を積み上げて井筒を設ける。井筒は北面の一部のみが遺存する。目地にはモルタルを施す。深さ約1.2m、底面の標高は40.2mである。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。

池2004（図版56・133） 南東部、祖師堂Ⅳと塔頭の間で検出した方形石組の池である。東は調査区外へ延びる。掘形は南北約4.5m、東西14.5m以上の隅丸長方形である。掘形埋土は黒褐色砂泥で小礫を少量含む。最下段に径0.15～0.3mの小振りの石を並べ、その上に径0.2～0.8mの割石を積み上げて壁をつくる。深さは約2.1mある。埋土は上層が暗オリーブ褐色砂泥、下層は暗灰黄色砂泥で、転落石を多く含む。土師器、土製品、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦、金属製品、石製品、ガラス製品などが出土した。京都XIV期中段階に属する。西部は石樋6650により井戸6771と接続する。絵図によれば、元治元年の大火以後に造成された放生池とみられる。

石樋6650（図版55・56） 池2004と井戸6771を繋ぐ石樋である。石樋は花崗岩製で、断面形が凹形に加工される。東西長約1.6m、幅0.25～0.35m、凹部は幅約0.15m、深さは0.07～0.1mある。底は、東側の池2004に水が流れる傾斜をもつ。土師器、土製品、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。

井戸6771（図版55・56） 石碑6771で池2004と繋がる円形石組井戸である。掘形は南北約1.6m、東西約1.7mの楕円形を呈する。掘形埋土は暗褐色砂泥で礫と焼土を少量含む。底部は径約0.9m、深さ約0.3mの窪みがあるが水溜施設は確認できない。中位には割石の長径を縦方向に組み、内径約0.9mの井筒を設ける。上部は割石の小口面を内側にして円形に積み上げる。深さは約1.0m、底面の標高は40.0mである。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。

土坑6260 南西部、祖師堂Ⅳの西で検出した不定形の大型土坑である。規模は南北約9.3m、東西約8.8m、深さ約0.5mある。埋土は褐灰色砂泥である。底部にはマツの根が遺存しており、植栽痕とみられる。土師器、土製品、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。絵図に記載される「鶴亀松跡」とみられる。

土坑6406 南西部、井戸6320新の南で検出した土坑である。規模は南北約2.4m、東西3.6m以上ある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出

土した。

方丈周辺の遺構

方丈Ⅳ（図版57・134）北東部で検出した礎石建物である。特に、「現在絵図面」（図版150）に記された方丈の北西部の礎石据付穴が良好に遺存する。柱間は約2.0mの等間である。据付穴は隅丸方形を呈し、径1.1～1.2m、深さは0.7～1.0mある。砂泥と小礫を交互に入れて版築し、その上に礎石を置く。礎石の大きさは、長径0.4～0.8mある。柱穴5780は、版築の礫層中に五輪塔の石材が混じる。建物礎石の南側に東西に並ぶ柱穴5075・5084とその約3.5m南に位置する柱穴5066・5071は、据付穴の版築が行われず、絵図との対比からも建物本体ではなく、玄関の礎石と考えられる。据付穴群からは土師器、施釉陶器、磁器、瓦が出土した。京都XIV期中段階に属する。

土坑3130 方丈Ⅳの北西で検出した楕円形の土坑である。規模は南北約1.1m、東西約1.4mある。埋土は褐色砂泥である。施釉陶器、焼締陶器、瓦などが出土した。

土坑2234 北東部、方丈Ⅳの東で検出した楕円形の土坑である。第2面の井戸2465と重複し、井戸の窪みを埋めたものと考えられる。規模は南北約1.9m、東西約1.8m、深さは約2.3mある。埋土は褐色泥砂で礫を多量含む。土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。

土坑2238 北東部、方丈Ⅳの東で検出した楕円形の土坑である。規模は南北約1.2m、東西約1.0mある。埋土は暗褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

土坑2438 方丈Ⅳの南で検出した方形土坑である。規模は南北約1.0m、東西約1.2mある。埋土は黒褐色泥砂である。土師器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

塔頭周辺の遺構

瓦列6661（図版58）南東部で検出した東西方向の瓦列である。東と西は攪乱を受ける。東西約15.0m分を検出した。掘形は溝状で、幅0.15～0.2m、深さは約0.1mある。掘形内中央に平瓦を立てて並べる。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦、金属製品などが出土した。京都XIV期に属する。塔頭北側の東西通路に関連する施設とみられる。

石列6660（図版58・135）南東部、瓦列6661の南で検出した東西方向の石列である。東と西は攪乱を受ける。東西約7.4m分を検出した。掘形は溝状で、幅0.4～0.5m、深さは約0.15mある。掘形内に径0.1～0.4mの石材を北側に面をそろえて並べる。土師器、施釉陶器、磁器、銭貨などが出土した。京都XIV期に属する。敷地3北側の境界施設である。

石列6774（図版58・135）南東部、石列6660の南東で検出した南北方向の石列である。南と北は攪乱を受ける。掘形は溝状で、幅0.5～0.6m、深さは約0.15mある。掘形内に径0.1～0.4mの石材を東側に面をそろえて並べる。土師器、施釉陶器、磁器が出土した。京都XIV期に属する。敷地3と敷地4との境界施設である。

石列2056（図版58・135）南東隅で検出した南北方向の石列である。南と北は攪乱を受ける。南北約7.6m分を検出した。掘形は溝状で、幅0.3～0.5m、深さは約0.3mある。掘形内に石材を東

側に面をそろえて並べる。施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XIII～XIV期に属する。敷地4と敷地5の境界施設である。

墓7435 南西隅で検出した。平面では検出できず、断面観察で確認した。墓坑は調査区西壁の外に延びる。規模は南北0.7m以上、深さは約0.25mある。頭蓋骨・下顎骨・歯が出土した。第3面の墓7343を削平する。土師器、土製品、焼締陶器、施釉陶器、磁器などが出土した。京都XIV期に属する。敷地1内の墓である。木棺墓の可能性が高い。

墓7350 南西隅で検出した。西は調査区外へ延びる。規模は南北0.4m、東西0.2m以上、深さは約0.2mある。人骨が出土した。遺存状態の良い幼児の骨で、頭蓋骨・右上腕骨・左右橈骨・左右尺骨・肋骨・椎骨・左右寛骨・左右大腿骨・左脛骨・左腓骨・指骨・仙骨・胸骨がある。敷地1内の墓である。

井戸6139 (図版59) 南部で検出した円形石組井戸である。掘形は南北約1.9m、東西約2.1mの楕円形を呈する。掘形上層の埋土は暗褐色砂泥で礫と炭を少量含む。底部には径約0.7m、深さ約0.9mの窪みがあるが、水溜施設は確認できない。径0.1～0.3mの河原石・割石・転用石を積み上げて、内径約0.8mの井筒を設ける。深さは約1.6m、底面の標高は39.8mである。土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。敷地2内の井戸である。

瓦列6690 (図版59) 南端中央で検出した東西方向の瓦列である。東と西は攪乱を受ける。東西約1.3m分を検出した。掘形は溝状で、幅約0.1m、深さは約0.1mある。掘形内北壁に沿わせて平瓦を立てて並べる。土師器、土製品、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XIV期に属する。敷地3の建物排水溝とみられる。

集石6145 (図版59) 南端中央で検出した集石土坑である。掘形は楕円形を呈し、南北約0.5m、東西約0.35m、深さは約0.5mある。径0.2～0.5mの石が詰まる。土師器、施釉陶器、焼締陶器などが出土した。京都XIV期に属する。敷地3の門の雨落ちとみられる。

土坑6142 南西部で検出した方形土坑である。規模は一辺約1.7mの正方形である。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。敷地2内の土坑である。

土坑6143 南西部で検出した長方形の土坑である。南側は攪乱を受ける。規模は南北2.5m以上、東西約1.6mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦などが出土した。敷地2内の土坑である。

土坑6540 南西部で検出した長方形の土坑である。規模は南北約1.3m、東西約2.6mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。敷地2内の土坑である。

土坑6206 南端中央で検出した方形の土坑である。規模は南北約1.5m、東西約0.9mある。埋土は粗砂である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦類などが出土した。京都XIV期古～中段階に属する。敷地3内の土坑である。

土坑6627 南東部で検出した方形土坑である。規模は一辺約1.2mのほぼ正方形で、埋土は黒褐

色泥砂である。土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類などが出土した。京都XIV期古～中段階に属する。敷地3内の土坑である。

土坑6623 南東部で検出した土坑である。南側は調査区外に延びる。規模は南北約4.3m、東西約10mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、石製品、金属製品のほか瓦がまとまって出土した。敷地3・4にまたがる土坑である。

土坑2041 南東部で検出した土坑である。東側は攪乱を受ける。規模は南北約1.7m、東西0.3m以上ある。埋土は黒褐色泥砂である。土師器、土製品、施釉陶器、磁器のほか、瓦類がまとまって出土した。京都XIV期中段階に属する。敷地4内の土坑である。

土坑2003 南東部で検出した土坑である。南側は調査区外に延びる。規模は南北2.1m以上、東西約2.8mある。埋土は黒褐色泥砂である。施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦、金属製品などが出土した。敷地4内の土坑である。

土坑6657 南東部で検出した土坑である。規模は南北約4.0m、東西約5.8mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、瓦などが出土した。敷地4内の土坑である。

池6769 (図版59) 南東部で検出した平面形が不定形の漆喰貼りの池である。漆喰の縁周部は東西約2.2m、南北約2.1mの範囲をめぐり、深さは約0.05mある。底部は平坦である。底に径約0.45m、深さ約0.1mのピットがある。池の掘形から土師器、土製品、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、石製品などが出土した。京都XIV期に属する。敷地4内の池である。

(9) 南調査区の遺構 (図版17・136)

土坑9006 北西部で検出した土坑である。東西を後世の遺構に削平される。規模は南北約2.4m、東西1.5m以上ある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。弥生土器が出土した。

井戸9001 (図18、図版136) 北端で検出した円形石組井戸である。上部は攪乱を受け、底部のみが遺存する。掘形は径約0.8mの円形を呈する。掘形埋土は灰黄褐色泥砂で礫を多量含む。底部から径0.2～0.4mの河原石を積み上げて井筒を設ける。深さは約0.3m、底面の標高は39.9mである。土師器、須恵器、灰釉陶器、輸入陶磁器などが出土した。平安京IV期新段階に属する。

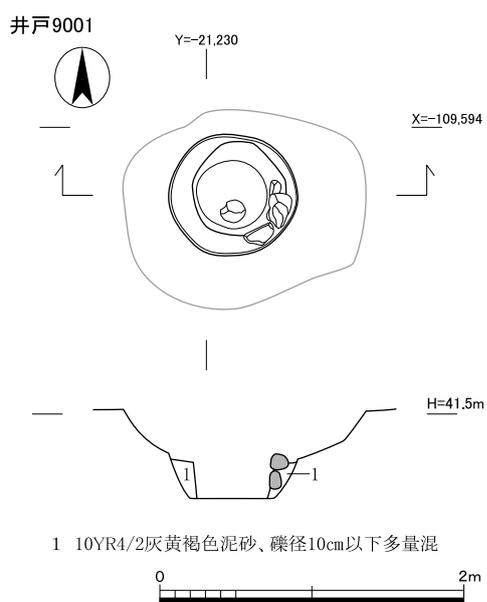


図18 井戸9001実測図 (1:50)

石列9020 (図版136) 北東部で検出した石列である。石9052～9055の4石から成る。北西から南東方向に3石が並び、石9054と石9055は東西に並ぶ。さらに東に延びる可能性がある。石材の大きさは径0.8～1.4mある。庭の景石の可能性もある。掘付穴から土師器、須恵器、輸入陶磁器などが出土した。京都VII期古段階に属する。

石列9065 東端南寄りで検出した石列である。南は攪乱を受け、東側は調査区外に延びる。調査区東壁断面では南北約6.5m分を確認した。掘形は幅0.4m以上ある。埋土はにぶい灰黄褐色粗砂である。土師器、施釉陶器、瓦などが出土した。京都XI期に属する。石室の西辺の可能性はある。

土坑9038 南端で検出した隅丸方形の土坑である。規模は南北約1.1m、東西約1.0mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XI期に属する。

土坑9018 西端中央で検出した土坑である。西側は調査区外に延びる。規模は南北約4.1m、東西1.5m以上ある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。京都XI期に属する。

土坑9035 東端南寄りで検出した方形の土坑である。東側は調査区外に延びる。規模は南北約2.0m、東西2.5m以上ある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XI期に属する。

井戸9032 (図19) 東端南寄りで検出した円形石組井戸である。掘形は不整円形を呈し、南北約1.7m、東西約1.8mある。掘形上層の埋土はにぶい黄褐色泥砂で礫を多量含む。底部には木質が遺存し、径約0.6m、深さ約0.4mの水溜施設であったとみられる。中位から径0.1～0.3mの河原石を積み上げて、内径約0.8mの井筒を設ける。深さは約1.3m、底面の標高は40.3mである。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などが出土した。京都XII期古段階に属する。

井戸9003 (図19) 中央北寄りで検出した円形瓦組井戸である。上半部の瓦は抜き取られている。掘形は径約1.1mの円形を呈する。掘形埋土はにぶい黄褐色砂礫である。底部には径約0.6m、

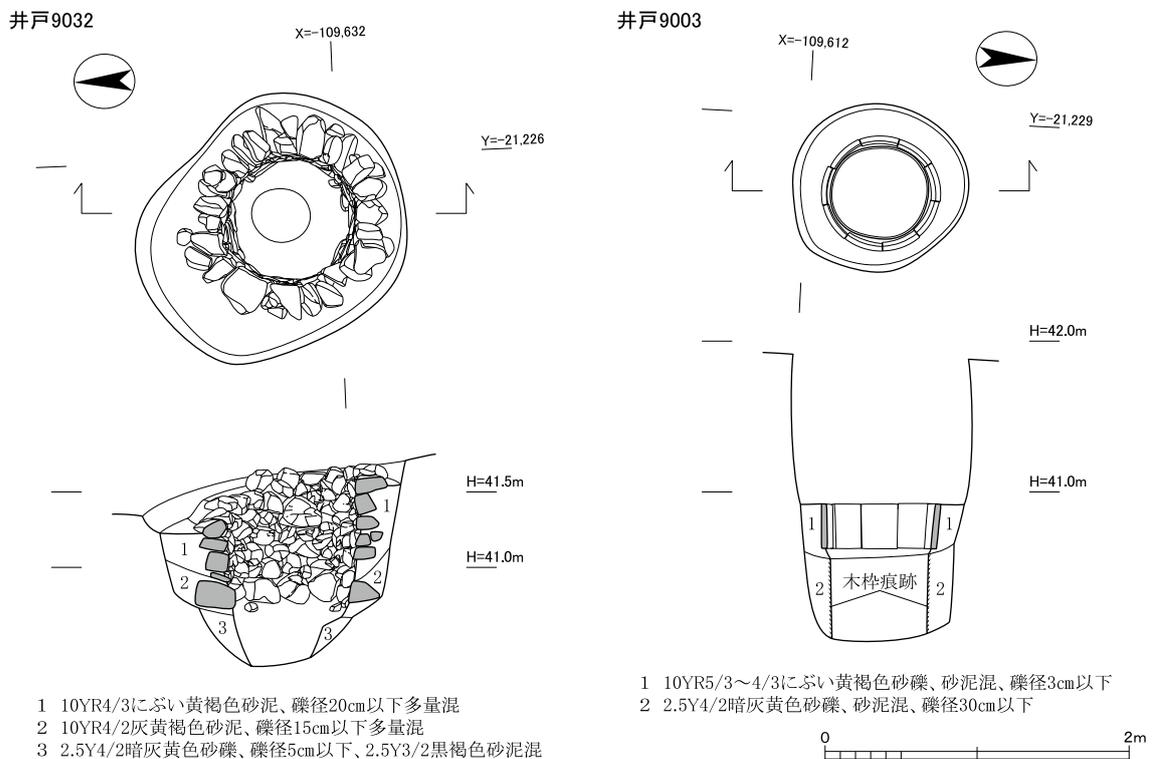


図19 井戸9003・9032実測図 (1:50)

高さ約0.5mの桶の痕跡がある。上部には井戸瓦9枚を筒状に組んで、内径約0.7mの井筒を設ける。深さは約1.9m、底面の標高は40.0mである。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦などが出土した。京都XIII期に属する。

土坑9034 南端で検出した円形土坑である。規模は南北約1.8m、東西約1.7mある。埋土は褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、金属製品などが出土した。

落込み9002 北部で検出した落込みである。検出規模は南北約4.5m、東西約2.1mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦、石製品などが出土した。

土坑9004 中央部で検出した楕円形の土坑である。規模は東西約2.5m、南北約4.0mある。埋土は暗褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

土坑9025 東端で検出した大規模土坑で、東側は調査区外に延びる。規模は南北10.5m以上、東西4.5m以上ある。埋土は褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑9027 南西部で検出した不整形の土坑である。規模は南北約2.2m、東西約1.2mある。埋土は黒褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。

土坑9045 南部で検出した土坑である。東側は後世の遺構に壊されている。規模は南北約2.8m、東西1.5m以上ある。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃	
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

- 2) 人骨については、土井ヶ遺跡・人類学ミュージアムの大藪由美子氏から御教示を得た。

4. 遺 物

(1) 出土遺物の概要

調査では整理用コンテナに1290箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器類、土製品、瓦類、銭貨、金属製品、石製品、ガラス製品などの種類がある。出土遺物は、江戸時代以降のものが大半を占めており、次いで室町時代のものが多い。平安時代・鎌倉時代のは比較的少量であり、さらに古墳時代以前の遺物はごく少量である。遺物の種類では、瓦類が遺物の大半を占め、江戸時代の火災後の廃棄土坑などから多量に出土した。近世の瓦のほかには、平安時代中期から後期の軒瓦もまとめて出土しており注目される。

古墳時代以前の遺物には、縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪などがある。主に流路8065、土坑1625・8085・9006などから出土した。小片のため図示できなかったが、縄文時代晩期前葉滋賀里Ⅲa式の縄文土器が第3面の落込みに混入して出土した。

平安時代の遺物は、土師器、白色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などの土器類の他に、土製品、瓦類、銭貨、石製品などがある。主に井戸5824、土

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代 ～古墳時代	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪		弥生土器2点、土師器2点、須恵器2点、埴輪2点		
平安時代	土師器、白色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、土製品、石製品		土師器68点、白色土器1点、須恵器11点、灰釉陶器6点、緑釉陶器7点、瓦器1点、輸入陶磁器6点、瓦類63点、銭貨15点、石製品1点		
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、須恵器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、灰釉系陶器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、土製品、石製品		土師器88点、須恵器1点、土師質土器2点、瓦器15点、瓦質土器1点、灰釉系陶器1点、施釉陶器2点、瓦類10点、銭貨1点、石製品2点		
桃山時代 ～江戸時代	土師器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、銭貨、金属製品、石製品、ガラス製品		土師器144点、土師質土器25点、瓦器1点、瓦質土器3点、施釉陶器81点、焼締陶器16点、磁器75点、輸入陶磁器9点、土製品11点、瓦類212点、銭貨17点、金属製品28点、石製品15点、ガラス製品1点		
江戸時代末 ～明治時代	土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦類、銭貨、ガラス製品		土師器21点、土師質土器4点、施釉陶器26点、焼締陶器2点、磁器19点、銭貨1点、ガラス製品2点		
合 計		1395箱	1023点 (85箱)	20箱	1290箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より105箱多くなっている。

坑5519・7888、溝6537などから出土した。

鎌倉時代から室町時代の遺物には、土師器、須恵器、瓦器、灰釉系陶器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器などの土器類の他に、土製品、瓦類、銭貨、石製品などがある。主に土坑7895・7900、溝1594・8014などから出土した。

桃山時代から江戸時代の遺物には、土師器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器などの土器類の他に、土製品、瓦類、銭貨、金属製品、石製品、ガラス製品などがある。主に土坑5182・5878・7087・7400などから出土した。

江戸時代末から明治時代の遺物には、土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などの土器類の他に、瓦類、銭貨、ガラス製品などがある。主に土坑5113・池2004などから出土した。

以下では、時代の古いものから順に、遺物の概要を述べる。個々の遺物の詳細については、巻末の付表に掲載した。

(2) 土器類・土製品 (図版60～79、付表1)

1) 古墳時代以前

土坑9006出土土器 (図版60 1) 1は弥生土器甕である。頸部から口縁部が外反して開き、端部を上方に拡張して受け口状を呈する。口縁部内面はハケ目調整の後、2種類の刺突文を巡らす。体部外面はナナメ方向のハケ目調整を施す。弥生時代中期のものである。

流路8065出土土器 (図版60 2～5) 2は弥生土器広口壺である。口縁部は外反して大きく開く。3・4は円筒埴輪である。体部外面はナナメ方向のハケ目調整を施し、突帯を貼り付ける。5は土師器の壺である。

土坑1625出土土器 (図版60 6) 6は土師器の甕である。体部外面はタテ方向のハケ目調整を施す。

1区砂礫層断割り出土土器 (図版60 7) 7は須恵器杯身である。口径に対して器高が高い。立ち上がりが低く、内傾する。

土坑8085出土土器 (図版60 8) 8は須恵器杯身である。立ち上がりが低く、内傾する。受け部は凹線が巡る。

2) 平安時代

井戸5824出土土器 (図版60・137 9～12) 土師器、須恵器、灰釉陶器がある。9～11は土師器である。9・10は椀Aである。平らな底部から体部が直線的に外上方へのびる。外面ナデ・オサエのe手法。11は皿Aである。平安京Ⅱ期古段階に属する。12は須恵器の長頸壺で、壺Gと呼ばれるものである。口縁部は大きく外反する。底部外面には、糸切り痕が残る。

4区第6面掘下げ出土土器 (図版60・137 13～27) 土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器がある。13～16は土師器である。13は杯Aである。体部が直線的に外上方へのびる。外面ナデ・オサエのe手法。14は皿Lである。体部が直線的に外上方へのび、口縁部は外反し、端部

をつまみ上げる。外面ナデ・オサエのe手法。15は皿Bである。貼り付けの高台をもつ。口縁端部は外反し、端部をつまみ上げる。内面に煤が付着する。16は半球形の鉢である。底部を欠損する。体部外面にはケズリの痕跡が残る。13は平安京Ⅱ期古段階、14・15は平安京Ⅱ期新段階に属する。17～21は須恵器である。17～19は杯A、20・21は杯Bである。22～24は灰釉陶器である。22は椀である。貼り付け高台で、口縁端部は外反する。23・24は皿である。24は底部内面が窪む段皿である。25・26は緑釉陶器である。25は平高台の椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。26は甌である。高台部付近のみ遺存する。底部には2箇所孔が確認できる。27は輸入青磁梅瓶の蓋である。口径5.0cm、器高2.7cm。直線的に立ち上がる体部の側面に紐通しの孔が穿たれる。平坦な天井部には陰刻文が施される。

土坑8060出土土器（図版60 28） 土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器がある。28は緑釉陶器小皿である。蛇の目高台である。硬質。平安京Ⅱ期に属する。

土坑4255出土土器（図版60 29） 土師器、須恵器、緑釉陶器、輸入陶磁器がある。29は緑釉陶器皿である。平高台の外面に線刻がある。体部は低く、口縁端部は外反する。軟質。平安京Ⅱ期に属する。

土坑8032出土土器（図版60 30） 土師器、灰釉陶器、緑釉陶器がある。30は緑釉陶器大型椀である。平高台で、口縁端部は外反させる。軟質。平安京Ⅱ期に属する。

土坑8011出土土器（図版60 31） 土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器がある。31は緑釉陶器壺蓋である。天井部に輪摘みを貼り付ける。東海系。平安京Ⅱ～Ⅲ期に属する。

溝1510出土土器（図版60 32・33） 土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器がある。32は須恵器鉢である。底部には糸切り痕が残る。口縁端部は内側に突出する。33は須恵器壺である。貼り付け高台で、肩部に耳を貼り付ける。東海系。平安京Ⅲ期に属する。

土坑6081出土土器（図版60・137 34） 土師器、須恵器がある。34は土師器皿Aである。口縁端部はいわゆる「ての字状口縁」を呈する。器壁は薄い。平安京Ⅲ期新段階に属する。

土坑8099出土土器（図版60 35） 土師器、輸入陶磁器がある。35は土師器皿Aである。いわゆる「ての字状口縁」を呈する。平安京Ⅲ期新段階に属する。

井戸9001出土土器（図版60・137 36・37） 土師器、須恵器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。36・37は土師器皿Nである。平安京Ⅳ期新段階に属する。

土坑1650出土土器（図版60 38・39） 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器がある。38・39は土師器皿Nである。38の口縁部には煤が付着する。平安京Ⅳ期新段階に属する。

土坑5952出土土器（図版60 40・41） 土師器、須恵器、輸入陶磁器がある。40・41は土師器皿Nである。平安京Ⅳ期新段階～Ⅴ期古段階に属する。

3区第6面掘下げ出土土器（図版61 42～55） 土師器、須恵器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。42～49は土師器である。42は皿Acで、いわゆる「コースター形皿」である。43～46は皿Aである。47・48は皿Nである。48の口縁部には煤が付着する。平安京Ⅳ期新段階～Ⅴ期古段階に属する。49はロクロ成形のミニチュア皿である。底部外面は糸切り痕が残る。50・51は須恵器である。

50は杯Bである。高台を貼り付け、体部は外上方に開く。51は皿である。52～54は灰釉陶器である。52は小椀である。内面底部に重ね焼き痕が残る。53は小型の輪花椀である。口縁部を内側に押し、8輪花とする。底部外面は糸切り痕が残る。54はミニチュア横瓶である。頸部から口縁部を欠損する。55は輸入白磁の小皿である。平坦な底部から体部は直線的に外上方に開く。口縁端部内外面を釉剥ぎする。

土坑7888出土土器（図版61・137 56～65） 土師器、須恵器、輸入陶磁器がある。56～65は土師器である。56～59は皿Aである。60～64は大型の皿Nである。60～62は口縁端部が外反する。平安京IV期新段階～V期古段階に属する。65はロクロ成形の皿で、底部外面にはヘラオコシ痕がある。

土坑5488出土土器（図版61 66～68） 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器がある。66～68は土師器皿Nである。66の口縁部には煤が付着する。平安京V期古段階に属する。

溝4353出土土器（図版61 69・70） 土師器、須恵器がある。69・70は土師器皿Nである。平安京V期古段階に属する。

土坑6537出土土器（図版61 71～75） 土師器、瓦器がある。71～75は土師器皿Nである。平安京V期古段階に属する。

土坑1645出土土器（図版61・137 76） 土師器、須恵器、輸入陶磁器がある。76は土師器皿Nである。口縁部は2段凹みナデを施し、口縁端部が立ち上がる。平安京V期古段階に属する。内面底部に墨絵が描かれる。

土坑5519出土土器（図版61 77～85） 土師器がある。77～85は土師器である。77は皿Acで、いわゆる「コースター形皿」である。78～85は皿Nである。78・83は口縁部に煤が付着する。平安京V期古段階に属する。

井戸8135出土土器（図版61 86） 土師器、須恵器、瓦器がある。86は土師器皿Nである。平安京V期古段階に属する。

柱穴2756出土土器（図版61 87） 87は土師器皿Nである。平安京V期古段階に属する。

土坑8029出土土器（図版61 88） 土師器がある。88は土師器皿Nである。平安京V期中段階に属する。

土坑4394出土土器（図版61 89～99） 土師器、須恵器、瓦器がある。89～96は土師器である。89～91は皿Acで、いわゆる「コースター形皿」である。92～96は皿Nである。平安京V期中段階に属する。97～99は輸入白磁である。97は小皿である。底部を欠損する。98・99は椀である。98は高台内に墨書がある。99は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は玉縁状とする。II類に属する。

土坑1646出土土器（図版61 100） 土師器、須恵器、瓦器がある。100は土師器皿Nである。平安京V期中段階に属する。

溝4266出土土器（図版61 101～103） 土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器がある。101～103は土師器である。101・102は皿Nである。平安京V期中段階に属する。103は土師器杯

Aである。口縁端部にかえりをもつ。外面はヘラケズリ調整のc手法。平安京Ⅰ期中～新段階に属する。混入品である。

1区第4面掘下げ出土土器（図版61 104） 104は白色土器の皿である。底部には糸切り痕が残る。京都Ⅵ期に属する。混入品である。

1区第6面掘下げ出土土器（図版61・137 105・106） 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器がある。105は輸入白磁の小皿である。平坦な底部から体部は直線的に外上方に開く。口縁端部を釉剥ぎする。106はミニチュアの瓦器羽釜である。京都Ⅵ期に属する。

4区第3面掘下げ出土土器（図版62 107） 107は小型の須恵器壺である。底部には糸切り痕が残る。体部外面下半にはタテ方向のケズリが見られる。内外面全面的に自然釉が付着する。播磨産の可能性もある。混入品である。

3) 鎌倉時代から室町時代

2区第3面清掃出土土器（図版62 108） 108は瓦器椀である。貼り付けの低い高台をもつ。外面はオサエ、内面はミガキを施す。楠葉産。京都Ⅵ期に属する。混入品である。

柱穴4368出土土器（図版62 109～114） 土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器がある。109～113は土師器である。109～111は皿N小、112・113は皿N大である。京都Ⅵ期中段階に属する。114は瓦器羽釜である。内傾する口縁部下部に短い鏝を付ける。体部外面に三脚が付く。

土坑7895出土土器（図版62 115～124） 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器がある。115～121は土師器である。115～119は皿N小、120・121は皿N大である。京都Ⅵ期中段階に属する。122は瓦器羽釜である。底部を欠損する。内傾する口縁部下部に短い鏝を付ける。123は須恵器鉢である。底部外面には糸切り痕が残る。体部は外上方に直線的に開く。内面下半から底部は使用による摩滅が著しい。124は緑釉陶器椀である。無高台で、口縁端部はわずかに外反させる。硬質。京都洛西産。平安京Ⅱ期に属する。混入品である。

井戸4420出土土器（図版62・137 125・126） 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器がある。125・126は土師器である。125は皿Shで、いわゆる「ヘソ皿」である。126は皿S大である。京都Ⅶ期古段階に属する。

土坑7351出土土器（図版62・137 127・128） 土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。127・128は土師器皿N小である。128は内面に線刻がある。京都Ⅶ期古段階に属する。

土坑7900出土土器（図版62・137 129～134） 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。129～134は土師器である。129～131は皿Acである。129は口縁端部が直立する。132・133は皿N小である。134は皿S小である。京都Ⅶ期古段階に属する。

溝1485出土土器（図版62 135～138） 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。135～138は土師器である。135は皿N小、136・137は皿N大である。体部が外反する。138は器壁が薄く白色を呈する皿S小であるが、器高が低く皿N小の形態を呈する。京都Ⅶ期古～中段階に属する。

石列9020出土土器（図版62 139） 土師器、須恵器、輸入陶磁器がある。139は土師器皿S大である。京都Ⅶ期古段階に属する。

溝8014出土土器（図版62・63・138 140～162） 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。140～156は土師器である。140～142は皿N小である。143は器高が低く皿N小の形態を呈するが、白色を呈する皿S小である。144・145は皿N大である。体部から口縁部は外反する。146～149は皿Shで、いわゆる「ヘソ皿」である。150～152は皿S小である。153～156は皿S大である。京都Ⅶ期新段階に属する。157は土師質火鉢である。口径50.4cm、器高9.7cm。底面には2脚1組の脚を3箇所につける。口縁部下部には短い顎を付ける。158～162は瓦器鍋である。158は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部の2箇所に注口をつくる。内面にはミガキが施され、底部には暗文が施される。外面には煤が付着する。159～162は外面には指オサエ、内面には細かいハケ目が残る。162以外には外面に煤が付着する。

溝1489出土土器（図版63 163・164） 土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器がある。163・164は土師器である。163は皿Shで、いわゆる「ヘソ皿」である。164は皿Sである。京都Ⅶ期新段階～Ⅷ期古段階に属する。

土坑7910出土土器（図版63・138 165～174） 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。165～174は土師器である。165・166は皿N小である。166は器壁が厚い。167～169は皿N大である。体部が外反する。170はロクロ成形で、底部外面に糸切り痕が残る。京都Ⅷ期古段階に属する。171・172は皿Shで、いわゆる「ヘソ皿」である。173・174は皿S大である。

溝1594出土土器（図版63・138 175～194） 土師器、須恵器、灰釉系陶器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。175～187は土師器である。175・176は皿N小である。177・178は皿N大である。体部が外反する。179はにぶい橙色を呈する皿N小であるが、器高が高く皿S小の形態を呈する。180・181は皿Shである。182は皿S小である。口縁部から内面に煤が付着する。183・184は皿S小である。185・186は皿S大である。187はロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残る。京都Ⅷ期新段階に属する。188は灰釉系陶器の輪花皿である。底部外面には糸切り痕が残る。口縁部を内側に押しして6輪花とする。189は施釉陶器のおろし目皿である。体部は外上方に直線的にのびる。内面底部にはおろし目が施される。190～193は蓋の受けが付く瓦器鍋である。外面には指オサエ、内面には細かいハケ目が残る。外面に煤が付着する。194は大型の瓦器火鉢である。体部は直線的に外上方にのびる。底部の3箇所に脚を付ける。

溝5478出土土器（図版64 195～202） 土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。195～200は土師器である。195～197は皿N小である。195・196は底部に丸味がある。198～200は皿Shである。京都Ⅷ期新段階に属する。201は土師質羽釜である。口径29.9cmの大型である。口縁端部は強く外反する。外面に煤が付着する。202は施釉陶器鉢である。底部から内湾気味に立ち上がる。

土坑4403出土土器（図版64 203～206） 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器がある。203～206は土師器である。203・204は皿Shである。204は底部を強く押し上げる。205・206は皿S大であ

る。内面に煤が付着する。京都Ⅷ期新段階に属する。

土坑5448出土土器（図版64 207～211） 土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。207～209は土師器皿である。207は皿Shである。208・209は皿S大である。京都Ⅷ期新段階に属する。210・211は蓋の受けが付く瓦器鍋である。外面には指オサエ、内面には細かいハケ目が残る。外面に煤が付着する。ともに口縁部に重ね焼き痕が残る。

井戸7975出土土器（図版64 212・213） 土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器がある。212・213は土師器である。212は皿N大である。体部が外反する。213は皿S大である。京都Ⅷ期新段階～Ⅸ期古段階に属する。

土坑7208出土土器（図版64 214～216） 土師器、須恵器、施釉陶器、輸入陶磁器がある。214～216は土師器である。214は皿S小である。器壁がやや厚めである。215・216は皿S大である。京都Ⅸ期新段階に属する。

土坑3959出土土器（図版64 217） 土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器がある。217は土師器皿S中である。器壁はやや厚く、底部を若干押し上げている。京都Ⅹ期古段階に属する。

井戸8009出土土器（図版76 576） 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。576は瓦質の鉢である。口径33.3cm、器高15.2cm。口縁部の2箇所注口部がある。体部外面にはタタキ目が残る。内面は使用のため摩滅する。

4) 桃山時代から江戸時代

土坑5882出土土器（図版64 218） 土師器、焼締陶器、磁器がある。218は土師器皿S大である。内面底部周縁部に凹線状の圏線が巡る。京都Ⅹ期新段階に属する。

土坑5898出土土器（図版64 219） 土師器がある。219は土師器皿S大である。内面底部周縁部に凹線状の圏線が巡る。京都Ⅹ期新段階に属する。

土坑5878出土土器（図版64・138 220～236） 土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。220～236は土師器皿である。220～225は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。226～229は皿S中である。内面底部周縁部に径の小さな凹線状の圏線が巡る。230～236は皿S大である。内面底部周縁部に凹線状の圏線が巡る。口径12cm以上の皿は器高が低くなる。227・228・231・234・236の口縁部には煤が付着する。京都Ⅹ期新段階に属する。

土坑4166出土土器（図版64 237） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。237は土師器皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。体部から底部が一体的に丸味をもつ。口縁部には煤が付着する。京都Ⅺ期古段階に属する。

柱穴4197出土土器（図版64 238） 土師器、焼締陶器がある。238は土師器皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。京都Ⅺ期古段階に属する。

柱穴3935出土土器（図版64 239） 土師器、輸入陶磁器がある。239は土師器皿S大である。内面底部周縁部に凹線状の圏線が巡る。京都Ⅺ期古段階に属する。

土坑5946出土土器（図版64 240～244） 土師器がある。240～244は土師器皿である。240は

皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。241～244は皿S中である。内面底部周縁部に径の小さな凹線状の圏線が巡る。京都XI期古段階に属する。

土坑3719出土土器（図版64 245・246） 土師器、土製品、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。245・246は土師器皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。京都XI期古～中段階に属する。

土坑4172出土土器（図版64 247・248） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。247・248は土師器皿である。247は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。248は皿Sである。内面底部周縁部に凹線状の圏線が巡る。ともに口縁端部に煤が付着する。京都XI期中段階に属する。

土坑3963出土土器（図版64 249～257） 土師器、瓦器がある。249～257は土師器皿である。249は皿Nrである。体部から底部が一体的に丸味をもつ口径が小さい皿である。250・251は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。252～257は皿Sである。内面底部周縁部に凹線状の圏線が巡る。京都XI期中段階に属する。

土坑2190出土土器（図版65・138 258～266） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。258・259は土師器皿である。258は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。口縁端部に煤が付着する。259は皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。京都XI期新段階に属する。260～265は美濃産の施釉陶器である。260は灰釉の丸皿である。内面底部以外に施釉する。高台内には輪トチン痕が残る。261は長石釉皿である。口縁端部を外反させる。高台内にはメアトが残る。262～265は椀である。262～264は天目椀である。削り出し高台で、口縁端部は外反させる。265は筒型椀である。貼り付け高台で、体部は上方にのびる。黒色釉を掛ける。266は唐津産の鉄釉壺である。頸部から短い口縁部が外反する。

井戸3949出土土器（図版65・138 267～271） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。267・268は土師器皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。268は口縁端部に煤が付着する。京都XI期新段階に属する。269・270は施釉陶器である。269は美濃唐津の向付である。平面形は木瓜形である。底部外面の4箇所半環足を付ける。内面中央に草花の鉄絵を施す。270は美濃産のいわゆる御深井の壺である。肩部に環状の把手を貼り付ける。口縁端部は内側に折り曲げて蓋の受け部とする。体部外面には部分的にタテヘラケズリがみられる。271は焼締陶器の丹波産播鉢である。内面には6条1単位の櫛目が施される。

瓦組3964出土土器（図版65 272～274） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。272・273は土師器皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。272の口縁部には煤が付着する。京都XI期新段階に属する。274は焼締陶器の丹波産播鉢である。体部外面下半は指オサエ痕が残る。内面には6条1単位の櫛目が施される。

溝4037出土土器（図版65 275～278） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。275～277は土師器皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。京都XI期新段階に属する。278は美濃産の施釉陶器で鉄釉小椀である。

土坑7670出土土器（図版66 279・280） 土師器、施釉陶器がある。279・280は土師器皿である。279は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。口縁端部に煤が付着する。280は皿Sである。内

面底部に凹線状の圏線が巡る。京都XI期新段階に属する。

土坑7672出土土器（図版66 281・282） 土師器・土師質土器がある。281は土師器皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。口縁端部に煤が付着する。京都XI期新段階に属する。282は土師質土器の小鉢である。底部は上方に押し上げられる。体部は外反しながら上方にのびる。体部外面上半と内面はヨコナデを施す。

土坑7818出土土器（図版66 283） 土師器、施釉陶器、輸入陶磁器がある。283は土師器皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。口縁端部に煤が付着する。京都XI期新段階に属する。

土坑5962出土土器（図版66・139 284～292） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。284～289は土師器皿である。284・285は皿Nrである。体部から底部が一体的に丸味をもつ口径が小さい皿である。口径が縮小傾向にある。286は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。体部内外面に煤が付着する。287～289は皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。口縁端部に煤が付着する。京都XI期新段階に属する。290・291は肥前系の染付椀である。290は筒型である。291は体部を薄く仕上げ、天目型にする。ともに1630年代の製品である。292は焼締陶器の信楽産水指である。底部には糸切り痕が残る。口縁部内面下方に蓋受け部を設ける。外面上部2箇所把手を貼り付ける。

土坑7400出土土器（図版66・139 293～316） 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。293～309は土師器皿である。295・296は皿Nrである。体部から底部が一体的に丸味をもつ口径が小さい皿である。293は極小サイズで、口縁端部に細かいキザミ目を施す。294は極小サイズで、口縁端部をつまみ上げて輪花状とする。297～300は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。297・299・300は口縁端部に煤が付着する。301～309は皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。301・303・305は口縁端部に煤が付着する。京都XI期新段階～XII期古段階に属する。310・311は土師質土器の鉢、いわゆるでんぼである。310は小型。311は大型で、底部外面には「□無妙法□□」の墨書がある。312～314は壺である。312は壺蓋である。上面外周に沈線を巡らす。上面下方に「深草砂川権兵衛」印が押される。313は壺蓋である。内面には布目痕が残る。314は壺身である。内面には布目痕が残る。315・316は施釉陶器である。315は三島大皿である。内面にはカキ目と刻印により施文を施す。体部下半外面に黒褐色の鉄釉を塗り、体部上半外面と内面に暗灰黄色の釉を施す。内面底部には7箇所の砂目が残る。316は丹波産の四耳壺である。底部外面にはハナレ砂が付着する。下半部には粘土紐痕が残る。

井戸2708出土土器（図版67 317・318） 土師器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、土製品がある。317は土師器皿Sである。内面底部に凹状の圏線がある。京都XII期古段階に属する。318は肥前産の施釉陶器平椀である。内面底部に山水文を施す。高台内に印がある。

井戸9032出土土器（図版67 319～324） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。319～322は土師器皿である。319・320は皿Nrである。体部から底部が一体的に丸味をもつ口径が小さい皿である。321・322は皿Sである。内面底部に凹状の圏線がある。京都XII期古段階に属する。323は肥前系の染付椀である。底部は厚く、梅樹文を施す。324は丹波産の焼締陶器搗鉢である。大型

である。体部外面には指オサエ痕が残る。内面に7条1単位の櫛目を施す。

土坑7087出土土器（図版67・68・139 325～361） 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。325～337は土師器皿である。325～330は皿Nrである。体部から底部が一体的に丸味をもつ口径が小さい皿である。325・329・330の口縁端部には煤が付着する。331～334は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。335～337は皿Sである。内面底部に凹状の圈線がある。3点ともに口縁端部には煤が付着する。京都XII期中段階に属する。338は土師質土器の鉢である。半球形の深い器形である。内面には赤色化した部分が認められる。339・340は塩壺である。339は壺蓋である。内面に布目が残る。340は壺身である。内面に布目が残る。339・340ともに古い様相がみられる。341～346は施釉陶器である。341～344・346は九州系である。341～344は椀である。341は唐津系の椀で、高台径が小さくやや高い。342は口縁端部がやや外反する。344は体部が外上方にのびる。342・344ともに高台底部にトチン痕が3箇所残る。343は唐津系の椀で高台底部にトチン痕が4箇所残る。346は蓋である。底部には回転糸切り痕が残る。落し蓋状にして、中央部に摘みをつくる。345は美濃系の鉄釉小椀である。347は備前産の焼締陶器播鉢である。内面に11本1単位の櫛目を施す。外面には火襷が残る。348～351は肥前系の染付椀である。348はやや小振りである。349は兜鉢風の絵付けを施す。350は内面底部に焼成時の付着物がある。351は全体的に厚いつくりである。内面底部に重ね焼き痕がある。352～358は肥前系の磁器である。352は色絵椀である。薄手のつくりである。353は白磁椀である。高台内にハナレ砂が付着する。354～357は染付皿である。354は小型の角皿である。型作り。355は高台径が小さく、口縁端部がやや外反気味である。356は体部が直線的に外上方にのびる。357は高台径が小さく、口縁部を内湾気味にする。358は青磁皿である。口縁端部を大きく外反させる。359～361は輸入陶磁器の青花である。359は小椀である。口縁部を外反させ、端反にする。360は椀である。体部上方を大きく外反させ、口縁端部を輪花状に仕上げる。361は皿である。口縁部を外反させ端反にする。鳳凰文を施す。

井戸6144出土土器（図版68 362） 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。362は焼塩壺蓋である。天井部と内面はナデを施し、口縁部の内外はヨコナデで仕上げる。

土坑4004出土土器（図版68・139 363～365） 土師器、土師質土器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。363は焼塩壺身である。外面はナデで仕上げ、内面には布目が残る。京都XII期古段階に属する。364・365は輸入陶磁器の青花である。364は小椀である。体部は直線的に外上方にのびる。365は椀である。体部は緩やかに外上方にのびる。内面底部に唐草文を描く。

土坑9038出土土器（図版68・139 366） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。366は輸入陶磁器の青花合子蓋である。緩やかな丸味の天井部をもつ。口縁部内面は釉剥ぎを施す。

土坑9018出土土器（図版68 367） 土師器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器がある。367は輸入白磁の皿である。幅広い高台で口縁部は外反する。外面高台付近にはハナレ砂が付着する。

土坑4110出土土器（図版68・140 368・369） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器があ

る。368は施釉陶器碗である。小振りな高台から体部は直線的に外上方にのびる。内外面には2種類の鉄釉を掛ける。京焼の可能性はある。369は唐津産の施釉陶器向付である。やや小振りな輪高台をもつ。体部は屈曲しながら外上方に開く。口縁部は輪花状に仕上げる。内面には草花文の鉄絵を描く。京都XI～XII期に属する。

土坑7687出土土器（図版68 370） 土師器、施釉陶器がある。370は美濃系の施釉陶器、長石釉皿である。高台径は広く、体部上方を水平に開く。内面底部に「龍」字を書く。京都XI～XII期に属する。

土坑7101出土土器（図版68・140 371～373） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。371・372は肥前系の磁器である。371は青磁碗である。高台内面にハナレ砂が付着する。372は染付壺である。口縁端部と内面は釉剥ぎされる。蛸唐草文。373は信楽産の焼締陶器壺である。いわゆる煎餅壺である。京都XI～XII期に属する。

土坑9035出土土器（図版68・69・140 374～379） 土師器、土製品、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。374～376は美濃産の施釉陶器である。374は長石釉の小碗である。高台は低く、口縁部はやや外反気味になる。375は青織部向付である。底部に半環足を貼り付ける。内面に布目が残る。型作り。内外面に銅緑釉を掛け分け、鉄釉で文様を描く。376は絵志野向付である。底部に半環足を3箇所貼り付ける。内面底部に鉄絵を描く。377は高取産の花入れである。体部は上部で4回屈曲させ端部を内側に折り曲げる。外面上部2箇所に把手を貼り付ける。正面と背面の2箇所に穿孔する。内面にはタタキ当て具の痕が残る。378・379は唐津産の施釉陶器である。378は絵唐津の鉢である。幅広い高台をもつ。外面に鉄絵を描く。内面底部に目跡が残る。379は大皿である。幅広い高台をもつ。底部内面にはトチン痕が4箇所ある。京都XI～XII期に属する。

埋甕3889出土土器（図版76 577） 土師器、瓦質土器、磁器、輸入陶磁器がある。577は瓦質土器の甕である。下半部のみが遺存する。内面にユビオサエ痕が残る。底部外面にはハナレ砂が付着する。京都XI～XII期に属する。

井戸3950出土土器（図版69 380～382） 土師器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。380・381は土師器皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。381の口縁部には煤が付着する。京都XII期新段階～XIII期古段階に属する。382は京焼の施釉陶器碗である。外面に錆絵を施す。

土坑8119出土土器（図版69 383～388） 土師器、土師質土器、施釉陶器、磁器がある。383～386は土師器皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。384の口縁端部には煤が付着する。京都XIII期古段階に属する。387は焼塩壺身である。小型で外面はナデで仕上げ、内面には布目が残る。388は肥前系の白磁小碗である。高台内にハナレ砂が付着する。

土坑6598出土土器（図版69・140 389～399） 土師器、土師質土器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器がある。389～393は土師器皿である。389～391は皿Nrである。体部から底部が一体的に丸味をもつ口径が小さい皿である。392・393は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。393は口縁部に煤が付着する。京都XIII期中段階に属する。394～397は塩壺である。394は花塩壺蓋である。上面下方に「深草砂川権兵衛」印がある。395は花塩壺身である。外面全体に剥離がみられる。394

と395はセットになる。396は焼塩壺蓋である。裏面に布目が残る。397は焼塩壺身である。底部外面は静止糸切り痕が残る。内面には布目が残る。体部側面に「泉湊伊織」印がある。398は施釉陶器の京焼丸椀である。高台径は小さい。赤色上絵で菊花文を施す。399は肥前系の染付磁器である。やや大振りの網目文の徳利である。

石室2704出土土器（図版69 400～405） 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。400～403は土師器皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。ともに口縁部に煤が付着する。京都XIII期中段階に属する。404は焼塩壺蓋である。内面に布目が残る。405は施釉陶器、京焼の灰釉椀である。

土坑5399出土土器（図版69・70・140 406～446） 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。406～417は土師器皿である。406・407は皿Nrである。体部から底部が一体的に丸味をもつ口径が小さい皿である。408～410は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。408の口縁端部には煤が付着する。411～417は皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。417は大型で、口縁端部には煤が付着する。京都XIII期中段階に属する。418・419は塩壺である。418は焼塩壺身である。やや古い様相がみられる。419は花塩壺身である。ロクロ形成し、底部外面はナデを施す。深草産。420～429は施釉陶器である。420～422・426～428は京信楽系の施釉陶器である。420は重ね鉢の最下部である。透明釉が施され、内面底部には小さな目跡が残る。421は口縁端部が内側に突出し上方に面をもつ鉢である。底部内面には焼成時の降灰が付着する。422は口縁端部を輪花状に成形する鉢である。423は口縁端部が外側に突出し、玉縁状となる鉢である。424は丹波産の植木鉢である。底部に貼り付けの脚が3方向につけられる。白化粧を施し灰釉を掛ける。底部中央には焼成前に孔が穿たれる。底部には灰が付着する。425は上野産の三館鉛壺である。底部には回転糸切り痕が残る。外面底部付近以外に黄褐色釉を掛ける。口縁端部では釉剥ぎする。426は鉄釉の乗燭である。内面は使用により磨滅する。427は灰釉の燈明皿である。内面には櫛描による5条線が刻まれる。428は灰釉の燈明受皿である。429は京焼の火入れである。白化粧の後に呉須で絵付けし、透明釉を掛ける。430は備前産焼締陶器の匣鉢である。体部外面下半に刻印がある。431～442・444～446は肥前系の磁器である。431は染付杯である。体部外面に摺花文を施す。432～439は染付椀である。432・433は小椀である。433は高台径が大きく、口縁端部が外反する。434は薄手の椀でやや端反気味である。435は底部から体部が厚い。口縁部内面に四方襷文、内面底部にコンニャク文の五弁花を配する。437は八字高台で、口縁部内面に四方襷文を施す。438・439は筒型椀である。438は内面底部にコンニャク文の五弁花を配する。440は染付皿である。口縁端部は輪花状に形成する。内面底部にコンニャク文の五弁花を配する。441は青磁染付皿である。口縁端部は玉縁状に形成する。幅広の蛇の目高台は低く、釉剥ぎする。外面に青磁釉。442は染付仏飯具である。脚底部には凹部が明瞭に見える。444～446は染付蓋である。444は小型で天井中央部に円柱状の摘みを付ける。445・446は椀蓋である。445は天井部に径の大きいほぼ直立する輪摘みが付く。446は天井部に径の小さい外反する輪摘みが付く。443は輸入陶磁器の青花端反小椀である。高台内にはカンナ削り痕がみられる。

土坑6775出土土器（図版71・140 447） 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、土製品がある。447は施釉陶器の徳利である。口縁部は片口になっている。体部は極めて薄い仕上げで、錆絵で菊花文を2箇所配する。京焼の禁裏御用品である。京都XIII期に属する。

土坑5182出土土器・土製品（図版71～74・141 448～544） 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、土人形がある。448～463は土師器皿である。448～451は皿Nrである。448～450は体部から底部が一体的に丸味をもつ口径が小さい皿である。451は口縁端部をつまんで輪花状にする。452はロクロ成形し、底部外面は回転ケズリ。453～456は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。453・455・456は口縁部に煤が付着する。457～463は皿Sである。内面底部に凹線状の圏線が巡る。京都XIII期新段階に属する。464・465は土師質土器である。464は小鉢である。ロクロ成形し、底部外面は回転ケズリ。465は火入れである。ロクロ成形し、体部は直線的に上方に立ち上がる。外面は使用による被熱で赤化する。口縁部に煤が付着する。466～468は塩壺である。466は焼塩壺身である。ロクロ成形し、底部外面は回転ケズリ。467・468は花塩壺身である。467はロクロ成形し、底部外面はヘラ切りの後ナデを施す。468はロクロ成形し、底部外面はヘラ切り。口縁部内面を受け口状にする。469～494は施釉陶器である。ほとんどが京信楽系陶器である。469はやや端反の小杯である。銅緑釉を掛ける。470～472は白化粧の端反碗である。470は体部外面に鉄釉を掛け、線刻で葉文を描く。471は外面に銅緑釉と鉄絵を施す。472は口縁部の内外に銅緑釉を流しかける。473は筒型碗である。体部上半がやや外反する。474は体部が上方にのびる筒型碗である。白化粧の後に外面に鉄釉で太い線を巡らす。滋賀県石塔窯産。475は幅広い高台をもつ灰釉碗である。476は体部外面を凹凸させ口縁部を外反させる。478は織部風の片口である。口縁部を輪花状に仕上げる。479は錆絵染付の鉢である。体部外面下半はヨコ方向のカキ目を施す。内面と外面上部には白化粧を施す。外面上部の白化粧部分に呉須と鉄釉により葉文を施す。高台内には「東山」刻印がある。480は透明釉の重ね鉢である。482は皿である。白化粧して透明釉を掛ける。口縁部に煤が付着する。483は丹波産の輪花皿である。口縁端部の3箇所を内側に押し曲げて輪花状とする。内面には櫛描き文を施し、灰釉を掛けたのち白泥を流し掛ける。477・481は萩焼である。477は碗で、体部外面下半以外に灰白色とオリーブ褐色の釉を厚く掛ける。481は把手付き鉢である。把手部は欠損しているが板状とみられる。把手部と皿部の接合部には飾りが貼り付けられる。484・485は水注である。484は一部に天井が付く。天井部には型押し菊花文が施される。天井部と同方向に小さな注口が付く。水滴か。485は把手部と注口部を欠損する。486～489は蓋である。486は天井部に輪状の摘みが付く。白化粧の後に鉄絵の葉文を描く。487は型押し形成である。天井部には葉の陽刻文が施され、赤・黒の漆で仕上げる。488は鉄釉の落し蓋である。窪んだ天井部中心に摘みが付く。489は天井部が平坦な重ね鉢の蓋である。490は小型の香炉である。口縁部と体部外面に鉄釉を掛ける。底部外面中央に削り出しの小さな高台をつくる。体部と体部外面の境部分3箇所に飾りの脚をつける。内面に「太」字の墨書がある。491～493は燈火具である。491は鉄釉の乗燭である。492は灰釉の燈明皿である。口縁内面に型押し菊花文を貼り付け、6条の櫛描き文を施す。493は灰釉の燈明受皿である。494は唐津産の壺である。球状の

体部から口縁部は上方にのび、端部は玉縁状とする。白化粧の後に銅緑釉を掛ける。495・496は焼締陶器播鉢である。495は小型で、内面には11条1単位の櫛目が付く。496は内面に8条1単位の櫛目が付く。内面下半から底部は使用のため摩滅している。ともに堺明石産。497～533は磁器である。506・507・512・513は瀬戸美濃系である。これら以外は肥前系である。497～499は白磁である。497は小椀である。498は体部が外上方に直線的に開く。体部外面に草花型押し文を施す。499は端反椀である。体部外面にケズリによる鐫を施す。500～502は色絵椀である。500は小型のいわゆる広東椀である。体部が外上方に直線的に開く。内面底部には「魁」字が書かれる。501は薄手の端反椀である。焼継ぎあり。502は赤絵の端反気味の椀である。503～515は染付椀である。503～505はいわゆる広東椀である。体部が外上方に直線的に開く。503は小型である。506は端反椀である。体部外面に靈芝文を施す。507は端反椀である。高台は八字状である。焼継ぎあり。508は小振りで、高台端部に離れ砂が付着する。510は底部が厚い。509・511は口縁部内面に四方襷文を施す。511は底部が薄く作られる。焼継ぎあり。512はいわゆるペンシルタイプの絵付けである。513は体部上方に凹部をもつ。514は小振りの高台をもつ。外面には蛸唐草文を施す。焼継ぎあり。515は筒型椀である。外面に矢羽根文、口縁部内面に四方襷文を施す。516青磁染付の筒型椀である。517は染付火入れである。体部は直線的に立ち上がる。幅広の蛇の目高台は低く、釉剥ぎする。内面下半は未施釉である。焼成後に高台内中央部に径約1cmの孔を穿つ。518～521は染付鉢である。518は口縁部内面を釉剥ぎする。焼継ぎを施し、高台内には焼継ぎ印がある。519は幅広の蛇の目高台は低く、釉剥ぎする。520は体部が直線的に上方に立ち上がり、口縁端部は内外面に沈線が施される。521は端反の大型鉢である。幅広の蛇の目高台は高く、釉剥ぎする。焼継ぎあり。522は輸入陶磁器の青花鉢である。口縁端部は外反する。靈芝文。焼継ぎあり。523～526は染付皿である。523は口縁端部がやや外反する。524は蛇の目幅広釉剥ぎ高台をもつ。525は内面底部にコンニャク文の五弁花を配する。526は内面底部に蛇の目釉剥ぎを施す。527～530は染付蓋である。527・528は合子蓋である。527は丸みをもって立ち上がった天井部には摘みはない。528は直線的に立ち上がった天井部には摘みはない。焼継ぎあり。529は鉢蓋である。窪みをもつ天井部中心に宝珠形の摘みを付ける。530は椀蓋である。天井部には削り出しの輪摘みが付く。焼継ぎあり。531は色絵の鉢蓋である。天井部に板摘みを施す。端部は内側に曲げ小さく突出させる。金彩赤絵を施す。532は色絵の小瓶である。金彩赤絵を施す。533は色絵の仏飯具である。脚底部の凹は小さい。金彩赤絵を施す。

534～544は狐を模った土人形である。534～537は小型。538～544は大型。大型の人形には玉や巻物を銜えたものがある。「天明類焼後元治兵燹前之古図」（図版149）に描かれた「番神社」との関連が窺える。

土坑2107出土土器（図版74・75・141 545～559）土師器、土師質土器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。545～547は土師器皿である。545は皿Sbである。器高が低い丸底皿である。546・547は皿Sである。547の口縁部には煤が付着する。京都XIV期古段階に属する。548は軟質施釉陶器の小椀である。口縁部は端反で、黒色釉を掛ける。高台内に粹付きの

「光」印がある。京焼とみられる。549～556は京信楽系の施釉陶器である。549は白泥掛けの端反小椀である。550は体部に窪みを付けた小椀である。白泥を内外面に流しかけする。551は鉄釉のミニチュア鍋である。552は鉄釉の落し蓋である。窪んだ天井部の中央に小さな窪みを貼り付ける。553は燈明皿である。口縁内面に型押し菊花文を貼り付け、6条の櫛描き文を施す。554は燈明受皿である。口縁部に重ね焼き痕が残る。555は灰釉の片口である。1方向に注口部を貼り付ける。556は植木鉢である。底部付近の3箇所脚を貼り付ける。焼成前に底部中央に穿孔する。557は土師質土器の風炉である。脚部外面はケズリ、体部外面は丁寧なミガキを施す。背面2箇所に6穴の透かしを施す。558は瓦質土器の香炉とみられる。高い脚部を貼り付け、口縁部は大きく外反させる。体部中央部に型押し文様を施す。装飾的な把手を2箇所に貼り付ける。559は肥前系の染付椀である。内面底部に蛇の目釉剥ぎがある。底部から体部下半が厚い。

土坑3498 (図版75・141 560～567) 土師器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、土製品がある。560・561は土師器皿である。560は皿Nrである。561は皿Sである。内面の凹線が付加された部分が突起する。京都XIV期古段階に属する。562は軟質施釉陶器椀である。体部外面の一部に斜め方向のヘラケズリを施す。黒色の釉を厚く掛ける。563・564は施釉陶器である。563は京信楽系の灰釉の端反椀で、高台内に「妙塔山」の墨書がある。564は白化粧を施した鑄絵染付の大型鉢である。口縁部を内側に押し5輪花状とする。565・566は備前産の焼締陶器である。565は鉢である。体部が直線的に外上方にのび、口縁端部は内側にかえりをつける。566は盤である。口縁部外面に4条のカキ目を施す。底部から体部にかけて火轡がある。底部に「乙」印がある。567は瓦質土器の十能である。柄を取り付ける釘留の孔が2箇所にある。

地業2452出土土器 (図版75 568～572) 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、土製品がある。568・569は土師器皿Nrである。口径が縮小傾向にある。569は器高が高い。570～572は瀬戸美濃系の染付である。570は端反気味の椀である。571は端反椀で草花文を施す。572は体部が内湾気味に立ち上がる。内外面に大柄の菊文を施す。京都XIII～XIV期に属する。

井戸9003出土土器 (図版75 573・574) 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。573・574は肥前系の染付椀である。573の高台にはハナレ砂が付着する。釉が失透する。574は外面に草花文を配する。ともに内面底部に蛇の目釉剥ぎがある。京都XIII～XIV期に属する。

土坑2155出土土器 (図版75 575) 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。575は施釉陶器茶入れである。底部を欠損する。体部は上方に立ち上がり緩やかな肩部をもつ。口縁部は外反する。美濃産とみられる。京都XIII～XIV期に属する土器類とともに出土した。

埋甕2039出土土器 (図版76・141 578) 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。578は丹波産の焼締陶器甕である。頸部は極めて短く口縁端部は外反する。肩部に環状の飾りを貼り付ける。内面には肩部まで灰白色の付着物がみられる。焼成後に底部中央を打ち欠いて穴をあける。便槽として使用されたとみられる。京都XIII～XIV期に属する。

埋甕6708出土土器 (図版76 579) 土師器、施釉陶器、焼締陶器がある。579は信楽産の焼締

陶器甕である。頸部から口縁部を欠損する。胴部やや下半に粘土の接合痕がみられる。内面底部付近に灰白色の付着物がみられる。便槽として使用されたとみられる。京都XIII～XIV期に属する。

埋甕3069出土土器（図版77 580） 土師器、施釉陶器、焼締陶器がある。580は信楽産の焼締陶器甕である。頸部から口縁部を欠損する。内面全体に厚さ0.5cm程度の灰白色の付着物がみられる。上部ほど付着物は厚い。便槽として使用されたとみられる。京都XIII～XIV期に属する。

埋甕2061出土土器（図版76 581） 土師器、瓦質土器、磁器がある。581は瓦質土器の甕である。底部のみが遺存する。内外面にユビオサエ痕が残る。便槽として使用されたとみられる。

埋甕2235出土土器（図版77 582） 土師器、施釉陶器、焼締陶器がある。582は信楽産の焼締陶器甕である。頸部から口縁部を欠損する。下位・中位・頸部の3箇所粘土接合痕が見える。内面底部付近に灰白色の付着物がみられる。便槽として使用されたとみられる。京都XIII～XIV期に属する。

埋甕3072出土土器（図版77 583） 土師器、施釉陶器、焼締陶器がある。583は焼締陶器甕である。頸部から口縁部を欠損する。下位・中位・頸部の3箇所粘土接合痕が見える。内面底部付近に灰白色の付着物がみられる。底部外面に「子」字の墨書がある。便槽として使用されたとみられる。京都XIII～XIV期に属する。

5) 江戸時代末から明治時代

土坑6206出土土器（図版78 584～586） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。584～586は土師器皿である。584は皿Sbである。器高が低い丸底皿である。585・586は皿Sである。内面の凹線が付加された部分が突起する。京都XIV期古～中段階に属する。

土坑6627出土土器（図版78 587～590） 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。587～589は土師器皿である。587は褐色系の小皿である。ロクロ形成で内面底部に圈線がある。588は皿Sbである。器高が低い丸底皿である。589は皿Sである。京都XIV期古～中段階に属する。590は土師質土器の小壺である。底部外面に回転ケズリ痕を残す。

土坑2041出土土器（図版78 591～601） 土師器、土師質土器、施釉陶器、磁器がある。591・592は土師器皿Sである。内面の凹線が付加された部分が突起する。592の口縁部には煤が付着する。京都XIV期中段階に属する。593～595は土師質土器のでんぼである。小・中・大の3サイズがある。底部には回転糸切り痕が残る。深草産。596・597は京信楽系の灰釉椀である。596は小丸椀である。598～601は肥前系の染付椀である。598・599は梅樹文、600はコンニャク印、601は網目文を施す。ともに底部が厚い。

土坑5113出土土器（図版78・79 602～632） 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器がある。602～607は土師器皿である。602は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。器高が極めて低い。603～607は皿Sである。内面の凹線が付加された部分が突起する。605の口縁部には煤が付着する。京都XIV期中段階に属する。608～622は施釉陶器である。608～610は小椀である。608は内面に菊花文を施す。609は端反椀で、白化粧を施す。610は灰釉の端反椀である。611は鉄釉の小鉢である。

口縁部2箇所把手が付く。612は片口鉢である。底部以外に灰釉を掛け、体部外面に白泥で文様を施す。底部内面に4箇所の目跡が残る。613は大型の鉢で、火鉢とみられる。外面上部に馬蹄形の把手を2箇所に貼り付ける。614は片口鍋である。体部上半に飛びカンナの装飾を施す。内面に鉄釉を掛ける。615はやや扁平な鍋である。口縁部の2箇所に環状の把手を付ける。体部外面に白泥を掛けたのち呉須で文様を付ける。内面には灰釉を掛ける。616は小瓶である。体部外面に銅緑釉を掛ける。617は土瓶である。体部外面に白泥で文様を描く。底部外面に煤が付着する。618～620は蓋である。618は窪んだ天井部に擬宝珠形の摘みが付く。619は鍋蓋である。天井部に紐状の摘みを貼り付ける。斑状に灰釉を掛ける。620も鍋蓋とみられる。天井部内面には布目が残ることから型作りである。外面は施釉する。621は燈明皿である。口縁部外面に煤が付着する。622は燈明受皿である。623は焼締陶器の急須蓋である。天井部に蒸気抜きの穿孔がある。摘みの部分に布目が残る。624は焼締陶器の急須である。底部を欠損する。体部外面に部分的に布目が残る。体部は極めて薄く、型作りである。装飾的な把手が付く。625～632は染付である。630は肥前系、630以外は瀬戸美濃系である。625～629は丸椀である。625はやや小振りで、口縁端部にいわゆる口紅を施す。626は底部が厚く、高台にハナレ砂が付着する。627はやや器高が低く、体部外面に大型の菊花文を配する。628は内外面に雨降り文を施す。629は外面に松と帆掛け舟を描く。630は輪花小皿である。631は椀蓋である。天井部に輪摘みが付く。外面には龍文が施される。632は角形の水滴である。内面には布目が残る型作りである。

池2004(石樋6650)出土土器(図版79 633～649) 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。633～635は土師器皿である。633・634は皿Sbで、いわゆる「丸底小皿」である。635は皿Sである。635は内面に線刻が施される。京都XIV期中段階に属する。636～642は京信楽系の施釉陶器である。636・637は椀である。636は小椀で高台が高い。637は小さな高台を削り出し、体部は内湾気味に立ち上がる。内面に三つ又トチンの痕が残る。638は小皿である。内面に施釉し、中央部に施文する。639は皿である。体部外面下半はケズリが残る。口縁部を内側に押し、輪花状とする。白泥を掛けたのち呉須で文様を描く。640・641は蓋である。640は小型で平坦な天井部である。天井部に「梅花」もしくは「桜花」と書かれる。641は土瓶の蓋で、白化粧後に施文する。642は香炉である。高台の上部に装飾的な脚が3箇所に配される。底部内面には施釉しない。643～647は瀬戸美濃系の染付である。643は小椀である。644は大きく外上方に開く体部をもつ。高台内に「嗽流亭製」の銘がある。645は鉢である。高台部にハナレ砂が付着する。口縁端部は釉剥ぎする。646は仏飯具である。647は土瓶である。肩部に環状の把手付けがある。648・649は白磁椀である。

土坑2234出土土器(図版79 650～655) 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器がある。650～653は土師器皿Sである。650以外の口縁部には煤が付着する。京都XIV期中段階に属する。654・655は施釉陶器である。654は京焼の灰釉平椀である。高台内に「油」字の墨書、底部外面にも墨書がある。655は鉄釉の徳利である。底部外面には静止糸切り痕が残り、ハナレ砂が付着する。イッチン書きがある。

(3) 鎌倉時代以前の瓦類 (図版80～87・142・143、表4・5、附表2)

今回の調査では、遺物整理箱約880箱分の瓦類が出土した。瓦の種類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などである。出土瓦の時期は、平安時代から鎌倉時代(13世紀代)と近世に大きく分かれる。本報告では、鎌倉時代以前と近世以降に分けて報告を行う。

1) 瓦類の概要

鎌倉時代以前の軒瓦の出土点数は、軒丸瓦65点、軒平瓦97点、総数162点である。出土瓦の内訳は瓦類一覧表(表4)、個々の瓦の詳細については瓦類観察表(附表2)に掲載した。

① 軒瓦の出土遺構

軒丸瓦・軒平瓦の遺構別の出土数は、表5の通りである。

土坑5448から軒丸瓦4点・軒平瓦1点が出土した。土坑5490から軒平瓦3点が出土した。土坑5497から軒平瓦4点が出土した。土坑4260から軒丸瓦25点・軒平瓦29点が出土した。その他の遺構は、1～2点である。

遺構以外では、第3面掘下げで軒丸瓦2点・軒平瓦2点、第5面掘下げで軒丸瓦2点・軒平瓦4点、第6面掘下げで軒丸瓦10点・軒平瓦15点が出土した。また、掘削中(包含層)で軒丸瓦2点・軒平瓦8点、検出中(包含層)で軒丸瓦5点・軒平瓦4点が出土した。

特に土坑4260からは、軒丸瓦25点・軒平瓦29点がまとまって出土し、全体の約3割を占める。その内訳は、軒丸瓦102類5点・104類2点・105類3点・108類2点・111類1点・113類5点・116類1点・117類1点・119類1点・121類1点・不明3点である。軒平瓦203A類8点・203B類1点・204類8点・205類1点・209類2点・210類1点・212類1点・213類2点・220類1点・227～229類各1点、不明1点である。

② 軒瓦の分類

軒瓦の文様・産地による分類は、軒丸瓦・軒平瓦一覧表(附表2)にまとめた。

軒丸瓦と軒平瓦の比率は2:3で軒平瓦の方がやや多い。

軒丸瓦 軒丸瓦は、瓦当文様によって分類すると26種56点、小片又は文様が不明瞭なため型式が認定できないものが9点ある。

瓦当文様は、蓮華文・宝相華文・巴文・無紋に大別した。

蓮華文は17種46点出土し、複弁蓮華文10種21点、単弁蓮華文6種20点、単複交互弁蓮華文1種5点に分類した。さらに、中房・蓮弁・間弁の形状、及び外区の有無などによって細分した。宝相華文は1種1点出土した。巴文は7種8点出土し、巴文の単位数、頭部・尾部の接続方法、及び外区の文様によって分類した。無文は1種1点出土した。

各種類ごとの点数は、113類が8点、122類が6点、102・105類が各5点で、他は1種3点以下と少ない。型式としては、讃岐産蓮華文102類～104類が9点、山城産複弁蓮華文122・123類が7点とやや多い。

表4 鎌倉時代以前の軒瓦 出土数量表

種類	分類	文様	出土数	種類	分類	文様	出土数	
軒丸瓦	101類	単弁蓮華文	1	軒平瓦	201類	外行唐草文	1	
	102類	単複交互弁蓮華文(外区唐草)	5		202類	半裁花文	1	
	103類	複弁蓮華文(外区唐草)	2		203A類	偏行唐草文	9	27
	104類	複弁蓮華文(外区唐草)	2		203B類	偏行唐草文	4	
	105類	単弁蓮華文	5		204類	外行唐草文(半裁花文)	13	
	106類	複弁蓮華文	1		205類	外行唐草文	1	
	107類	複弁蓮華文	3		206類	外行唐草文	1	
	108類	複弁蓮華文	3		207類	外行唐草文	1	
	109類	複弁蓮華文	1		208類	外行唐草文	1	
	110類	単弁蓮華文	1		209類	外行唐草文	4	
	111類	単弁蓮華文	3		210類	外行唐草文	1	
	112類	単弁蓮華文	2		211類	外行唐草文	1	
	113類	単弁蓮華文	8		212類	内行唐草文	2	
	114類	複弁蓮華文	1		213類	内行唐草文	4	
	115類	複弁蓮華文	1		214類	内行唐草文	3	
	116類	宝相華文	1		215類	右偏行唐草文	1	
	117類	右巴文(外区単弁)	1		216類	右偏行唐草文	4	
	118類	右三巴文(外区珠文)	2		217類	右偏行唐草文	2	
	119類	右二巴文(外区珠文)	1		218類	唐草文	1	
	120類	右三巴文(外区なし)	1		219類	唐草文	1	
	121類	無文	1		220類	外行唐草文	1	
	122類	複弁蓮華文	6		221類	外行唐草文	1	
	123類	複弁蓮華文	1		222類	外行唐草文	1	
	124類	左三巴文(外区なし)	1		223類	宝相華文	1	
	125類	右三巴文(外区なし)	1		224類	内行唐草文	1	
	126類	右三巴文(外区なし)	1		225類	幾何学文	1	
型式不明		9	226類		幾何学文へラ描き	1		
軒丸瓦計			65	227類	半裁花文	1		
				228類	半裁花文	2		
				229類	連巴文	2		
				230類	劍頭文	5		
				231類	劍頭文	19		
				232類	劍巴文	1		
				型式不明		4		
				軒平瓦計			97	
				丸瓦	301類		1	
				熨斗瓦	302類		2	
				総計			165	

表5 鎌倉時代以前の軒瓦 遺構別出土数量表

種類	瓦番号	分類	1面掘下	2面掘下	3面掘下	4面掘下	5面掘下	6面掘下	掘削中	検出中	井戸5121	井戸6241	井戸6139	井戸8009	溝5478	溝1485	溝1489	溝1612	溝4266	柱穴1609	土坑1095	土坑5113	土坑1322
軒丸瓦	瓦1	101類											1										
	瓦2・3	102類																					
	瓦4	103類						2															
	瓦5	104類																					
	瓦6・7	105類							2														
	瓦8	106類																					
	瓦9	107類								2													
	瓦10	108類								1													
	瓦11	109類																					
	瓦12	110類																					
	瓦13	111類					1			1													
	瓦14	112類				1		1															
	瓦15	113類						1		1													
	瓦16	114類			1																		
	瓦17	115類							1														
	瓦18	116類																					
	瓦19	117類																					
	瓦20	118類												1									
	瓦21	119類																					
	瓦22	120類											1										
瓦23	121類																						
瓦24	122類																						
瓦25	123類																						
瓦26	124類							1															
瓦27	125類							1															
瓦28	126類							1															
-	型式不明			1				3															
	軒丸瓦計		0	0	2	1	2	10	2	5	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
軒平瓦	瓦29	201類																					
	瓦30	202類																					
	瓦31	203A類						1															
	瓦32~34	203B類						1	1														
	瓦35	204類						3		1	1												
	瓦36	205類																					
	瓦37	206類																				1	
	瓦38	207類																					
	瓦39	208類						1															
	瓦40	209類							1												1		
	瓦41	210類																					
	瓦42	211類														1							
	瓦43	212類																					
	瓦44・45	213類							1	1													
	瓦46	214類							3														
	瓦47	215類							1														
	瓦48	216類				1	1				2												
	瓦49	217類								1	1												
	瓦50	218類																		1			
	瓦51	219類							1														
	瓦52	220類																					
	瓦53	221類																					
	瓦54	222類			1																		
	瓦55	223類								1													
	瓦56	224類																					
	瓦57	225類															1						
	瓦58	226類	1																				
瓦59	227類																						
瓦60・61	228類								1														
瓦62	229類													1									
瓦63~65	230類		1				1		1														
瓦66~69	231類						2	2									1			1		1	
瓦70	232類																						
-	型式不明			1				1	1														
	軒平瓦計		1	1	2	1	4	15	8	4	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	
丸瓦	瓦71	301類																					
熨斗瓦	瓦72・73	302類						1		1													
	総計		1	1	4	2	6	26	10	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

土坑 5854	土坑 5448	土坑 5490	土坑 5497	土坑 1499	土坑 5520	石室 3813	土坑 3964	土坑 6148	土坑 4260	土坑 6267	土坑 6460	土坑 6537	土坑 6768	土坑 5225	土坑 7433	土坑 7900	土坑 7910	土坑 8134	土坑 3506	東西 セク	攪乱	土坑 1094	土坑 7400	合計
																								1
									5															5
									2															2
									2															2
									3															5
										1														1
											1													3
									2															3
1																								1
																				1				1
									1															3
																								2
									5	1														8
																								1
									1															1
									1															1
									1								1							2
									1															1
									1															1
	3													1					1	1				6
	1																							1
																								1
																								1
							1	1	3															9
1	4	0	0	0	0	0	1	1	25	1	1	1	0	1	0	0	1	0	1	2	0	0	0	65
																1								1
									8														1	1
									1									1						4
									8															13
									1															1
													1											1
																								1
									2															4
									1															1
									1						1									2
									2															4
																								3
																								1
																								4
									1															2
																								1
									1													1		1
																								1
						1																		1
									1															1
																								1
									1															2
									1															2
																								5
	1	2	4	1															3		1			19
																			1					1
									1															4
0	1	3	4	1	1	1	0	0	29	0	0	0	1	0	1	1	0	1	4	0	1	1	1	97
						1																		1
																								2
1	5	3	4	1	1	2	1	1	54	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5	2	1	1	1	165

軒平瓦 軒平瓦は、瓦当文様によって分類すると32種93点、小片又は文様が不明瞭なため型式が認定できないものが4点ある。

瓦当文様は、唐草文・半裁花文・宝相華文・幾何学文・連巴文・剣頭文・剣巴文に大別した。

唐草文は23種59点出土し、外行唐草文・内行唐草文・偏行唐草文などに分類した。さらに、中心文の形・有無、唐草の形状、及び外区の有無・形状などによって細分した。半裁花文は3種4点出土し、花文の形状によって分類した。宝相華文は1種1点出土した。連巴文は1種2点出土した。剣頭文は24点出土し、全て陰刻文様で、成形技法によって二つに分類した。いずれも剣形の形状によって細分した。剣巴文は1種1点出土した。

各種類ごとの点数は、203A類9点、203B類4点、204類13点、209・213・216類が各4点、230類が5点、231類が19点とやや多いが、他は1種3点以下と少ない。型式としては、讃岐産偏行唐草文204類が13点と多い。

2) 瓦類の時期

出土瓦類が属した時期は、同範瓦・同文瓦の出土した遺跡の年代、及び瓦当文様系譜や成形技法の特徴から判断したが、不明なものも少なくない。

瓦の時期は、平安時代前期（9世紀）、中期後葉（11世紀中葉）、後期初め（11世紀後葉）、後期前葉（12世紀前葉）、後期中葉（12世紀中葉）、後期後葉（12世紀後葉）、鎌倉時代（13世紀）に分けた。

時期別の割合は、平安時代前期1点、中期後葉5点、後期初め41点（25%）、後期前葉～後葉73点（50%）、鎌倉時代30点（15%）である。後期前葉～後葉が大半を占め、後期初めがやや多く、鎌倉時代が続く。

平安時代前期（9世紀） 軒平瓦201類は類例が少なく、時期は特定できない。同範瓦が平安京右京二条二坊八町溝5から出土した。伴出遺物は、9世紀中頃から後半と推定できる〔北中2011〕。また、瓦当文様系譜・成形技法などから9世紀代に属する。

平安時代中期後葉（11世紀中葉） 軒丸瓦101類・軒平瓦202類は、同文瓦が法成寺（1022年造営）及び、周辺の平安京左京北辺四坊から出土した〔加納2004〕。さらに、同時期の緑釉瓦が法成寺及び周辺地域から出土した。

以上のことから、軒丸瓦101類・軒平瓦202類は11世紀中葉に比定した。また、丸瓦301類・熨斗瓦302類は施釉瓦であることから同時期と推定した。

平安時代後期初め（11世紀後葉） 軒丸瓦102類は、同範瓦が法勝寺（1077年造営）から出土した。104・105類は、同文瓦が最勝寺推定地〔内田ほか1995〕、円勝寺〔上原1972〕から出土した。この地域から出土した瓦の内の一部は法勝寺所用瓦と推定し、当該瓦はこれに含まれる。また、103類は102・104類と同文である。

軒平瓦203A・203B類は、同範瓦が鳥羽南殿（1086年造営）、同文瓦が法成寺周辺の平安京左京北辺四坊から出土した。204類は、同文瓦が最勝寺推定地から出土した。205類は同文瓦が法成寺

から出土した。

以上のことから、軒丸瓦102～105類、軒平瓦203A・203B～205類は11世紀後葉と推定した。

平安時代後期前葉（12世紀前葉） 軒丸瓦107・111～113類、軒平瓦206・209・212・213・215～217・220・222・223類は、同範瓦または同文瓦が尊勝寺（1102年造営）・円勝寺（1128造営）から出土した。軒丸瓦115類は、同文瓦が平等院（1109年葺替え）から出土した。

この他、瓦当文様系譜・成形技法などから考え、軒丸瓦108・110類、軒平瓦207・208類は、おおむね12世紀前葉に属する。

平安時代後期中葉（12世紀中葉） 軒丸瓦114類は、同範瓦が鳥羽金剛心院（1153年造営）から出土した。このことから、12世紀中葉に比定できる。

平安時代後期後葉（12世紀後葉） 軒丸瓦116類・軒平瓦228類は、同文瓦が法住寺殿蓮華王院（1161年頃造営）から出土した。このことから、12世紀後葉に比定できる。

この他、瓦当文様系譜・成形技法などから、軒丸瓦109・117～120類、軒平瓦210・214・218・219・225・227・229・230類は、おおむね12世紀後葉に属する。

鎌倉時代（13世紀） 軒丸瓦122・123類、軒平瓦231・232類は、同文瓦が亀山殿（1255年頃造営）から出土した。以上のことから、13世紀後葉に比定できる。

3) 瓦類の生産地

出土瓦類の生産地は、同範瓦・同文瓦の出土した生産遺跡・周辺遺跡、及び瓦当文様系譜や成形技法の特徴などから判断したが、不明なものも少なくない。

生産地は、山城・丹波・讃岐・播磨・河内に分類した。軒瓦の産地別の割合は、山城93点（57%）、丹波6点（4%）、讃岐40点（25%）、播磨5点（3%）、河内1点（1%）、不明17点（10%）である。山城が大半を占め、次に讃岐が多い。他の地域は少ない。

山城国 山城産と推定できる軒丸瓦は17種37点、軒平瓦は19種56点、計93点出土した。

軒丸瓦107・109・112・117・120類、軒平瓦209・212・215・216・225・228類は栗栖野窯で同範瓦・同文瓦を確認した。軒丸瓦116類、軒平瓦209・228類は南ノ庄田窯で同文瓦を確認した。

この他、瓦当文様系譜・成形技法などから、軒丸瓦108・111・113・116・118～126、軒平瓦210・211・213・214・217～219・226・227・229～232類は山城産と推定した。

丹波国 丹波産と推定できる軒丸瓦は1種1点、軒平瓦は5種5点、計6点出土した。

軒平瓦205・206類は、篠窯で同文瓦を確認した。

この他、瓦当文様系譜・成形技法などから、軒丸瓦101類・軒平瓦202・207・208類は丹波産と推定した。

讃岐国 讃岐産と推定できる軒丸瓦は4種14点、軒平瓦は3種26点、計40点出土した。

軒丸瓦103類は、丸山窯で同文瓦を確認した。104類は、北条池南岸窯・庄屋原窯で同範瓦を確認した。105類は、北条池南岸窯で同範瓦を確認した。軒平瓦204類は西村1号窯で同文瓦を確認した。さらに、軒平瓦203A・203B・204類の平瓦側面には、凸型台の痕跡と粘土バリが残存し、凹

面の布目が狭端面に連続する。同様の痕跡は、丸山窯・ますえ畑窯出土軒平瓦にも認められる〔森下2016〕。

この他、瓦当文様系譜・成形技法などから、軒丸瓦102類・軒平瓦203A・203B類は讃岐産と推定した。

播磨国 播磨産と推定できる軒丸瓦は1種1点、軒平瓦は4種4点、計5点出土した。

軒丸瓦114類・軒平瓦222類は林崎三本松窯で同範瓦を確認した。軒平瓦220類は、神出窯・林崎三本松窯で同文瓦を確認した。軒平瓦223類は林崎三本松窯で同文瓦を確認した。

この他、瓦当文様系譜・成形技法などから、軒平瓦221類は播磨産と推定した。

河内国 河内産と推定できる軒丸瓦は1種1点、計1点出土した。

軒丸瓦115類は向山窯で同文瓦を確認した。

4) 軒瓦の分析

今回の出土瓦の分析から見られる状況は、当地域の変遷を窺う重要な手がかりとなる。以下に出土瓦から想定できる平安京東辺地域の状況について考察を加える。

① 平安時代中期後葉（11世紀中葉）

平安時代中期（11世紀代）と推定した瓦は、軒丸瓦1点・軒平瓦1点があり、これに組み合う丸瓦1点・熨斗瓦2点を確認した。軒平瓦202類と丸瓦301類・熨斗瓦302類は施釉瓦である。各瓦共に摩滅する。瓦の産地は丹波と推定でき、他の産地は見られない。

軒丸瓦101類と軒平瓦202類の同範・同文軒瓦は、法成寺域では確認していないが、法成寺域西隣接地（平安京左京北辺四坊七町）で確認した〔加納2004〕。

出土遺構は、軒丸瓦101類が井戸6139、軒平瓦202類が土坑7400、熨斗瓦が第6面掘下げ・検出中、丸瓦が石室3813である。

法成寺は、寛仁四年（1020）正月十四日頃から無量寿院阿弥陀堂の造営を始め、治安二年（1022）七月十四日に金堂の供養（『小右記』）。建物の状況は、「御堂を御覧ずれば、七寶所成宮殿也。寶楼眞珠の瓦あをく葺き、（中略）瓦光て空の影見え、（後略）」（『栄華物語』）とあり、緑釉瓦が葺かれたと推定される〔福山ほか1968〕。

当該瓦は、法成寺以外の地域では出土していないことから、法成寺所用瓦と推定できる。しかし、点数が少ないこと、摩滅していることから、当該地で使用されたとは考え難く、法成寺域からの混入品と考えるのが妥当であろう。

② 平安時代後期初め（11世紀後葉）

平安時代後期初めと推定した軒瓦は、軒丸瓦14点・軒平瓦27点があり、全出土軒瓦の約25%を占める。瓦の産地は、讃岐産が主体をなし丹波産も少量見られる。大和産・播磨産瓦は見られない。

讃岐産軒丸瓦は、外区に唐草文を廻らす蓮華文102～104類のグループと、単弁蓮華文105類の2種に分けられる。前者は文様に統一性が認められる。両者共に同様の成形技法で、裏面を縄タタ

キするものとしなないものがある。讃岐産軒平瓦は、偏行唐草文203A・B類と、外行唐草文204類の2種に分けられる。203A・B類の陰刻状の唐草文は、軒丸瓦104類外区唐草文の表現方法と共通性が見られる。両者共に顎形態や、成形・調整技法は同様である。

出土遺構は、軒丸瓦102・104・105類、軒平瓦203A・203B・204類が土坑4260、軒平瓦203B類が土坑8134、軒丸瓦103類、軒平瓦203A・203B・204類が第6面掘下げ、軒丸瓦105類、軒平瓦203B類が掘削中、軒平瓦204類が検出中・井戸5152から出土した。その内軒丸瓦10点・軒平瓦17点は土坑4260からまとまって出土した。

軒丸瓦102～105類の同範・同文軒瓦は、法成寺域では確認していない。軒丸瓦102類の同範瓦は、法勝寺で確認した〔柏田2011〕。軒丸瓦103類の類似瓦は、高陽院池（SG1-B）で確認した〔平尾ほか1982〕。軒丸瓦104類の同範瓦は、最勝寺推定地から出土した〔内田ほか1995〕。軒丸瓦105類の同範瓦は、法成寺域西隣接地（平安京左京北辺四坊七町）・円勝寺から出土した〔加納2004・上原1972〕。軒平瓦203A・203B・204類の同範・同文軒瓦は、法成寺域では確認していないが、軒平瓦203A・203B類の同文瓦は、法成寺域西隣接地（平安京左京北辺四坊七町）・鳥羽南殿で確認した〔加納2004・細谷1968〕。

丹波産は軒平瓦205類である。同文瓦は、法成寺域・平安宮真言院で確認した〔福山ほか1968・梶川1976〕。

法成寺は、天喜六年（1058）二月廿三日に全焼し、翌月から再建が始まり、康平二年（1059）十月十二日に阿弥陀堂供養、その後堂塔が再建され、承德元年（1097）十月十七日に新堂が供養され、再建が終了する〔杉山1968〕。平安宮真言院は、治暦二年（1066）九月五日に新造された（『北院御室日次記』）。その後に行われた後三条天皇による延久年間の平安宮の再建・修造事業の際には、会昌門造営は伊予国と共に讃岐国に割り充てられる。法勝寺は、承暦元年（1077）十二月十八日供養される。なお、最勝寺推定地と円勝寺から出土した瓦の一部は法勝寺所用瓦と推定される〔上原1987〕。高陽院は、康平三年（1060）に造営された第3期池（SG1-C）以前の第2期池（SG1-B）から類似瓦が出土した。これらのことから、12世紀中葉と推定される〔平尾ほか1982〕。鳥羽南殿は、応徳三年（1086）十月廿日頃に造営される。造営には讃岐守高階泰仲が関与し、供養後に讃岐守の重任を受ける。

以上のことから、当該瓦は、11世紀中葉～後葉と推定でき、産地は讃岐産が主体を占める。また、瓦が摩滅していないことから、当時期には調査区周辺に瓦葺きの建物が存在した可能性を示唆する。

③ 平安時代後期前葉から後葉（12世紀代）

平安時代後期中葉から後葉（12世紀代）と推定した軒瓦は、軒丸瓦30点・軒平瓦43点出土し、全体の半数を占める。

時期的には、12世紀前葉のものから12世紀後葉のものまでを含む。軒瓦の産地は、山城産が大半を占め、播磨産が5点、丹波産が3点、河内産が1点と少ない。讃岐産は見られない。

山城産単弁蓮華文軒丸瓦113類が8点と、山城産唐草文軒平瓦209・213・216類が各4点と比較

的まとまる。

以上のことから、当該期の瓦は出土量が多いこと、また摩滅していないことから、当時期には調査区周辺に瓦葺きの建物が存在したと推定できる。

平安時代中期以降、平安京東辺地域では、火災・洪水記事が頻繁に見られ、寺院や邸宅が存在したことが知られる。調査地周辺では、嘉承二年（1107）十月十四日に「大炊御門東朱雀小屋、及二條焼亡人家数百宇灰燼」とあり（『中右記』）、人家が密集していた状況が伺える。このように、平安時代後期頃から東辺地域の開発・宅地化が進んだ状況が推定でき、瓦類の出土状況はこれを裏付ける〔上村2012〕。

④ 鎌倉時代（13世紀代）

鎌倉時代（13世紀代）と推定した軒瓦は、軒丸瓦10点・軒平瓦20点出土した。

これらの軒瓦は、亀山殿（1274頃造営）と同範瓦・同文瓦であることから、13世紀後葉～14世紀前葉と考えられる。

また、当該瓦は出土量がやや多いことや瓦が摩滅していないことから、平安時代後期から引き続き、周辺に瓦葺きの建物の存在が推定できる。

引用・参考文献（引用文献は「付表2 鎌倉時代以前の瓦観察表」と共通）

上原1987：上原真人「瀬戸内海を渡ってきた瓦」『大阪湾をめぐる文化の流れ—もの・ひと・みち—』帝塚山考古学研究所、1987年

上原2009：上原真人「摂関・院政期における讃岐系軒瓦の動向」『平安京とその時代』思文閣出版、2009年

上村2012：上村和直「平安京の変容」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』XIV、同研究所、2012年

杉山1968：杉山信三「法成寺について」『藤原氏の氏寺とその院家』奈良国立文化財研究所学報第十九冊、同研究所、1968年〔後に『院の御所とその御堂』に所収〕

前田1994：前田義明「中期の瓦」『平安京提要』角川書店、1994年

(4) 近世の瓦類 (図版88～111・144・145、表6～8、附表3)

1) 瓦類の概要

今回の調査で出土した瓦は、880箱である。この内、近世瓦は870箱である。近世の妙満寺と本能寺の瓦の変遷を解明するため、抽出した瓦は主として軒瓦、菊丸瓦、鬼瓦、軒端飾瓦、道具瓦、刻印瓦で、総数1523点である。

分析対象となる時代は、妙満寺が四条堀川から寺町二条に移転した天正十一年(1583)から、岩倉の地に移転した昭和四十三年(1968)までの385年間である。

2) 分類方法

1 一次分類では、軒瓦・菊丸瓦・棟端飾瓦・道具瓦・刻印瓦を抽出し、通し番号を付し、各瓦を同定した。

2 二次分類では、軒丸瓦・鳥袂・軒棧瓦の巴文、軒平瓦・軒棧瓦の中心文、菊丸瓦(小菊)及び軒棧瓦の花文など、文様別に型式分類した。

3 分類した瓦は遺存状況を重視して、掲載遺物を抽出し、今回の報告書で図示した。よって、掲載した瓦は各分類の標識となる瓦である¹⁾。

3) 時期区分について

瓦の時期比定は、共伴した土器の年代を重視し、形式的な検討と製作技法の検討を合わせて行った。瓦が出土した遺構の多くは、土坑や攪乱として調査を行ったもので、廃棄時の年代を示しても、使用開始ないし使用時の時期は示さないため、一部瓦については上限が遡る可能性がある瓦もあり、時期幅を広く設定した瓦がある。

時代区分は土器編年(京都X～XIV期)を基に瓦の使用年代と廃棄年代を検討し、全体で6期に区分した。

1期-京都X期新段階、寺町移転期

2期-京都XI期

3期-京都XII期、宝永五年火災前後。

4期-京都XIII期、宝永五年火災前後から天明八年火災まで

5期-京都XIV期古～中段階、天明八年火災再建から元治元年火災まで

6期-元治元年火災再建～昭和四十三年岩倉移転まで

妙満寺が被災した大火後の火災瓦礫層や瓦礫処理土坑を評価するため、時期の画期は再建直前までを含めた。なお、6期の瓦は基本的に報告対象としていない。

4) 調整などについて

瓦の調整は、ナデ、横ナデ、縦方向のナデ、ケズリ、ミガキ、タタキが主として認められた。横

表6 近世の瓦 主要遺構別出土数量表

瓦番号	土坑	土坑	井戸	井戸	井戸	井戸	土坑	土坑	土坑	合計	瓦番号	土坑	土坑	井戸	井戸	井戸	土坑	土坑	土坑	土坑	合計	
	1310	2013	3109	3940	3949	3950	3582	3705	3845			5096	XIII新	XIII新	XIV	X新	XI新	XIII新	XIV中	XIII新		XIII新
	XIV古	XIV古	XIV	X新	XI新	XIII新	XIV中	XIII新	XIII新	XIV中		XIV古	XIV古	XIV	X新	XI新	XIII新	XIV中	XIII新	XIII新	XIV中	
瓦74							3	1			4	瓦150		3								4
瓦75					1						1	瓦151	3		2							7
瓦77					2						2	瓦153									1	1
瓦79	1				1						2	瓦154									2	2
瓦80								1			1	瓦155									2	2
瓦82								1			1	瓦160	3									3
瓦84					1						1	瓦161		1							3	5
瓦85							1				1	瓦165	1									1
瓦87										1	1	瓦173			1							1
瓦88											1	瓦180								1		1
瓦89			1			1					2	瓦185										1
瓦94							2				2	瓦186										1
瓦95										2	2	瓦189								1		1
瓦96	1										1	瓦191								1	4	6
瓦97	1										1	瓦192		1	1							2
瓦99	4										4	瓦194										1
瓦100										4	4	瓦195		3						1		1
瓦101										2	2	瓦196		1								1
瓦102						2	1	1			4	瓦197								3		1
瓦107						1					1	瓦198			1							1
瓦108	4	1		1				2			8	瓦200		1								1
瓦111				1							1	瓦202										7
瓦112						1					1	瓦203	1									1
瓦114					1		1				2	瓦208		2								2
瓦117										1	1	瓦209										1
瓦119				3							3	瓦210									2	2
瓦121							2				2	瓦213									4	4
瓦125					1						1	瓦215	1									1
瓦126				1							1	瓦217								1		1
瓦128				1							1	瓦218								1		1
瓦129	1				1						2	瓦220										1
瓦130										1	1	瓦226									1	1
瓦133	1										1	瓦227								2		2
瓦136										1	1	瓦228	12	3								15
瓦139						1					1	瓦229	2	7								9
瓦141	1										1	瓦230										1
瓦144										1	1	瓦231										1
瓦145										1	1	瓦259		1	1					1	2	5
瓦146	1	1	1				1	1			5	瓦262		1								1
瓦147	1						1				2	合計	39	26	8	7	8	4	34	10	38	10

ナデは瓦当面に平行するナデ、縦方向のナデは瓦当面对し直交方向のナデとした。ケズリは器表面の粘土が掻き取られた状態、ミガキは原体幅痕跡の有無にかかわらず、瓦表面の砂粒を沈めて平滑にし、光沢のある状態を判断の基準とした。ナデについては、調整の単位幅内に原体の条線が残る状態を判断の目安とし、丁寧なナデによって平滑にした場合は、観察表の表記では「平滑に仕上げ」を付記した。

ミガキと判断した瓦は軒丸瓦の瓦105、鳥衾の瓦222・瓦223、軒棧瓦の瓦160、獅子口の瓦249などである。軒丸瓦は5期に位置付けた瓦である。鳥衾は1期と3期に位置付けた瓦である。軒棧瓦は4期と5期から6期の瓦に認められた。5期から6期の瓦は全体的に平滑な瓦が増加し、ナデによって平滑に仕上げるものが多く、製作技術の向上に依るところ大きいと考える²⁾。

内面のタタキについては、今回出土した資料の中では瓦88が初出で、部分的な使用が認められた。京都Ⅻ期中段階以降に位置付けており、その後、多数の瓦でタタキが認められるようになる。

瓦製作の材料となるタタラ製作時の痕跡は糸切りのコビキAと鉄線切りのコビキBが認められた。コビキAは、軒丸瓦の瓦75と軒平瓦の瓦108に認められた。いずれも京都Ⅹ期に属し、1580～1590年頃を下限とする。妙満寺移転時に使用した瓦である。それ以降の瓦はすべてコビキBによる。

瓦当面上端などに認められる面取りは5mm以上のものを幅広、それより幅が狭いものを幅狭と表記した。軒棧瓦の脇区の幅が広い面取りについては角切りとし、観察表に面数を表記した。

5) 離脱材について

離脱剤は離れ砂とキラコ（雲母主体）が認められ、粒径を区分した。離れ砂は細粒から中粒の砂粒を主として使用する。京都Ⅻ期新段階、18世紀以降、キラコの使用が主流となると、砂粒が混和しているものが一部認められるものの、離れ砂は軒平瓦の平瓦部など使用が限定的である。砂粒の大きさによって、時期的な変化や産地別の個性の抽出はできていない。

キラコは18世紀以降、菊丸瓦の瓦当面向への使用に最も顕著にあらわれ、瓦当面向全体に粗粒のキラコが付着するものがある。時代が下るにつれ細粒化し、5期には極細粒ないし泥状になるものが多い。5～6期になると粗粒化したものを使用する瓦もある。4期の後半になると焼成技術の向上と合わせて、泥状のキラコを使用した瓦は光沢を増している。

6) 妙満寺の瓦（図版88～111・144・145）

軒瓦の主要遺構の出土数を表6に示した。軒瓦などの分類が313、遺構及び遺構面掘り下げに伴う項目が240あるため、主要遺構10基を抜粋して掲載した。5点以上の出土を目安とし、合わせて井戸3950を抽出した。

1区（本堂の調査範囲）では土坑1310から違い鷹羽文、桔梗花文の軒棧瓦など39点以上の軒瓦が出土した。同瓦は本堂西面に関係する施設ないし方丈・塔頭所用瓦である。2区（方丈の調査範囲）では土坑2013から26点以上の瓦が出土した。

3区（庫裡・方丈の調査範囲）では、井戸3109から8点以上の軒瓦が出土した。元治元年火災後の井戸で主として庫裡所用瓦と考えられる。井戸3940は、1期の瓦が7点以上出土した。寺町移転後、初期の段階に機能した井戸である。瓦組井戸3950は被熱して変色する瓦を多く用いており、時期的に宝永五年火災後の構築である。瓦組に刻印瓦を35点使用する。土坑3582からは、1期から5期の瓦が出土した。本堂と方丈及び庫裡の間で検出しており、元治元年火災後の瓦礫処理土坑である。1期の瓦の遺存状況が良好なことや、時期幅のある遺物が出土することから、土坑3582は重複する瓦礫処理土坑を一括して掘削した可能性がある。

4区（祖師堂・方丈・塔頭の調査範囲）では、土坑5096から10点以上の軒瓦が出土した。番神社に関係する瓦が多く含まれる。祖師堂南側では、元治元年火災後の瓦礫を処理した土坑を複数検出した。4区南部の塔頭では、通路及び前庭があったと想定される範囲で検出した土坑から瓦が多量に出土している。

土坑1310・土坑2013・土坑3705・土坑3845は天明八年火災後の瓦礫処理土坑、土坑3582は元治元年火災後の瓦礫処理土坑で、井戸3950は宝永五年火災後の瓦を転用した井戸と考える。なお、井戸3950から出土した瓦については井戸枠に転用した瓦を評価するため3期に含めた。

宝永五年火災後の瓦礫処理土坑は層位的な検討から本堂北側・西側にその可能性がある土坑が存在するが、軒瓦の組み合わせで明確に指摘しうるものはない。また、元治元年火災後の瓦礫処理土坑の多くは機械で掘削したため、近代の遺物が混じる場合が多く、出土した瓦の使用開始時を特定することが困難な場合が多く、5期以降の軒瓦が少数である一因となっていると考える。

軒瓦の分類は、1期から6期までの瓦を近世瓦観察表（付表3）に示した。

① 軒丸瓦

瓦当文様は、巴文、抱き茗荷文、「知足山」・「□□山（□は欠損）」の文字瓦がある。

軒丸瓦の巴文は軒棧瓦・鳥袞・棟端飾瓦を合わせて分類を行っており、型式は108、軒丸瓦のみで96に分類した。同範関係の判断で範傷の一致が確認できた瓦は16点で、他は文様の観察などに依る。

抱き茗荷文は5期以降、方丈・庫裡・塔頭の範囲から出土した瓦で、大（1点）、中（1点）、小（4点）の3型式に分かれる。小に分類した瓦106を図示した。

「知足山」（19点）・「□□山（□は欠損）」（1点）の文字瓦は方丈及び塔頭の範囲から出土した。山号が知足山の常德寺の瓦を昭和に入って庭師が持ち込んだ瓦である。6期に属する。

巴文軒丸瓦の分類

軒丸瓦は、巴文が大半を占める。巴文の分類は瓦当径が確認できる瓦ないし巴数が判明した瓦など遺存状況を重視し、珠文数が確認できる瓦を中心に掲載対象とした。

巴文軒丸瓦の変遷

巴文軒丸瓦を中心とした軒丸瓦の変遷は以下のとおりである。

1期の特徴 巴頭部は稜があり、文様は精緻である。コビキAの痕跡を残す瓦がある。珠文は不整な円形で小さく、断面形は歪な半楕円形である。色調は灰色～灰褐色、焼成は硬質である。

2期の特徴 1期と同様、灰褐色を呈し、焼成が硬質な瓦（瓦76～79、以下A群）と、暗褐色を呈し、焼成がやや軟質な瓦（瓦80～83、以下B群）がある。

A群は、文様がシャープで、巴頭部に不明瞭な稜があるものや巴頭部が接するか近接するものがある。尾部は接し、界線を有するものがある。珠文は円形で、断面形は半楕円形である。コビキBの痕跡を残す瓦がある。B群は巴頭部が近接し、三巴文の構成が粗雑である。珠文は円形で、断面形は半楕円形である。

瓦80は軒平瓦の瓦119・124と共に茶褐色から暗褐色砂粒を含み、色調は全体に黄色を呈するが、聚楽第東堀から出土した茶褐色粒子を含む瓦と胎土の特徴が似る。瓦84は凹弁八弁八重菊文の軒丸瓦で聚楽第出土瓦と同一の意匠の瓦である。

3期の特徴 京都Ⅸ期中段階までと新段階以降で前半と後半に細分した。

前半は瓦85から瓦87が該当する。暗褐色を呈し、焼成はやや軟質である。2期B群の系譜に繋がり、巴頭部が近接し、三巴文の構成が粗雑である。珠文は円形で、断面形は半楕円形である。焼成不良により断面の色が暗色を呈する瓦が多い。瓦87は天明八年火災後の瓦礫処理土坑である土坑3845から出土し、文様の特徴から3期に位置付けたが後出する可能性がある。

後半は瓦88から瓦92が該当する。珠文は円形、断面形は半楕円形で高さが低いものがある。暗褐色から黒褐色を呈し、焼成は硬質である。巴頭部は丸味を帯び、明瞭なくびれをもつものが含まれる。瓦88は丸瓦の内タタキの初出の事例で、部分的にタタキが認められる。瓦89は宝永五年火災後の瓦を転用する井戸3950上層から出土した。界線があり、周縁内端を丁寧に面取りし、「榎木作 弥三左門」を陰刻する。「榎木作 弥三左門」は「堺大小路」と組み合う瓦259が出土しており、堺産の瓦である。瓦90は京都Ⅹ期中段階の遺構及び遺構面掘削から出土した瓦である。胎土や焼成は瓦89と同じで堺産の瓦と考えられ、瓦89より後出する瓦と考えられる。瓦92は、頭部がやや長く巴頭部の間隔は広い。天明八年火災後の火災瓦礫処理土坑から出土する軒丸瓦の巴文に系譜的につながる瓦と考えたが、4期に下る可能性がある。

4期の特徴 巴頭部は丸味を帯び、くびれが明瞭化する。3期と比較し、文様はシャープさを増すが、施工後に指おさえやナデによって文様の形状を整えるため、巴頭部断面形の頂部が平坦なものが含まれる。珠文の径は徐々に大きくなり、断面形は頂部が平坦な半楕円形を主体とし、時期が新しくなると高さが低いものが現れる。色調は黒褐色を呈し、天明八年火災時の被熱により変色する瓦が多い。

5期の特徴 巴頭部は丸く、くびれが明瞭である。尾部内側の稜線が巴頭部の内側に入り込む。珠文は円形、断面形は半円形、新しくなると半球形になる。色調は黒褐色から黒色を呈する。

6期の特徴 瓦105の文様の特徴を引き継ぎ、巴頭部は丸く、くびれが明瞭である。全体に光沢をもち、焼成は堅緻である。出土量は減少する。瓦75の復刻瓦が2点出土した。

② 軒平瓦・軒棧瓦

軒平瓦・軒棧瓦は、中心文に着眼して分類を行った。中心文は143に分類し、その内103点を図示した。中心文と脇飾りの唐草文の区別は文様のまとまりを重視した。中心文の表現や珠点に対し

文様がどの位置にあり、連続性を有するかということを目安の一つとした。

中心文は、三葉文、五葉文、花文、橘文、宝珠文などがある。中心文の主題として多くの瓦に採用される花文は、花の構造上、どの部位を表現するかということ considering して観察表を作成した。

唐草文は、唐草の巻き込みがあるものを1転と数え、中央部がくびれるものや先端が二股に分かれるものは子葉（飛び唐草）とした。連続するもの及び連続しないものに分け、瑞雲形ないし雲形のもを雲形唐草文と表記した。

軒平瓦の変遷

1期の特徴 界線を有する瓦がある。唐草文は1転ないし3転で、連続するものが多い。唐草文は文様が細く先端の巻き込みが明瞭である。中心文は、三葉文・五葉文を主体とする。色調は灰褐色である。顎の断面形は長方形で分厚く、瓦当と平瓦の接合部はシャープである。瓦当上端は幅広（15mm前後）に面取りする。コビキAの痕跡を残す瓦が含まれる。

2期の特徴 唐草文は1～3転で、連続するもの含まれる。唐草文は文様が細く先端の巻き込みが明瞭なものから、後半になると文様が太くなり巻き込みが弱いもの、子葉を表現するものがある。中心文は二葉文、三葉文、五葉文がある。コビキBの痕跡を残す瓦がある。色調は暗褐色を呈する。顎の断面形状は長方形で、瓦当厚が薄くなる。瓦当と平瓦の接合部はシャープである。前半は瓦当上端を幅広（6～15mm）に面取りし、後半になると幅狭に面取りするものがある。瓦116は聚楽第から出土した金箔瓦と同一の意匠である。

3期の特徴 唐草文は1転ないし2転、文様が太く、先端が肉厚になるものがある。中心文は三葉文、五葉文、花文がある。色調は黒味が強くなり、暗褐色から黒褐色を呈する。顎の断面形は縦長の長方形で、瓦当厚は薄くなる。瓦当の縦の長さが短い瓦134は、本能寺瓦280など共に、短期的に採用した瓦と考えられる。瓦当と平瓦の接合部は横方向のナデの痕跡を残すものが増加する。瓦136と瓦131は瓦当上端に幅広の面取りがあり、文様の構成要素から2期に遡る可能性を検討したが、顎形態がシャープではないことや焼成が前段階のものと比較し硬質であることから3期と判断した。瓦当面上端の面取りは幅狭の面取りで、面取りを行わないものやナデによって丸味を帯びるものがある。

4期の特徴 唐草文は文様が細いものに、文様が太く短いものが増加し、雲形唐草文が新たに加わる。雲形唐草文は軒棧瓦にも採用され、軒棧瓦の導入と深く関係する。中心文は珠点を有する二葉文、三葉文がある。三葉文には三葉を剣先形に表現するものがあり、文様の外形は丸味を帯びる。また、中央の一葉を逆U字に表現する瓦150～152が主流を占めるようになる。色調は黒褐色を呈し、軒丸瓦と同じく、天明八年火災の被熱により変色するものが多い。顎の断面形は長方形か、平瓦との接合部まで傾斜をもって台形状となるものがある。

瓦143・145・146の中心文は公家町では宝永五年火災以前から採用する文様である。唐草文は細く、文様はシャープである。瓦143は遺構面の掘り下げ時に出土したもので時期を明確にしがたいが、胎土が粗く、焼成がやや軟質、文様の彫りが深く、瓦当と平瓦の接合部は傾斜があるもののシャープで古相を示す。

瓦150～152の中央の一葉を逆U字に表現した三葉文は、雲形唐草文と組み合わせる。軒棧瓦の文様としても採用され、雲形唐草文と同様に軒棧瓦の導入と深く関係する。瓦150・239は同範関係で、軒平瓦・見せ掛け袖瓦だけではなく、軒棧瓦にも同範のものがある。

5期の特徴 軒丸瓦とともに、5期以降の軒平瓦は出土量が減少する。唐草文は雲形を呈するものが2種ある。中心文は三葉文と花文があり、三葉文（瓦157・158の中心文、中央の一葉が逆U字）が主流である。同じ三葉文の中心文は文様の対称性が失われる傾向にあり、6期にも出土する。色調は黒褐色を呈する。顎の断面形は台形状、瓦当と平瓦の接合部はナデにより湾曲するものがあり、近代に近付くとシャープなものが現れる。雲形唐草文の内、瓦157は本堂基壇から出土した瓦で、天明八年火災後の瓦礫層より新しい層位から出土したことから5期に位置付けた。

6期の特徴 軒丸瓦に比して、元治元年火災以降の軒平瓦の出土数はさらに少なくなる。中心文は三葉文（中央の一葉が逆U字）が継続して使用する。これ以外に軒平瓦の可能性のあるものが2型式あるが、遺存状況が悪い。

軒棧瓦の変遷

軒棧瓦は、軒丸瓦の付く軒棧瓦、棧が鎌形の軒棧瓦（以下、鎌形棧瓦とする）、軒平部が滴水瓦形の軒棧瓦（以下、軒棧瓦（滴水状）とする）がある。4期以降出土しており、方丈、庫裡、塔頭で主として使用された。本堂や祖師堂では一部入口などで用いられた可能性がある。滴水瓦と軒棧瓦（滴水状）については、両端が遺存せず、角切りがないなど、滴水瓦と厳密に区別が付かない瓦があり、まとめて図示した。

4期の特徴 中心文は二葉文と三葉文があり、中央の一葉を逆U字に表現する三葉文が量的に卓越する。瓦160は巴頭部のくびれが弱く楕円状を呈すること、瓦当裏面の接合で軒平部に角があり古い様相を示すこと（杉本氏のa手法〔杉本2000〕）、焼成が軟質であることから、今回出土した軒棧瓦の中では最も古いものと考えられる。瓦161は巴頭部が丸く、尾部の稜線が頭部に表現されるなど新しい要素を持ち、4期では新しい段階、天明八年火災前後の導入を想定する。鎌形棧瓦の瓦179は広島藩大坂蔵屋敷に同文の瓦がある。

瓦228の違い鷹羽文と瓦229の八重桔梗文の軒棧瓦（滴水状）はこの期の後半の瓦で方丈・塔頭で使用した瓦である。軒平部の立浪文は同じ範を用いる。なお、中心文が剥落しており図示していないが上向き橋文の鎌形棧瓦がある。

5期の特徴 中心文は二葉文・三葉文・橋文がある。鎌形棧瓦が量的に卓越するようになる。三葉文は引き続き中央の一葉を逆U字に表現する三葉文が主流である。二葉文の瓦169～171は近代の遺構から主として出土した。被熱するものがあることから元治元年火災の被熱による変色と判断し、5期に位置付けた。瓦232や瓦233にみる「瀧」の及び花文を複線で表現する瓦が祖師堂6250の造成土として用いた元治元年火災瓦礫からまとまって出土した。また、図示していないが、軒丸部が輪貫文、いわゆる「蛇の目」の軒棧瓦も出土している。

6期の特徴 中心文は三葉文・橋文がある。三葉文は引き続き中央の一葉を逆U字に表現する三葉文である。瓦176と瓦177の中心文と類似する軒棧瓦がある。また、軒丸部の瓦当文様に八弁

蓮華文を復刻した軒棧瓦がある。

③ 菊丸瓦

菊丸瓦は49に分類した。差し込み部の折損を除けば、瓦当が遺存する率は高く、合計183点出土した。菊丸瓦は、瓦当幅と内区幅を降順で並べた場合に経時的な変化が最も顕著に表れる。時期が下ると瓦当径は小さくなり、差し込み部は棒状に変化する。

菊丸瓦の変遷

1期の特徴 菊花文の凹弁八弁一重菊である。凸形で円形の中房。周縁はない。焼成は軟質である。瓦当径は10.2cmである。公家町の調査に同文の瓦がある。

2期の特徴 菊花文の凹弁八弁一重菊である。凸形で円形の中房。周縁はない。焼成は軟質である。瓦189は差し込み部の凹面にコビキBの痕跡が認められる。瓦当径は10.1cmである。公家町の調査に同文の瓦がある。

3期の特徴 菊花文の凹弁八弁一重菊である。凸形で円形の中房。周縁がある。花卉の中央に弁端に向かって表現する稜は徐々に表現されなくなる。花卉の凹みが深くなり、花卉の輪郭が線状になるものが出現する。焼成はやや軟質。瓦当径の平均は約9.7cmである。

4期の特徴 菊花文の凹弁八弁一重菊である。花卉の輪郭は線状。中房はボタン状(小)と粒状のものがある。瓦当径は、8.0～8.5cm(A群、平均8.2cm、細粒から中粒のキラコを使用、3寸よりやや小さい)、7.0～7.7cm(B群、平均7.4cm、極細粒から泥状のキラコを使用、2寸5分を指向)、5.3～6.8cm(C群、平均6.1cm、2寸を指向)に大きく分けることができる。B群からC群は差し込み部が棒状化するものが大半を占める。A群は瓦198～瓦208、B群は瓦214～瓦217、C群は瓦209～瓦213である。

5期の特徴 菊花文の凹弁八弁一重菊と凹弁・凸弁十六弁一重菊である。凹弁八弁一重菊は前の型式を踏襲するもので、中房は粒状中房。凹弁の花卉の横断面形は逆三角形で、凹みが花卉の稜に見える。凹弁十六弁一重菊は凸形で円形の中房、凸弁十六弁一重菊はボタン状の中房である。公家町の調査成果と合わせて時期を検討すると、前者が古く位置付けられる。

6期の特徴 本堂後拝から1点出土した。瓦当形状が六角形で、瓦当文様が凸弁四弁一重の花文である。昭和前期以降か。

④ 鳥衾

瓦222と瓦223は軒丸瓦に同範の瓦がある。瓦222は瓦74と同範で、同範関係にある軒丸瓦は合計13点である。瓦223は同範関係にある軒丸瓦は合計3点である。瓦226の梅鉢文は天明八年火災後の瓦礫処理土坑から出土しており、4期とした。

⑤ 滴水瓦と軒棧瓦(滴水状)

滴水瓦は、軒棧瓦の軒平部が滴水状のものも合わせて図示した。今回出土した滴水瓦の内、最も古いものは瓦259である。瓦227は同一の意匠だが、瓦227は「久左衛門」、瓦259は「堺大小路」と「榎木作 弥三左門」で刻印が異なり、瓦当文様も異なる。

⑥ 板塀瓦・見せ掛け袖瓦・隅軒瓦

板塀瓦は4期のものが少量出土しており、3期以前のものはない。見せ掛け袖瓦の瓦239は軒平瓦の瓦150と同範である。隅軒瓦は瓦240と瓦241のほか、5期以降のものが他にも出土している。

⑦ 棟端飾瓦ほか

鬼瓦は全体で81点出土した。瓦242は1期に位置付けられ、寺町移転時に使用した鬼瓦である。八峰輪宝を表現した棟端飾瓦（鬼瓦の額飾りか）の瓦245は、文様・胎土・焼成から2期以前に遡る可能性がある。獅子及び桃を表現した留蓋瓦は5期のもので、これ以降の出土量が多い。獅子口を含む棟端飾瓦は全体で115点出土した。瓦249～253は3～4期の獅子口である。瓦塼は全体で37点出土している。

⑧ ヘラ描きによる文字瓦

ヘラ描きによる文字瓦は3点出土した。瓦255は棟端飾瓦の外縁で鬼瓦と考えられる。表面に「□丙申」のヘラ描きした文字がある。京都XIII期新段階の井戸2620の掘形から出土した。丙申は正徳六年・享保元年（1716）ないし、安永5年（1776）丙申に該当すると考えられる。焼成は硬質、色調は黒味が強く、表面の遺存状態も良好なことから後者の安永五年に製作したもの。

瓦256は獅子口系の飾瓦、裏面に「大工井上三右」のヘラ描きした文字がある。刻印瓦から「京大佛瓦師井上三右衛門」を表記したと想定される。被熱して変色する。時期は5期である。

瓦257は雁振瓦で、裏面に「大佛清」とヘラ描きした文字がある。京都XIII期新段階から京都XIV期古段階、5期に位置付けられる。

これ以外に、ヘラ描きの瓦は2点出土した。留蓋瓦の瓦247は背面に「×」をヘラ描きする。他に、図示していないが、棟端飾瓦に「×」をヘラ描きしたものがある。時期はいずれも5期である。

⑨ 刻印瓦

刻印は、全体で21種類ある。刻印の総数は135点、この内1個体に異なる刻印が2ヶ所ある瓦が4点あり、刻印を確認した瓦の総数は131点である（表7）。陽刻と陰刻があり、文字及び記号を刻印する。以下、各刻印は掲載した瓦番号に「刻印」を付して呼称する³⁾。

刻印瓦の概要

瓦258刻印は「久左衛門」の陰刻である⁴⁾。瓦260刻印「榎木作 弥三左門」と同様に、井戸3950の井戸枠として用いられた平瓦への刻印が最も多い。堺の大小路口瓦町に1689年に居住した瓦生産者「瓦屋久左衛門」の刻印瓦である〔嶋谷2017〕。

瓦259刻印は「堺大小路」と「榎木作 弥三左門」の陰刻である。滴水瓦に使用する。「堺大小路」は、堺の「大小路口瓦町」の刻印瓦である。「堺大小路」と「榎木作 弥三左門」はセットで上下に押される瓦が3点あり、いずれも「堺大小路」が上段である。「堺大小路」は太字3点、細字2点が出土しており、瓦259は細字のものである。なお、同文の瓦227及びその同範瓦は「久左衛門」の刻印のみを使用し、2点出土している。堺環濠都市遺跡（SKT725地点）、堺の南宗寺、高知城、長崎の聖福寺から「堺大小路」の刻印瓦が出土している。

瓦260刻印は「榎木作 弥三左門」の陰刻である。堺の大小路口瓦町に1689年に居住した瓦生産

者「瓦屋弥三左衛門」の刻印瓦である。井戸3950の井戸枠に用いられた平瓦への刻印が最も多い。井戸3950から出土した瓦89の丸瓦凸面中央にも同じ刻印がある。堺環濠都市遺跡（SKT787地点）、堺の南宗寺から同じ刻印瓦が出土している。瓦258～260刻印瓦は被熱により変色するものが多く含まれる。

瓦261刻印は「京大佛瓦師井上三右衛門」の陽刻である。刻印は最も大きく、焼成は軟質である。他の「井上三右衛門」の刻印はすべて陰刻である。

瓦262刻印は半月形の形状の陰刻である。天明八年火災後の火災瓦礫処理土坑と考える土坑2013から出土した。

瓦263刻印は「○（丸）」の陰刻である。切隅板塀瓦に刻印する。天明八年火災後の火災瓦礫処理土坑と考える土坑3845から出土した。相国寺旧境内、二条城などから「○（丸）」の刻印瓦が出土している。

瓦264刻印は「大」にの陰刻である。方広寺、白河街区跡から同じ刻印瓦が出土している。

瓦265刻印は「十」の陽刻である。方広寺、伏見城から同じ刻印瓦が出土している。

瓦266刻印は「京大佛瓦師井上三右衛門」の陰刻である。元治元年火災により被熱するものが大半である。異範の刻印が5点ある。異範の刻印は文字が不鮮明で「右」の口の部分が大きいなど字体が異なる部分があり、枠線のみ明瞭である。時期はいずれも5期である。

瓦267刻印は「二」の陽刻である。

瓦268刻印は「□之□□□」の陰刻である。瓦当面の「○（丸）」の陰刻と合わせて使用する。「□之□□□」の刻印は、文字数は異なるが、公家町（迎賓館）の調査で出土した「山之内長兵衛」の刻印に似る。

瓦269刻印は「二」の陽刻（陰刻の丸で囲む）である。軒丸瓦の瓦当は欠損しており、瓦当文様は不明。相国寺旧境内、知恩院三門から同じ刻印瓦ある。

瓦270刻印は「御用京大佛瓦師井上三右衛門」の陰刻である。「御用」の下に横線があり、四角の線で囲む。白河街区跡に同じ刻印瓦がある。

瓦271刻印は「与」の陰刻（丸の線で囲む）である。相国寺旧境内、公家町、伏見城に同じ刻印瓦がある。

瓦272刻印は下向き三角形と上向き三角形を組み合わせた、鱗形の陽刻である。相国寺旧境内、寺町旧域・御土居跡に同じ刻印瓦がある。

瓦273刻印は「井上三右衛門」の陰刻である。他に棟端飾瓦細片に刻印するものがあり、被熱により変色する。

瓦274刻印は「昆太」の陰刻（長方形の線で囲む）である。「日比太」とも見えるが、白河街区跡から内容が同じ刻印瓦が出土しており、字の配置から「昆太」と判断した。

瓦275刻印は「十」の陰刻。元治元年火災により被熱する瓦が含まれる。相国寺旧境内、寺町旧域・御土居跡、白河街区跡に同じ刻印瓦がある。

瓦276刻印は三角形の陰刻である。三角形内に斜位に布目痕がある。

刻印瓦の使用時期と特徴

刻印瓦は3期から6期のものが出土した。記号の刻印は13種類あり、3期から4期のものが多い。ただし、1点のみの出土の場合、時期を明確にしないものもあった。

刻印は「久左衛門」・「榎木作 弥三左門」の点数が多く、計89点になり、全体の67%を占める。井戸3950の井戸枠として用いられた瓦が大半である。井戸3950（京都Ⅻ期新段階～ⅩⅢ期古段階）は宝永五年火災後に構築した井戸と考えられる。近接する井戸3940（京都Ⅺ期）も井戸枠に瓦を使用するが、井戸3940から出土した刻印瓦は皆無である。西本願寺御影堂の解体修理の成果によれば、刻印と番付のある瓦と、瓦が葺かれる位置に関係があることが示されている。井戸3950と井戸3940の刻印瓦の有無は時期差だけではなく、瓦転用時に屋根のどの部位の瓦を使用したかということを反映した可能性がある。

「京大佛瓦師井上三右衛門」のヘラ描き及び刻印は合計5種類ある。時期は、5期を中心に瓦生産に従事した瓦工のものである。

7) 本能寺の瓦（図版111）

調査地は本能寺寺域の北西に当たる場所、塔頭が想定される範囲を調査した。時期に偏りがあるものの、軒瓦などが出土している。特筆すべきは妙満寺と本能寺に瓦280を除き同範・同文となる瓦がなかったことである。

軒丸瓦は2期から5期、軒平瓦は1期から5期の瓦があり、ほかに軒棧瓦、菊丸瓦が出土した。瓦280は瓦134と瓦当の形状と胎土が類似しており、生産地が同じ可能性がある。瓦281刻印は輪鼓形の形状の陽刻である。本能寺から出土した刻印瓦はこの1点のみで、妙満寺に同じ刻印は認められない。ほかに、図示していないが、5期の凹弁八弁一重菊の菊丸瓦、中心文が橘文の軒棧瓦が出土した。

8) 所用瓦の検討

妙満寺の各建物で用いられた所用瓦について法量及び出土地点から検討を行った。

各建物で用いられた軒瓦の法量について、軒丸瓦と菊丸瓦の瓦当径及び軒平瓦の瓦当幅を尺寸に変換して検討を行った（図20）。1寸≒3.03cmで換算した。

軒丸瓦は1期から5寸が量的に多く、五寸の軒丸瓦を6期まで継続して使用する。なお、4期は4寸5分の軒丸瓦も採用しており、本堂周辺からまとまって出土した。

軒平瓦は1期から8寸が量的に多く、八寸の軒平瓦を6期まで継続して使用する。

菊丸瓦は1期に3.5寸、2期から3期にかけて3寸を採用する。4期とした天明八年火災までは1.5～2.5寸を採用し、1.5寸及び2.0寸は後出すると考えられる。

軒丸瓦、軒平瓦、菊丸瓦の基本となる大きさの上下に、大小の瓦が分布する状況がそれぞれにあるものの、いずれも個体数が少なく法量としては規格外の瓦である。軒丸瓦は4期に4寸5分のものが本堂周辺から出土しているが、軒平瓦の法量に大きな変化は認められず、本堂については5寸

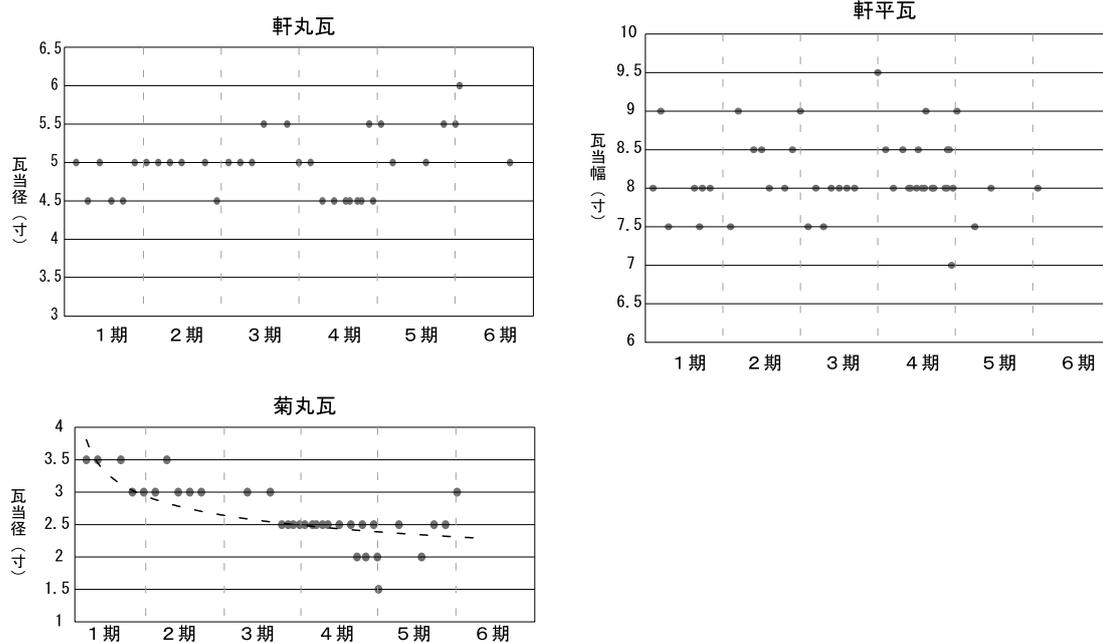


図20 妙満寺軒瓦及び菊丸瓦法量分布図

の軒丸瓦を使用し続けたと考えている。軒丸瓦の瓦当径と軒平瓦の瓦当幅の比率は1 : 1.6である。

出土地点は、取り上げの単位である4 mの地区割りをを行った分布図を各瓦について作成した。本堂ほか主要な建物との近接性を、出土状況を含めて検討を行った(付表3、同範瓦の出土地点に近接する建物)。以下、図示した瓦番号を用いて、各瓦の出土状況を概観する。

本堂周辺から出土した軒丸瓦は瓦74・80・87～92、94、97、102・105がある。軒平瓦は瓦108・117・121・129・136・145・146・151・153～154・157がある。菊丸瓦は瓦189・191・195・197・201～203・210・213がある。

祖師堂周辺から出土した軒丸瓦は瓦87・88がある。軒平瓦は瓦108・117・135・151・158がある。菊丸瓦は瓦193・198・201～207がある。祖師堂は天明八年火災で焼失していないことや本堂より建物規模が小さいため、抽出できた瓦数は少ないと考えられる。

軒棧瓦は方丈、庫裡、塔頭、番神社の東側から出土しており、4期から用いられる。

表8 妙満寺屋瓦構造の変遷

	本堂	祖師堂	方丈・庫裡	南側塔頭	番神社
1期	本瓦葺き	本瓦葺き	本瓦葺き		
2期	本瓦葺き	本瓦葺き	本瓦葺き	本瓦葺き	
3期	本瓦葺き(建替え)	本瓦葺き(建替え)	本瓦葺き(一部焼失か)	本瓦葺き	不明
4期	本瓦葺き (天明八年火災焼失)	本瓦葺き(焼失せず)	棧瓦葺き (天明八年火災焼失)	棧瓦葺き (天明八年火災焼失)	棧瓦葺き (天明八年火災焼失)
5期	本瓦葺き (元治元年火災焼失)	本瓦葺き (元治元年火災焼失)	棧瓦葺き (元治元年火災焼失)	棧瓦葺き (元治元年火災焼失)	棧瓦葺き (元治元年火災焼失)
6期	本瓦葺き	本瓦葺き	棧瓦葺き	棧瓦葺き	

※ 1～3期の瓦には被熱により変色する瓦あり。ただし、出土遺構から宝永5年火災による被熱と断定できる瓦なし。

※ 3期井戸3950の瓦組みに被熱により変色した瓦を転用しており、庫裡は一部焼失か。

以上の検討から、妙満寺の屋瓦構造の変化を表8に示した。元治火災後の本堂及び祖師堂から出土した軒瓦は少量であるが、昭和以前の写真絵葉書が残されており、それによれば本堂及び祖師堂は本瓦葺きである。方丈、庫裡、南側塔頭は元治元年火災後の再建から軒棧瓦は鎌形棧瓦を主として使用するようになると考えられる。太鼓堂及び鐘楼は資料数に乏しく詳細は不明であるが、鐘楼は昭和前期以前の写真絵葉書では本瓦葺きである。

9) 小結

妙満寺は、天文十一年（1542）後奈良天皇の法華宗帰洛論旨により、堺から四条堀川（妙満寺町）に移転し、天正十一年（1583）豊臣秀吉から寺町への移転を命じられる。1期とした瓦は室町時代後期の瓦の特徴を指摘できるものがあり、四条堀川（妙満寺町）で使用した瓦を寺町において転用した可能性のある瓦も含まれていると考えられる。2期から3期は、軒丸瓦、軒平瓦の出土数が増え、建物の補修や方丈・庫裡の増改築、塔頭の新設などが想定できる。1期から3期の瓦には被熱する瓦が含まれるものの、井戸から出土した瓦を除いてまとまって出土することがなく、被熱した時期が宝永五年火災と特定できる瓦はなかった。

4期は、方丈、庫裡、塔頭では軒棧瓦を使用するようになる。祖師堂では土蔵造りに建物構造が変化し、天明八年火災時には焼失しなかったため、屋根構造は変化せず、同じ瓦を引き続き使用する。5期は、本堂は引き続き本瓦葺きで再建されることが考えられるが、軒丸瓦及び軒平瓦の出土量は減少する。6期の本堂及び祖師堂は元治元年に被災した後、本瓦葺きの建物として再建される。昭和四十三年の岩倉へ移転した妙満寺の堂宇には、新造の瓦が葺かれる。

註

- 1) 瓦番号に新たに分類名を付与することは行っておらず、同范関係にある瓦を記述する際にも瓦番号を使用する。
- 2) ミガキのある瓦が他の瓦と流通価格が違うことが『桜田上御屋鋪御普請記録』に示される。宮崎勝美「大名屋敷の作事・普請と江戸遺跡」『江戸遺跡研究会会報』No.74 2000年
- 3) 刻印瓦の類例の内、未報告の瓦については、『幕藩体制下の瓦－近世都市遺跡における生産と流通－』埋蔵文化財研究会 2017年を参照した。
- 4) 瓦258～260の刻印は、大阪歴史博物館の豆谷浩之氏にご教示いただいた。

引用・参考文献

- 芦田淳一「総持寺に残る瓦銘と北摂地域の瓦師」『帝塚山大学大学院紀要』創刊号 帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要編集委員会 2000年
- 芦田淳一「大和の近世瓦－編年の方法と瓦師の動向－」『関西近世考古学研究XI』 関西近世考古学研究会 2003年
- 芦田淳一「方広寺造営にみる近世造瓦体制の確立」『石造物の研究－仏教文物の諸相－』高志書院 2011年
- 芦田淳一「大和の近世瓦－編年と瓦生産－」『幕藩体制下の瓦－近世都市遺跡における生産と流通－』埋蔵文化財研究会 2017年

- 市川 創「徳川期大阪城の瓦」『大阪文化財研究所紀要』第16号 大阪市博物館協会大阪文化財研究所 2015年
- 市川 創「大坂における近世瓦の生産と流通」『幕藩体制下の瓦－近世都市遺跡における生産と流通－』埋蔵文化財研究会 2017年
- 内田好昭「第2節瓦類」『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22集 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 金子 智「近世瓦の刻印」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第4分冊 早稲田大学大学院文学研究科 1997年
- 金子 智「江戸の瓦生産と近世瓦の展開」『幕藩体制下の瓦－近世都市遺跡における生産と流通－』埋蔵文化財研究会 2017年
- 京都府教育委員会「御影堂の瓦について」『宗報』本願寺御影堂平成大修復推進事務所だより(57) 2004年7月号 本願寺出版社 2004年
- 黒田慶一「瓦の検討」『瓦屋町遺跡発掘調査報告』大阪市文化財協会 2009年
- 嶋谷和彦「近世堺の瓦屋仲間と刻印瓦－住友銅吹所跡出土の堺銘刻印瓦に寄せて－」『大阪市文化財協会研究紀要』第2号 大阪市文化財協会 1999年
- 嶋谷和彦「堺瓦の生産と流布」『関西近世考古学研究XI』関西近世考古学研究会 2003年
- 嶋谷和彦「刻印瓦と株仲間記録からみた近世堺の瓦生産者の動向」『幕藩体制下の瓦－近世都市遺跡における生産と流通－』埋蔵文化財研究会 2017年
- 杉本 宏「棧瓦考」『考古学研究』第46巻第4号 考古学研究会 2000年
- 杉本 宏「棧瓦の成立過程と京瓦師の動向」『関西近世考古学研究XI』関西近世考古学研究会 2003年
- 杉本 宏「棧瓦考拾遺」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会 2002年
- 武内雅人・鳴海祥博「近世瓦の生産と流通－建造物を素材とした研究事例－」『幕藩体制下の瓦－近世都市遺跡における生産と流通－』埋蔵文化財研究会 2017年
- 内記 理「京都大学構内遺跡出土の近世瓦－幕末藩邸関係資料を中心に－」『幕藩体制下の瓦－近世都市遺跡における生産と流通－』埋蔵文化財研究会 2017年
- 浜中邦弘「2. 瓦・塼」『相国寺旧境内発掘調査報告書今出川キャンパス整備に伴う発掘調査』同志社大学歴史資料館調査研究報告第13集 同志社大学歴史資料館 2015年
- 日本鬼師の会『鬼瓦・瓦屋根再考』日本鬼師の会 2005年
- 豆谷浩之「文献資料からみた近世大坂の瓦の生産と流通」『幕藩体制下の瓦－近世都市遺跡における生産と流通－』埋蔵文化財研究会 2017年
- 宮本佐知子「3) 瓦類」『大阪市北調査区広島藩大坂屋敷跡II』大阪市文化財協会 2004年
- 宮本佐知子「1) 瓦」『佐賀藩蔵屋敷跡発掘調査報告』大阪市博物館協会大阪文化財研究所 2012年
- 森島康雄「聚楽第と城下町の瓦」『織豊城郭』織豊期城郭研究会 1994年
- 森島康雄「聚楽第周辺の金箔瓦－聚楽第城下町復元に向けて－」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年
- 森田克行「畿内における近世瓦の成立について」『摂津高槻城』高槻市教育委員会 1984年
- 山崎信二「近世瓦の技法と編年」『関西近世考古学研究XI』関西近世考古学研究会 2003年
- 山崎信二『近世瓦の研究』同成社 2008年
- 山崎信二『瓦が語る日本史』吉川弘文館 2012年
- 李 銀眞「近世京都の公家屋敷跡出土瓦－近年の発掘調査の成果を含めて－」『幕藩体制下の瓦－近世都市遺跡における生産と流通－』埋蔵文化財研究会 2017年

(5) 銭貨 (図版112、付表4)

銭貨は309点出土した。このうち種類が判明しないものも多数あるが、寛永通寶の割合が高い。比較的状態の良い34点を図示した。銭貨の内訳は、皇朝銭、北宋銭、明銭、寛永通寶、近代通貨に大別できる。皇朝銭では、隆平永寶(銭1)・富壽神寶(銭2)が各1枚出土した。銭貨のなかでも北宋銭と寛永通寶が多量に出土している。寛永通寶では新銭の背面に「文」字(銭19・20)、「元」字(銭25)、波文(銭26)がある。

1区では、第3面掘下げから天禧通寶(銭6)が出土している。

2区では、土坑2300から寛永通寶(銭18)が出土している。

3区では、第4面掘下げから祥符元寶(銭4)、柱穴3716から天聖元寶(銭7)、石室3813から至和元寶(銭9)・大觀通寶(銭15)、庫裡Ⅲ柱穴3058から元祐通寶(銭13)、土坑3582や土坑3481から寛永通寶(銭21・24)が出土している。

4区では、第6面掘下げから隆平永寶(銭1)、第4面掘下げから聖宋元寶(銭5)・元豊通寶(銭12)・寛永通寶(銭17)、石列7818から富壽神寶(銭2)、第3面掘下げから太平通寶(銭3)・永樂通寶(銭16)、土坑7087から皇宋通寶(銭8)・紹聖元寶(銭14)、石列6660から嘉祐元寶(銭10)、石列6400から熙寧元寶(銭11)、第2面掘下げ・溝5015・土坑5113・土坑5635・土坑6452・土坑7178から寛永通寶(銭19・20・22・23・25・26)、第1面検出から文久永寶(銭33)、柱穴6496から桐1銭青銅貨(銭34)が出土した。墓7343からは寛永通寶(銭27～32)がまとめて6枚出土したことから六道銭とみられる。

(6) 金属製品 (図版113、付表5)

金属製品には、皿、蓋、飾金具、分銅、燭台、匙、簪、火箸、煙管、釘類がある。

皿(金1) 金1は高台付の皿である。器壁は薄く、表面は研磨される。高台内には「極上長光土器」銘がある。口径は10.2cmで、ほぼ3寸の製品である。材質は真鍮。土坑6623から出土した。

蓋(金2・3) 金2は平坦な天井部中央に宝珠形の摘みが付く。裏面には返しが付く。金3は緩やかに盛り上がる天井部中央に宝珠形の摘みが付く。裏面には返しが付く。ともに青銅製。金2は土坑6244、金3は土坑7087から出土した。

飾金具(金4～9) 金4は仏具の輪宝を象った飾金具である。円盤状の体部に文様を線刻する。中心部には釘孔がある。金5は円筒形の飾金具である。円柱状の製品の端部に被せる金具である。端面には蓮華文、筒部側面には蓮葉や蓮華を線刻する。魚々子彫りで装飾する。円筒部には裏面に接合部がみられる。金6は四角柱状の製品の端部に被せる金具である。端面には菊花文、他には葉文を線刻する。魚々子彫りで装飾する。端部下面端部には孔がある。先端に向かって緩やかな上方向の反りがある。金7は全体像は欠損のため不明である。体部の2箇所には孔がある。唐草文様に魚々子彫りで装飾する。金8は瓔珞である。上端部に孔がある。風化のため線刻が不明瞭である。金9は欠損部があるが円形の製品とみられる。窪んだ中央部の2箇所に孔がある。6点ともに金銅

製である。金4は4区第3面清掃、金5は土坑6244、金6は4区第2面掘下げ、金7・9は土坑6586、金8は柱穴3483から出土した。

分銅(金10) 金10は一部欠損しているが分銅とみられる。体部は角柱状で、上面に摘みが付く。銅製。表面に銅錆が付着する。重さは9.3g(3匁弱)。4区第4面掘下げから出土した。

燭台(金11) 金11は蠟燭の受け部である。円盤状の蠟燭受け部と、断面四角形の釘である。真鍮製。土坑2003から出土した。

匙(金12・13) 金12は体部は長円形で、受け部はやや窪む。柄につながる部分は筒状に成形し、木製の柄が付くとみられる。金13は薄板状で、体部は欠損しているが平坦で、長円形になるとみられる。柄の部分は板状である。金12は銅製、金13は青銅製である。金12は3区第3面掘下げ、金13は3区第4面検出から出土した。

煙管(金14～16) 金14～16は吸口である。ともに接合型である。金14・15は真鍮製、金16は銅製である。金14・15は池2004、金16は土坑9034から出土した。

簪(金17～19) 金17・18は体部が二股状となる。端部には装飾が施される。金19は薄い板状の簪である。端部近くの幅広い部分には透かしを施す。端部は耳かきが付く。金19は銅製、金17・18は真鍮製である。金17は4区第2面掘下げ、金18は土坑6244、金19は土坑5277から出土した。

火箸(金20・21) 金20は断面四角形の細い棒状を呈する。上端部に近い部分に捩じりを加える。端部には孔がある。金21は断面円形の細い棒状を呈する。端部には珠状の飾りを付ける。金20は真鍮製、金21は銅製である。金20は4区排土、金21は土坑2369から出土した。

釘類(金22～28) 様々な大きさの釘がある。体部の断面形は金24が円形で、他は四角形である。金22・28は頭部を円盤状に成形する。他は端部を折り曲げて頭部とする。金22・25・27は銅製、以外は鉄製である。金22は2区第1面掘下げ、金23・24・26は4区第2面掘下げ、金25は祖師堂Ⅳ掘下げ、金27は3区第3面掘下げ、金28は4区第3面検出から出土した。

(7) 石製品(図版114、付表6)

石製品には、石製銚具、数珠玉、碁石、角形容器、硯、石鍋、石臼、石仏、一石五輪塔、宝篋印塔がある。

石製銚具(石1) 石1は巡方の未製品である。表面の研磨は丁寧である。面取り・潜穴は施されていない。溝8097から出土した。

数珠玉(石2) 石2は数珠玉の未製品である。ほぼ円形で、中央部の穴は未貫通である。表面には加工痕が残る。4区第4面掘下げから出土した。

碁石(石3・4) 石3は白色、石4は黒色を呈する。石4は柱穴1072、石3は3区第3面掘下げから出土した。

角形容器(石5) 石5は平面形がほぼ正方形で、周縁を作って内側を窪める。厚さは1.3cmである。用途は不明である。祖師堂Ⅳ掘下げから出土した。

硯(石6～10) 石6は小型で、平面形が細い長方形の硯である。内部は仕切り縁により2つに

区切られる。周縁の一部が欠損している。側面と裏面は滑らかに加工されている。左側の陸部中央部は使用によりやや窪んでいる。裏面には文字が線刻されているが「高島」以外は不明である。石7は平面形が細い長方形の硯である。周縁の一部が欠損している。側面と裏面は滑らかに加工されている。陸部中央部は使用によりやや窪んでいる。石8は平面形が長方形の硯である。周縁のほとんどが欠損している。側面は滑らかに加工されている。陸部中央部は使用により著しく窪んでいる。石9は平面形が長方形の硯である。周縁の一部が欠損している。側面と裏面は滑らかに加工されて、角の部分は面取りが施される。石10は平面形が楕円の硯である。左側の一部が欠損している。紫色を呈する。石7・8は土坑5182、石6・9は3区第3面掘下げ、石10は1区第3面掘下げから出土した。

石鍋(石11・12) 石11は体部が直線的に上外方にのびる。内外面には成形痕が残る。外面には煤が付着する。石12は体部が内湾しながら立ち上がる。内外面には成形痕が残る。外面には煤が付着する。石11は溝5478、石12は柱穴5033から出土した。

石臼(石13) 石13は花崗岩製。8分画で、副溝は3条。芯棒の穴平面形は円形、断面形は方形。側面の挽き木の差し込み穴は2箇所。2区重機掘削時に出土した。

石仏(石14) 石14は花崗岩製。石仏2体を陽刻。片側側面から下位にかけて大きく欠損する。全体が磨滅する。4区排土から出土した。

一石五輪塔(石15～17) 石15は砂岩製。地輪は角柱状で墓碑銘を刻む。水輪より上部は欠損。「寛永三年／□□□／経 妙□(圓カ) 霊\十月」を陰刻する。石16は砂岩製。地輪は角柱状、墓碑銘を刻み、一部欠損する。空輪から水輪にかけて「妙法蓮華」、地輪は「元和四年\経 妙通□(呉カ)\□□」を陰刻する。石17は砂岩製。地輪は角柱状で墓碑銘を刻む。全体に磨滅が顕著で、文字は不鮮明である。火輪から上位と地輪の一部を欠損する。水輪は「華」、地輪は「元龜元年\経 □妙正霊\十二月廿八日」を陰刻する。石15は柱穴7157、石16は祖師堂北側の石列6400裏込め、石17は井戸6241から出土した。

宝篋印塔(石18) 石18は花崗岩製。相輪先端は円形の凹みあり。九輪は輪の高さと間隔が狭く、細密に表現する。軸の先端は一部欠損。全体は鉄分沈着により黒味を帯びる。土坑7087から出土した。

(8) ガラス製品(図版113、付表7)

ガラス製品には、珠、瓶がある。

珠(ガ1) ガ1は小さな珠である。中心部に紐通しの孔がある。墓7399から出土したことから、副葬品とみられる。

瓶(ガ2・3) ガ2・3は牛乳瓶である。ガ2は胴部に「京都牧畜場」銘がある。ガ3は胴部2箇所に「森田牧場 伊東」、「全乳」銘がある。ともに型による形成である。ガ2は池2004、ガ3は土坑6768から出土した。

5. ま と め

今回の調査地では、多くの遺構・遺物を検出した。それらの遺構は、大きくは古墳時代以前、平安時代、鎌倉時代から室町時代、桃山時代から江戸時代、江戸時代末から明治時代に分けられる。ここでは、周辺の調査成果も含め、今回の調査で検出した遺構の変遷を時代ごとにまとめておく。

(1) 古墳時代以前 (第6面) (図21)

古墳時代以前の遺構としては、北調査区の北東部から南西部に向かう大規模な流路8065がある。埋土の砂礫から、弥生時代中期から古墳時代後期の遺物が出土した。上流部の集落から流れてきた遺物と考えられる。流路は古墳時代以前の河川堆積物の砂礫が累重する第7層で最も新しい時期に形成されたものである。流路埋土の砂礫は調査地南西部の下刻部分にのみ顕著に堆積している。

(2) 平安時代 (第6面) (図21・23)

調査地に隣接する平安京左京三条四坊十五・十六町では、第2章(2)周辺の調査で記述した平安時代後期の土坑・遺物包含層などが16箇所検出されている。この周辺は、平安京の東端ではあるが、平安時代後期以降、活発な土地利用がなされていたことがわかる。さらに、条坊街路関連では東京極大路、二条大路、押小路、三条坊門小路の各推定地で関連遺構を検出しており、平安京東端の条坊施工の実態が明らかになっている。

今回の北調査区では、調査地の西側を中心に平安時代の遺構が点在する。遺構には井戸、土坑、溝、柱穴、石列などがある。平安京Ⅱ期の遺物が出土する9世紀中頃の井戸が1基存在するが、多くは平安京Ⅳ・Ⅴ期の11世紀から12世紀代のものであり、平安時代中期後半以降に宅地化が進んだと考えられる。さらに庭の景石の可能性のある石列4270や多量の瓦類の出土は邸宅や瓦葺き建築物の存在を窺わせる。南調査区でも平安京Ⅳ期の遺物が出土する11世紀代の井戸9001があり、こちらも宅地化されていたことが判明した。この状況は、平安時代中期後半の藤原氏らによる京極東の開発や、院政期の鴨東の開発と関連するとみられる。

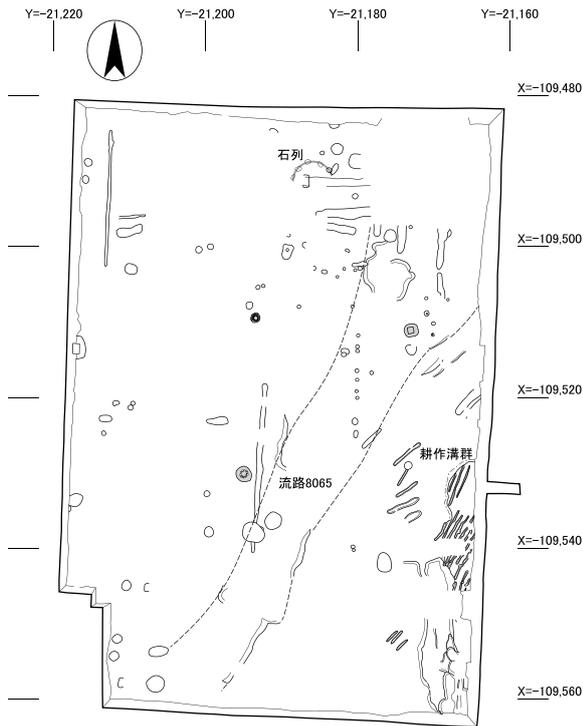
北調査区の南西部では耕作溝群を検出している。明確な時期は不明であるが、宅地開発が進む以前に耕作地となっていた可能性がある。

(3) 鎌倉時代から室町時代 (第5面) (図21・23)

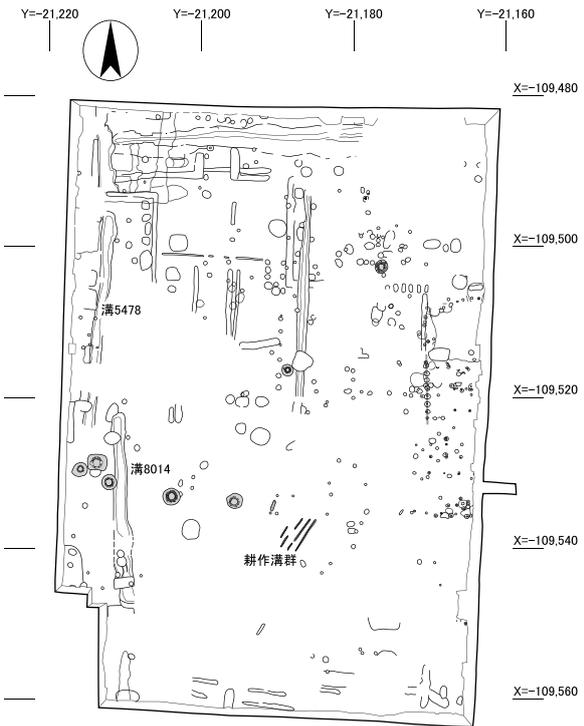
周辺調査では、鎌倉時代から室町時代の土坑・遺物包含層などが17箇所検出されている。平安時代から継続して土地利用されていたことがわかる。

今回の北調査区では、この時期の整地が厚さ約1mに及ぶ場所があり、3層以上に細分が可能である。活発な宅地利用に伴い、整地が繰り返されたことがわかる。整地層からは京都Ⅵ期から京都Ⅸ期、13世紀から15世紀までの遺物が多量に出土した。京都Ⅶ期からⅧ期の土師器は量的にも卓越し、京都Ⅸ期になると減少することから、特に13世紀後半から15世紀半ばまでの土地利用が活

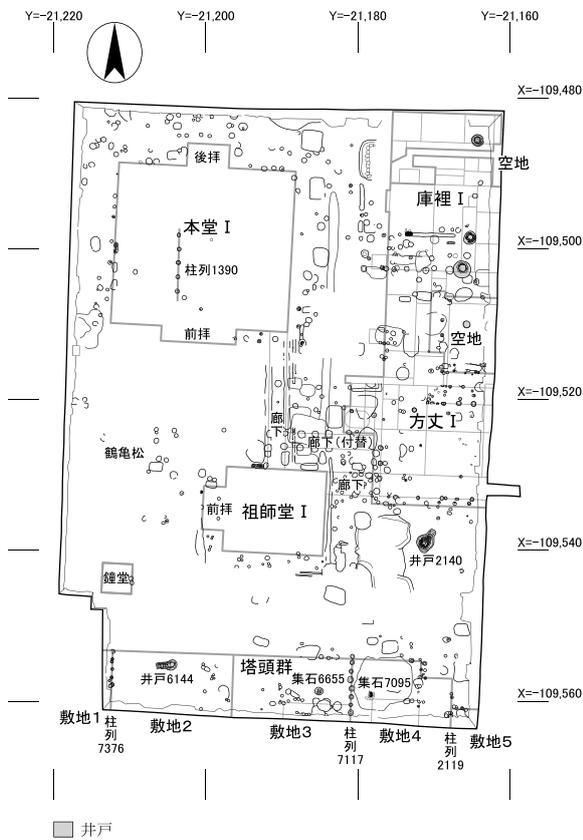
平安時代以前(第6面)



鎌倉時代～室町時代(第5面)



桃山時代～江戸時代前期(第4面)



江戸時代中期(第3面)

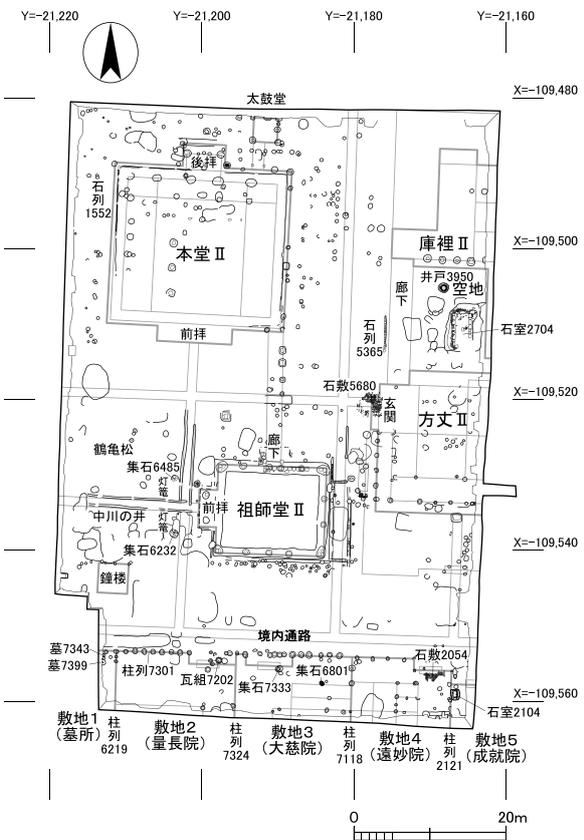
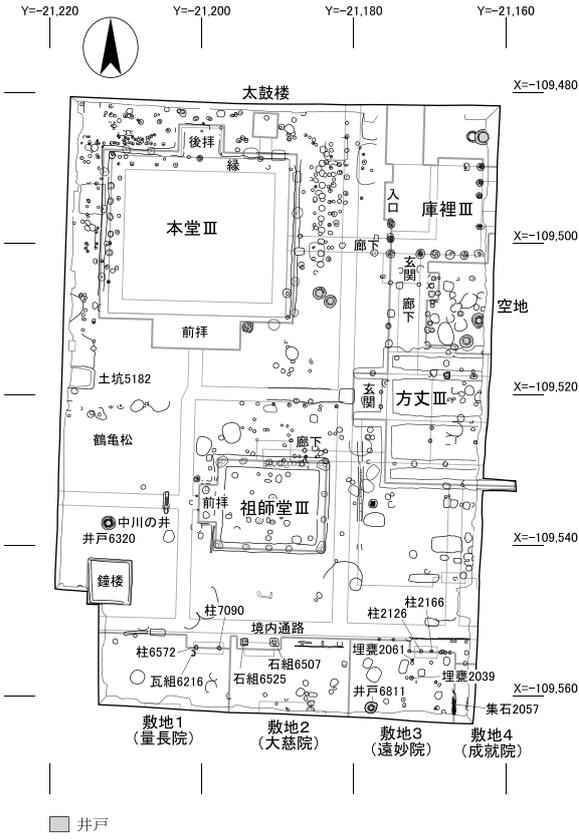


図21 北調査区遺構変遷図1 (1:1,000)

江戸時代後期(第2面)



明治時代(第1面)

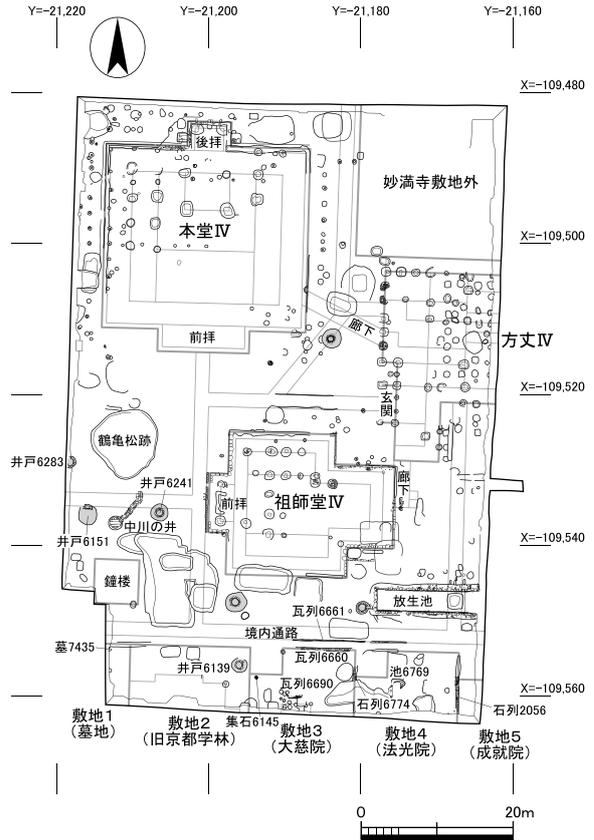
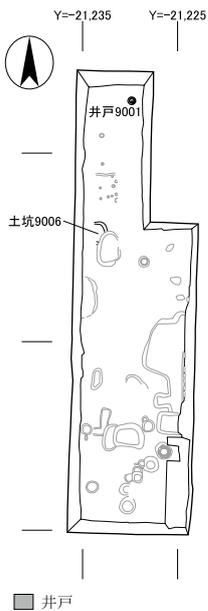
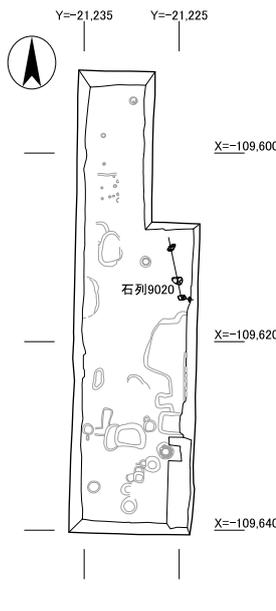


図22 北調査区遺構変遷図2 (1:1,000)

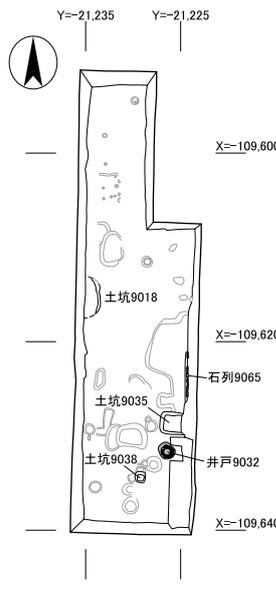
平安時代以前



鎌倉時代～室町時代



桃山時代～江戸時代前期



江戸時代後期

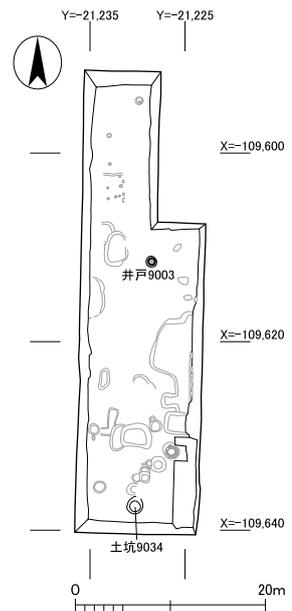


図23 南調査区遺構変遷図 (1:800)

発であったと考えられる。遺構は、井戸・土坑・溝・柱列・柱穴・石敷・墓・落込みなどを検出した。溝の中には幅1 m以上の溝5478・8014などがあり、区画溝として機能したと考えられる。井戸は北東から南西にかけて分布する。井戸を検出した範囲から北西側に向かって地形が高くなっており、井戸はその縁辺部に掘削されたものである。南東部では、耕作溝を検出した。京都Ⅸ期から京都Ⅹ期、15世紀後半から16世紀代の遺構・遺物の出土が相対的に少なく、その時期に耕作地となっていた可能性が考えられる。

南調査区では庭の景石の可能性のある石列9020を検出したほか、北調査区と同様、京都Ⅵ期から京都Ⅸ期、13世紀から15世紀代の土器が多数出土しており、宅地利用が継続していたことがわかる。

(4) 桃山時代から江戸時代 (第4～2面)

寺町が形成され、妙満寺の移転先となり、伽藍が建設され、大火類焼のたびに伽藍を再建し続ける時期である。周辺調査では、桃山時代から江戸時代の土坑・遺物包含層などが21箇所で見出されている。墓や墓石が出土し、江戸時代の早い段階から妙満寺の墓地として利用されていたことがわかっている。

今回の北調査区では、調査区全域に妙満寺関連の遺構が展開し、妙満寺が当地に移転してきた天正十一年(1583)から、再び岩倉に移転する昭和四十三年(1968)までの建物の変遷を明らかにすることができた。また、中井家文書「美濃守様御本陣妙満寺絵図」(図版147)、妙満寺が所蔵する絵図「天明焼失前之古図」(図版148)・「天明類焼後元治兵燹前之古図」(図版149)・「現在絵図面」(図版150)に記された建物群の正確な位置関係や構造の変化を調査で明らかにできたことは大きな成果である。

また、南調査区は、本能寺の移転先であり、境内の北西部にあたとみられる。

桃山時代から江戸時代前期 (第4面) (図版147、図21・23)

寺町新設に伴って妙満寺が移転してきた時期である。

本堂Ⅰとその周辺 本堂Ⅰ関連では基壇盛土を検出したが、後世の改変により、この時期の基壇化粧石や本堂母屋の礎石据付穴などは検出できなかった。しかし、基壇上で検出した南北方向の柱列1390は、東柱の礎石列の可能性が有る。「美濃守様御本陣妙満寺絵図」(図版147)によれば、本堂は南向きであり、屋根は出土した瓦類の分析から本瓦葺きとみられる。

祖師堂Ⅰとその周辺 祖師堂Ⅰ関連では基壇盛土、前拝に關係する礎石据付穴や雨落ちとみられる集石などを検出した。基壇は盛土の構築単位が明瞭で、南西隅を起点に平面形が長方形となるように泥質の土を盛った後、北辺及び東辺に砂礫の盛土を行って基壇を造成する。盛土は基盤層に由来し、周囲の整地土と同質である。寺町の造成から間隙なく、基壇を構築したと考えられる。なお、基壇上面は元治元年火災後の整地により削平を受けるため建物構造などは不明である。廊下で本堂と繋がる。その廊下の途中から方丈に向かう廊下は、出土遺物から17世紀以降に付替えられ

たものとみられる。

方丈Ⅰ・庫裡Ⅰとその周辺 方丈Ⅰ関連では礎石据付穴群を検出した。東西方向に並ぶものもあるが、建物構造は不明である。庫裡Ⅰ周辺では井戸・礎石据付穴・溝・雨落ち・石室などを検出したが、建物構造の復元はできなかった。方丈Ⅰ南側の、前庭と想定される場所では階段付きの井戸2140を検出した。階段は東に振れる角度で井戸に取り付き、方丈南面中央を意識した構造とみられる。

塔頭とその周辺 後世の改変により明確に検出できた遺構は少ないが、各敷地を区画する南北方向の掘立柱列を検出した。間口が7～8間とすれば5区画が想定でき、西から敷地1～5が並ぶ。調査地は各塔頭の前庭部分にあたりとみられ、建物はさらに南側に展開すると考えられる。敷地2内には、階段付きの井戸6144がある。階段部分には数種類の石材が用いられており、視覚を意識した特殊な井戸である。敷地3・4内では、雨落ちとみられる集石6655・7095を検出した。

本能寺境内 南調査区南半に井戸9032、土坑9018・9035・9038、石列9065などの遺構が集中している。この部分は境内北西部の塔頭にあたりとみられる。この周囲からは、唐津大皿、絵唐津鉢、高取花入、志野椀、絵志野向付、織部向付、輸入陶磁器などが出土しており、喫茶に関わる高級陶磁器の出土率が高い傾向にあることが特徴である。

江戸時代中期（第3面）（図版148、図21・23）

天明大火（1788）以前に再建した伽藍である。

本堂Ⅱとその周辺 本堂Ⅱは、前代の本堂Ⅰと同位置に再建される。基壇の規模は、東西約22.3m、南北約20.4mである。建物規模は、基壇上で検出した礎石据付穴列から、東西約19.6m、南北約17.6mと推測される。基壇の外側に小ぶりの礎石据付穴が並ぶことから、縁先が基壇の外側に出る構造であったと考えられる。建物は南向きで、屋根は本瓦葺きである。北面の中央に後拝がある。前拝は明確に検出できなかった。本堂Ⅱの北東部では太鼓堂の礎石据付穴を検出し、本堂Ⅱとは廊下で繋がる。南面の東端からは南に位置する祖師堂Ⅱに繋がる廊下がのびる。

祖師堂Ⅱとその周辺 祖師堂Ⅱ関連では、基壇盛土、前拝、雨落ち、灯籠の台石、北面入口などを検出した。祖師堂Ⅱは基壇周囲に布掘りの地業がめぐり、「天明焼失前之古図」（図版148）に記された通り、土蔵造りに建物構造が変化したとみられる。基壇は祖師堂Ⅰの基壇を踏襲した上で、規模は拡張する。西辺では、前拝基壇を検出した。基壇上で南北に並ぶ礎石据付穴を検出しており、祖師堂Ⅰと比較すると、前拝の上屋構造も変化したと考えられる。前拝の西側で検出した集石6232・6485は「都名所圖會」に描かれる灯籠の台石とみられる。「天明焼失前之古図」によれば祖師堂西側に「中川の井」が記されており、位置的には第2面の井戸6320にあたるが、構築時期がこの時期まで遡るかは不明である。

方丈Ⅱ・庫裡Ⅱとその周辺 方丈Ⅱ関連では、石敷及び石列、礎石据付穴列、井戸などを検出した。建物構造の全容は不明であるが、「天明焼失前之古図」に示される玄関付近で石敷5680を検出した。庫裡Ⅱ関連では、井戸や東西方向の礎石据付穴列を検出したが、建物構造の全容は不明であ

る。方丈Ⅱと庫裡Ⅱを繋ぐ廊下部分では縁石とみられる石列5365、方丈Ⅱと庫裡Ⅱの間、「天明焼失前之古図」に示される「空地」では石室2704、井戸3950を検出した。井戸3950は被熱して変色する刻印瓦を井戸枠に多量に転用した井戸である。宝永五年（1708）の火災後に構築された考えられる。この期に属する瓦として堺産の瓦が多用されていることが注目される。

塔頭とその周辺 塔頭関連では、敷地を区画する掘立柱列を検出した。柱列で区画される敷地は5区画ある。「天明焼失前之古図」によれば、西から墓地・量長院・大慈院・遠妙院・成就院とみられる。それぞれの間口は、墓地は東西1.8m以上、量長院は東西15.7m、大慈院は東西15.2m、遠妙院は東西13.1m、成就院は東西2.0m以上となる。各敷地内では門の雨落ちや石敷き、建物礎石、石室など数多くの遺構を検出した。

本能寺境内 この時期の顕著な遺構はみとめられなかった。

江戸時代後期（第2面）（図版149、図22・23）

天明大火類焼後に再建された伽藍である。

本堂Ⅲとその周辺 本堂Ⅲは、前代の本堂Ⅱと同位置に再建される。基壇の規模は、東西約25.4m、南北約22.2mと推測される。建物の4面に幅約1.8mの縁がめぐる。建物は南向きで、屋根は本瓦葺きである。北面の中央には後拝がある。南面中央の前拝は後世の削平により検出できなかったが、前拝の雨落ちとみられる集石を検出した。東面からは東に位置する庫裡Ⅲと繋がる廊下がのびる。

「天明類焼後元治兵燹前之古図」（図版149）には、本堂の北西に「番神社」が記されている。調査区外のため建物など遺構は不明であるが、本堂Ⅲの南西で検出した土坑5182から、狐を模った人形が多量に出土しており、番神社に奉納されたものであった可能性がある。この時期の妙満寺境内での神仏習合の状況が窺える。

祖師堂Ⅲとその周辺 前代の祖師堂Ⅱは土蔵造りであったため、天明八年火災時に類焼しなかったとみられ、建物構造に変化はない。祖師堂Ⅲ北側に方丈Ⅲと繋がる廊下を新たに敷設している。祖師堂Ⅲ南西部では、「天明類焼後元治兵燹前之古図」に描かれる鐘樓の化粧石抜き取り穴を検出した。祖師堂Ⅲ西側で検出した井戸6320は、同絵図の「中川の井」とみられる。

方丈Ⅲ・庫裡Ⅲとその周辺 方丈Ⅲは天明大火の類焼後に再建された建物である。礎石の下が布掘地業され、建物基礎構造が強化されている。建物構造は、元治元年火災後の整地によって多くの礎石が失われているため不明である。方丈Ⅲ関連では他に、南西部で石列や排水施設とみられる石組土坑などを検出した。

庫裡Ⅲは、天明大火の類焼後に再建された礎石建物で、建物規模は東西約11.4m、南北約11.6mである。方丈Ⅲと庫裡Ⅲの間では、廊下の礎石据付穴や井戸、「天明類焼後元治兵燹前之古図」に描かれる便槽とみられる埋甕群を検出した。

塔頭とその周辺 塔頭も前代とほぼ同位置に再建されたとみられ、敷地境界施設や門の関連遺構などを検出した。敷地は4区画想定でき、「天明類焼後元治兵燹前之古図」によれば西から量長

院・大慈院・遠妙院・成就院とみられる。量長院西側の小規模な墓地が消滅する以外は、前代と塔頭の移動や変更はない。それぞれの間口は、量長院は東西15.8m以上、大慈院は東西約15.7m、遠妙院は東西約13.7m、成就院は東西1.9m以上となる。各敷地内では門の礎石据付穴や雨落ち、井戸などを検出した。

本能寺境内 建物に関わる遺構は検出できなかったが、調査区中央で井戸9003、南側では土坑9034を検出した。境内北西部の塔頭に関わる遺構とみられる。

(5) 江戸時代末から明治時代（第1面）（図版150、図22）

元治元年（1864）の大火類焼後に再建した伽藍である。

本堂Ⅳとその周辺 本堂Ⅳは、前代と同位置に再建されるが、本堂Ⅲ基壇の上に盛土を行い、全体的に拡張する。基壇の規模は、東西約26.8m、南北約24.3mである。基壇上では礎石据付穴を検出した。4面に幅約3.0mの縁がまわり、北面中央には後拝がある。前拝は後世の攪乱により検出できなかった。建物は南向き、屋根は本瓦葺きである。

本堂Ⅳ南西では、「現在絵図面」（図版150）に記載される「鶴亀松跡」とみられる不定形の大型土坑6260を検出した。土坑底部にはマツの根が遺存していた。

祖師堂Ⅳとその周辺 祖師堂Ⅳは元治元年火災後の再建時に全体の規模を拡張する。特に東側は大きく張り出す形状となる。基壇化粧石には元治元年火災前の祖師堂Ⅲや方丈Ⅲの石が再利用されている。基壇上では外陣と須弥壇に関わる礎石を検出した。前拝も規模が拡大しており、岩倉移転前に撮影された写真によれば、前拝の南北に石製の雨落ちが設置されていたようである。「現在絵図面」に示される「中川の井」は、検出位置などから井戸6241と考えられる。なお、第2面の井戸6320もこれより古い段階の「中川の井」と考えられるが、後に溝6231が付加され、排水マスに転用される。周辺では、井戸6151・6283を検出しており、昭和四十三年の岩倉移転までの間にも、変遷した可能性がある。

方丈Ⅳとその周辺 妙満寺敷地の北部が上地令によって寺域ではなくなったため庫裡を廃し方丈Ⅳのみとなる。方丈Ⅳ関連では、建物の礎石列を検出した。方丈建物の西側の礎石据付穴が特に深く掘削され、壺地業されている。建物の正面となる西面の構造を補強したと考えられる。また、方丈Ⅳ南側には放生池が新設され、防火対策兼排水施設として機能したとみられる。

塔頭とその周辺 塔頭は、前代と同位置に再建され、敷地境界施設などを検出した。敷地は5区画想定でき、「現在絵図面」によれば、西から墓地・旧京都学林・大慈院・法光院・成就院とみられる。それぞれの間口は、墓地は2.8m以上、旧京都学林は東西約15.7m、大慈院は東西約13.8m、法光院は東西約13.6m、成就院は東西2.4m以上となる。各敷地内では墓や井戸、雨落ち、建物礎石、池などを検出した。

本能寺境内 顕著な遺構はみとめられなかった。

付章 出土銅製品の材質調査

北野信彦（龍谷大学）・関 晃史

（1）はじめに

寺町旧域（妙満寺跡）の発掘調査では、天正十一年（1583）の当該地域への妙満寺移転当初から元治元年（1864）の火災後に再建された地域内建造物群に至るまでの近世期各年代の遺構と遺物が多数検出された。今回、このうちの銅製品（金1～22・25・27）の材質調査を実施したので、結果を報告する。

（2）調査方法

1）資料表面の拡大観察

各資料の状態を目視観察した後、色相や鍍金などの表面状態の細部観察は、龍谷大学・保存修復科学研究室設置のデジタル拡大顕微鏡（（株）スカラ社製DG-3型）を用いて50倍から200倍の倍率で行った。さらに詳細な拡大観察はデジタルマイクロスコープ（（株）キーエンス社製VHX-1000型）を用いて500倍から2,000倍の倍率で行った。

2）無機元素の定性分析

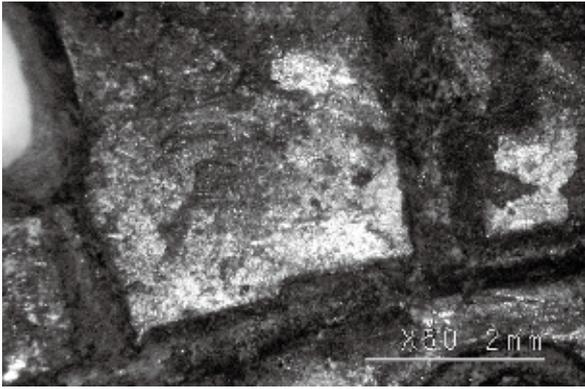
各資料の材質調査のため、龍谷大学・北野研究室設置の蛍光X線分析装置（（株）堀場製作所製MESA-500型）を用いた無機元素の定性分析を行った。分析設定条件は設定時間600秒、試料室内は真空状態とし、X線管ターゲットはRh、X線管電圧は15kV及び50kV、電流は240 μ A及び20 μ A、検出強度は200.0～250.0cpsである。なお、この据え付け型蛍光X線分析装置の試料分析室内に入らない資料については、同・北野研究室設置の可搬型機器、ハンドヘルド蛍光X線分析装置（（株）リガク製NitonXL3t-950S型）を用いて分析を行った。分析設定条件は設定時間600秒、対陰極Agターゲット、X線管電圧は50kV、電流は自動可変、スポットサイズは0.8mmであり、鉍物（Cu/Zn）モードの分析ソフトを連動させて現地での非破壊調査を実施した。

（3）調査結果

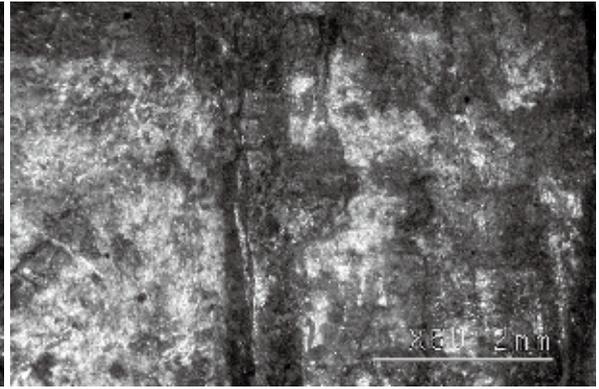
各資料の元素分析の結果、材質的な特徴から以下の5グループに大別することができた。

①銅（Cu）のみが検出される銅製品3点（金16・22・25）、②鉛やヒ素（As）が微量に検出される銅製品5点（金10・12・19・21・27）、③銅とともに亜鉛（Zn）が検出される真鍮製品7点（金1・11・14・15・17・18・20）、④銅とともに鉛（Pb）・スズ（Sn）が検出される青銅製品3点（金2・3・13）、⑤銅とともに金（Au）が検出される金銅製品6点（金4～9）の以上5分類である。

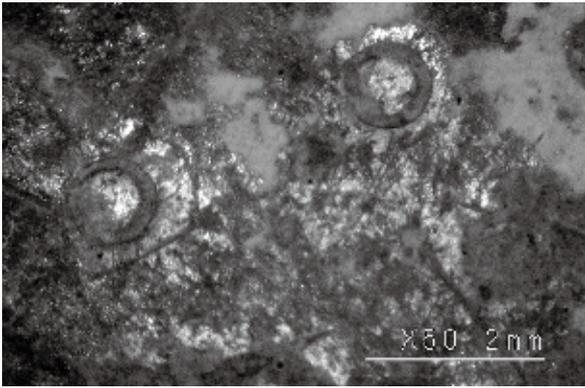
上記のうち、グループ②の金19は鉛・ヒ素のほか、銀（Ag）を微量に検出しており、銀鍍金の可能性も考えられる。また、金1はグループ③の真鍮製品としたが、鉛・スズの検出もみられ、製作材料に青銅を利用したものと考えられる。そのほか、金が検出されるグループ⑤には水銀（Hg）



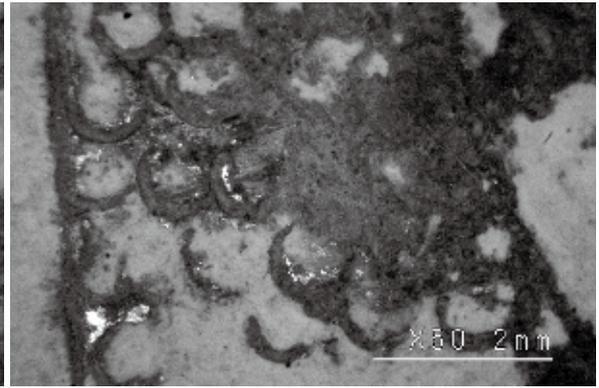
金4拡大①



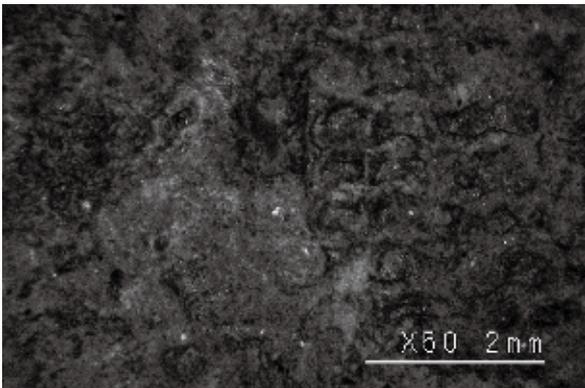
金4拡大②



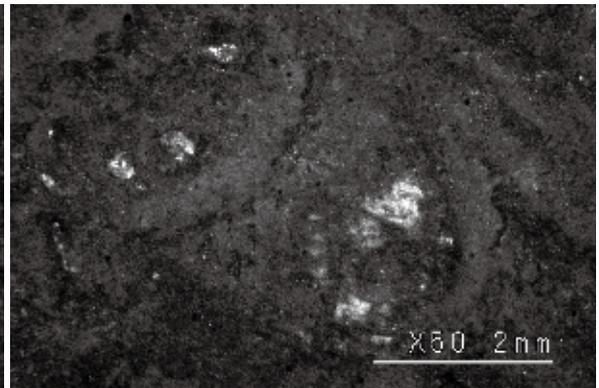
金5拡大①



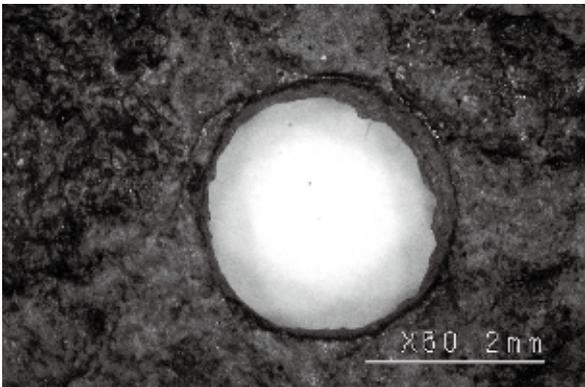
金5拡大②



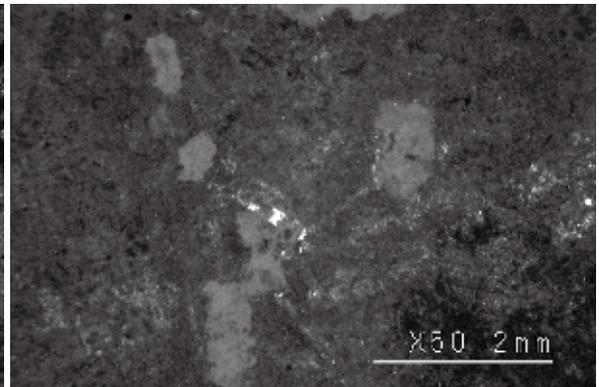
金6拡大①



金6拡大②

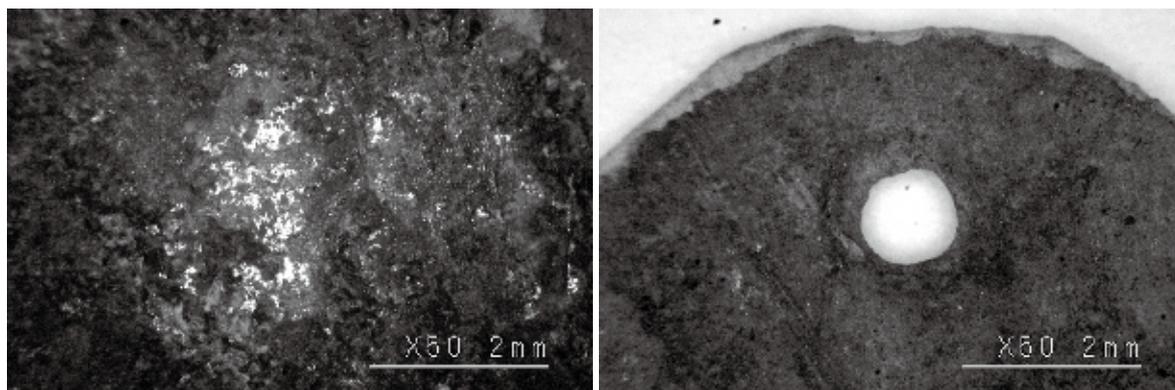


金7拡大①



金7拡大②

図24 銅製品拡大写真1



金8拡大①

金8拡大②

図25 銅製品拡大写真2

表9 可搬型蛍光X線分析結果（鉱物モードCu/Zn）

(PPM)	Au	Ag	Cu	As	Pb	Sn	Zn	Fe
金13	0	0.04	69.89	0.39	1.19	0.44	0.06	0.20
金19	0	0.21	53.86	0.48	0.94	0.02	0.04	0.04
金20	0	0	21.82	0.06	0.45	0.07	5.97	0.31
金21	0	0.01	22.80	0.05	0.24	0.01	0.10	0.18
金27	0	0.01	67.33	0.15	0.51	0.01	0.08	0.63

を検出する資料もあり、銅胎部のうゑに金アマルガムの鍍金を施したものと推測した。また、同グループ金4からは加えて銀を検出しており、金・銀合金の青金を鍍金に用いた可能性を有している。資料のうち、地金の銅にヒ素を含む資料は9点（金1～3・7・10・12・13・19・27）、鉛を含む資料は青銅に由来するものを除いて13点（金5・6・8～12・17～21・27）である。

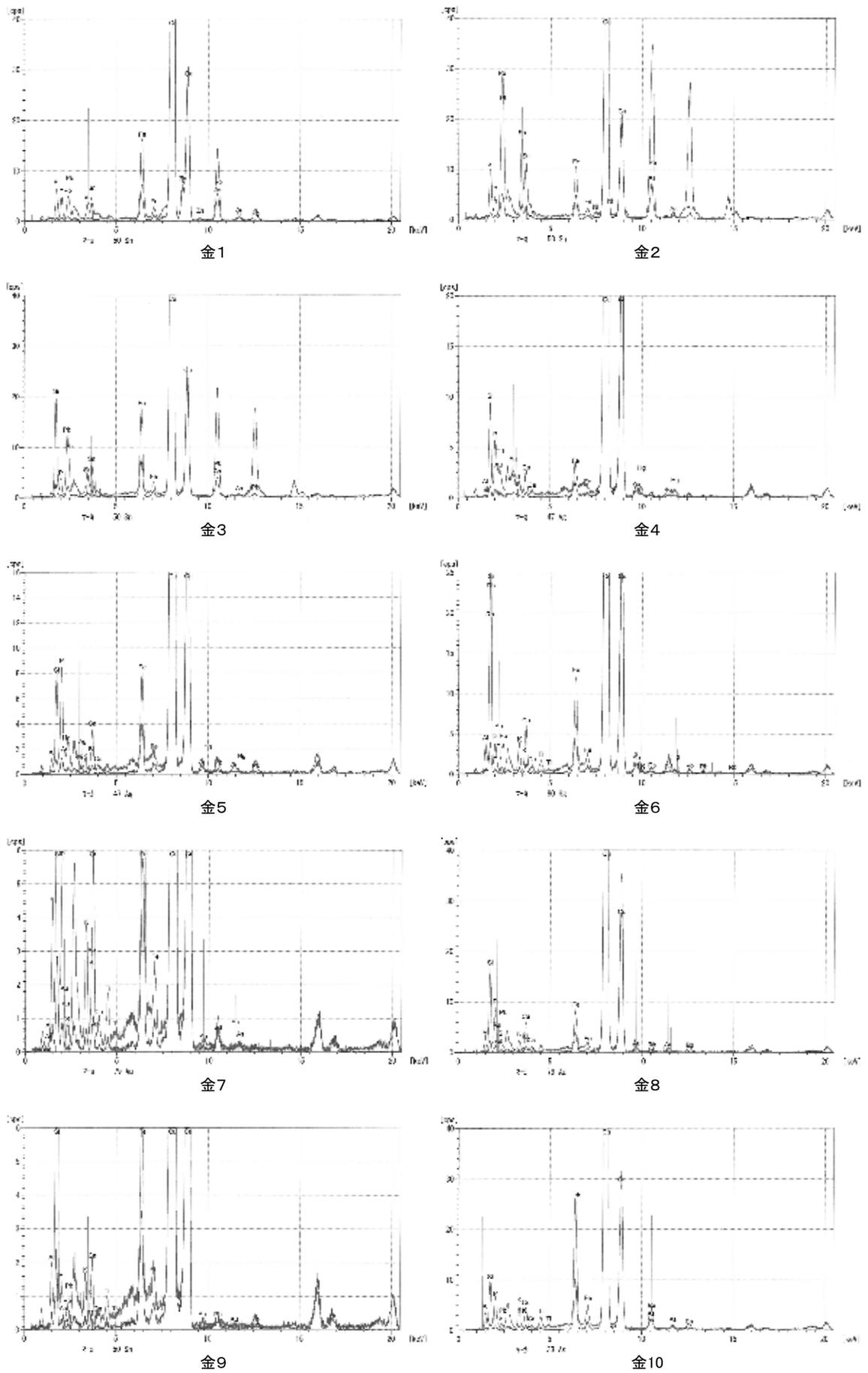


图26 据付型蛍光X線分析結果1

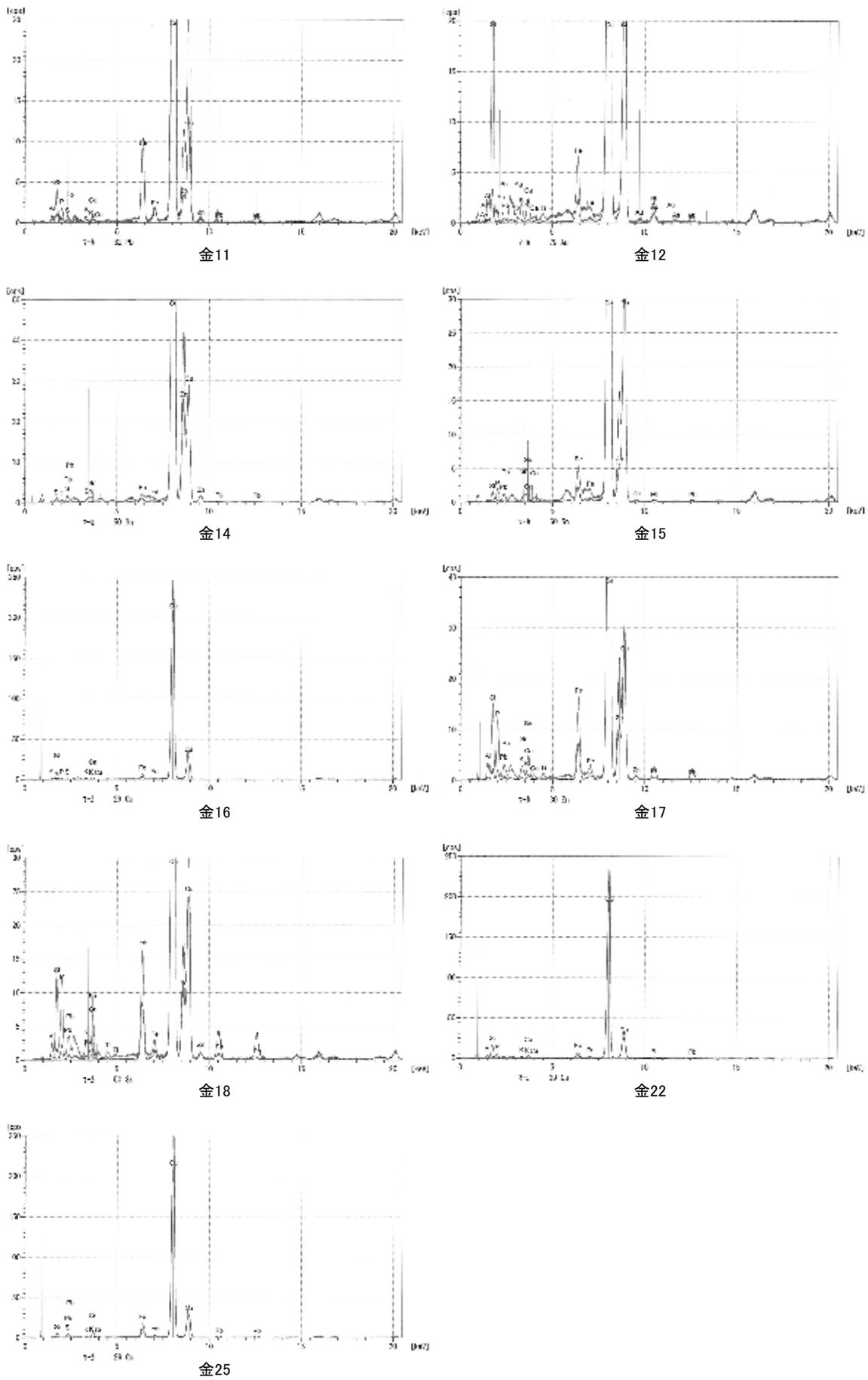


图27 据付型蛍光X線分析結果2

付表1 土器類観察表

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
1	弥生土器	甕	土坑9006	11.6	(5.6)		7.5YR8/6	
2	弥生土器	壺	流路8065	20.6	(3.1)		10YR7/3	中期
3	埴輪	円筒埴輪	流路8065		(7.2)		5YR6/6	
4	埴輪	円筒埴輪	流路8065		(8.6)		5YR6/6	
5	土師器	壺	流路8065	8.6	(9.4)		5YR7/6	
6	土師器	甕	土坑1625	25.0	(8.5)		10YR8/2	
7	須恵器	杯身	1区砂礫層断割り	9.4	(3.9)		N6/0	
8	須恵器	杯身	土坑8085	10.6	3.4		N6/0	
9	土師器	椀A	井戸5824	14.0	3.2		7.5YR8/4	Ⅱ期古
10	土師器	椀A	井戸5824	14.5	3.4		7.5YR8/3	Ⅱ期古
11	土師器	皿A	井戸5824	14.9	1.7		7.5YR7/4	Ⅱ期古
12	須恵器	壺G	井戸5824	6.9	13.8	4.3	N7/0	
13	土師器	杯A	4区第6面掘下げ	17.0	4.1		5YR7/6	Ⅱ期古
14	土師器	皿L	4区第6面掘下げ	18.8	(3.3)		7.5YR7/3	Ⅱ期新
15	土師器	皿B	4区第6面掘下げ	25.6	2.9		5YR6/4	Ⅱ期新
16	土師器	鉢	4区第6面掘下げ	12.0	(5.7)		7.5YR7/4	深型
17	須恵器	杯	4区第6面掘下げ	12.8	4.0		N7/0	
18	須恵器	杯	4区第6面掘下げ	13.1	(3.7)		N7/0	
19	須恵器	杯	4区第6面掘下げ	16.2	5.8		N8/0	
20	須恵器	杯	4区第6面掘下げ	11.7	4.5	8.4	N6/0	
21	須恵器	杯	4区第6面掘下げ	14.8	5.5	10.4	N6/0	
22	灰釉陶器	椀	4区第6面掘下げ	10.7	3.8	6.0	釉:2.5Y6/1 胎土:N7/0	
23	灰釉陶器	皿	4区第6面掘下げ	13.6	1.9	7.7	釉:2.5Y6/2 胎土:N7/0	
24	灰釉陶器	皿	4区第6面掘下げ	17.8	3.8	6.0	釉:2.5Y7/2 胎土:N7/0	
25	緑釉陶器	椀	4区第6面掘下げ	12.6	3.5	5.8	釉:7.5Y7/2 胎土:10YR8/2	
26	緑釉陶器	甕	4区第6面掘下げ		(10.2)		釉:10Y7/2 胎土:10YR8/2	
27	輸入 青磁	梅瓶蓋	4区第6面掘下げ	5.0	2.7		釉:5G7/1 胎土:N8/0	
28	緑釉陶器	小皿	土坑8060	10.0	2.8	5.0	2.5Y7/1	
29	緑釉陶器	皿	土坑4255	12.5	2.0	5.4	釉:7.5YR7/2 胎土:2.5Y8/2	
30	緑釉陶器	椀	土坑8032	21.0	6.5	8.6	釉:7.5YR7/2 胎土:2.5Y8/2	
31	緑釉陶器	壺蓋	土坑8011	12.6	3.2		釉:7.5YR7/2 胎土:N6/0	
32	須恵器	鉢	溝1510	17.4	6.0	8.6	2.5Y8/2	
33	須恵器	壺	溝1510	7.4	12.0	10.0	5Y7/1	
34	土師器	皿A	土坑6081	10.8	1.3		10YR7/3	Ⅲ期新
35	土師器	皿A	土坑8099	11.0	1.4		7.5YR8/3	Ⅲ期新
36	土師器	皿N	井戸9001	10.2	2.0		7.5YR6/4	Ⅳ期新
37	土師器	皿N	井戸9001	15.2	3.2		7.5YR8/3	Ⅳ期新
38	土師器	皿N	土坑1650	9.6	1.2		7.5YR7/4	Ⅳ期新
39	土師器	皿N	土坑1650	10.4	1.6		10YR8/3	Ⅳ期新
40	土師器	皿N	土坑5952	10.1	1.6		10YR8/2	Ⅳ期新～Ⅴ期古
41	土師器	皿N	土坑5952	14.2	2.4		10YR8/2	Ⅳ期新～Ⅴ期古
42	土師器	皿Ac	3区第6面掘下げ	9.0	1.5		7.5YR7/3	Ⅳ期新～Ⅴ期古
43	土師器	皿A	3区第6面掘下げ	9.2	1.4		7.5YR7/3	Ⅳ期新～Ⅴ期古
44	土師器	皿A	3区第6面掘下げ	9.7	1.3		7.5YR8/2	Ⅳ期新～Ⅴ期古
45	土師器	皿A	3区第6面掘下げ	9.7	1.3		7.5YR7/4	Ⅳ期新～Ⅴ期古
46	土師器	皿A	3区第6面掘下げ	10.2	1.4		10YR8/3	Ⅳ期新～Ⅴ期古
47	土師器	皿N	3区第6面掘下げ	9.4	1.8		5YR7/6	Ⅳ期新～Ⅴ期古

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
48	土師器	皿N	3区第6面掘下げ	9.7	1.9		5YR7/4	IV期新～V期古
49	土師器	皿	3区第6面掘下げ	4.6	1.5	3.5	10YR8/2	ミニチュア
50	須恵器	杯	3区第6面掘下げ	12.8	4.5	9.0	N6/0	
51	須恵器	皿	3区第6面掘下げ	14.5	(1.8)	12.2	2.5YR7/1	
52	灰釉陶器	椀	3区第6面掘下げ	9.4	3.2	5.4	7.5YR8/4	
53	灰釉陶器	輪花椀	3区第6面掘下げ	5.8	2.6	3.4	2.5YR8/2	ミニチュア
54	灰釉陶器	横瓶	3区第6面掘下げ		4.2		2.5YR7/2	ミニチュア
55	輸入 白磁	皿	3区第6面掘下げ	9.1	2.5	5.9	釉:10Y7/1 胎土:N8/0	
56	土師器	皿A	土坑7888	8.6	1.6		7.5YR8/2	IV期新～V期古
57	土師器	皿A	土坑7888	9.0	1.9		7.5YR7/4	IV期新～V期古
58	土師器	皿A	土坑7888	9.5	1.7		7.5YR7/3	IV期新～V期古 煤多量
59	土師器	皿A	土坑7888	9.7	1.8		5YR7/4	IV期新～V期古
60	土師器	皿N	土坑7888	13.8	1.4		10YR8/3	IV期新～V期古
61	土師器	皿N	土坑7888	14.7	2.8		7.5YR7/4	IV期新～V期古
62	土師器	皿N	土坑7888	14.8	3.1		10YR7/2	IV期新～V期古
63	土師器	皿N	土坑7888	15.0	2.0		7.5YR7/4	IV期新～V期古
64	土師器	皿N	土坑7888	15.1	2.5		7.5YR7/4	IV期新～V期古
65	土師器	皿	土坑7888	9.1	1.4		7.5YR7/4	ロクロナデヘラオコシ
66	土師器	皿N	土坑5488	9.9	1.7		7.5YR8/4	V期古
67	土師器	皿N	土坑5488	10.0	1.8		7.5YR8/4	V期古
68	土師器	皿N	土坑5488	15.0	2.8		7.5YR8/4	V期古
69	土師器	皿N	溝4353	10.0	2.0		7.5YR7/4	V期古
70	土師器	皿N	溝4353	15.2	2.7		7.5YR7/3	V期古
71	土師器	皿N	土坑6537	9.9	1.6		7.5YR8/3	V期古
72	土師器	皿N	土坑6537	10.0	2.0		7.5YR7/4	V期古
73	土師器	皿N	土坑6537	9.7	2.0		7.5YR7/3	V期古
74	土師器	皿N	土坑6537	14.7	2.3		7.5YR7/3	V期古
75	土師器	皿N	土坑6537	15.6	3.1		7.5YR7/3	V期古
76	土師器	皿N	土坑1645	9.7	1.8		7.5YR7/3	V期古 墨絵
77	土師器	皿Ac	土坑5519	8.9	1.2		7.5YR8/4	V期古
78	土師器	皿N	土坑5519	9.1	1.7		10YR7/3	V期古
79	土師器	皿N	土坑5519	9.7	1.7		10YR8/2	V期古
80	土師器	皿N	土坑5519	9.8	1.8		7.5YR7/4	V期古
81	土師器	皿N	土坑5519	9.9	1.7		7.5YR7/3	V期古
82	土師器	皿N	土坑5519	9.9	2.1		5YR7/6	V期古
83	土師器	皿N	土坑5519	10.1	1.9		7.5YR7/4	V期古
84	土師器	皿N	土坑5519	14.2	2.3		10YR8/2	V期古
85	土師器	皿N	土坑5519	14.7	3.3		7.5YR8/4	V期古
86	土師器	皿N	井戸8135	8.8	1.5		10YR7/3	V期古
87	土師器	皿N	柱穴2756	14.8	2.4		7.5YR7/4	V期古
88	土師器	皿N	土坑8029	9.1	2.3		7.5YR7/4	V期中
89	土師器	皿Ac	土坑4394	8.2	1.1		7.5YR8/4	V期中
90	土師器	皿Ac	土坑4394	9.1	1.0		10YR8/2	V期中
91	土師器	皿Ac	土坑4394	10.2	1.1		10YR8/3	V期中
92	土師器	皿N	土坑4394	9.8	1.7		10YR8/3	V期中
93	土師器	皿N	土坑4394	9.8	1.9		7.5YR8/4	V期中
94	土師器	皿N	土坑4394	10.0	1.8		7.5YR8/3	V期中

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
95	土師器	皿N	土坑4394	14.2	2.8		N7/0	V期中
96	土師器	皿N	土坑4394	14.4	2.7		7.5YR8/3	V期中
97	輸入白磁	皿	土坑4394	9.8	(2.4)		釉:2.5Y8/2 胎土:2.5Y8/1	II類
98	輸入白磁	椀	土坑4394		(3.0)	5.8	釉:5Y7/3 胎土:5Y8/1	II類 高台内墨書
99	輸入白磁	椀	土坑4394	15.0	6.0	5.6	釉:2.5Y8/2 胎土:2.5Y8/1	II類
100	土師器	皿N	土坑1646	9.3	1.6		7.5YR6/4	V期中
101	土師器	皿N	溝4266	8.8	1.9		7.5YR8/4	V期中
102	土師器	皿N	溝4266	10.2	2.1		10YR7/3	V期中
103	土師器	杯A	溝4266	17.3	3.9		5YR7/4	I期中～新 混入
104	白色土器	皿	1区第4面掘下げ	6.7	1.7	3.2	10YR8/2	混入
105	輸入白磁	小皿	1区第6面掘下げ	8.2	2.2	5.0	釉:N8/0 胎土:10GY8/1	
106	瓦器	羽釜	1区第6面掘下げ	4.3	(4.3)		7.5YR4/1	ミニチュア
107	須恵器	壺	4区第3面掘下げ	5.6	8.0	6.2	N7/0	播磨か 混入
108	瓦器	椀	2区第3面清掃	13.6	4.6	4.4	N3/0	楠葉産 混入
109	土師器	皿N	柱穴4368	7.9	1.4		10YR7/3	小 VI期中
110	土師器	皿N	柱穴4368	8.6	1.9		10YR7/3	小 VI期中
111	土師器	皿N	柱穴4368	9.1	1.7		10YR7/3	小 VI期中
112	土師器	皿N	柱穴4368	13.8	2.1		10YR7/3	大 VI期中
113	土師器	皿N	柱穴4368	14.3	2.6		7.5YR6/4	大 VI期中
114	瓦器	羽釜	柱穴4368	13.8	19.6		N3/0	
115	土師器	皿N	土坑7895	8.5	1.6		7.5YR7/3	小 VI期中
116	土師器	皿N	土坑7895	8.5	1.6		10YR7/2	小 VI期中
117	土師器	皿N	土坑7895	8.5	1.5		10YR8/2	小 VI期中
118	土師器	皿N	土坑7895	8.8	1.6		10YR8/1	小 VI期中
119	土師器	皿N	土坑7895	9.0	1.6		7.5YR7/3	小 VI期中
120	土師器	皿N	土坑7895	13.0	2.3		7.5YR7/3	大 VI期中
121	土師器	皿N	土坑7895	13.0	2.6		7.5YR8/4	大 VI期中
122	瓦器	羽釜	土坑7895	18.6	(11.9)		N6/0	
123	須恵器	鉢	土坑7895	27.2	10.5		N6/0	
124	緑釉陶器	椀	土坑7895	16.0	4.6	5.6	釉:7.5YR5/2 胎土:N6/0	無高台 洛西 混入 II期
125	土師器	皿Sh	井戸4420	6.9	2.0		10YR8/2	VII期古
126	土師器	皿S	井戸4420	12.1	3.1		10YR8/2	大 VII期古
127	土師器	皿N	土坑7351	8.0	1.6		7.5YR7/4	小 VII期古
128	土師器	皿N	土坑7351	8.3	1.5		7.5YR7/3	小 VII期古
129	土師器	皿Ac	土坑7900	4.7	1.1		10YR8/3	VII期古
130	土師器	皿Ac	土坑7900	4.7	0.8		10YR8/2	VII期古
131	土師器	皿Ac	土坑7900	5.0	0.9		10YR8/2	VII期古
132	土師器	皿N	土坑7900	7.9	1.4		5YR7/6	小 VII期古
133	土師器	皿N	土坑7900	8.2	1.7		10YR8/2	小 VII期古
134	土師器	皿S	土坑7900	7.7	(2.0)		7.5YR8/2	小 VII期古
135	土師器	皿N	溝1485	8.0	1.3		10YR8/4	小 VII期古
136	土師器	皿N	溝1485	11.8	2.3		7.5YR7/4	大 VII期古
137	土師器	皿N	溝1485	12.6	2.0		7.5YR7/4	大 VII期古
138	土師器	皿S	溝1485	8.6	1.5		10YR8/2	小 VII期古
139	土師器	皿S	石列9020	12.8	3.1		2.5Y8/2	大 VII期古
140	土師器	皿N	溝8014	8.0	1.3		7.5YR7/3	小 VII期新
141	土師器	皿N	溝8014	7.9	1.6		7.5YR7/4	小 VII期新

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
142	土師器	皿N	溝8014	8.2	1.6		7.5YR6/4	小 VII期新
143	土師器	皿S	溝8014	8.9	1.4		10YR8/2	小 VII期新
144	土師器	皿N	溝8014	11.2	2.5		7.5YR7/4	大 VII期新
145	土師器	皿N	溝8014	11.5	2.2		7.5YR7/3	大 VII期新
146	土師器	皿Sh	溝8014	6.8	1.9		10YR8/2	VII期新
147	土師器	皿Sh	溝8014	7.0	1.8		10YR8/2	VII期新
148	土師器	皿Sh	溝8014	7.1	1.9		7.5YR8/2	VII期新
149	土師器	皿Sh	溝8014	7.3	1.8		10YR8/2	VII期新
150	土師器	皿S	溝8014	6.8	1.9		10YR8/2	小 VII期新
151	土師器	皿S	溝8014	6.9	2.0		10YR8/2	小 VII期新
152	土師器	皿S	溝8014	7.0	1.9		10YR8/2	小 VII期新
153	土師器	皿S	溝8014	11.8	3.0		10YR8/1	大 VII期新
154	土師器	皿S	溝8014	12.2	2.9		7.5YR8/2	大 VII期新
155	土師器	皿S	溝8014	12.3	3.1		10YR8/2	大 VII期新
156	土師器	皿S	溝8014	12.6	2.8		10YR8/2	大 VII期新
157	土師質土器	火鉢	溝8014	50.4	9.7		10YR8/3	
158	瓦器	鍋	溝8014	13.5	5.7		N4/0	両口
159	瓦器	鍋	溝8014	22.1	(8.5)		2.5Y8/1	
160	瓦器	鍋	溝8014	22.8	(11.0)		10YR6/3	
161	瓦器	鍋	溝8014	22.8	(8.3)		10YR7/3~2.5Y5/1	
162	瓦器	鍋	溝8014	26.8	(9.9)		N8/0	
163	土師器	皿Sh	溝1489	6.6	1.9		2.5Y8/1	VII期新~VIII期古
164	土師器	皿S	溝1489	9.5	1.8		2.5Y8/1	VII期新~VIII期古
165	土師器	皿N	土坑7910	7.8	1.4		7.5YR7/4	小 VIII期古
166	土師器	皿N	土坑7910	8.0	1.9		10YR7/3	小 VIII期古
167	土師器	皿N	土坑7910	11.4	1.9		7.5YR6/4	大 VIII期古
168	土師器	皿N	土坑7910	11.5	1.8		7.5YR7/4	大 VIII期古
169	土師器	皿N	土坑7910	11.8	2.0		5YR6/6	大 VIII期古
170	土師器	皿S	土坑7910	7.3	1.5		2.5Y8/3	糸切
171	土師器	皿Sh	土坑7910	6.8	1.5		10YR8/2	VIII期古
172	土師器	皿Sh	土坑7910	7.0	1.9		10YR8/2	VIII期古
173	土師器	皿S	土坑7910	11.8	2.8		10YR8/2	大 VIII期古
174	土師器	皿S	土坑7910	11.9	2.8		10YR8/2	大 VIII期古
175	土師器	皿N	溝1594	8.0	1.6		7.5YR6/6	小 VIII期新
176	土師器	皿N	溝1594	8.2	1.6		7.5YR7/6	小 VIII期新
177	土師器	皿N	溝1594	10.6	1.8		7.5YR7/4	大 VIII期新
178	土師器	皿N	溝1594	10.6	2.1		7.5YR7/4	大 VIII期新
179	土師器	皿N	溝1594	7.4	1.9		7.5YR7/4	小 VIII期新
180	土師器	皿Sh	溝1594	5.9	1.7		10YR8/2	VIII期新
181	土師器	皿Sh	溝1594	7.9	2.2		10YR8/2	VIII期新
182	土師器	皿S	溝1594	7.5	2.2		10YR8/2	小 VIII期新
183	土師器	皿S	溝1594	10.8	2.8		10YR8/2	中 VIII期新
184	土師器	皿S	溝1594	11.5	3.1		10YR8/2	中 VIII期新
185	土師器	皿S	溝1594	13.6	3.3		10YR8/2	大 VIII期新
186	土師器	皿S	溝1594	13.8	3.6		10YR8/2	大 VIII期新
187	土師器	皿	溝1594	7.5	1.6		10YR8/3	糸切
188	灰釉系陶器	輪花皿	溝1594	9.3	3.3		N7/0	糸切

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
189	施釉陶器	おろし目皿	溝1594	15.9	4.0	13.6	5YR5/4	
190	瓦器	鍋	溝1594	18.0	8.0		N6/0	
191	瓦器	鍋	溝1594	26.5	(10.4)		N3/0	
192	瓦器	鍋	溝1594	26.2	(6.8)		N5/0	
193	瓦器	鍋	溝1594	27.0	(10.0)		N5/0	
194	瓦器	火鉢	溝1594	36.8	13.2		N4/0	
195	土師器	皿N	溝5478	7.8	1.8		7.5YR7/4	小 VIII期新
196	土師器	皿N	溝5478	7.8	2.1		7.5YR7/4	小 VIII期新
197	土師器	皿N	溝5478	9.2	1.9		5YR7/4	小 VIII期新
198	土師器	皿Sh	溝5478	6.2	1.7		10YR8/1	VIII期新
199	土師器	皿Sh	溝5478	6.5	1.5		10YR8/1	VIII期新
200	土師器	皿Sh	溝5478	6.9	1.7		10YR8/2	VIII期新
201	土師質土器	羽釜	溝5478	29.9	(12.7)		10YR8/3	
202	施釉陶器	鉢	溝5478	16.1	5.4		2.5Y6/1	
203	土師器	皿Sh	土坑4403	6.5	1.5		10YR8/3	VIII期新
204	土師器	皿Sh	土坑4403	6.5	1.8		10YR8/3	VIII期新
205	土師器	皿S	土坑4403	11.6	2.9		7.5YR6/6	大 VIII期新
206	土師器	皿S	土坑4403	15.6	4.1		10YR7/3	大 VIII期新
207	土師器	皿Sh	土坑5448	7.0	1.8		2.5Y8/2	VIII期新
208	土師器	皿S	土坑5448	10.8	2.6		2.5Y8/2	大 VIII期新
209	土師器	皿S	土坑5448	13.7	3.5		2.5Y8/1	大 VIII期新
210	瓦器	鍋	土坑5448	22.6	(9.2)		N4/0~N8/0	
211	瓦器	鍋	土坑5448	24.2	(10.7)		N5/0~N8/0	
212	土師器	皿N	井戸7975	11.9	2.7		2.5Y8/2	大 VIII期新~IX期古
213	土師器	皿S	井戸7975	16.3	(3.2)		7.5YR7/4	大 VIII期新~IX期古
214	土師器	皿S	土坑7208	8.4	2.0		10YR8/3~7.5YR7/6	IX期新
215	土師器	皿S	土坑7208	12.6	2.3		7.5YR7/4	大 IX期新
216	土師器	皿S	土坑7208	12.4	2.6		7.5YR8/4	大 IX期新
217	土師器	皿S	土坑3959	10.0	2.2		10YR7/3	中 X期古
218	土師器	皿S	土坑5882	12.1	2.0		10YR5/2	大 X期新
219	土師器	皿S	土坑5898	12.3	2.0		7.5YR7/4	大 X期新
220	土師器	皿Sb	土坑5878	9.3	2.2		7.5YR7/4	X期新
221	土師器	皿Sb	土坑5878	9.3	2.2		7.5YR7/4	X期新
222	土師器	皿Sb	土坑5878	9.4	2.1		7.5YR7/4	X期新
223	土師器	皿Sb	土坑5878	9.7	2.0		7.5YR7/4	X期新
224	土師器	皿Sb	土坑5878	9.8	(2.1)		7.5YR7/4	X期新
225	土師器	皿Sb	土坑5878	9.9	1.9		7.5YR8/3	X期新
226	土師器	皿S	土坑5878	10.3	2.5		7.5YR8/4	中 X期新
227	土師器	皿S	土坑5878	10.9	2.4		7.5YR8/4	中 X期新
228	土師器	皿S	土坑5878	11.0	2.1		10YR7/3	中 X期新
229	土師器	皿S	土坑5878	11.0	(2.2)		7.5YR7/4	中 X期新
230	土師器	皿S	土坑5878	11.8	2.1		7.5YR8/4	大 X期新
231	土師器	皿S	土坑5878	12.0	2.1		10YR8/4	大 X期新
232	土師器	皿S	土坑5878	12.3	1.9		7.5YR8/4	大 X期新
233	土師器	皿S	土坑5878	12.4	2.0		7.5YR8/4	大 X期新
234	土師器	皿S	土坑5878	12.4	2.2		10YR8/3	大 X期新
235	土師器	皿S	土坑5878	12.8	2.1		10YR8/4	大 X期新

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
236	土師器	皿S	土坑5878	12.8	2.3		7.5YR8/4	大 X期新
237	土師器	皿Sb	土坑4166	10.2	1.9		7.5YR8/4	XI期古
238	土師器	皿Sb	柱穴4197	10.4	1.9		10YR8/3	XI期古
239	土師器	皿S	柱穴3935	11.2	2.0		10YR8/4	大 XI期古
240	土師器	皿Sb	土坑5946	9.4	1.8		7.5YR8/4	XI期古
241	土師器	皿S	土坑5946	10.5	2.2		10YR8/4	中 XI期古
242	土師器	皿S	土坑5946	10.6	2.3		10YR8/4	中 XI期古
243	土師器	皿S	土坑5946	10.7	2.1		10YR8/3	中 XI期古
244	土師器	皿S	土坑5946	10.7	2.2		10YR8/4	中 XI期古
245	土師器	皿Sb	土坑3719	9.6	2.1		7.5YR8/6	XI期古～中
246	土師器	皿Sb	土坑3719	9.9	2.1		7.5YR8/4	XI期古～中
247	土師器	皿Sb	土坑4172	9.7	2.1		7.5YR7/4	XI期中
248	土師器	皿S	土坑4172	11.0	2.0		10YR8/4	XI期中
249	土師器	皿Nr	土坑3963	5.4	1.4		7.5YR7/4	XI期中
250	土師器	皿Sb	土坑3963	9.6	2.1		5YR8/3	XI期中
251	土師器	皿Sb	土坑3963	9.9	2.1		5YR8/4	XI期中
252	土師器	皿S	土坑3963	12.0	2.3		7.5YR8/4	XI期中
253	土師器	皿S	土坑3963	12.2	2.2		7.5YR7/4	XI期中
254	土師器	皿S	土坑3963	12.4	(2.1)		7.5YR7/4	XI期中
255	土師器	皿S	土坑3963	12.4	2.2		7.5YR7/4	XI期中
256	土師器	皿S	土坑3963	12.4	2.2		7.5YR7/4	XI期中
257	土師器	皿S	土坑3963	12.4	2.3		7.5YR7/4	XI期中
258	土師器	皿Sb	土坑2190	9.4	1.9		7.5YR7/4	XI期新
259	土師器	皿S	土坑2190	10.6	2.2		7.5YR7/4	XI期新
260	施釉陶器	皿	土坑2190	10.2	2.0	5.4	釉:5Y6/4 胎土:10YR6/3	美濃 灰釉
261	施釉陶器	皿	土坑2190	11.6	2.4	7.0	釉:10YR7/2 胎土:10YR3/1	美濃 長石釉
262	施釉陶器	椀	土坑2190	10.8	6.5	4.2	釉:5Y4/4 胎土:10YR8/2	美濃 天目型
263	施釉陶器	椀	土坑2190	11.2	6.8	4.2	釉:10YR2/1～7.5YR6/3 胎土:10YR8/2	美濃 天目型
264	施釉陶器	椀	土坑2190	11.2	6.8	4.6	釉:7.5YR2/3 胎土:2.5Y7/3	美濃 天目型
265	施釉陶器	椀	土坑2190	10.2	7.7	4.7	釉:2.5Y5/1 胎土:10YR8/2	美濃 筒形
266	施釉陶器	壺	土坑2190	12.0	(11.7)		釉:2.5Y5/1 胎土:10YR7/2	唐津 鉄釉
267	土師器	皿S	井戸3949	11.0	(2.0)		10YR8/4	XI期新
268	土師器	皿S	井戸3949	11.9	2.2		5YR7/6	XI期新
269	施釉陶器	向付	井戸3949	17.8	5.1		釉:10YR7/2 胎土:2.5Y8/3	美濃唐津
270	施釉陶器	壺	井戸3949	14.0	(10.3)		釉:7.5Y8/1 胎土:5Y8/1	御深井
271	焼締陶器	播鉢	井戸3949	36.7	(9.7)		5YR4/3	丹波
272	土師器	皿S	瓦組3964	10.9	2.1		7.5YR7/4	XI期新
273	土師器	皿S	瓦組3964	11.0	2.1		7.5YR7/4	XI期新
274	焼締陶器	播鉢	瓦組3964	35.8	14.0		7.5YR6/4	丹波
275	土師器	皿S	溝4037	10.9	2.2		10YR8/4	XI期新
276	土師器	皿S	溝4037	11.4	2.2		7.5YR8/3	XI期新
277	土師器	皿S	溝4037	11.7	2.2		7.5YR7/4	XI期新
278	施釉陶器	小椀	溝4037	8.1	3.9	4.6	釉:10YR3/2 胎土:2.5Y8/2	美濃 鉄釉
279	土師器	皿Sb	土坑7670	9.8	2.1		7.5YR7/4	XI期新
280	土師器	皿S	土坑7670	12.0	2.3		7.5YR7/4	XI期新
281	土師器	皿S	土坑7672	11.8	2.2		7.5YR7/4	XI期新 煤付着
282	土師質土器	小鉢	土坑7672	6.8	5.0	4.2	7.5YR7/4	

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
283	土師器	ⅢS	土坑7818	10.4	1.9		7.5YR8/3	XI期新
284	土師器	ⅢNr	土坑5962	5.5	1.3		10YR8/3	XI期新
285	土師器	ⅢNr	土坑5962	5.7	1.4		10YR8/3	XI期新
286	土師器	ⅢSb	土坑5962	9.5	2.1		7.5YR8/4	XI期新
287	土師器	ⅢS	土坑5962	10.9	2.1		10YR8/2	XI期新
288	土師器	ⅢS	土坑5962	11.0	2.1		7.5YR8/4	XI期新
289	土師器	ⅢS	土坑5962	12.2	2.2		10YR8/3	XI期新
290	染付	椀	土坑5962	9.2	7.4	6.2	釉:N7/0 胎土:N8/0	筒形 1630年代
291	染付	椀	土坑5962	11.1	7.2	4.8	釉:N7/0 胎土:N8/0	天目型 1630年代
292	焼締陶器	水指	土坑5962	17.4	16.3	18.0	釉:5GY8/1 胎土:10YR7/3	信楽
293	土師器	ⅢNr	土坑7400	3.9	0.7		7.5YR8/3	XI期新～XII期古 極小 輪花
294	土師器	ⅢNr	土坑7400	3.9	0.9		10YR8/3	XI期新～XII期古 極小 刻み
295	土師器	ⅢNr	土坑7400	5.1	1.2		10YR8/3	XI期新～XII期古
296	土師器	ⅢNr	土坑7400	5.6	1.2		5YR7/6	XI期新～XII期古
297	土師器	ⅢSb	土坑7400	8.0	1.6		10YR7/4	XI期新～XII期古
298	土師器	ⅢSb	土坑7400	8.0	1.9		10YR8/3	XI期新～XII期古
299	土師器	ⅢSb	土坑7400	8.3	1.7		7.5YR7/4	XI期新～XII期古
300	土師器	ⅢSb	土坑7400	8.5	1.7		7.5YR7/4	XI期新～XII期古
301	土師器	ⅢS	土坑7400	9.8	1.6		10YR8/2	XI期新～XII期古
302	土師器	ⅢS	土坑7400	9.4	1.9		5YR7/6	XI期新～XII期古
303	土師器	ⅢS	土坑7400	10.3	1.7		10YR8/3	XI期新～XII期古
304	土師器	ⅢS	土坑7400	10.3	2.0		10YR8/1	XI期新～XII期古
305	土師器	ⅢS	土坑7400	10.4	1.8		5YR7/3	XI期新～XII期古
306	土師器	ⅢS	土坑7400	10.6	2.1		10YR8/3	XI期新～XII期古
307	土師器	ⅢS	土坑7400	12.2	2.0		7.5YR7/4	XI期新～XII期古
308	土師器	ⅢS	土坑7400	12.6	2.2		7.5YR7/4	XI期新～XII期古
309	土師器	ⅢS	土坑7400	13.0	2.2		7.5YR8/4	XI期新～XII期古
310	土師質土器	でんぼ	土坑7400	8.0	3.0	5.4	10YR8/2	小
311	土師質土器	でんぼ	土坑7400	12.2	3.9	7.6	10YR8/2	大 底部墨書
312	土師質土器	花塩壺蓋	土坑7400	6.1	1.1		7.5YR8/2	深草砂川権兵衛
313	土師質土器	焼塩壺蓋	土坑7400	7.7	1.9		2.5YR5/4	XII期中～新
314	土師質土器	焼塩壺身	土坑7400	4.9	9.0	5.2	7.5YR7/3	XII期中～新
315	施釉陶器	大皿	土坑7400	27.0	8.7	10.2	釉:@2.5Y3/2㊦2.5Y5/2 胎土:2.5YR5/4	三島
316	施釉陶器	壺	土坑7400	9.5	24.0	11.8	釉:5Y4/2 胎土:5Y7/1	丹波 四耳
317	土師器	ⅢS	井戸2708	10.5	1.6		5YR7/6	XII古
318	施釉陶器	椀	井戸2708	12.5	4.5	4.4	釉:2.5Y7/3 胎土:2.5Y8/2	肥前京風 平椀 高台内印
319	土師器	ⅢNr	井戸9032	5.3	1.1		10YR7/4	XII期古
320	土師器	ⅢNr	井戸9032	5.4	1.0		2.5YR6/4	XII期古
321	土師器	ⅢS	井戸9032	10.0	(1.9)		7.5YR7/4	XII期古
322	土師器	ⅢS	井戸9032	10.1	(1.6)		7.5YR8/4	XII期古
323	染付	椀	井戸9032	10.0	5.3	4.1	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
324	焼締陶器	播鉢	井戸9032	40.4	(7.1)		7.5YR5/3	丹波
325	土師器	ⅢNr	土坑7087	5.0	1.0		10YR8/3	XII期中
326	土師器	ⅢNr	土坑7087	5.2	0.9		10YR8/3	XII期中
327	土師器	ⅢNr	土坑7087	5.2	1.3		10YR8/3	XII期中
328	土師器	ⅢNr	土坑7087	5.6	1.1		7.5YR8/3	XII期中

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
329	土師器	皿Nr	土坑7087	5.7	1.3		10YR8/3	XII期中
330	土師器	皿Nr	土坑7087	5.8	1.2		7.5YR8/4	XII期中
331	土師器	皿Sb	土坑7087	7.1	1.5		10YR8/3	XII期中
332	土師器	皿Sb	土坑7087	7.4	1.5		7.5YR8/4	XII期中
333	土師器	皿Sb	土坑7087	7.6	1.4		7.5YR8/3	XII期中
334	土師器	皿Sb	土坑7087	9.7	1.9		7.5YR8/4	XII期中
335	土師器	皿S	土坑7087	10.5	2.1		7.5YR8/4	XII期中
336	土師器	皿S	土坑7087	10.7	2.1		10YR8/3	XII期中
337	土師器	皿S	土坑7087	11.0	2.0		7.5YR8/3	XII期中
338	土師質土器	鉢	土坑7087	10.8	5.3		10YR8/2	ボウル状
339	土師質土器	焼塩壺蓋	土坑7087	7.8	1.7		5YR7/4	XII期古
340	土師質土器	焼塩壺身	土坑7087	5.6	8.6	4.4	7.5YR7/4	XII期古
341	施釉陶器	椀	土坑7087	10.4	7.5	4.3	釉:10YR4/3 胎土:10YR7/1	唐津 鉄釉
342	施釉陶器	椀	土坑7087	10.2	7.3	4.7	釉:2.5Y6/2 胎土:7.5YR8/1	九州系 灰釉
343	施釉陶器	椀	土坑7087	10.0	8.0	4.7	釉:2.5Y7/2 胎土:2.5Y8/1	九州系 灰釉
344	施釉陶器	椀	土坑7087	12.7	7.0	4.6	釉:2.5GY6/1 胎土:N6/0	九州系 灰釉
345	施釉陶器	小椀	土坑7087	8.0	4.0	3.8	釉:5Y4/3 胎土:2.5Y8/3	美濃 鉄釉
346	施釉陶器	蓋	土坑7087	11.4	2.4	5.4	釉:7.5YR3/3 胎土:10YR8/4	唐津 鉄釉
347	焼締陶器	播鉢	土坑7087	33.6	14.3	12.4	5YR5/4	備前
348	染付	椀	土坑7087	9.7	5.3	4.0	釉:N7/0 胎土:N8/0	肥前
349	染付	椀	土坑7087	10.8	5.6	4.3	釉:N7/0 胎土:N8/0	肥前
350	染付	椀	土坑7087	10.9	5.6	4.6	釉:N7/0 胎土:N8/0	肥前
351	染付	椀	土坑7087	10.1	6.5	4.2	釉:N7/0 胎土:N8/0	肥前
352	色絵	椀	土坑7087	11.4	5.2	4.4	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
353	白磁	椀	土坑7087	11.1	5.3	4.1	釉:N8/0 胎土:N8/0	肥前
354	染付	角皿	土坑7087	8.9	2.4	5.4	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
355	染付	皿	土坑7087	12.2	2.7	4.6	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
356	染付	皿	土坑7087	12.6	2.7	5.8	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
357	染付	皿	土坑7087	13.3	2.8	4.8	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
358	青磁	皿	土坑7087	12.6	2.4	7.8	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
359	輸入 青花	小椀	土坑7087	6.6	3.5	2.3	釉:2.5GY8/1 胎土:N9/0	
360	輸入 青花	椀	土坑7087	9.7	5.7	4.0	釉:N8/0 胎土:N9/0	
361	輸入 青花	皿	土坑7087	13.8	4.7	6.3	釉:N7/0 胎土:N9/0	
362	土師質土器	焼塩壺蓋	井戸6144	7.8	2.0		5YR6/6	XII期古
363	土師質土器	焼塩壺身	土坑4004	5.7	9.1	4.2	5YR7/6	XII期古
364	輸入 青花	小椀	土坑4004	7.8	4.5	3.4	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	
365	輸入 青花	椀	土坑4004	12.0	5.5	4.7	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	
366	輸入 青花	合子蓋	土坑9038	6.1	2.1		釉:明青白色 胎土:N8/0	
367	輸入 白磁	皿	土坑9018	11.5	3.4	4.5	釉:N8/0 胎土:N8/0	
368	施釉陶器	椀	土坑4110	13.0	6.3	4.4	釉:7.5YR3/1 胎土:7.5YR6/3	京焼か 鉄釉
369	施釉陶器	向付	土坑4110	15.8	5.0	5.6	釉:2.5Y7/1 胎土:10YR7/3	絵唐津
370	施釉陶器	皿	土坑7687	14.5	2.7	7.8	釉:5Y8/1 胎土:2.5Y8/2	美濃 龍字
371	青磁	椀	土坑7101	11.2	7.0	4.6	釉:7.5GY7/1 胎土:N8/0	肥前
372	染付	壺	土坑7101	10.0	17.6	8.9	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
373	焼締陶器	壺	土坑7101	10.3	28.7	14.0	10YR7/4	信楽 煎餅壺
374	施釉陶器	小椀	土坑9035	8.8	3.5	5.0	釉:2.5Y8/1 胎土:2.5Y1	志野
375	施釉陶器	向付	土坑9035	11.0	4.6		釉:透明釉のち緑色釉 胎土:10YR8/2	織部

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
376	施釉陶器	向付	土坑9035	17.8	5.7	16.0	釉:2.5Y8/2 胎土:10YR8/1	絵志野
377	施釉陶器	花入	土坑9035	12.9	27.4	14.2	釉:5Y6/3 胎土:5Y6/1	高取
378	施釉陶器	鉢	土坑9035	18.0	12.0	9.9	釉:7.5Y7/1 胎土:7.5YR8/3	絵唐津
379	施釉陶器	大皿	土坑9035	26.7	7.2	8.0	釉:5Y6/2 胎土:10YR8/1	唐津
380	土師器	皿S	井戸3950	10.3	1.6		7.5YR7/4	XII期新~XIII期古
381	土師器	皿S	井戸3950	11.8	1.7		7.5YR7/4	XII期新~XIII期古
382	施釉陶器	椀	井戸3950	9.2	5.9	3.2	釉:2.5Y8/2 胎土:2.5Y7/2	京焼 錆絵
383	土師器	皿S	土坑8119	9.5	1.9		10YR8/4	XIII期古
384	土師器	皿S	土坑8119	9.7	1.8		10YR8/3	XIII期古
385	土師器	皿S	土坑8119	9.8	1.6		5YR7/6	XIII期古
386	土師器	皿S	土坑8119	9.8	1.6		5YR7/6	XIII期古
387	土師質土器	焼塩壺身	土坑8119	4.0	5.9	3.5	5YR7/6	小型
388	白磁	小椀	土坑8119	7.2	3.4	2.9	釉:10Y7/1 胎土:N8/0	肥前
389	土師器	皿Nr	土坑6598	5.3	1.0		7.5YR8/3	XIII期中
390	土師器	皿Nr	土坑6598	5.4	1.3		7.5YR7/4	XIII期中
391	土師器	皿Nr	土坑6598	5.8	1.4		7.5YR7/2	XIII期中
392	土師器	皿Sb	土坑6598	8.0	1.6		7.5Y7/2	XIII期中
393	土師器	皿Sb	土坑6598	8.1	1.6		5YR8/3	XIII期中
394	土師質土器	花塩壺蓋	土坑6598	6.1	1.1		2.5Y8/2	深草砂川権兵衛
395	土師質土器	花塩壺身	土坑6598	8.2	2.7		7.5YR8/3	
396	土師質土器	焼塩壺蓋	土坑6598	7.7	2.0		7.5YR7/6	裏布目
397	土師質土器	焼塩壺身	土坑6598	6.6	8.5	5.3	7.5YR6/6	泉湊伊織 XII期新
398	施釉陶器	椀	土坑6598	9.0	5.6	2.7	釉:5Y7/1 胎土:10YR8/2	京焼 赤菊絵
399	染付	德利	土坑6598	5.3	(16.6)		釉:N8/0 胎土:N8/0	肥前
400	土師器	皿S	石室2704	9.7	1.5		7.5YR8/4	XIII期中
401	土師器	皿S	石室2704	10.3	1.8		7.5YR7/4	XIII期中 煤付着
402	土師器	皿S	石室2704	10.4	1.8		10YR8/3	XIII期中 煤付着
403	土師器	皿S	石室2704	12.2	2.3		10YR8/3	XIII期中 煤付着
404	土師質土器	焼塩壺蓋	石室2704	7.8	1.9		5YR6/6	XII期新
405	施釉陶器	椀	石室2704	9.5	6.0	4.2	釉:2.5Y6/4 胎土:5YR7/2	京焼 灰釉
406	土師器	皿Nr	土坑5399	4.6	0.9		7.5YR6/4	XIII期中
407	土師器	皿Nr	土坑5399	5.3	1.1		10YR7/3	XIII期中
408	土師器	皿Sb	土坑5399	7.3	1.3		10YR7/2	XIII期中
409	土師器	皿Sb	土坑5399	7.6	1.3		7.5YR7/4	XIII期中
410	土師器	皿Sb	土坑5399	7.9	(1.2)		7.5YR7/4	XIII期中
411	土師器	皿S	土坑5399	8.4	1.7		10YR8/2	XIII期中
412	土師器	皿S	土坑5399	8.8	1.7		7.5YR8/4	XIII期中
413	土師器	皿S	土坑5399	8.8	1.3		10YR8/3	XIII期中
414	土師器	皿S	土坑5399	9.4	1.7		7.5YR8/4	XIII期中
415	土師器	皿S	土坑5399	11.1	1.9		5YR7/6	XIII期中
416	土師器	皿S	土坑5399	11.7	2.2		7.5YR8/3	XIII期中
417	土師器	皿S	土坑5399	14.2	2.2		10YR8/2	XIII期中 大型
418	土師質土器	焼塩壺身	土坑5399	5.5	8.5		5YR6/6	XII期古
419	土師質土器	花塩壺身	土坑5399	6.9	3.0		2.5Y8/1	深草
420	施釉陶器	鉢	土坑5399	10.0	7.2		釉:2.5Y8/2 胎土:10YR8/2	京信 透明釉
421	施釉陶器	鉢	土坑5399	15.7	10.0	7.4	釉:7.5YR3/3 胎土:10YR7/1	京信 鉄釉
422	施釉陶器	鉢	土坑5399	19.4	8.4	9.2	釉:7.5Y7/1 胎土:2.5Y7/1	京信 灰釉

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
423	施釉陶器	鉢	土坑5399	23.6	10.4	10.8	釉:5Y6/3 胎土:10YR7/2	京信 灰釉
424	施釉陶器	植木鉢	土坑5399	13.0	12.2	8.7	釉:2.5Y8/1 胎土:2.5Y6/1	丹波 灰釉 底部に灰付着
425	施釉陶器	壺	土坑5399	7.2	11.5	5.3	釉:2.5Y5/4 胎土:5YR7/4	上野 三館館壺
426	施釉陶器	秉燭	土坑5399	4.4	5.4	4.0	釉:7.5YR3/3 胎土:7.5YR7/4	京信 鉄釉
427	施釉陶器	燈明皿	土坑5399	11.2	2.8	3.7	釉:7.5Y7/1 胎土:5Y8/1	京信 灰釉
428	施釉陶器	燈明受皿	土坑5399	11.0	1.8	4.0	釉:7.5Y7/1 胎土:5Y7/1	京信 灰釉
429	施釉陶器	火入れ	土坑5399	10.0	8.9	6.5	釉:7.5Y8/1 胎土:断面2.5Y6/1 内面10YR7/4	京焼 呉須
430	焼締陶器	匣鉢	土坑5399	13.4	7.6	14.5	5YR3/3	備前
431	染付	杯	土坑5399	7.2	3.8	2.7	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前
432	染付	小椀	土坑5399	9.9	4.8	4.4	釉:7.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
433	染付	小椀	土坑5399	8.4	6.0	5.1	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前 高台径大
434	染付	椀	土坑5399	11.2	6.3	4.8	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前 やや端反
435	染付	椀	土坑5399	11.7	6.4	4.6	釉:5Y8/1 胎土:N8/0	肥前
436	染付	椀	土坑5399	11.7	6.4	5.1	釉:7.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
437	染付	椀	土坑5399	10.6	5.7	4.8	釉:7.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前 八字高台
438	染付	椀	土坑5399	6.9	5.5	3.5	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前 筒型
439	染付	椀	土坑5399	7.3	5.3	4.1	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前 筒型
440	染付	皿	土坑5399	14.0	4.1	8.0	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
441	青磁染付	皿	土坑5399	14.2	4.0	9.2	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前 蛇の目凹型高台低
442	染付	仏飯具	土坑5399	6.6	6.5	4.2	釉:7.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
443	輸入 青花	小椀	土坑5399	6.3	2.6	2.8	釉:N8/0 胎土:N8/0	端反
444	染付	蓋	土坑5399	5.2	1.5		釉:5Y8/1 胎土:N8/0	肥前
445	染付	椀蓋	土坑5399	9.5	2.4		釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前 輪摘み
446	染付	椀蓋	土坑5399	9.9	2.7		釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前 輪摘み
447	施釉陶器	德利	土坑6775	3.4	16.2	5.4	釉:2.5Y8/2 胎土:2.5Y7/2	京焼 禁裏御用品
448	土師器	皿Nr	土坑5182	4.8	1.2		7.5YR7/3	XIII期新
449	土師器	皿Nr	土坑5182	5.0	1.2		7.5YR7/3	XIII期新
450	土師器	皿Nr	土坑5182	5.3	1.1		7.5YR6/4	XIII期新
451	土師器	皿Nr	土坑5182	5.6	2.2		10YR8/2	XIII期新 輪花
452	土師器	皿	土坑5182	5.1	1.0	3.8	5YR6/6	XIII期新 ロクロ
453	土師器	皿Sb	土坑5182	7.3	1.2		10YR7/2	XIII期新 煤付着
454	土師器	皿Sb	土坑5182	7.4	1.2		7.5YR7/4	XIII期新
455	土師器	皿Sb	土坑5182	7.4	1.3		10YR7/2	XIII期新 煤付着
456	土師器	皿Sb	土坑5182	7.8	1.2		7.5YR7/4	XIII期新 煤付着
457	土師器	皿S	土坑5182	8.8	1.7		7.5YR7/4	XIII期新 煤付着
458	土師器	皿S	土坑5182	9.0	1.5		7.5YR6/4	XIII期新 煤付着
459	土師器	皿S	土坑5182	9.3	1.4		5YR6/6	XIII期新
460	土師器	皿S	土坑5182	9.6	1.6		7.5YR7/4	XIII期新
461	土師器	皿S	土坑5182	12.2	1.8		5YR6/6	XIII期新
462	土師器	皿S	土坑5182	14.6	1.6		10YR8/3	大 XIII期新 煤付着
463	土師器	皿S	土坑5182	14.6	1.8		10YR8/2	大 XIII期新 煤付着
464	土師質土器	小鉢	土坑5182	5.0	3.8		2.5Y8/2	深草
465	土師質土器	火入れ	土坑5182	11.0	9.5	10.6	7.5YR8/3	内面煤付着 深草
466	土師質土器	焼塩壺身	土坑5182	6.5	6.5	4.8	5YR7/6	XIII期古~ 大阪型
467	土師質土器	花塩壺身	土坑5182	7.5	3.2	7.8	10YR8/2	
468	土師質土器	花塩壺身	土坑5182	10.0	2.9	7.4	7.5YR8/3	
469	施釉陶器	小杯	土坑5182	5.4	3.5	2.2	釉:10Y6/2 胎土:N7/0	端反 銅緑釉

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
470	施釉陶器	椀	土坑5182	8.3	5.2	3.4	釉:2.5YR2/2+2.5Y8/3 胎土:7.5Y8/3	端反 内白化粧 外鉄釉
471	施釉陶器	椀	土坑5182	8.2	4.6	3.4	釉:2.5Y8/2+7.5YR5/3 胎土:2.5Y6/2	京焼 白化粧 銅緑釉
472	施釉陶器	椀	土坑5182	8.3	5.6	3.5	釉:2.5Y8/3+10Y6/2 胎土:2.5Y8/3	端反 白化粧 銅緑釉
473	施釉陶器	椀	土坑5182	6.6	4.6	4.4	釉:10Y6/1 胎土:N6/0	
474	施釉陶器	椀	土坑5182	7.1	5.4	4.1	釉:2.5Y8/2+10YR2/3 胎土:2.5Y8/2	石塔窯 筒型 白化粧
475	施釉陶器	椀	土坑5182	11.0	6.1	5.0	釉:7.5Y7/2 胎土:5Y7/1	京信 灰釉
476	施釉陶器	椀	土坑5182	10.4	7.4	4.0	釉:5Y7/2 胎土:5Y8/1	京焼 端反
477	施釉陶器	椀	土坑5182	9.7	5.4	3.7	釉:5Y8/2+2.5Y4/3 胎土:2.5Y7/1	萩
478	施釉陶器	片口	土坑5182	9.2	5.9	4.1	釉:2.5Y7/1 胎土:2.5Y7/2	京焼 織部風
479	施釉陶器	鉢	土坑5182	12.9	7.0	6.8	釉:@5YR5/4④2.5Y8/1 胎土:10YR8/2	京焼 錆絵染付 白化粧
480	施釉陶器	鉢	土坑5182	10.1	5.5	6.5	2.5Y8/3	京焼
481	施釉陶器	手鉢	土坑5182	20.0	(8.1)	10.2	釉:5Y8/2 胎土:2.5Y7/1	萩 手付き
482	施釉陶器	皿	土坑5182	11.7	2.6	4.6	釉:2.5Y8/1 胎土:7.5YR6/4	白化粧
483	施釉陶器	皿	土坑5182	18.9	5.3	9.5	釉:5Y6/2 胎土:10YR7/1 (外)5YR5/3	丹波 輪花 白化粧
484	施釉陶器	水注	土坑5182	6.6	4.7	3.8	釉:2.5Y6/3 胎土:2.5Y6/2	
485	施釉陶器	水注	土坑5182	7.3	6.5	7.4	釉:2.5Y7/1 胎土:2.5Y7/3	京焼 白化粧
486	施釉陶器	椀蓋	土坑5182	10.5	2.6		釉:2.5Y8/1 胎土:2.5Y8/1	輪摘み 白化粧 鉄釉
487	施釉陶器	椀蓋	土坑5182	11.6	2.9		釉:2.5Y8/1 胎土:2.5Y8/3	型押し漆器風 白化粧
488	施釉陶器	蓋	土坑5182	8.9	2.3	4.4	釉:10YR3/4 胎土:10YR7/4	鉄釉
489	施釉陶器	鉢蓋	土坑5182	7.8	1.0		釉:2.5Y7/2 胎土:2.5Y8/3	灰釉
490	施釉陶器	香炉	土坑5182	4.6	3.8		釉:10YR2/1 胎土:5Y8/1	鉄釉 内面墨書「本」
491	施釉陶器	乗燭	土坑5182	6.0	6.0	4.1	釉:7.5Y3/3 胎土:7.5YR6/2	鉄釉
492	施釉陶器	燈明皿	土坑5182	11.2	2.8	3.6	釉:7.5Y8/1 胎土:2.5Y8/2	灰釉 菊押し型
493	施釉陶器	燈明受皿	土坑5182	12.0	2.9	4.3	釉:2.5Y8/2 胎土:2.5Y8/1	
494	施釉陶器	壺	土坑5182	9.4	14.7	8.8	釉:白のち明綠色 胎土:5YR5/2	唐津 銅緑釉
495	焼締陶器	播鉢	土坑5182	18.6	6.9		10R5/6	小 堺明石
496	焼締陶器	播鉢	土坑5182	30.2	12.4	15.4	2.5YR5/6	大 堺明石
497	白磁	小椀	土坑5182	7.4	3.2	2.2	釉:N8/0 胎土:N8/0	肥前
498	白磁	杯	土坑5182	7.1	4.8	3.8	釉:N8/0 胎土:N8/0	肥前 型押し 口紅
499	白磁	小椀	土坑5182	8.3	5.9	3.4	釉:N8/0 胎土:N8/0	肥前 外鎊 端反
500	色絵	椀	土坑5182	7.9	5.2	4.8	釉:N8/0 胎土:N8/0	肥前 広東椀 赤絵
501	色絵	椀	土坑5182	9.6	5.0	4.0	釉:N8/0 胎土:N8/0	肥前 赤絵 焼継ぎ
502	色絵	椀	土坑5182	8.5	4.4	3.9	釉:N8/0 胎土:N8/0	肥前 赤絵
503	染付	椀	土坑5182	9.9	5.5	5.3	釉:7.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前 広東椀小
504	染付	椀	土坑5182	11.6	6.1	6.3	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前 広東椀
505	染付	椀	土坑5182	10.9	7.0	6.4	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前 広東椀
506	染付	椀	土坑5182	9.7	4.9	4.3	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	美濃 端反
507	染付	椀	土坑5182	11.0	6.2	4.6	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	美濃 端反 焼継ぎ
508	染付	椀	土坑5182	9.2	4.8	3.3	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前 小
509	染付	椀	土坑5182	11.6	6.2	4.6	釉:7.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前 焼継ぎ
510	染付	椀	土坑5182	10.9	5.6	3.9	釉:7.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
511	染付	椀	土坑5182	11.0	6.1	4.2	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前 焼継ぎ
512	染付	椀	土坑5182	11.1	5.9	4.3	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	美濃
513	染付	椀	土坑5182	10.3	5.6	4.5	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	美濃
514	染付	椀	土坑5182	9.3	5.4	3.2	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前 焼継ぎ
515	染付	椀	土坑5182	8.0	6.3	3.8	釉:7.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前 筒型
516	青磁染付	椀	土坑5182	7.5	6.1	3.8	釉:10GY8/1 胎土:N8/0	肥前 筒型

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
517	染付	火入れ	土坑5182	8.0	9.0	9.0	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前 底部穿孔
518	染付	鉢	土坑5182	11.9	6.7	5.8	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	
519	染付	鉢	土坑5182	15.0	6.4	9.3	釉:7.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前 蛇の目釉剥ぎ幅広高台低
520	染付	鉢	土坑5182	9.0	6.9	5.7	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
521	染付	鉢	土坑5182	21.6	9.6	10.6	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	蛇の目釉剥ぎ幅広高台高 焼継ぎ
522	輸入 青花	鉢	土坑5182	14.3	7.0	7.3	釉:N8/0 胎土:N8/0	焼継ぎ 端反
523	染付	皿	土坑5182	9.2	2.4	4.4	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
524	染付	皿	土坑5182	10.0	1.3	7.2	釉:2.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前 蛇の目幅広高台低
525	染付	皿	土坑5182	13.1	4.0	7.4	釉:7.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前
526	染付	皿	土坑5182	18.8	4.4	9.5	釉:10G7/1 胎土:N8/0	肥前 内蛇の目釉剥ぎ
527	染付	合子蓋	土坑5182	4.9	0.7		釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前
528	染付	合子蓋	土坑5182	4.4	1.2		釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前 焼継ぎ
529	染付	鉢蓋	土坑5182	9.1	2.6		釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前
530	染付	椀蓋	土坑5182	11.0	2.9		釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前 焼継ぎ
531	色絵	鉢蓋	土坑5182	11.4	(3.2)		釉:N8/0+10R4/8 胎土:N8/0	肥前 金彩赤絵
532	色絵	小瓶	土坑5182	2.0	10.3		釉:N8/0+10R4/8 胎土:N8/0	肥前 金彩赤絵
533	色絵	仏飯具	土坑5182	5.2	4.1	3.2	釉:N8/0+10R4/8 胎土:N8/0	肥前 金彩赤絵
534	土製品	人形	土坑5182		5.7	3.0	5YR7/6	眷属 小
535	土製品	人形	土坑5182		5.6	2.9	10YR8/3	眷属 小
536	土製品	人形	土坑5182		5.3	2.9	5YR7/6	眷属 小
537	土製品	人形	土坑5182		5.9	3.1	10YR8/3	眷属 小
538	土製品	人形	土坑5182		8.2		5YR8/4	眷属 玉
539	土製品	人形	土坑5182		12.6	6.5	10YR8/4	眷属 玉
540	土製品	人形	土坑5182		12.3	6.4	5YR8/3	眷属 玉
541	土製品	人形	土坑5182		10.5		7.5YR8/4	眷属 巻物
542	土製品	人形	土坑5182		12.4	5.8	7.5YR8/4	眷属 巻物
543	土製品	人形	土坑5182		12.1	6.4	10YR8/3	眷属
544	土製品	人形	土坑5182		12.4		7.5YR8/3	眷属 巻物
545	土師器	皿Sb	土坑2107	7.6	1.4		10YR8/3	XIV期古
546	土師器	皿S	土坑2107	9.0	1.6		7.5YR7/4	XIV期古
547	土師器	皿S	土坑2107	9.2	1.6		10YR8/3	XIV期古
548	施釉陶器	小椀	土坑2107	8.0	5.1	2.8	釉:N2/0 胎土:N7/0	京焼 黒釉 軟質 高台内印
549	施釉陶器	小椀	土坑2107	8.7	4.6	3.6	釉:2.5Y8/1 胎土:2.5Y8/1	京信 白泥
550	施釉陶器	小椀	土坑2107	8.7	5.6	4.5	釉:2.5Y6/2 胎土:10YR7/3	京信 白泥
551	施釉陶器	鍋	土坑2107	7.8	3.8	3.7	釉:5YR4/4 胎土:10YR7/3	京信 ミニチュア
552	施釉陶器	蓋	土坑2107	7.3	2.0		釉:7.5YR3/1 胎土:7.5YR7/4	京信 鉄釉
553	施釉陶器	燈明皿	土坑2107	8.4	1.7	3.6	釉:5Y7/2 胎土:2.5Y7/2	京信
554	施釉陶器	燈明受皿	土坑2107	8.1	1.8	3.6	釉:5Y6/2 胎土:5Y7/1	京信
555	施釉陶器	片口	土坑2107	15.0	7.8	6.5	釉:5Y4/2 胎土:2.5Y7/2	京信
556	施釉陶器	植木鉢	土坑2107	12.6	8.6	6.4	釉:10YR3/1 胎土:2.5Y7/1	京信
557	土師質土器	風炉	土坑2107	23.4	22.4	23.4	2.5YR6/6	
558	瓦器	香炉	土坑2107	24.2	18.0	14.0	10YR3/1	
559	染付	椀	土坑2107	10.2	4.6	3.8	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前 内蛇の目釉剥ぎ
560	土師器	皿Nr	土坑3498	4.8	1.3		10YR8/3	
561	土師器	皿S	土坑3498	9.0	1.6		5Y7/4	
562	施釉陶器	椀	土坑3498	12.0	(6.1)		釉:N2/0 胎土:2.5Y6/2	京焼 鉄釉 軟質

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
563	施釉陶器	椀	土坑3498	8.7	5.2	3.4	釉:7.5Y7/1 胎土:5Y8/1	高台内墨書「妙塔山」
564	施釉陶器	鉢	土坑3498	25.0	19.3	15.0	釉:10Y7/1 胎土:2.5Y8/2	錆絵染付 白化粧
565	焼締陶器	鉢	土坑3498	14.5	9.7	9.5	5YR5/2	備前
566	焼締陶器	盤	土坑3498	18.9	3.8	10.8	7.5YR5/2	備前 底部乙印
567	瓦質土器	十能	土坑3498				N3/0	
568	土師器	皿Nr	地業2452	4.8	1.0		10YR8/3	
569	土師器	皿Nr	地業2452	4.8	1.5		10YR8/3	深型
570	染付	小椀	地業2452	8.6	4.0	2.9	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	瀬戸美濃
571	染付	椀	地業2452	10.0	(5.4)		釉:10Y8/1 胎土:N8/0	瀬戸美濃 端反
572	染付	椀	地業2452	10.0	4.8	3.2	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	瀬戸美濃
573	染付	椀	井戸9003	10.8	5.4	4.6	釉:10Y8/1 胎土:N7/0	肥前 内蛇の目釉剥ぎ
574	染付	椀	井戸9003	10.9	(4.9)		釉:7.5GY8/1 胎土:N8/0	肥前 内蛇の目釉剥ぎ
575	施釉陶器	茶入	土坑2155	3.8	(7.2)		釉:5YR2/2 胎土:10YR8/2	美濃か
576	瓦質土器	鉢	井戸8009	33.3	15.2	16.2	N4/0	
577	瓦質土器	甕	埋甕3889		(20.3)	26.6	N5/0	便槽
578	焼締陶器	甕	埋甕2039	22.4	40.5	21.4	2.5Y4/3	丹波 便槽
579	焼締陶器	甕	埋甕6708		(33.6)	19.3	釉:2.5YR3/4 胎土:2.5Y8/2	信楽 便槽
580	焼締陶器	甕	埋甕3069		(28.8)	18.8	表面:5YR4/2 胎土:2.5Y8/1	信楽 便槽
581	瓦質土器	甕	埋甕2061		(11.4)	21.0	2.5YR6/1	便槽
582	焼締陶器	甕	埋甕2235		(50.8)	18.7	釉:5YR2/3 胎土:2.5Y8/2	信楽 便槽
583	焼締陶器	甕	埋甕3072		(51.8)	20.8	釉:2.5YR3/1 胎土:5Y8/1	信楽 便槽
584	土師器	皿Sb	土坑6206	8.2	1.5		10YR8/3	XIV期古～中 煤付着
585	土師器	皿S	土坑6206	9.8	1.6		10YR8/3	XIV期古～中
586	土師器	皿S	土坑6206	9.9	1.6		10YR8/2	XIV期古～中
587	土師器	小皿	土坑6627	6.0	1.1		5YR6/6	XIV期古～中 ロクロ 圏線
588	土師器	皿Sb	土坑6627	8.4	1.2		10YR8/4	XIV期古～中
589	土師器	皿S	土坑6627	9.8	1.7		2.5Y8/3	XIV期古～中
590	土師質土器	小壺	土坑6627	3.6	3.2	3.3	7.5YR7/4	
591	土師器	皿S	土坑2041	9.5	1.7		7.5YR7/4	XIV期中
592	土師器	皿S	土坑2041	9.5	1.7		10YR8/2	XIV期中
593	土師質土器	でんぼ	土坑2041	8.6	2.5	5.6	10YR8/2	小 深草
594	土師質土器	でんぼ	土坑2041	9.3	3.0	5.5	2.5Y8/3	中 深草
595	土師質土器	でんぼ	土坑2041	9.9	3.1	5.8	10YR8/3	大 深草
596	施釉陶器	椀	土坑2041	8.3	5.5	3.3	釉:7.5Y7/1 胎土:2.5Y8/1	京信 灰釉
597	施釉陶器	椀	土坑2041	9.2	6.0	2.9	釉:5Y/8/1 胎土:2.5Y8/3	京信 灰釉
598	染付	椀	土坑2041	9.7	5.4	4.1	釉:10Y8/1 胎土:10YR8/1	肥前
599	染付	椀	土坑2041	9.6	4.9	3.9	釉:10Y7/1 胎土:5Y7/1	肥前
600	染付	椀	土坑2041	9.8	5.1	3.5	釉:10Y8/1 胎土:N8/0	肥前
601	染付	椀	土坑2041	9.4	5.2	3.9	釉:10Y7/1 胎土:2.5Y8/1	肥前
602	土師器	皿Sb	土坑5113	8.3	1.1		10YR8/2	XIV期中
603	土師器	皿S	土坑5113	8.2	1.2		2.5Y8/2	XIV期中
604	土師器	皿S	土坑5113	8.4	1.4		10YR8/2	XIV期中
605	土師器	皿S	土坑5113	10.9	1.8		2.5Y8/2	XIV期中
606	土師器	皿S	土坑5113	11.0	1.6		10YR8/2	XIV期中 圏線異常
607	土師器	皿S	土坑5113	11.0	1.8		10YR8/2	XIV期中
608	施釉陶器	小椀	土坑5113	7.4	3.0	3.3	釉:2.5Y8/2 胎土:2.5Y8/2	京信
609	施釉陶器	小椀	土坑5113	8.4	4.6	2.8	釉:2.5Y8/2 胎土:2.5Y8/2	京信 端反 白化粧

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
610	施釉陶器	小椀	土坑5113	7.6	4.1	3.2	釉:7.5Y7/1 胎土:10YR8/1	端反 灰釉
611	施釉陶器	小鉢	土坑5113	6.8	3.2	4.6	釉:7.5YR3/4 胎土:10YR7/2	手付き 鉄釉
612	施釉陶器	片口鉢	土坑5113	15.0	8.3	7.5	釉:2.5GY8/2 胎土:10YR7/1	京信 灰釉
613	施釉陶器	鉢	土坑5113	33.0	21.1	31.2	釉:7.5Y7/2 胎土:2.5Y7/1	瀬戸美濃 灰釉
614	施釉陶器	片口鍋	土坑5113	16.2	8.3	7.0	釉:7.5YR4/3 胎土:7.5YR7/3	鉄釉
615	施釉陶器	鍋	土坑5113	14.0	6.8	10.0	釉:5Y6/3 胎土:2.5Y7/1	手付き 白化粧 呉須
616	施釉陶器	小瓶	土坑5113	1.7	10.1	3.6	釉:10GY7/1 胎土:2.5Y8/1	銅緑釉
617	施釉陶器	土瓶	土坑5113	8.1	9.7	6.2	釉:2.5Y5/2 胎土:10YR7/2	鉄釉
618	施釉陶器	蓋	土坑5113	3.0	2.6		釉:N9/0 胎土:2.5Y7/2	白化粧 呉須
619	施釉陶器	鍋蓋	土坑5113	15.0	5.2		釉:5Y4/3 胎土:N7/0	斑褐釉
620	施釉陶器	鍋蓋	土坑5113	16.0	4.0		釉:2.5Y6/3 胎土:2.5Y7/2	型作り 裏施釉
621	施釉陶器	燈明皿	土坑5113	6.1	1.1	2.2	釉:2.5Y7/2 胎土:2.5Y8/1	京信 灰釉
622	施釉陶器	燈明受皿	土坑5113	6.1	1.1	2.2	釉:2.5Y7/2 胎土:2.5Y8/1	京信 灰釉
623	焼締陶器	急須蓋	土坑5113	3.9	2.1		7.5YR5/3	
624	焼締陶器	急須	土坑5113	9.0	10.5	8.4	2.5Y7/2	
625	染付	椀	土坑5113	8.3	4.2	2.8	釉:10Y8/1 胎土:N9/0	瀬戸美濃
626	染付	椀	土坑5113	9.4	4.7	3.6	釉:7.5Y8/1 胎土:N9/0	瀬戸美濃
627	染付	椀	土坑5113	10.3	4.4	3.4	釉:10Y8/1 胎土:N9/0	瀬戸美濃
628	染付	椀	土坑5113	10.8	5.6	3.9	釉:7.5Y8/1 胎土:N8/0	瀬戸美濃
629	染付	椀	土坑5113	9.7	5.7	3.6	釉:7.5Y8/1 胎土:N9/0	瀬戸美濃
630	染付	輪花皿	土坑5113	6.9	1.9	3.9	釉:10Y8/1 胎土:N9/0	肥前
631	染付	椀蓋	土坑5113	9.5	2.9		釉:10Y8/1 胎土:N9/0	瀬戸美濃
632	染付	水滴	土坑5113		2.0	6.5	釉:7.5Y8/1 胎土:N9/0	瀬戸美濃 角型
633	土師器	皿Sb	池2004	7.8	1.1		2.5Y8/1	XIV期中
634	土師器	皿Sb	池2004	8.0	(1.3)		2.5Y8/2	XIV期中
635	土師器	皿S	池2004	8.4	1.6		10YR8/2	XIV期中
636	施釉陶器	小椀	池2004	8.0	4.7	4.5	釉:10YR7/1 胎土:5Y7/1	京信 灰釉 広東風
637	施釉陶器	椀	池2004	9.4	5.1	3.4	釉:10YR7/2 胎土:7/0N	京信 灰釉
638	施釉陶器	小皿	池2004	6.0	1.1	2.9	7.5YR6/4	京信
639	施釉陶器	皿	池2004	18.0	5.6		釉:2.5Y6/2 胎土:2.5Y7/2	京信 白泥
640	施釉陶器	蓋	池2004	4.4	1.0		釉:5Y7/1 胎土:5Y7/2	京信
641	施釉陶器	土瓶蓋	池2004	6.7	4.0		釉:5Y8/1 胎土:10YR8/3	京信
642	施釉陶器	香炉	池2004	7.3	4.3	3.2	釉:2.5GY8/1 胎土:2.5Y8/1	京信
643	染付	小椀	池2004	6.8	4.5	2.5	釉:2.5GY8/1 胎土:N9/0	美濃
644	染付	椀	池2004	10.2	4.1	3.2	釉:2.5GY8/1 胎土:N9/0	高台内「嗽流亭製」
645	染付	鉢	池2004	12.3	6.1	5.5	釉:2.5GY8/1 胎土:N9/0	美濃
646	染付	仏飯具	池2004	5.7	4.8	4.0	釉:2.5GY8/1 胎土:N9/0	美濃
647	染付	土瓶	池2004	8.0	11.3	7.2	釉:2.5GY8/1 胎土:N9/0	美濃
648	白磁	小椀	池2004	6.8	2.9	2.5	釉:N9/0 胎土:N9/0	
649	白磁	椀	池2004	9.8	4.6	3.1	釉:N9/0 胎土:N9/0	
650	土師器	皿S	土坑2234	8.6	1.3		10YR8/2	XIV期中 煤付着
651	土師器	皿S	土坑2234	9.9	1.6		10YR8/2	XIV期中 煤付着
652	土師器	皿S	土坑2234	10.4	2.0		10YR8/2	XIV期中 煤付着
653	土師器	皿S	土坑2234	12.2	2.0		7.5YR8/4	XIV期中 煤付着
654	施釉陶器	椀	土坑2234	11.8	4.6	3.6	釉:5Y7/2 胎土:2.5Y8/1	京焼 平椀 「油」他墨書
655	施釉陶器	德利	土坑2234		(22.2)	9.4	釉:7.5YR3/3 胎土:2.5Y6/1	鉄釉

付表2 鎌倉時代以前の軒瓦観察表

番号	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範・同文	備考
瓦1	単弁6弁蓮華文。圏線中房、1+6+12。蓮弁は宝珠形で、蓮弁短い。中央に稜あり。外区は珠文24、周縁なし。範キズ多い。施釉痕跡なし。全体に磨滅。	瓦当裏面丸瓦貼付成形。瓦当部裏面ナデ、上面・下面ナデ。	11世紀中葉。丹波産。平安京左京北辺四坊(加納2004)図51-1、平安京左京一条三坊九町(南1983)25図6と同範。丹波では類例未確認。	101類は1点出土。
瓦2	単複交互蓮華文。単弁6・複弁6を交互に配す。蓮弁接する。凸中房で中央凹む、1+4。外区は右回12転唐草文。唐草回転の間に房あり。素文直立縁。範キズ多い。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部裏面オサエ、下縁横ケズリ。上面縦縄タキ後ナデ、下面横ケズリ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面布目、側面縦ナデ。	11世紀後葉。讃岐産。法勝寺塔(柏田2011)図81-瓦35、石清水八幡宮(市埋文1996)22図-1と同範。鴨魔寺(高松市1996)KM107Bと同文。	102類は5点出土。
瓦3	同上。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部裏面縄タキ、下面横ケズリ後横ナデ。5点中1点が瓦当部裏面タキ。	同上。	102類
瓦4	複弁8弁蓮華文。円形凸中房、1+6。蓮弁やや盛り上がる。Y字形間弁あり。外区は右回唐草文で1ヶ所途切れる。素文直立縁。	瓦当裏面丸瓦貼付成形。瓦当部上面・下面横ナデ、裏面ナデ。丸瓦凸面縦縄タキ、凹面布目、側面縦ケズリ。	11世紀後葉。讃岐産。高陽院(平尾ほか1982)図版9-23と同文。丸山窯(森下2016)TMY-102類・鴨魔寺(高松市1996)KM107Aと同文で、外区唐草文回転が逆。	103類は2点出土。
瓦5	複弁蓮華文。半球状中房、1+6。蓮弁やや盛り上がり、接する。三角形間弁が界線に接する。外区は陰刻左回10転唐草文。素文直立縁。範キズあり。	瓦当裏面丸瓦貼付成形。瓦当部裏面縄タキ、上面横ナデ、下面縦ケズリ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面布目、側面縦ナデ。	11世紀後葉。讃岐産。平安京左京五条三坊十五町(佐々木1981)32図-1、最勝寺推定地(内田ほか1995)、北条池南岸窯(香川県1983)154、庄屋原窯(安藤1967)図153-135と同範。	104類は2点出土。
瓦6	単弁8弁蓮華文。蓮弁重なり、交互にのぎ弁となる。弁端返りあり。凸中房、1+6、周囲に葺50あり。素文直立縁。範キズあり。	瓦当裏面丸瓦貼付成形。瓦当部裏面オサエナデ、上面縦縄タキ後ナデ・下面横ナデ。丸瓦凸面縦縄タキ後ナデ、凹面布目、側面縦ナデ。	11世紀後葉。讃岐産。平安京左京北辺四坊(加納2004)図版92-19、円勝寺(上原1972)ER039型式、北条池南岸窯(香川県1983)155と同範。	105類は5点出土。
瓦7	同上。	瓦当裏面丸瓦貼付成形。瓦当部裏面縄タキ、下面横ナデ。5点中2点瓦当部裏面タキ。	同上。	105類
瓦8	複弁蓮華文。中房不明。蓮弁は宝珠形、間弁なし。外区は珠文、素文直立縁。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部上面横ナデ、裏面ナデ。	時期不明。産地不明。平安宮西院(上村2003)図40-5と同文。	106類は1点出土。
瓦9	複弁蓮華文。圏線中房、1+6。蓮弁・間弁は凸縁。間弁は独立。外区は珠文12。周縁は素文縁。瓦当面楕円形。中房径4.2cm、界線径7.4cm。中央に範キズあり。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部裏面ナデ、下面横ケズリ。	12世紀前葉。山城産。平安宮民部省(平博1977)218、円勝寺(上原1972)ER018型式、栗栖野窯(市埋文1996)図版9-51と同範。	107類は3点出土。
瓦10	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1+6。間弁独立。外区は珠文16。素文直立縁。中房径4.2cm、界線径8.7cm。範キズ多い。	瓦当裏面丸瓦貼付成形。丸瓦貼付位置低い。裏面盛り上がる。瓦当部上面ナデ、下面横ナデ、裏面オサエ。丸瓦凸面縦縄タキ、凹面布目、側面縦ナデ。	12世紀前葉。山城産。平安宮内裏(平博1977)216、平安京左京六条三坊十町(小椋山ほか2000)図29-4と同範。	108類は3点出土。
瓦11	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1+8。蓮弁は凸縁。間弁なし。界線太い。周縁素文縁。瓦当面楕円形。範型磨滅、範キズ多い。	成形不明。瓦当部裏面ナデ、下面ケズリ、下面横ケズリ。	12世紀後葉。山城産。栗栖野窯(石井1980)図3-13と同文。	109類1点出土。
瓦12	単弁蓮華文。中房不明。蓮弁端にしのぎあり。蓮弁接する。外区は珠文3個1単位で配す。素文直立縁。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部裏面ナデ、上面縦ナデ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面布目、側面縦ナデ。	12世紀前葉。産地不明。	110類1点出土。
瓦13	単弁10弁蓮華文。中房不明。間弁連続。外区は粗い珠文。素文直立縁。瓦当面楕円形。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部裏面ナデ、下縁横ケズリ。下面横ケズリ。	12世紀前葉。山城産。尊勝寺阿弥陀堂(石井2015)54図-145と同文。	111類は3点出土。
瓦14	単弁8弁蓮華文。凸中房、蓮子不明。蓮弁輪郭線あり。間弁に珠文。界線2重。素文直立縁。瓦当面楕円形。範キズ多い。丸瓦凸面ヘラ記号あり。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部裏面ナデ、上面横ケズリ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面ナデ、側面縦ナデ。	12世紀前葉。山城産。平安宮内裏(平博1977)172、尊勝寺(奈文研1961)62型式、栗栖野窯(吉村1993)図23-17と同範。	112類は2点出土。
瓦15	単弁16弁蓮華文。圏線中房、1+8。蓮弁は剣頭状。間弁なし。素文直立縁。範キズ1ヶ所あり。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部下面横ナデ、裏面ナデ。範型はB型。	12世紀前葉。山城産。三条西殿(平博1977)220、尊勝寺(奈文研1961)89型式、円勝寺(上村ほか2015)図版33-瓦30と同範。	113類は8点出土。

番号	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範・同文	備考
瓦16	複弁6弁蓮華文。中房半球状。蓮弁・子葉は凸線。蓮弁は接する。子葉長1.3cm、幅0.7～0.6cmと短い。外区なし、素文直立縁。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部上面ナデ、裏面ナデ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面糸切、側面縦ナデ。	12世紀中葉。播磨産。 鳥羽殿金剛心院(前田2002)HM1E型式、林崎三本松窯(池田2017)NM18B型式と同範。	114類は1点出土。
瓦17	複弁蓮華文。中房は巴文。蓮弁接する。子葉に輪郭線あり。外区なし。素文直立縁。弁幅3.7cm、長2.8cm。	成形不明。瓦当部裏面ナデ、下面横ナデ。	12世紀前葉。河内産。 平等院(浜中ほか2003)NM032E、醍醐大智院(杉山ほか1976)01型-B、向山窯(江谷1985)と同文。	115類は1点出土。
瓦18	8弁宝相華文。中房は珠文。花卉は山形。上下2重で、単弁・素弁交互に配す。間弁なし。外区に唐草文と▲を配す。周縁素文縁。瓦当面楕円形。範キズあり。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部裏面ナデ、下面横ケズリ。瓦当部裏面溝付け丸瓦挿入成形。瓦当下面横ケズリ、裏面ナデ。	12世紀後葉。山城産。 尊勝寺(上村ほか1996)図42-71、法住寺殿(柴野1984)59図-4、南ノ庄田窯(高1998)図版3-18と類似。	116類は1点出土。
瓦19	内区右卷三巴文。外区珠文・単弁15弁蓮華文。蓮弁は剣頭状。周縁素文縁。	瓦当裏面丸瓦貼付成形。瓦当部裏面ナデ、上面ナデ。丸瓦凸面ナデ、凹面糸切。	12世紀後葉。山城産。 尊勝寺(上村ほか1996)図40-37と同範。栗栖野窯(北田ほか1986)図版11-7と同文。	117類は1点出土。
瓦20	右卷三巴文。頭離れる、尾は短く界線に接しない。珠文14。素文直立縁。界線径9.0cm。範キズあり。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部裏面ナデ、上面横ケズリ、下面横ナデ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面ナデ、側面縦ナデ。	12世紀後葉。山城産。 円宗寺(加納1989)図2-29、円勝寺(上村ほか2015)図版39-瓦93と同文。	118類は2点出土。
瓦21	右卷二巴文。頭離れる、尾は長く界線に接する。外区密な珠文。素文直立縁。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部裏面ナデ、上面オサエ、下面横ケズリ。丸瓦凹面ナデ、側面縦ナデ。	12世紀後葉。山城産。 尊勝寺観音堂(森下ほか1987)30図-38、円勝寺(上村ほか2015)図版41-瓦111と同文。	119類は1点出土。
瓦22	右卷三巴文。頭離れる、尾は短く互いに接する。範キズ多い。		12世紀後葉。山城産。 円勝寺(上村ほか2015)図版41-瓦117、栗栖野窯(市埋文1996)図版10-67と同文。	120類は1点出土。
瓦23	瓦当面は本来の文様をナデ消して無文。瓦当面楕円形。	瓦当裏面丸瓦貼付成形。瓦当部裏面ナデ、上面横ナデ、下面横ケズリ。	12世紀。山城産。 類例不明。	121類は1点出土。
瓦24	複弁8弁蓮華文。凸中房、円銘配す。蓮弁接する。楕円形珠文12。素文直立縁。中房径2.2cm。範キズあり。	瓦当裏面丸瓦貼付成形。瓦当部裏面オサエ、上面ナデ、下面横ナデ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面ナデ、側面縦ナデ。	13世紀後葉。山城産。 常盤仲ノ町遺跡(鈴木ほか1978)PL18-1、龜山殿(布川2005)図版8-100と同文。	122類は6点出土。
瓦25	複弁8弁蓮華文。凸中房、円銘配す。蓮弁接する。外区珠文12。素文直立縁。中房は122類よりも大きく、径2.6cm。範キズ多い。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当部裏面ナデ、上面縦ナデ、下面横ナデ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面ナデ、側面縦ナデ。	13世紀後葉。山城産。 常盤仲ノ町遺跡(鈴木ほか1978)PL18-3、龜山殿(布川2005)図版9-109と同文。	123類は1点出土。
瓦26	右卷三巴文。頭離れる、尾は短く他の尾に接する。巴文太い、上面平坦。範キズ少し。	同上。	13世紀後葉。山城産。 龜山殿(布川2005)図版8-102、大覚寺(上原1994)と同文。	124類は1点出土。
瓦27	右卷三巴文。頭離れる、尾も離れる。巴文太い。	同上。	13世紀後葉。山城産。 龜山殿(布川2005)図版8-101、大覚寺(上原1994)と同文。	125類は1点出土。
瓦28	右卷三巴文。頭離れる、尾も離れる。巴文細い。	同上。	13世紀後葉。山城産。 龜山殿(布川2005)図版8-101、大覚寺(上原1994)と同文。	126類は1点出土。
瓦29	外行3転唐草文。中心文は上向C字。唐草は連続しない。外区は珠文。外区上下に逆字「左」・「兵」銘を配す。素文直立縁。範キズあり。	直線類。瓦当部成形不明。瓦当部上面横ケズリ、下面縦ナデ、側面縦ケズリ。平瓦凹面布目、凸面横縄タタキ後ナデ。	9世紀。産地不明。 平安京右京二条二坊八町(北中2011)図44-瓦12、平安京左京二条三坊一町(河野2004)69図-B750と同範。	201類は1点出土。
瓦30	半裁花文を上下に配置。花文の蓮弁短い、花文間に珠文なし。外区は珠文3個1単位で配す。素文直立縁。瓦当面に薄く淡緑釉を施す。全体に磨滅。	曲線類で、額面やや長い。瓦当部成形不明。瓦当・平瓦部調整不明。	11世紀中葉。丹波産。 平安京左京北辺四坊(加納2004)図51-3、東寺(森ほか1995)123と同範。観音芝廬寺(亀岡市1988)と同文。	202類は1点出土。

番号	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範・同文	備考
瓦31	左偏行4.5転唐草文。唐草各単位は離れる。唐草太い。唐草各単位間に▲を上下に配す。素文直立縁。范型左端部を縮小し、唐草の一部が残存。	直線顎Aは1点。曲線顎Aの下面端部中央を削り、額面(2~4cm)とするもの8点。瓦当部成形不明。瓦当部上面横ケズリ、下面横ケズリ、側面縦ケズリ。平瓦凹面布目、凸面交差方向縄タタキ、側面縦ケズリ。	11世紀後葉。讃岐産。綾川寺(安藤1967)図153-156と同範。丸山窯(森下2016)TMY-203a類と同文。	203A類は9点出土。
瓦32	B類はA類より回転数多く、唐草・間文様異なる。左偏行6.5転唐草文。唐草各単位は離れる。唐草細い。唐草各単位間に△・▲を上下に配す。素文直立縁。	曲線顎、短い額面あり。瓦当部成形不明。瓦当部上面横ケズリ、下面横ケズリ、側面縦ケズリ。平瓦凹面布目、凸面交差縄タタキ、側面縦ケズリ。	11世紀後葉。讃岐産。鳥羽南殿(細谷1968)H6類、鳥羽金剛心院(前田2002)SH2型式、平安京左京六条四坊六町(堀内2008)8図-3と同範。讃岐では同範例未確認。	203B類は4点出土。
瓦33	同上。	直線顎。瓦当部下面ケズリ。他の調整などは同上。	同上。	203B類左側拓本はこれを使用
瓦34	同上。	直線顎。瓦当部下面交差縄タタキ、横ケズリなし。他の調整などは同上。	同上。	203B類右側拓本。
瓦35	外行唐草文。中心文は半裁花文。唐草は左2転、右2.5転。唐草は連続する。半裁花文と唐草端部は離れる。素文直立縁。左右端部共に范型を縮小。范キズ少しあり。	直線顎又は曲線顎Aの下面端部を削り、額面(3~4cm)とする。瓦当部成形不明。瓦当部上面横ケズリ、下面横ケズリ、側面縦ケズリ。平瓦凹面布目、凸面交差縄タタキ、側面縦ケズリ。	11世紀後葉。讃岐産。広隆寺(平博1977)531、平安京左京五条三坊十五町(佐々木1981)33図-1と同範。西村1号窯(松本1986)と同文。	204類は13点出土。
瓦36	外行唐草文。唐草は連続する。外区密な珠文。素文直立縁。	蹄顎。顎貼付成形。瓦当部上面布目、裏面横縄タタキ。平瓦凹面布目、凸面縦縄タタキ、側面縦ケズリ。	11世紀後葉。丹波産。法成寺(福山ほか1968)第3図、真言院(梶川1976)図24-19、篠窯三軒家南窯(亀岡市1988)第97図と同文。	205類は1点出土。
瓦37	外行唐草文。中心文は背向C字。唐草は連続しない。外区は珠文。周縁不明。	顎形態不明。成形不明。調整不明。	12世紀前葉。丹波産。尊勝寺阿弥陀堂(上村1981)図版6-17、円勝寺(上村ほか2015)図版51-瓦243、篠窯(安井1960)67図-1と同文。	206類は1点出土。
瓦38	外行唐草文。中心文なし。唐草は左7転、右5転。唐草は連続しない。外区は密な珠文。素文直立縁。范キズ多い。	薄顎。折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面斜縄タタキ、裏面縦縄タタキ曲げ皺あり、側面ケズリ。平瓦凹面布目、凸面縦縄タタキ、側面縦ケズリ。瓦当裏面・平瓦凸面タタキは連続。	12世紀前葉。丹波産。丹波では類例未確認。	207類は1点出土。
瓦39	外行唐草文。唐草回転数不明。唐草は連続しない。外区は珠文3個1単位。素文直立縁。	段顎。折曲成形。瓦当部上面布目、下面縦縄タタキ、裏面縄タタキ後ナデ、側面ケズリ。平瓦凹面布目、凸面縦縄タタキ。	12世紀前葉。丹波産。東寺(森ほか1995)132と同文。	208類は1点出土。
瓦40	外行唐草文。左3転・右2転。唐草は連続する。中心文なし、素文直立縁。	曲線顎で、額面短い。半折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ケズリ、裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面縦ナデ、側面縦ケズリ。	12世紀前葉。山城産。六角堂(平博1977)152、尊勝寺(奈文研1961)171A型式、栗栖野窯(北田ほか1986)図版13-7・8、南ノ庄田窯(市埋文1996)図版14-143と同範。	209類は4点出土。
瓦41	外行6転唐草文。中心文は下向き唐草。唐草は連続する。外区・周縁なし。瓦当面に布目残存。	薄顎。折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面ナデ、裏面ナデで曲げ皺あり。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ケズリ。	12世紀後葉。山城産。円勝寺(上村ほか2015)図版45-瓦167と同範。	210類は1点出土。
瓦42	外行唐草文。中心文不明。唐草は連続する。界線あり。外区・周縁なし。	曲線顎で、額面短い。半折曲成形。瓦当部上面横ナデ、下面横ナデ、裏面ナデ。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ケズリ。	12世紀。山城産。類例なし。	211類は1点出土。
瓦43	内行2転唐草文。唐草は連続する。両側に蕾あり。素文縁。	曲線顎で、額面短い。半折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ナデ、裏面ナデ。平瓦凹面布目、凸面オサエ、側面縦ケズリ。	12世紀前葉。山城産。円勝寺(上原1972)ER133型式、平安京左京北辺四坊(加納2004)図版96-15、栗栖野窯(浪貝ほか1977)図30-1と同範。	212類は2点出土。

番号	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範・同文	備考
瓦44	内行4転唐草文。唐草は連続する。唐草巻き強く返りがあり、界線に接する。外区は密な珠文。素文縁。	曲線顎Bで、額面短い。半折曲成形。瓦当部上面布目、下面横ケズリ、裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面オサエ、側面縦ケズリ。	12世紀前葉。山城産。三条西殿(平博1977)468、円勝寺(上原1972)ER142型式と同範。	213類は4点出土。
瓦45	同上。	同上。	同上。	213類-2
瓦46	内行唐草文。中央に直線の主茎、上下に枝茎あり。左8転、右6転。唐草は連続する。素文縁。平瓦凸面ヘラ記号あり。	曲線顎で、額面短い。半折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ケズリ、裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ケズリ。	12世紀後葉。山城産。平安宮内裏(平博1977)430、平安京左京三条二坊十町(加納2008)図版70-瓦87と同範。	214類は3点出土。
瓦47	右偏行4転唐草文。唐草は連続する。唐草は大きく反転。素文縁。	薄顎。半折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ケズリ、裏面ナデ。平瓦凹面布目、凸面オサエ、側面縦ケズリ。	12世紀前葉。山城産。尊勝寺(奈文研1961)195型式、円勝寺(上村ほか2015)図版46-瓦179、栗栖野窯(吉村1993)図26-87と同範。	215類は1点出土。
瓦48	右偏行4転唐草文。唐草は連続する。右上部に葉形を配す。外区なし。素文縁。	曲線顎で、額面短い。半折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ケズリ、裏面オサエ後横ナデ。平瓦凹面布目、凸面縦ナデ、側面縦ケズリ。	12世紀前葉。山城産。内裏(平博1977)464、尊勝寺(奈文研1961)196型式、栗栖野窯(吉村1993)図26-85と同範。	216類は4点出土。
瓦49	右偏行6転唐草文。唐草は連続。支葉は結合して紡錘形となる。素文直立縁。瓦当面に布目。	曲線顎で、額面やや長い。半折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ナデ、裏面縦ナデ。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面ナデ。	12世紀前葉。山城産。平安宮豊楽院(平博1977)529、尊勝寺(奈文研1961)202型式、円勝寺(上村ほか2015)図版46-瓦182と同範。	217類2点出土。
瓦50	右偏行唐草文か内行唐草文。唐草は連続する。外区なし。素文直立縁。	曲線顎で、額面短い。半折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ケズリ、裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面ナデ。	12世紀。山城産。類例なし。	218類1点出土。
瓦51	右偏行3転唐草文。唐草は連続。素文直立縁。範キズ多い。	薄顎。折曲成形。瓦当部上面ナデ、下面・裏面横ナデ。	12世紀後葉。山城産。法勝寺金堂(上村1987)図版17-45、白河(市埋文1996)図版39-597と同文。	219類は1点出土。
瓦52	外行2転唐草文。中心文は縦線・下向C字並列。唐草は連続しない、界線に接する。素文直立縁。	曲線顎で、額面短い。半折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ナデ、裏面縦ナデ。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ナデ。	12世紀前葉。播磨産。尊勝寺(奈文研1961)242型式、円勝寺(上村ほか2015)図版48-瓦210、林崎三本松窯(池田2017)NH02型式、神出窯(春成2014)図版16-363と同文。	220類は1点出土。
瓦53	外行唐草文。中心文は花文。左3転・右2転。唐草は連続する。素文直立縁。範型右側を縮小。	バチ形顎。瓦当裏面上部に平瓦を接合、側面に粘土を付加する包込成形。瓦当部上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ナデ。	12世紀前葉。播磨産。平安京左京三条二坊十町(加納2008)図版72-瓦133・114と同範。吉田南遺跡(春成2015)図版6-105と同文。	221類は1点出土。
瓦54	外行4転唐草文。文様は陰刻。唐草は連続する。界線あり。素文直立縁。	バチ形顎。瓦当裏面上部に平瓦を接合、側面に粘土を付加する包込成形。瓦当部上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凹面・凸面ナデ、側面縦ナデ。	12世紀前葉。播磨産。尊勝寺(奈文研1961)153型式、円勝寺(上村ほか2015)図版50-瓦234、林崎三本松窯(池田2017)NH19型式と同範。	222類は1点出土。
瓦55	外行宝相華文。中心文はハート形。宝相華・唐草は連続しない。素文直立縁。	バチ形顎。瓦当裏面上部に平瓦を接合。瓦当部上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凹面ナデ、凸面横ナデ。	12世紀前葉。播磨産。尊勝寺(奈文研1961)269型式、林崎三本松窯(池田2017)NH32C型式と同文。	223類は1点出土。
瓦56	内行3転唐草文。唐草は連続する。唐草巻き強く返りあり。素文直立縁。	曲線顎で、額面短い。成形不明。瓦当部上面布目、下面横ナデ、裏面ナデ。平瓦凹面布目、凸面縦縄タキ後ナデ、側面縦ケズリ。	時期不明。産地不明。尊勝寺(上村ほか1996)図38-5、平安京左京七条三坊五町(植山1985)39図-1と同文。	224類は1点出土。
瓦57	幾何学文。中心文は珠文。両側に横方向S字形・卵形を4単位配し、両端に珠文。文様は不連続。素文直立縁。範キズ多い。平瓦凸面ヘラ記号あり。	段顎。半折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ナデ、裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面縦ナデ、側面縦ケズリ。	12世紀後葉。山城産。平安京左京八条三坊十四町(網ほか1996)図34の左端の上から5番目、栗栖野窯(北田ほか1986)図版13-9と同文。	225類1点出土。
瓦58	幾何学文。平坦な瓦当面に、内外区界線と内区の格子文様をヘラで描く。	曲線顎で、額面短い。成形不明。瓦当部上面横ナデ。瓦当部上面布目、下面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面ナデ。	12世紀。山城産。同文例未確認。	226類は1点出土。

番号	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範・同文	備考
瓦59	半裁花文。3単位で、中心は上向き、両側は下向き。花文は単弁蓮華文。素文縁。筈キズ多い。	曲線顎で、額面短い。半折曲成形。瓦当部上面横ナデ、下面横ケズリ、裏面縦オサエ後横ナデ。平瓦凹面布目、凸面ナデ。	12世紀後葉。山城産。平安京六条院(原山ほか1981)図版46 No.61-90と同文。	227類は1点出土。
瓦60	中心文は花文、両側に半裁花文・蓮弁状の剣頭文を配す。両端は文様を切り取る。素文直立縁。平瓦凸面ヘラ記号あり。	段顎。半折曲成形。瓦当部上面ナデ、下面横ナデ、裏面ナデ。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ケズリ。	12世紀後葉。山城産。法住寺殿(上村2013)図44-85、栗栖野窯(市埋文1996)図版13-131、南ノ庄田窯(市埋文1996)図版14-145と同文。	228類は2点出土。
瓦61	同上。	同上。	同上。	228類の右側拓本はこれを使用。
瓦62	連巴文。中心文は双葉文で、両側に巴文2単位配す。巴文は右巻三巴文と、左巻三巴文が混在。外区なし。素文直立縁。	曲線顎で、額面短い。半折曲成形。瓦当部上面ナデ、下面横ケズリ、裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ケズリ。	12世紀後葉。山城産。尊勝寺(奈文研1961)300型式、尊勝寺(上村1996)図41-58、幡枝南東窯(市埋文1996)図版13-134と同範。	229類は2点出土。
瓦63	陰刻剣頭文。配置は垂直。単位不明。鑄先端角張る。筈キズあり。	薄顎。折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ナデ、裏面ナデで曲げ皺あり。平瓦凸面ナデ。	12世紀後葉。山城産。	230A類は1点出土。
瓦64	陰刻剣頭文。配置は垂直。単位不明。鑄は細く先端尖る。瓦当面布目。	段顎。折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、裏面曲げ皺あり。平瓦凹面布目、凸面オサエ・ナデ、側面縦ケズリ。	同上。	230B類は1点出土。
瓦65	陰刻剣頭文。配置は垂直。単位不明。鑄先端角張る。筈キズあり。	曲線顎で、額面短い。成形不明。瓦当部下面横ナデ、裏面オサエ。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ケズリ。	同上。	230C類は1点出土。
瓦66	陰刻剣頭文。配置は垂直。6単位、両側半裁。鑄は細く先端尖る。	段顎。折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ナデ、裏面横ナデ、凹型台圧痕あり。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ケズリ。	13世紀。山城産。龜山殿(布川2005)図版8-103と同文。	231A類は1点出土。
瓦67	陰刻剣頭文。配置は垂直。単位不明。鑄幅広く短い。平瓦凸面ヘラ記号あり。	段顎。成形不明。瓦当部上面横ケズリ、下面横ナデ、裏面横ナデ、凹型台圧痕あり。平瓦凹面布目、凸面オサエ後ナデ、側面縦ケズリ、狭端面横ナデ。全長16.5cm。	13世紀。山城産。大覚寺(上原1994)DKH14J型式と同文。	231B類は1点出土。
瓦68	陰刻剣頭文。配置は垂直。単位不明。鑄幅広く短く、先端角張る。筈キズ多い。	段顎。折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ナデ、裏面横ナデ、凹型台圧痕なし。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ナデ。	13世紀。山城産。大覚寺(上原1994)DKH14H型式と同文。	231C類は1点出土。
瓦69	陰刻剣頭文。配置は放射状。単位不明。鑄幅広く、先端角張る。	段顎。折曲成形。瓦当部上面横ケズリ、下面横ナデ、裏面オサエ、凹型台圧痕あり。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ケズリ。	13世紀。山城産。	231D類は1点出土。
瓦70	剣巴文。中心は巴文、両側に陰刻剣頭文を配す。巴文は右巻三巴文、頭尾離れる。配置は垂直、鑄先端角張る。単位不明。	段顎。成形不明。瓦当部上面横ケズリ、下面横ナデ、裏面横ナデ、凹型台圧痕。平瓦凹面布目、凸面ナデ。	13世紀。山城産。常盤仲ノ町遺跡(鈴木ほか1978)PL.21-29と同文。	232類は1点出土。
瓦71	丸瓦。凸面に厚い濃緑色釉を施す。全体に磨滅。	凸面不明、凹面布目、側面縦ケズリ。	11世紀中葉。丹波産。	緑釉丸瓦301類は1点出土。
瓦72	熨斗瓦。割熨斗瓦か切熨斗瓦か不明。幅不明。端面・側面と凸面の側縁から3cmまでに、厚い濃緑色釉を施す。全体に磨滅。	凹面布目、凸面縦縄タタキ、側面縦ケズリ、端面横ケズリ。	11世紀中葉。丹波産。	緑釉熨斗瓦302類は2点出土。
瓦73	同上。	同上。	同上。	302類-2

付表2 鎌倉時代以前の瓦観察表 文献リスト

あ

- 網ほか1996: 網 伸也・東 洋一・南 孝雄・百瀬正恒・清藤玲子・桜井みどり・真喜志悦子「平安京左京八条三坊2」『平成6年度
京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年
- 安藤1967: 安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会年報 特別号8』香川県文化財保護協会・香川県教育委員会、1967年
- 池田2017: 池田征弘「瓦」『明石市林崎三本松窯跡群発掘調査報告書』明石市文化財調査報告書 第6冊、明石市文化・スポーツ
部文化振興課、2017年
- 石井2015: 石井明日香「瓦類」『白河街区・尊勝寺跡・岡崎遺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』イビソク京
都市内遺跡調査報告 第12輯、株式会社イビソク、2015年
- 石井1980: 石井 望「史跡栗栖野瓦窯跡」『平安京発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』京都市
文化観光局、1980年
- 上原1972: 上原真人「円勝寺跡の発掘調査、瓦類」『佛教藝術 84号』毎日新聞社、1972年
- 上原1994: 上原真人「瓦類」『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告 大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査』大覚寺、1994年
- 上村1981: 上村和直「六勝寺跡A・B調査区」『六勝寺跡発掘調査概要 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター、1981年
- 上村1987: 上村和直「瓦」『法勝寺跡発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局、1987年
- 上村ほか1996: 上村和直・堀内明博・吉村正親「尊勝寺跡・最勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』京
都市文化市民局、1996年
- 上村2003: 上村和直「平安宮西院跡・聚楽遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成14年度』京都市文化市民局、2003年
- 上村ほか2015: 上村和直・李 銀眞「瓦類」『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報
告 2014-13、同研究所、2015年
- 植山1985: 植山 茂「瓦類」『平安京左京七条三坊五町』平安京跡研究調査報告 第15輯、古代学協会、1985年
- 内田ほか1995: 内田好昭・丸川義広・平方幸雄「最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都
市埋蔵文化財研究所、1995年
- 江谷1985: 江谷 寛「河内・向山窯の瓦」『同志社大学考古学シリーズII 考古学と移住・移動』同大学、1985年
- か
- 香川県1983: 香川県「歴史時代・古瓦」『香川県史 13考古 資料編』香川県、1983年
- 梶川1976: 梶川敏夫「平安宮真言院跡」『京都市埋蔵文化財年次報告-1975』京都市文化観光局文化財保護課、1976年
- 柏田2011: 柏田有香「法勝寺・岡崎遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局、2011年
- 加納1989: 加納敬二「円宗寺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1989年
- 加納2004: 加納敬二「瓦類」『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊、同研究所、2004年
- 加納2008: 加納敬二「瓦類」『平安京左京三条二坊十町(堀河院)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17、同研究
所、2008年
- 上村2013: 上村憲章『妙法院境内・法住寺殿跡』古代文化調査会、2013年
- 亀岡市1988: 亀岡市教育委員会編「篠窯跡」『亀岡市史』亀岡市、1988年
- 河野2004: 河野凡洋『平安京左京二条三坊一町』京都文化博物館調査研究報告 第16集、同博物館、2004年
- 北田ほか1986: 北田栄造・長谷川行孝『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局、1986年
- 北中2011: 北中泰裕「瓦類」『平安京右京二条二坊八町跡—平安時代庭園跡の調査—』株式会社 日開調査設計コンサルタント
文化財調査報告書 第4集、同コンサルタント、2011年
- 高1998: 高 正 龍『南ノ庄田瓦窯跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第18冊、同研究所、1998年
- 小檜山ほか2000: 小檜山一良・長戸満男「平安京左京六条三坊十町」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京
都市埋蔵文化財研究所、2000年

さ

- 佐々木1981: 佐々木英夫『平安京左京五条三坊十五町』平安京跡研究調査報告 第5輯、古代學協會、1983年
- 市埋文1996: 京都市埋蔵文化財研究所編『木村捷三郎収集瓦図録』同研究所、1996年
- 柴野1984: 柴野康之「出土瓦・磚の分類と考察」『法住寺殿跡』平安京跡発掘調査報告書第13号、古代學協會、1984年
- 杉山ほか1976: 杉山信三・長宗繁一「醍醐寺境内地に於ける大智院埋蔵文化財発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報集 1976』醍醐寺・鳥羽離宮跡調査研究所、1976年
- 鈴木ほか1978: 鈴木廣司・伊藤 潔・平尾政幸『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-III、同研究所、1978年

た

- 高松市1996: 高松市歴史資料館編『讃岐の古瓦展』同資料館、1996年

な

- 奈文研1961: 奈良国立文化財研究所編「尊勝寺発掘調査報告—京都会館建設地の調査—」『平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第十冊、同研究所、1961年
- 浪貝ほか1977: 浪貝 毅・梶川敏夫「史跡栗栖野瓦窯跡表面採集瓦」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告 1976-I』京都市文化観光局文化財保護課、1977年
- 布川2005: 布川豊治「瓦類」『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2004-11、同研究所、2005年

は

- 浜中ほか2003: 浜中邦弘・西田倫子「軒瓦」『史跡及び名勝 平等院庭園保存整備報告書』平等院、2003年
- 原山ほか1981: 原山充志・小森俊寛『京都市高速鉄道烏丸線内 遺跡調査年報II』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1981年
- 春成2014: 春成秀爾「明石の古瓦集成2」『明石の古代II』発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市、2014年、
- 春成2015: 春成秀爾「明石の古瓦集成3」『明石の中世』発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市、2015年、
- 平博1977: 平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣、1977年
- 平尾ほか1982: 平尾政幸・辻 純一「平安京左京二条二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局、1982年
- 福山ほか1968: 福山敏男・大塚ひろみ「法成寺の古瓦」『佛教藝術 68号』毎日新聞社、1986年、〔後に『寺院建築の研究下』福山敏男著作集三、中央公論美術出版、1983年所収〕
- 細谷1968: 細谷義治「鳥羽離宮跡出土瓦の整理」『埋蔵文化財発掘調査報告 1968』京都府教育委員会、1968年
- 堀内2008: 堀内明博「平安京左京六条四坊六町跡」『平安京左京内5遺跡 平安京跡研究調査報告第22輯』古代學協會、2008年

ま

- 前田2002: 前田義明「瓦」『鳥羽離宮跡I—金剛心院跡の調査—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊、同研究所、2002年
- 松本1986: 松本敏三『讃岐陶村古窯址群の瓦窯址について 帝塚山大学第24回歴史考古学研究会発表資料』同大学、1986年
- 南1983: 南 博史「出土瓦」『平安京土御門烏丸内裏—左京一条三坊九町—』平安京跡研究調査報告第10輯、古代學協會、1983年
- 森ほか1995: 森 郁夫・鈴木久男・上村和直・前田義明「瓦」『新東寶記 東寺の歴史と美術』東寺、1995年
- 森下2016: 森下英治『水道局第3投棄場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 丸山窯跡』香川県埋蔵文化財センター、2016年
- 森下ほか1987: 森下 衛・竹原一彦・水谷寿克「尊勝寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第23冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター、1987年

や

- 安井1960: 安井良三「篠町A號瓦窯址」『亀岡市史 上巻』亀岡市、1960年
- 吉村1993: 吉村正親「栗栖野瓦窯跡の調査(その2)」『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 平成4年度』京都市文化観光局、1993年

付表3 近世の瓦観察表

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範瓦の点数	同範瓦出土地点に近接する建物	備考
瓦74	軒丸瓦	土坑3582	1期	右卷三巴文。珠文15。界線あり。頭部先端に稜あり。尾部は長く、界線と接する。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ、一部面取り気味のナデになる。丸瓦凹面は吊り紐圧痕、横方向に縫目がある布目痕、一部縦ナデ。瓦当面に離れ砂(細粒～中粒)付着。	13	本堂、庫裡	瓦222と同範。
瓦75	軒丸瓦	土坑7087	1期	右卷三巴文。珠文13。界線あり。頭部先端に稜あり。	瓦当裏面はナデ、下半分は横ナデ。瓦当下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ。丸瓦凹面はコピキA、布目痕、横棧が付く。瓦当面に離れ砂(細粒～中粒)付着。	5	(方丈ないし庫裡)、塔頭	公家町出土瓦と同範。
瓦76	軒丸瓦	土坑3964	2期	左卷三巴文。珠文15。頭部は離れ、尾部は接する。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ。丸瓦凹面はコピキB、布目痕、一部縦ナデ。	1	庫裡	
瓦77	軒丸瓦	土坑3964	2期	右卷三巴文。珠文16。頭部は近接し、尾部は離れる。頭部の断面形は上部が平坦、半楕円形。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ。凹面はコピキB、布目痕、部分的に縦ナデ。范傷あり。	7	方丈・庫裡	
瓦78	軒丸瓦	土坑3964	2期	右卷三巴文。珠文16。頭部は近接、尾部は離れる。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ、沈線様の工具の痕跡あり。丸瓦凹面はコピキB、布目痕、部分的に縦ナデ。	5	方丈・庫裡	
瓦79	軒丸瓦	井戸3949	2期	右卷三巴文。珠文15。頭部・尾部は離れる。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ。丸瓦凹面はコピキB、布目痕、縦ナデ。瓦当面に離れ砂(細粒～中粒)微量付着。	1	(方丈・庫裡)	
瓦80	軒丸瓦	3区第3面掘下げ	2期	右卷三巴文。珠文18。頭部は近接、尾部は接する。	瓦当裏面はナデ、瓦当下面は横ナデ。丸瓦は欠損。瓦当面に離れ砂(中粒～粗粒)付着。	4	本堂	茶褐色砂粒を少量含む。
瓦81	軒丸瓦	土坑4196	2期	右卷三巴文。珠文15。頭部は近接、尾部は離れる。頭部断面形は上部が平坦、半楕円形。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデか。丸瓦凹面は布目痕。	1	(方丈・庫裡)	
瓦82	軒丸瓦	土坑3705	2期	右卷三巴文。珠文13。頭部は離れ、尾部は接する。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦は欠損。	3	庫裡	
瓦83	軒丸瓦	土坑2610	2期	右卷三巴文。珠文11。頭部は近接し、尾部は離れる。周縁幅3.2cm、内区に比して周縁幅が広い。	瓦当裏面はナデ、下端は横方向ケズリ。瓦当下面は横ナデ。丸瓦凸面は磨滅が顕著、一部縦ナデの痕跡が残る。丸瓦凹面は布目痕、一部縦ナデ。	7	方丈	
瓦84	軒丸瓦	井戸3949	2期	菊花文。凹弁八弁八重菊。ボタン状中房、径は大きい。	瓦当裏面はナデ。丸瓦凸面は縦ナデ、凹面はコピキB、ナデ、布目痕は不明瞭だが吊り紐圧痕あり。	1	(庫裡)	
瓦85	軒丸瓦	土坑2610	3期	右卷三巴文。珠文11。頭部は接触、尾部は離れる。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ、凹面はコピキB、布目痕。	9	方丈	
瓦86	軒丸瓦	土坑2610	3期	右卷三巴文。珠文17。頭部は近接、尾部は接する。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦は欠損。	2	方丈ないし庫裡	
瓦87	軒丸瓦	土坑3845	3期	右卷三巴文。珠文17。頭部は離れ、尾部は接する。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ、凹面はコピキB、布目痕、一部ナデ。瓦当歪みあり。	3	本堂・祖師堂	
瓦88	軒丸瓦	土坑5746	3期	左卷三巴文。珠文18。頭部は近接、尾部は接する。三巴文の外周は楕円形。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ。丸瓦凹面は縦方向に縫目がある布目痕、板状の工具による部分的なタタキ。瓦当面に離れ砂(雲母多量含む、粗粒)付着。	6	本堂・祖師堂	内タタキの初出。
瓦89	軒丸瓦	井戸3950	3期	右卷三巴文。珠文16。界線あり。頭部・尾部は離れる。丸瓦凸面に「榎木作 弥三左門」を陰刻(隅丸長方形の線で囲む)。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ、凹面は遺存状況が悪く詳細不明。周縁内端は幅広(7mm)の面取り。	11	本堂・庫裡	
瓦90	軒丸瓦	土坑3214	3～4期	右卷三巴文。珠文14。頭部・尾部は離れる。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦は欠損。周縁内端は幅狭(3mm)の面取り。被熱により変色。	3	本堂	

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範瓦の点数	同範瓦出土地点に近接する建物	備考
瓦91	軒丸瓦	1区第3面掘下げ	3期	右卷三巴文。珠文16。尾部は2本は接し、1本は離れる。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦凸面は縦ナゲ、凹面はコビキB、布目痕。	1	本堂	
瓦92	軒丸瓦	土坑3695	3期	右卷三巴文。珠文17。頭部・尾部は離れる。	瓦当裏面は磨滅により詳細不明。瓦当下面は横ナゲ。丸瓦凸面は縦ナゲ。丸瓦凹面は欠損により詳細不明。瓦当面・丸瓦凸面に離れ砂(雲母含む、細粒～中粒)付着。	1	本堂	
瓦93	軒丸瓦	土坑7352	4期	右卷三巴文。珠文13。頭部は離れ、尾部は接する。頭部の断面形は上部が平坦な半楕円形。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦凸面は縦ナゲ、凹面は布目痕。被熱により変色。	1	(祖師堂)	
瓦94	軒丸瓦	土坑3582	4期	右卷三巴文。珠文16。頭部・尾部は離れる。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦は欠損。瓦当面にキラコ(泥状)付着。周縁内端は幅狭(3mm)の面取り。	4	本堂	
瓦95	軒丸瓦	土坑3845	4期	右卷三巴文。珠文15。頭部・尾部は離れる。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦凸面は縦ナゲ、凹面はコビキB、粗い縦ナゲ。瓦当面に離れ砂(中粒～粗粒)付着。	4	本堂	
瓦96	軒丸瓦	土坑1310	4期	右卷三巴文。珠文15。頭部・尾部は離れる。文様は指押えにより成形。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦凸面は縦ナゲ、凹面は布目痕、一部ナゲ。瓦当面にキラコ(極細粒～細粒)付着。周縁外端は幅狭(3mm)の不明瞭な面取り。被熱により変色。	1	(本堂)	
瓦97	軒丸瓦	土坑2011	4期	右卷三巴文。珠文14。頭部・尾部は離れる。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦凸面は縦ナゲ、凹面はコビキB、布目痕、部分的に縦ナゲ。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。周縁外端は幅狭の面取り。被熱により変色。范傷あり。	13	本堂・方丈	
瓦98	軒丸瓦	4区第2面掘下げ	4期	右卷三巴文。珠文13。頭部・尾部は離れる。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦凸面は縦ナゲ、凹面は遺存状況が悪く詳細不明。瓦当面にキラコ(泥状)付着。被熱により変色。	1	不明	
瓦99	軒丸瓦	土坑1310	4期	右卷三巴文。珠文14。頭部・尾部は離れる。文様の上部を指押えて形状を整える。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦は欠損。周縁内端・外端は幅狭(2～3mm)の面取り。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	4	(本堂)	他に同型瓦3型式(計3点)あり。
瓦100	軒丸瓦	土坑3845	4期	右卷三巴文。珠文15。頭部・尾部は離れる。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦凸面は縦ナゲ後ミガキ、凹面は布目痕、一部縦ナゲか。周縁内端は幅広(6mm)の面取り。瓦当面にキラコ(細粒～中粒)付着。	4	(本堂)	
瓦101	軒丸瓦	土坑3845	4期	右卷三巴文。珠文13。頭部・尾部は離れる。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦凸面は縦ナゲ、凹面は遺存状況が悪く詳細不明。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。范傷あり。	2	(本堂)	
瓦102	軒丸瓦	土坑3705	4期	右卷三巴文。珠文13。頭部・尾部は離れる。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦凸面は縦ナゲ、凹面は遺存状況が悪いが縦ナゲか。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	5	本堂	
瓦103	軒丸瓦	土坑3498	5期	右卷三巴文。珠文15。頭部・尾部は離れる。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦は欠損。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	1	(庫裡)	
瓦104	軒丸瓦	土坑3214	5期	右卷三巴文。珠文13。頭部・尾部は離れる。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦凸面は縦ナゲ、凹面はコビキB、ナゲ、縦方向に工具痕あり。瓦当面にキラコ(細粒～中粒)付着。	1	(本堂)	
瓦105	軒丸瓦	柱穴3206	5期	右卷三巴文。珠文16。頭部は丸く、くびれが明瞭。断面形は半円形。珠文は円形で大きい。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦凸面は横ナゲ後、縦方向ミガキ。凹面は布目痕。周縁の内端・外端、瓦当裏面下端は幅狭(2～3mm)の面取り。瓦当面にキラコ(泥状)付着。	2	本堂	
瓦106	軒丸瓦	土坑6623	5期	抱き茗荷文。	瓦当裏面はナゲ、下面は横ナゲ。丸瓦凸面は縦方向ミガキ、凹面はコビキB。周縁外端は幅狭(4mm)の面取り。	4	方丈・庫裡、(塔頭)	
瓦107	軒平瓦	土坑3498	1期	外行3転唐草文。2転目の唐草文は小さい。中心文は上向き五葉文、下に珠点。中房は楔形の文様を上下に重ねて表現。界線あり。	瓦当裏面・下面は横ナゲ、下面両端に離れ砂付着。平瓦凸面は縦ナゲ、離れ砂付着。凹面は横ナゲ、布目痕あり。瓦当上端は幅狭(1mm)の面取り気味に整形。方形の釘孔あり。	5	庫裡	

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同 範 瓦 の 点 数	同 範 瓦 出 土 地 点 に 近 接 す る 建 物	備考
瓦108	軒平瓦	井戸3940	1期	外行3転連続唐草文。中心文は上向き三葉文、三葉文の直上に線を表現。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ後、粗い縦ナデ。コビキAの痕跡残る。平瓦凹面はコビキA、粗い横ナデ。平瓦凹面に離れ砂(雲母含む、細粒)付着。瓦当上端中央は幅広(18mm)の面取り。範傷あり。	17	本堂・祖師堂・方丈・庫裡	
瓦109	軒平瓦	土坑5940	1期	外行3転唐草文。中心文は上向き五葉文、下に珠点。界線あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。裏面下端はナデにより丸味を帯びる。平瓦凸面はナデ。平瓦凹面は縦ナデで、一部横ナデあり。瓦当上端は幅広(12mm)の面取り、下端は幅狭(2~3mm)の面取り。瓦当面に離れ砂(中粒~粗粒)付着。範傷あり。	1	(方丈ないし庫裡)	
瓦110	軒平瓦	3区攪乱	1期	外行2転連続唐草文。中心文は上向き五葉文の下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は遺存状況が悪く詳細不明。凹面は磨滅が著しいが横ナデか。範傷あり。	2	庫裡	
瓦111	軒平瓦	井戸3940	1期	外行1転唐草文。中心文は上向き三葉文。葉は葉脈を表現し、立体的。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は離れ砂(細粒~中粒)付着。平瓦凹面は横ナデ。瓦当上端は面取り気味に強く横ナデする。	11	庫裡	
瓦112	軒平瓦	土坑3582	1期	外行1転唐草文。中心文は上向き三葉文、葉脈はヘラ描き沈線で表現。文様の外形はヘラ状工具で整える。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。凹面はナデ、平滑に仕上げる。側縁に水切りの剥離面あり。範傷あり。	1	不明	
瓦113	軒平瓦	土坑7352	1期	外行3転連続唐草文と子葉。中心文は上向き宝珠文。界線あり。	瓦当裏面が工具による斜め方向ナデと横ナデ。瓦当下面は横ナデ。平瓦は欠損。範傷あり。	2	(祖師堂)、(本堂)	聚楽第出土瓦と同一の意匠。
瓦114	軒平瓦	土坑3582	1期	外行3転連続唐草文。中心文は上向き三葉文、下に珠点。一転目の唐草文を中心文の直上に表現する。	瓦当裏面は横方向に工具を用いたナデ。瓦当下面は横ナデ。平瓦凸面は縦ナデ。平瓦凹面は斜め方向ナデ。瓦当上端中央は幅広(10mm)の面取り。	2	(庫裡)	聚楽第出土瓦と同文。
瓦115	軒平瓦	4区第3面掘下げ	1期	外行2転唐草文。中心文は上向き五葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は斜め方向ナデ、凹面は横ナデ。瓦当上端中央は幅広(12mm)の面取り。瓦当面・平瓦凹面に離れ砂(粗粒)微量付着。範傷あり。	1	不明	
瓦116	軒平瓦	土坑4166	2期	外行2転連続唐草文。中心文は上向き三葉文。唐草文と中心文は複線で表現。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凹面は縦ナデ。凸面は遺存状況が悪く詳細不明。瓦当上端は幅広(13mm)の面取り。	1	不明	
瓦117	軒平瓦	土坑5958	2期	外行3転唐草文。中心文は上向き五葉文、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凹面はナデ。平瓦凸面は未調整の部分があり、ナデの範囲のみ平滑に仕上げる。瓦当面・平瓦凸面に離れ砂(細粒~中粒)付着。瓦当上端は幅広(12mm)の面取り。範傷あり。	2	(本堂と祖師堂)	
瓦118	軒平瓦	土坑5095	2期	外行3転唐草文。中心文は上向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は縦ナデ、凹面は横ナデ。瓦当上端は幅広(5mm)の面取り。	1	不明	
瓦119	軒平瓦	井戸3940	2期	外行1転唐草文。中心文は上向き三葉文、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は工具痕が斜め方向に残る。凹面は横ナデ。瓦当上端は幅広(6mm)の面取り、中央に向かって幅広になる。	3	庫裡	茶褐色砂粒を微量含む。
瓦120	軒平瓦	埋甕2235	2期	外行唐草文。中心文は上向き五葉文、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦は欠損。瓦当上端は幅広(9mm)の面取り。瓦当面に離れ砂(細粒~中粒)付着。	1	(方丈)	
瓦121	軒平瓦	土坑3705	2期	外行3転唐草文。中心文は上向き五葉文、下に珠点。	瓦当裏面は横ナデ。瓦当下面は横ナデ、離れ砂が付着する。平瓦凸面は縦ナデ後、横ナデ。瓦当との接合部は縦ナデ、工具痕が明瞭。平瓦凹面は横ナデ、布目痕が一部残る。瓦当上端中央は幅広(15mm)の面取り。瓦当面に離れ砂(極細粒~細粒)付着。	11	本堂、庫裡	
瓦122	軒平瓦	3区第3面掘下げ	2期	外行唐草文。中心文は上向き五葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は縦ナデ。凹面は布目痕が残る。瓦当上端は工具の当たりが弱く、幅狭(3mm)の不明瞭な面取り。瓦当面と平瓦凹面に離れ砂(細粒~中粒)付着。	1	(方丈ないし庫裡)	

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範瓦の点数	同範瓦出土地点に近接する建物	備考
瓦123	軒平瓦	2区第2面掘り下げ	2期	外行3転唐草文。中心文は上向き五葉文。	瓦当裏面は横ナデ、下面は離れ砂(中粒～粗粒)付着。平瓦凸面は縦ナデ。凹面は布目痕、横ナデ。凹面側縁に沿って水切りの剥離痕あり。瓦当上端は幅広(11mm)の面取り。瓦当面に離れ砂が一部付着。瓦当面は施文後ヘラ状工具により平滑に仕上げるが、その際唐草文が潰れている部分あり。平瓦凹凸面に離れ砂(中粒～粗粒)付着。	1	方丈	
瓦124	軒平瓦	井戸6214	2期	外行2転連続唐草文。中心文は上向き二葉文、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は粗い縦ナデ。凹面は縦ナデ、瓦当の直上はタキ状の工具痕あり。瓦当上端中央は幅広(5mm)の面取り。平瓦凹凸面に離れ砂(細粒)付着。	1	不明	茶褐色砂粒を少量含む。
瓦125	軒平瓦	井戸3949	2期	外行2転連続唐草文。中心文は上向き五葉文、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は斜め方向ナデ。平瓦凹面はコピキB、横ナデ。瓦当上端は幅広(9mm)の面取り。	1	(方丈ないし庫裡)	
瓦126	軒平瓦	井戸3940	2期	外行1転唐草文。中心文は上向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は縦ナデ。平瓦凹面は横ナデ。瓦当上端は幅広(9mm)の面取り。範傷あり。	1	庫裡	
瓦127	軒平瓦	土坑2610	2期	外行2転唐草文。中心文は上向き五葉文、先端が丸味を帯びる。下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。上縁から脇区にかけて工具による成形。平瓦凸面は縦ナデ、凹面は横ナデ、平滑に仕上げる。瓦当上端は幅広(9mm)の面取り。	1	(方丈)	
瓦128	軒平瓦	土坑2610	2期	外行1転唐草文と子葉。中心文は下向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。瓦当裏面の下端は幅狭(3mm)の面取り。平瓦凸面は遺存状況が悪く詳細不明。平瓦凹面は横ナデ、磨滅顕著。瓦当上端は幅広(10mm)の面取り。	3	庫裡、(方丈)	
瓦129	軒平瓦	井戸3949	2期	外行1転唐草文と子葉。中心文は上向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は縦ナデ。平瓦凹面は横ナデ、側縁に平行して片側にヘラ状工具痕あり。瓦当上端は幅狭(3mm)に面取りするが、上縁の横ナデにより不明瞭。瓦当面に離れ砂(細粒)付着。	7	本堂、方丈、庫裡	知恩院集会堂瓦と同文。
瓦130	軒平瓦	土坑5797	2期	外行1転唐草文と子葉。中心文は剣先形の三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ、凹面は縦ナデ。瓦当面・平瓦凹凸面に離れ砂(細粒)付着。	4	(本堂)、(祖師堂)	
瓦131	軒平瓦	土坑6142	3期	外行2転連続唐草文。中心文は上向き五葉文、先端が丸味を帯び、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面はナデ、凹面は横ナデ。瓦当上端中央は幅広(10mm)の面取り。瓦当面と平瓦凹面に離れ砂(細粒～中粒)付着。	2	方丈、塔頭	
瓦132	軒平瓦	土坑7352	3期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、上に二股に分かれる子葉を表現。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凹凸面は縦ナデ。瓦当上端は幅狭(3mm)の面取り、上縁を横ナデにより丸味を帯びる。範傷あり。	3	不明	
瓦133	軒平瓦	柱穴6925	3期	外行1転唐草文。中心文は上向き三葉文。立体的に表現。	瓦当裏面は横ナデ、下端は幅狭(2～3mm)の面取り。平瓦凹凸面は遺存状況が悪く詳細不明。瓦当上端中央は幅狭(3mm)の面取り。	2	本堂	寺町旧域・御土居跡出土瓦と同文。
瓦134	軒平瓦	柱穴2438	3期	外行2転唐草文。中心文は花文、珠点あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凹凸面は横ナデ。	1	方丈	本能寺瓦280と同一の意匠。
瓦135	軒平瓦	土坑5746	3期	外行3転唐草文。中心文は上向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。凹面は横ナデ、表面の剥離顕著。泥質の固形物付着、離脱剤か。範ずれあり。	1	(祖師堂)	
瓦136	軒平瓦	土坑5746	3期	外行2転唐草文。中心文は下向き三葉文、上に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は縦ナデ後、横ナデ。平瓦凹面は縦ナデ。瓦当上端は中央部に向かって幅広(15mm)の面取り。	2	本堂、祖師堂	
瓦137	軒平瓦	3区第2面掘り下げ	3期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は斜め方向ナデ、凹面は横ナデ。瓦当上端は幅広(10mm)の面取り。範傷あり。	1	不明	
瓦138	軒平瓦	1区第2面掘り下げ	3期	外行2転唐草文。中心文は上向き五葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。瓦当上端は幅広(5mm)の面取り。平瓦は欠損。	2	(本堂)、(方丈ないし庫裡)	

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範瓦の 点数	同範瓦出土 地点に近接 する建物	備考
瓦139	軒平瓦	井戸3950	3期	外行1転唐草文と子葉。中心文は上向き三葉文、珠点あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。凹面は横ナデ、全体に煤が付着。瓦当上端は幅狭(3~4mm)の面取り。	1	(方丈ないし庫裡)	
瓦140	軒平瓦	柱穴3681	3期	外行唐草文。中心文は花文。花文中心部の遺存状況は悪いが、粒状に表現か。	瓦当裏面は横ナデ。瓦当上端は幅広(6mm)の面取り。	1	不明	
瓦141	軒平瓦	土坑1310	3期	外行2転唐草文。中心文は花文、花文中心部は星形。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。平瓦凹面は横ナデ、布目痕。	2	(本堂)、北側塔頭	
瓦142	軒平瓦	2区第1面掘下げ	3期	外行唐草文。中心文は花文、珠点あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は粗い横ナデ、凹面は縦ナデ。瓦当面に離れ砂(細粒)付着。瓦当上端は横ナデ、丸味を帯びる。	2	方丈	
瓦143	軒平瓦	3区第2面掘下げ	4期	外行唐草文。中心文は上向き三葉文、中央の一葉剣先形。下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は遺存状況が悪く詳細不明。平瓦凹面は表面剥離。瓦当上端は幅広(5mm)の面取り。瓦当と平瓦の接合部はシャープ。	1	不明	公家町出土瓦と同文。
瓦144	軒平瓦	土坑3845	4期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は粗い横ナデ、凹面は縦ナデ。瓦当上端中央は幅広(5mm)の面取り。瓦当面に離れ砂(細粒)付着。	1	(本堂)	
瓦145	軒平瓦	土坑3845	4期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、中央の一葉剣先形、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。瓦当上端は幅狭(3mm)の面取り。	1	(本堂)	公家町出土瓦と同文。
瓦146	軒平瓦	1区第1面掘下げ	4期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、中央の一葉剣先形、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は縦ナデ、離れ砂(極細粒~細粒)付着。平瓦凹面は縦ナデ、一部横ナデ。瓦当上端中央は幅狭(2~3mm)の面取り。	18	本堂	
瓦147	軒平瓦	土坑1310	4期	外行2転唐草文。中心文は剣先形の上向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面はコピキB、縦ナデ。凹面は縦ナデ。瓦当上端は幅狭(4mm)、下端は幅狭(2mm)の面取り。内区外端は幅狭(2mm)の面取り。被熱により変色。	4	本堂	
瓦148	軒平瓦	3区第1面掘下げ	4期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、中央の一葉剣先形、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ、凹面は縦ナデ。瓦当上・下端及び内区外端は幅狭(2~3mm)の面取り。瓦当面にキラコ(泥状)、平瓦凸面に離れ砂(中粒~粗粒)付着。	2	(本堂)、北側塔頭	
瓦149	軒平瓦	4区第2面掘下げ	4期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。平瓦凹面は縦ナデ。瓦当面・平瓦凹面にキラコ(細粒)付着。	1	(方丈ないし庫裡)	天明八年火災瓦礫層から出土。
瓦150	軒平瓦	土坑3017	4期	外行2転雲形唐草文。中心文は三葉文、中央の一葉が逆U字、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ、離れ砂(粗粒)付着。平瓦凹面は横ナデ。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。被熱により変色。	12	(庫裡)	公家町出土瓦と同文。瓦239と同範。
瓦151	軒平瓦	3区第1面掘下げ	4期	外行2転雲形唐草文。中心文は三葉文、中央の一葉が逆U字、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。平瓦凹面は横ナデ、平滑に仕上げる。瓦当上・下端は幅狭(3mm)の面取り。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	15	本堂、庫裡、(祖師堂)	
瓦152	軒平瓦	土坑6143	4期	外行2転雲形唐草文。中心文は三葉文、中央の一葉が逆U字、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ、離れ砂(中粒~粗粒)付着。平瓦凹面は縦ナデ。凹面側縁に沿って水切りが付く。脇区側縁に面取り(1面)あり。瓦当上端は幅狭(3mm)の面取り、瓦当面と凹面の横ナデによって丸味を帯びる。被熱により一部変色。	1	塔頭	
瓦153	軒平瓦	土坑3845	4期	外行1転唐草文。中心文は上向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は粗い縦ナデ、凹面は横ナデ。瓦当上端中央は幅広(10mm)の面取り、粗雑な面取りで右側にかけて狭くなる。	1	本堂	
瓦154	軒平瓦	土坑3845	4期	外行1転唐草文と子葉。中心文は二葉文、珠点あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ後、部分的にナデ。凹面は縦ナデ、平滑に仕上げる。瓦当上端は横ナデ、丸味を帯びる。	2	本堂	

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範瓦の点数	同範瓦出土地点に近接する建物	備考
瓦155	軒平瓦	土坑3845	4期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、珠点あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ、離れ砂(極細粒)付着。凹面は横ナデ。平瓦凸面に離れ砂(粗粒)付着。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。	2	本堂	
瓦156	軒平瓦	2区排土	4～5期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文。三葉文中央部一葉のみ単線、他二葉と唐草文は複線で表現。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ、瓦当近くに横方向、等間隔に爪圧痕あり。凹面は縦ナデ、平滑に仕上げる。瓦当面と凹面にキラコ(細粒)付着。上縁の内端は一部幅狭(2mm)の面取り。范傷あり。	1	不明	公家町出土瓦と同文。軒棧瓦の可能性あり。
瓦157	軒平瓦	本堂IV基壇	5期	外行2転雲形唐草文。中心文は三葉文、中央の一葉が逆U字、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凹凸面は横ナデ。瓦当面にキラコ(泥状)付着。被熱により変色。	1	本堂	
瓦158	軒平瓦	4区第1面掘下げ	5期	外行2転雲形唐草文。中心文は三葉文、中央の一葉が逆U字、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凹凸面は横ナデ。瓦当上・下端は幅狭(1～2mm)の面取り。内区周縁は幅狭の面取り。被熱により変色。	1	祖師堂	元治元年火災瓦礫層から出土。
瓦159	軒平瓦	井戸6811	5期	中心文は花文。左右に葉文が付く。脇飾りは子葉。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ、凹面は縦ナデ。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。	3	塔頭	
瓦160	軒棧瓦	土坑1310	4期	軒丸部は右卷三巴文。珠文は12以上。軒平部は外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、下に珠点。	軒丸部の瓦当裏面はナデ。軒平部の瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ。平瓦凹面は横ナデ。瓦当裏面の軒丸部と軒平部の接合は軒平部が板状(長方形)。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。被熱により変色。	4	(塔頭)、本堂西面入口	
瓦161	軒棧瓦	土坑6244	4期	軒丸部は右卷三巴文。珠文11。頭部・尾部は離れる。軒平部は外行2転雲形唐草文。中心文は三葉文、中央の一葉が逆U字、下に珠点。	軒丸部の瓦当裏面はナデ。軒平部の瓦当裏面・下面は横ナデ。瓦当下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。丸瓦凸面は縦方向ミガキ、凹面は縦ナデ。軒平部瓦当面上・下端は幅狭(3mm)の面取り。軒平部脇区は角切り(2面)、鉄釘(角)が付着。平瓦凸面に離れ砂(粗粒)付着。	14	方丈・庫裡	
瓦162	軒棧瓦	1区第1面掘下げ	4期	中心文は上向きの花文、珠点あり。	瓦当裏面は横ナデ。平瓦欠損。	1	不明	
瓦163	軒棧瓦	祖師堂IV基壇	4期	外行唐草文。中心文は上向き三葉文、剣先形。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は離れ砂(中粒～粗粒)付着。平瓦凹面は縦ナデか。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。被熱により変色。	1	祖師堂	
瓦164	軒棧瓦	土坑7423	4期	軒丸部は右卷三巴文。軒平部は外行1転唐草文と子葉。中心文は上向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面はナデの痕跡あり、遺存状況が悪く詳細不明。丸瓦凸面は縦方向ミガキ。平瓦凹面は横ナデ。被熱により変色。	1	(方丈)	
瓦165	軒棧瓦	土坑7423	4期	立浪文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は遺存状況が悪く詳細不明、遺存部は平滑に仕上げる。凹面は縦方向ミガキ、平滑に仕上げる。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。	2	方丈、(北側塔頭か)	
瓦166	軒棧瓦	土坑5113	5期	軒丸部は右卷三巴文。軒平部は外行2転雲形唐草文。中心文は三葉文、中央の一葉が逆U字、下に珠点。	軒丸部の瓦当裏面はナデ。軒平部の瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ。平瓦凹面は横ナデ。瓦当上端は幅狭(2mm)で不明瞭な面取り。丸瓦に切込みあり。脇区外端に角切り(1面)。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。被熱により変色。	2	不明	
瓦167	軒棧瓦	地業2452周辺	5期	中心文は上向き橘文。	瓦当裏面は横ナデ、下端は幅狭(2mm)の面取り。瓦当下面は横ナデ。平瓦は欠損。瓦当面にキラコ(泥状)付着。瓦当上端は幅狭(3mm)の面取り。	1	方丈	
瓦168	軒棧瓦	柱穴3178	5期	外行唐草文。中心文は上向きの花文、珠点あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は遺存状況が悪く詳細不明。凹面は横ナデ。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	1	(方丈ないし庫裡)	
瓦169	軒棧瓦	2区攪乱	5期	外行2転唐草文。中心文は上向き二葉文。下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデと縦ナデの痕跡あり。凹面は横方向ミガキ。瓦当面にキラコ(泥状)付着。被熱により変色。	1	方丈	

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範瓦の点数	同範瓦出土地点に近接する建物	備考
瓦170	軒棧瓦	3区攪乱	5期	外行唐草文。中心文は上向き三葉文。下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦は欠損。瓦当面にキラコ(泥状)付着。被熱により変色。	1	不明	
瓦171	軒棧瓦	石組2004	5期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、下に珠点。	瓦当裏面・下端は横ナデ。平瓦凸面はナデ、離れ砂(中粒)付着。凹面は縦ナデ、平滑に仕上げる。瓦当上端は幅狭の(2mm)の面取り、脇区外端に角切り(1面)。	1	(方丈)	
瓦172	軒棧瓦	土坑6244	5期	外行2転唐草文。中心文は下向き三葉文、上に珠点。三葉文は葉脈を表現し、立体的。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は離れ砂(細粒)付着。平瓦凹面は縦ナデ、平滑に仕上げる。被熱により変色。	1	不明	
瓦173	軒棧瓦	井戸3109	5～6期	軒丸部は右巻三巴文。珠点13。頭部・尾部は離れる。軒平部は外行2転雲形唐草文。中心文は三葉文、中央の一葉が逆U字、下に珠点。	平瓦凸面は横ナデ。丸瓦凸面は縦方向ミガキ。平瓦凹面は縦ナデ。脇区上部に角切り(2面)。	1	庫裡	
瓦174	軒棧瓦	土坑5113	5～6期	軒丸部は右巻三巴文。軒平部は外行1転唐草文。中心文は下向き橘文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。瓦当裏面の下端は幅狭(2mm)の面取り。瓦当上端・下端は幅狭(3mm)の面取り。瓦当面にキラコ(中粒～粗粒)付着。	1	不明	
瓦175	軒棧瓦	土坑6623	5～6期	外行唐草文。中心文は花文。花文の中心は珠点で表現。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は遺存状況が悪く詳細不明。凹面は縦ナデ。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	1	塔頭	
瓦176	軒棧瓦	土坑6623	5～6期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は遺存状況が悪く詳細不明。凹面は横ナデ。瓦当面・平瓦凹面にキラコ(極細粒)付着。	1	塔頭	寺町旧城・御土居跡出土瓦と同文。
瓦177	軒棧瓦	土坑1006	5～6期	軒丸部は右巻三巴文。軒平部は外行2転唐草文。中心文は上向き五葉文、下に珠点。	瓦当裏面は横ナデ、下端は幅狭(2～3mm)に面取り。瓦当下面は横ナデ、一部ナデ。平瓦凸面はナデ。丸瓦凸面は縦ナデ、平瓦凹面は横ナデ。丸瓦凸面と平瓦凹面は平滑に仕上げる。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。脇区上端は角切り(1面)。瓦当面にキラコ(中粒～粗粒)付着。	3	(方丈)	
瓦178	軒棧瓦	3区第2面掘下げ	4期	外行2転雲形唐草文。中心文は三葉文、中央の一葉が逆U字、下に珠点。範の右側は直角に揃えておらず、段あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は粗い縦ナデ、凹面は横ナデ。範傷あり。同範の瓦は3点出土しており、本瓦の範傷が最も進行する。他2点は被熱により変色。	3	方丈	
瓦179	軒棧瓦	土坑1144	4期	外行1転唐草文と子葉2単位。中心文は上向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面はコビキB、ナデ。凹面は縦ナデ、一部ナデ、平滑に仕上げる。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。棧山は明瞭な稜あり。瓦当面・平瓦凹面にキラコ(泥状～極細粒)付着。	3	不明	広島藩大坂蔵屋敷に同一の意匠の瓦あり(愛媛県菊間産)。
瓦180	軒棧瓦	土坑3705	4期	外行2転唐草文。中心文は上向き花文。唐草文と中心文は複線で表現、弁端(くびれ部分)は珠点を複線で表現したもの。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凹凸面は横ナデ。瓦当上端は幅狭(4mm)の不明瞭な面取り。瓦当面・平瓦凸面に離れ砂(極細粒～細粒)付着。	1	不明	
瓦181	軒棧瓦	土坑3037	5期	外行1転唐草文と子葉。中心文は上向き橘文、下に珠点。右側、橘文と唐草文の間に「○(丸)」の陰刻あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。棧部分は欠損。平瓦凸面は横ナデ、凹面は工具を使用した縦方向ナデの後、横ナデ。	1	不明	
瓦182	軒棧瓦	土坑6623	5期	外行2転唐草文。中心文は上向き橘文。	平瓦凸面はナデ、凹面は縦ナデ。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。瓦当面にキラコ(細粒)付着。	1	不明	
瓦183	軒棧瓦	土坑1006	5期	外行2転雲形唐草文。中心文は宝珠文。	瓦当裏面は横ナデ、爪痕が付く。瓦当下面は横ナデ。平瓦凸面は縦ナデ。平瓦凹面は横ナデ、平滑に仕上げる。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	1	不明	
瓦184	軒棧瓦	土坑6151	5期	外行2転唐草文。中心文は五葉の花文、左右に葉文が伴う。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凹凸面は横ナデ。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	1	(番神社)	

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範瓦の点数	同範瓦出土地点に近接する建物	備考
瓦185	軒棧瓦	土坑5096	5期	中心文は上向き三葉文、下に珠点。脇飾りは子葉3単位を表現、外側の2単位は複線。	瓦当裏面・下面は横ナデ。瓦当凸面は横ナデ、凹面は縦ナデ。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	1	番神社	寺町旧域・御土居跡出土瓦と同文。
瓦186	軒棧瓦	土坑5096	5期	外行3転唐草文。中心文は上向き三葉文、下に粒状の珠点。三葉文は複線で表現。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は遺存状況が悪く詳細不明。凹面は縦ナデ。瓦当面にキラコ(細粒～中粒)付着。	1	番神社	
瓦187	軒棧瓦	石組2004	5～6期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ、粘土塊(小)・離れ砂(粗粒)付着。凹面は横ナデ後、部分的に縦ナデ。瓦当上端は幅狭(3～4mm)の不明瞭な面取り。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	1	(方丈)	
瓦188	菊丸瓦	4区第3面掘下げ	2期	菊花文。凹弁十二弁一重菊。中房は凸形で径は大きい。	瓦当外縁は横ナデ。	1	不明	
瓦189	菊丸瓦	土坑3582	3期	菊花文。凹弁十六弁一重菊。中房は凸形で径は大きい。花卉は接する。	瓦当外縁は横ナデ。差し込み部凸面は縦ナデ、凹面はコビキB。	7	本堂、方丈、塔頭	
瓦190	菊丸瓦	4区第2面掘下げ	3期	菊花文。凹弁八弁八重菊。ボタン状中房で、径は大きい。花卉は重なるように表現。	瓦当外縁は横ナデ。差し込み部凹凸面は縦ナデ。瓦当面に離れ砂(雲母含む、極細粒)微量付着。被熱により変色。	1	不明	
瓦191	菊丸瓦	3区第2面掘下げ	3期	菊花文。凹弁八弁一重菊。花卉に稜を表現。中房は凸形で径は大きい。花卉の内端は中房に沿って円形に整える。精緻な文様。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部凸面は縦ナデ、凹面は遺存状況が悪く詳細不明。被熱により変色。	13	本堂、方丈	
瓦192	菊丸瓦	井戸3109	3期	菊花文。凹弁八弁一重菊。中房は凸形で、輪郭は不明瞭。花卉の内端に稜を表現するものあり。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部凸面は縦ナデ、凹面は遺存状況が悪く詳細不明。	5	方丈、庫裡	
瓦193	菊丸瓦	3区第2面掘下げ	3期	菊花文。凹弁八弁一重菊。中房は凸形で径は大きい。花卉は稜があるものとないものがある。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は欠損しており詳細不明。	8	祖師堂、方丈、庫裡	
瓦194	菊丸瓦	土坑5096	3期	菊花文。凹弁八弁一重菊。中房は凸形で径は大きい、外形は不明瞭。花卉は稜があるものとないものがある。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は欠損しており詳細不明。被熱により変色。	1	不明	
瓦195	菊丸瓦	土坑3582	3期	菊花文。凹弁八弁一重菊。中房は凸形で径は大きい、外形は不明瞭。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部凹凸面は縦ナデ。	18	本堂、方丈、庫裡、塔頭	
瓦196	菊丸瓦	3区攪乱	3期	菊花文。凹弁八弁一重菊。中房は凸形で径は大きい、外形は不明瞭。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は欠損しており詳細不明。瓦当面に離れ砂(極細粒～細粒)付着。被熱により変色。	3	方丈	
瓦197	菊丸瓦	土坑3845	3期	菊花文。凹弁八弁一重菊。中房は凸形で径は大きく、花卉が接する。花卉は稜がある。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ、裏面と外縁のナデは差し込み部側縁まで連続して行く。差し込み部凸面は縦ナデ、凹面はナデ。	20	本堂、方丈、庫裡、塔頭	
瓦198	菊丸瓦	井戸3109	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。粒状中房。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。差し込み部は棒状、凹凸面は縦ナデ。瓦当面にキラコ(細粒～中粒)多量に付着。	2	祖師堂	
瓦199	菊丸瓦	土坑6611	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。凹形中房。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部凸面は縦ナデ、凹面はナデ。被熱により変色。瓦当面キラコ(細粒～中粒)多量付着。	4	塔頭内西側	
瓦200	菊丸瓦	土坑6260	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。ボタン状中房、径は小さい。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。周縁内端の一部を2～7mm幅の面取り。差し込み部凸面は縦ナデ、凹面は縦方向のナデ。範傷あり。	6	方丈	
瓦201	菊丸瓦	土坑6197	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。ボタン状中房。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。周縁外側は幅狭の面取り。差し込み部は棒状、上面は縦ナデ。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。被熱により変色。	6	(本堂ないし祖師堂)	

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同 範 瓦 の 点 数	同 範 瓦 出 土 地 点 に 近 接 す る 建 物	備考
瓦202	菊丸瓦	土坑6244	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。花卉は外形を線状に表現。ボタン状中房。文様に布目痕あり。	瓦当裏面は上下にナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は棒状、凸面は縦ナデ、凹面は側縁ナデの影響で筋目(しぼり痕)あり。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。箔傷あり。	8	本堂、祖師堂	
瓦203	菊丸瓦	4区第1面掘下げ	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。粒状中房。花卉間は離れる。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は遺存状況が悪いが凸面にナデの痕跡あり。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。被熱により変色。	4	本堂、祖師堂	
瓦204	菊丸瓦	石列6400掘形	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。ボタン状中房、径は小さい。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は欠損。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。被熱により変色。	1	祖師堂	
瓦205	菊丸瓦	2区北壁清掃	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。粒状中房。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は棒状、凸面は縦ナデ、凹面は遺存状況が悪く詳細不明。瓦当面にキラコ(極細粒～細粒)付着。被熱により変色。	7	祖師堂	
瓦206	菊丸瓦	土坑5096	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。粒状中房。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は棒状、凸面は縦ナデ、凹面はナデ。瓦当面にキラコ(泥状)付着。被熱により変色。	1	不明	
瓦207	菊丸瓦	4区第1面掘下げ	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。花卉は稜を表現し、文様は精緻。粒状中房。	瓦当裏面・下面は横ナデ。差し込み部は欠損。被熱により変色。	1	祖師堂	
瓦208	菊丸瓦	土坑2013	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。ボタン状中房、中房に指押えの痕跡あり。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。差し込み部凸面は縦ナデ、凹面は遺存状況が悪く詳細不明。瓦当面・瓦当裏面にキラコ(極細粒～細粒)付着。	4	方丈	
瓦209	菊丸瓦	土坑5096	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。粒状中房。範の木目が瓦当面に付く。花卉間は離れる。	瓦当裏面は上下にナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は棒状、欠損する。被熱により変色。	1	不明	寺町旧城・御土居跡出土瓦と同文。
瓦210	菊丸瓦	柱穴3342	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。ボタン状中房。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部凸面は縦ナデ、凹面はナデか。瓦当面にキラコ(極細粒～細粒)付着。	3	本堂	
瓦211	菊丸瓦	土坑6657	4期	菊花文。凹面八弁一重菊。粒状中房。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部凸面は縦ナデ、凹面は遺存状況が悪く詳細不明。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。被熱により変色。	1	南側塔頭内	
瓦212	菊丸瓦	土坑6611	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。粒状中房。文様に布目痕が付く。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は棒状、凸面は縦ナデ、凹面は横ナデ。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。被熱により変色。	2	南側塔頭内	
瓦213	菊丸瓦	土坑3845	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。ボタン状中房で、径は小さい。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部凹凸面は縦ナデ。瓦当面にキラコ(泥状)付着。	5	本堂	
瓦214	菊丸瓦	4区第1面掘下げ	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。粒状中房。	瓦当外面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は欠損。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。被熱により変色。	1	不明	
瓦215	菊丸瓦	土坑1310	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。ボタン状中房。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部凸面はナデ、凹面は遺存状況が悪く詳細不明、ナデの痕跡あり。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	1	本堂	
瓦216	菊丸瓦	土坑5032	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。粒状中房。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は棒状、凸面は縦ナデ、凹面は横ナデ。被熱により変色。	1	(方丈ないし庫裡)	
瓦217	菊丸瓦	3区第1面掘下げ	4期	菊花文。凹弁八弁一重菊。中房は凸形、径は小さい。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は棒状。凸面は縦ナデ、凹面はナデ。瓦当面にキラコ(泥状)付着。被熱により変色。	8	本堂	
瓦218	菊丸瓦	土坑3582	5期	菊花文。凹弁八弁一重菊。粒状中房。	瓦当裏面はナデ。差し込み部は欠損。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	1	不明	

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範瓦の点数	同範瓦出土地点に近接する建物	備考
瓦219	菊丸瓦	土坑6623	5期	菊花文。凹弁十六弁一重菊。ボタン状中房。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は棒状、欠損しており詳細不明。瓦当面にキラコ(泥状)付着。	1	塔頭	
瓦220	菊丸瓦	土坑5096	5期	菊花文。凸弁十六弁一重菊。凸形で円形の中房。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は棒状、欠損しており詳細不明。	1	不明	
瓦221	菊丸瓦	土坑5190	5期	菊花文。凸弁十六弁一重菊。ボタン状中房。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は棒状、欠損しており詳細不明。瓦当面にキラコ(泥状)付着。	3	(本堂)、(祖師堂)	
瓦222	鳥衾	土坑5130	1期	右卷三巴文。珠文15。界線あり。頭部先端に稜あり。頭部は離れる。尾部は界線と接する。	瓦当裏面は粗いナデ。筒部の横断面形は紡錘形。外面は縦ナデ後ミガキ、内面は粗いナデ。周縁内端は幅広(6mm)の面取り。被熱により変色。	1	本堂、庫裡	瓦74と同範。
瓦223	鳥衾	土坑5777	3期	右卷三巴文。珠文15。頭部は接し、尾部は珠文に接するもの一つ、他は離れる。	瓦当裏面は筒部に接しており詳細不明、下面は磨滅。筒部の断面形は紡錘形、外面は縦方向ミガキ、内面はナデ、離れ砂(中粒)付着。	3	(方丈)	
瓦224	鳥衾	土坑3582	4期	右卷三巴文。珠文13。頭部は離れ、尾部は接する。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。筒部は横ナデ、一部縦ナデ。周縁内端は幅狭(2~3mm)の面取り。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。被熱により変色。	1	(本堂)	
瓦225	鳥衾	土坑6244	4期	右卷三巴文。珠文16。頭部・尾部は離れる。頭部は丸く、くびれあり。	瓦当裏面は粗いナデ、瓦当下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ、凹面は遺存状況が悪く詳細不明。瓦当面にキラコ(細粒)付着。	1	(祖師堂)	
瓦226	鳥衾	土坑3845	4期	梅鉢文。范ずれあり。	瓦当裏面はナデ、筒部接合時の指押えあり。筒部外面の上部は縦方向ミガキ、下部は縦ナデ、平滑に仕上げる。筒部内面は粗い縦ナデ、布目痕が一部残る。周縁外端・内端は幅狭(2mm)の面取り。瓦当面にキラコ(細粒)付着。	1	(庫裡)	
瓦227	滴水瓦	土坑3582	3期	外行2転唐草文。中心文は下向き三葉文、上に珠点。脇区に「久左衛門」を陰刻(隅丸長方形の線で囲む)。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凹凸面は横ナデ、平滑に仕上げる。縦棧は欠損。他の瓦から縦棧を復元(図は点線で表現)。	6	本堂、庫裡	
瓦228	軒棧瓦	祖師堂IV基壇	4期	軒丸部は違い鷹羽文、軒平部は立浪文。	軒丸部の瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。瓦当下半分で破損しており、下半分のみ被熱で変色。軒平部の瓦当裏面・下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ、一部横ナデ。平瓦凹面は縦ナデ、一部ミガキ。平瓦は横ナデ。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。	17	方丈、(北側塔頭)	
瓦229	軒棧瓦	土坑2013	4期	軒丸部は八重桔梗文。	瓦当裏面はナデ、下端は幅狭(3mm)の面取り。下面は横ナデ。瓦当面にキラコ(細粒)付着。周縁外端は幅狭の面取り(2mm)。	15	方丈、庫裡	瓦228軒平部の立浪文と組み合う。
瓦230	軒棧瓦	土坑5096	4~5期	外行1転唐草文と子葉。中心文は下向き三葉文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ、凹面は縦ナデか。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。脇区は角切り(2面)。瓦当面・平瓦凹面にキラコ(極細粒~細粒)付着。	1	不明	
瓦231	滴水瓦か軒棧瓦	土坑5096	4~5期	中心文は外向する蕨手様の唐草文。左右に子葉を表現。	瓦当裏面は横ナデ。接合部に粘土を付加した後、横ナデ。瓦当下面は横ナデ。平瓦凸面は斜め方向ナデの痕跡あり、離れ砂・粘土塊(小)が付着。凹面は縦ナデ。瓦当上端は幅狭(2~5mm)の面取り。被熱により変色。	1	番神社	
瓦232	軒棧瓦	溝6196	5期	「瀧」の字の文様。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。周縁及び瓦当裏面外端は幅狭(2~3mm)の面取り。瓦当面にキラコ(泥状)付着。被熱により変色。	9	方丈	
瓦233	軒棧瓦	柱穴5032	5期	外行1転唐草文と子葉。中心文は花文、下に珠点。中心文は複線で表現。	瓦当凹凸面は横ナデ。瓦当裏面下端は幅狭(2~3mm)の面取り。平瓦凸面は横ナデ。平瓦凹面は横ナデ。瓦当上端は幅狭(2mm)の面取り。脇区上端と側縁を角切り(2面)。被熱により変色。	2	方丈ないし庫裡	

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範瓦の 点数	同範瓦出土 地点に近接 する建物	備考
瓦234	軒棧瓦	柱穴6825	5期	軒丸部は右巻三巴文。珠文16。頭部・尾部は離れる。軒平部は外行1転唐草文と子葉。中心文は花文、下に珠点。中心文は複線で表現。	軒丸部の瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。軒平部の瓦当裏面・下面は横ナデ。丸瓦凸面・平瓦凹凸面は横ナデ、平滑に仕上げる。軒丸部の周縁外端に幅狭(3mm)の面取り。軒平部の瓦当上端に幅狭(2mm)の面取り。脇区上端から側縁にかけて面取り。内区上縁に幅狭(2mm)の面取り。瓦当面にキラコ(泥状)付着。	3	祖師堂、方丈	
瓦235	軒棧瓦	土坑5113	5期	軒丸部は右巻三巴文。軒平部は外行1転唐草文と子葉。中心文は花文、下に珠点。中心文は複線で表現。	丸瓦凸面は縦ナデ。平瓦凹面は横ナデ後、部分的にナデ。平瓦凸面は横ナデ。軒丸部の周縁外端に幅狭(2mm)の面取り。軒平部の脇区上端から側縁に角切り(2面)。瓦当面にキラコ(泥状)付着。	1	(本堂)	
瓦236	軒棧瓦	2区攪乱	5期	立浪文。飛沫は珠点で表現。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は遺存状況が悪く詳細不明。凹面は横ナデ。脇区外端に幅広の角切り(1面)。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。被熱により変色。	1	(方丈)	寺町旧域・御土居跡・本能寺出土瓦と同範。
瓦237	軒棧瓦	柱穴2438	5～6期	軒丸部は右巻三巴文。軒平部の中心文は内向き蕨手様の唐草文。脇飾りに子葉を表現。	瓦当裏面は横ナデ。瓦当下面は横ナデ、縦方向に工具を用いた調整を行い、形状をシャープに加工する。平瓦凸面は横ナデ、凹面はナデ。	1	方丈	
瓦238	板塀瓦	土坑3498	4期	唐草文。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦表面はナデ、裏面は横ナデ。			
瓦239	見せ掛け袖瓦	土坑2013	4期	外行2転雲形唐草文。中心文は三葉文、中央の一葉が逆U字、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ、一部縦ナデあり。平瓦凹面は縦ナデ。瓦当上端中央に幅広(33mm)の面取り。脇区・脇区右上端に面取り(2面)。瓦当下端は幅狭(2mm)の面取り。平瓦凸面に離れ砂(細粒～中粒)付着。	12	北側の塔頭、方丈、庫裡	瓦150と同範。
瓦240	隅軒瓦	土坑1144	5期	外行1転唐草文と子葉。中心文は上向き橋文、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。瓦当裏面下端は幅狭(2mm)の面取り。平瓦凸面は遺存状況が悪く詳細不明。平瓦凹面は横ナデ、側縁に沿いへら状工具による沈線あり。瓦当上・下端は幅狭(2mm)の面取り。瓦当面にキラコ(中粒～粗粒)付着。	1	不明	
瓦241	隅軒瓦	土坑6768	5期	外行2転唐草文。中心文は上向き二葉文、珠点あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凹凸面は横ナデ。凹面側縁に沿って沈線(溝)あり。棧部分は欠損、残存する棧山部分は縦ナデ。釘孔2ヶ所あり。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	1	不明	
瓦242	鬼瓦	土坑5940	1期	鼻・髭が遺存。	鼻は小粘土塊を重ねながら成形。欠損した部分の剥離面は粘土塊の接合面と同じ。表面の凸部はミガキ、凹部はナデ。裏面は縦ナデ、一部櫛状の工具痕あり、横方向に紐状の粘土塊を上下に重ねて成形。髭はへら状工具で刻目を付けるように下方向に工具を移動させて線を表現。板部表面は指押えとナデ、裏面は工具を用いたケズリ、側板は上端中央に幅広の面取り2ヶ所あり。		(方丈)	
瓦243	鬼瓦	土坑3964	2期	頭・眉・眼が遺存、角は基部で欠損。	頭部の額飾りはへら状工具による沈線で表現。眉は大小の刺突で表現、瞳孔は円錐形の凹みに成形。裏面はナデ、布目痕あり、顔面の成形及び調整時の圧力により生じた凹凸が顕著。板部表面は円筒状工具による陰刻と縁取りの線刻あり。裏面は指ナデ、側縁は横位のみで、上端5cmより下位は焼成不良で軟質。		本堂	
瓦244	鬼瓦	土坑3582	4～5期	前頭部から鼻にかけて遺存。中央に角を表現。	頭髮は工具を用いて刺突状に施文。表面はナデ、裏面は縦ナデ。		本堂ないし方丈	
瓦245	棟端飾瓦	土坑3017	2～3期	八峰輪宝。周縁は正円ではなくやや扁平。鬼瓦の額飾りか。	中央の鬼目は沈線、八本の独鈷形は先端が鋭利な工具を用いて表現し、独鈷と独鈷の間には工具痕が残る。裏面は布目痕、上端はミガキ、平滑に仕上げる。		北側塔頭ないし庫裡	

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範瓦の 点数	同範瓦出土 地点に近接 する建物	備考
瓦246	留蓋瓦	土坑2041	5期	獅子を表現。	全体ナデ。細部はヘラ状工具を用いた沈線で表現。背面は粗いナデ、筒部の粘土板合わせ目には工具を用いた刺突状の穴あり。筒部内面は布目痕。外面全体にキラコ(極細粒)付着。		方丈	
瓦247	留蓋瓦	土坑3481	5～6期	桃と葉文。	釘孔4ヶ所。背面に「×」印のヘラ描きあり。表面はナデ、裏面は粗いナデ。外面全体にキラコ(極細粒)付着。		北側塔頭ないし庫裡	
瓦248	棟端飾瓦	土坑2262	5期	菊花文。十六弁二重菊、中央に井桁を表現。	周縁外端は幅狭の面取り。裏面はナデ。花弁間の孔は6ヶ所遺存する。全体で8ヶ所に復元でき、2孔ずつ対向する位置に孔を穿つ。表面にキラコ(泥状)付着。被熱により変色。		方丈	
瓦249	獅子口	土坑7626	4期	巴文は右巻三巴文。珠文12。頭部・尾部は離れる。珠文12。	瓦当外縁の上面は横ナデ後ミガキ、下面は粗い横ナデ。瓦当裏面はナデ。本体正面はナデの後、ヘラ状工具による斜位の文様を施す。本体上面は巴文直上が縦ナデ、左右は横ナデ。本体内面は粗いナデ。		方丈	
瓦250	棟端飾瓦	土坑6623	4期	足元(鱗)。	全体ナデにより平滑に仕上げ、側縁は工具を用いたナデ。内面は不明。釘孔4ヶ所。被熱により変色。		塔頭	
瓦251	棟端飾瓦	土坑5477	5期	足元(鱗)。十六弁一重菊と葉文。	表面はナデ、側縁は縦ナデ、平滑に仕上げる。側縁下端、表面の葉先端に当たる部分は縦方向ケズリ。内面は粗いナデ。		(本堂)	
瓦252	棟端飾瓦	土坑2107	5～6期	獅子口の別作りの台。十六弁一重菊と葉文。	表面はナデ、文様はヘラ状工具による沈線で表現。側縁は横ナデ。裏面は粗いナデ。内面は粗いナデ。釘孔は2ヶ所。菊花文の裏側に該当する内面には長方形の穴あり。		方丈	
瓦253	棟端飾瓦	土坑2107	5～6期	獅子口の足元(鱗)。十六弁一重菊と葉文。	表面はナデ、文様はヘラ状工具による沈線で表現。茎は先端が櫛状工具を用いた施文とナデで立体的に仕上げる。裏面は粗いナデ。下面は横ナデ、平滑に仕上げる。内面は粗いナデ。側縁に孔3ヶ所あり。内面に穴1ヶ所あり、表面の菊花蕾の裏面に当たり貫通孔ではない。		方丈	
瓦254	瓦埴	4区第2面掘下げ	4期		表面はナデ、平滑に仕上げる。2辺は端部に幅広(3～10mm)の面取り。裏面はナデ、一部銀化。側面は横ナデ。		方丈	
瓦255	棟端飾瓦	井戸2620掘形	4期	棟端飾瓦の外縁。鬼瓦か。表面に「□丙申」のヘラ描きした文字がある。	表面・側縁はナデ、平滑に仕上げる。裏面は粗いナデ。側縁の両端部は幅狭(2mm)の面取り。		方丈	
瓦256	棟端飾瓦	地業2445周辺	5期	獅子口系の棟端飾瓦。裏面に「大工井上三右」のヘラ描きした文字がある。	表面にナデ、2条の綾筋あり。裏面は粗い縦ナデ。釘孔3ヶ所あり。被熱により変色。		方丈	
瓦257	雁振瓦	土坑6406	5期	裏面に「大佛清」のヘラ描きした文字がある。	凸面は縦ナデ。凹面は縦ナデ、離れ砂(中粒～粗粒)付着。左右の熨斗と丸瓦の境界、凸状の屈曲部に縦方向のミガキを施し、形状を整える。		塔頭	
瓦258	丸瓦	土坑5096	3期	凸面に「久左衛門」を陰刻(隅丸長方形の線で囲む)。	凸面は縦方向ミガキ、凹面はコビキB、縦ナデ。被熱により変色。			
瓦259	滴水瓦	土坑3582	3期	外行2転唐草文。中心文は下向き三葉文、上に珠点と罽。范ずれあり。軒平部の凹面に「堺大小路」と「榎木作 弥三左門」を陰刻。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は縦ナデ、平滑に仕上げる。平瓦凹面は横ナデ。側縁の縦板は欠損。図は他の遺存状況の良い滴水瓦から三角形の縦棧を復元。瓦当面は内区外端を幅狭(2～3mm)の面取り。瓦当上端は幅狭(1mm)の面取り。被熱により変色。	6	方丈、庫裡	
瓦260	丸瓦	土坑3582	3期	凸面に「榎木作 弥三左門」を陰刻(隅丸長方形の線で囲む)。	凸面は縦方向ミガキ、凹面は縦方向の縫目のある布目痕。			
瓦261	平瓦	4区排土	5期	凸面に「京大佛瓦(師)井上三右衛門(門)」を陰刻。刻印の形状は入隅の長方形。	凸面は横ナデ。凹面はナデか、平滑に仕上げる。被熱により変色。			

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範瓦の点数	同範瓦出土地点に近接する建物	備考
瓦262	軒棧瓦	土坑2013	4期	外行1転唐草文と子葉。中心文は上向き三葉文、下に珠点。右脇区上位に半月形の陰刻あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凹凸面は横ナデ、平滑に仕上げる。瓦当上端は幅狭(3~4mm)の面取り。脇区上部から側縁にかけて角切り(1面)。瓦当面・平瓦凹面にキラコ(極細粒)付着。被熱により変色。	1	(方丈)	
瓦263	切隅板塀瓦	土坑3845	4期	剣垂れに「丸」を陰刻。	剣垂れ表・裏は斜位のナデ、下面は横ナデ。平瓦凹・凸面は斜位のナデ。平瓦凸面離れ砂(雲母含む、細粒)付着。			
瓦264	丸瓦	3区攪乱	4~5期	凸面に「大」を陰刻(丸の線で囲む)。	凸面は平滑に仕上げる。凹面は布目痕、タタキ。			
瓦265	丸瓦	4区第1面掘下げ	4~5期	凸面に「十」を陽刻(陰刻の丸で囲む)。	凸面は縦ナデ、凹面は布目痕、タタキ。被熱により変色。			
瓦266	丸瓦	土坑5032	5期	凸面に「京大佛瓦師井上三右衛門」を陰刻(隅丸長方形の線で囲む)。	凸面は縦方向ミガキ、平滑に仕上げる。凹面は板状工具によるタタキ。			
瓦267	軒棧瓦	土坑2238	5期	軒丸部は右卷三巴文。軒平部は外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、下に珠点。唐草文間の下位に、「二」の陽刻(丸の線で囲む)。	軒丸瓦の瓦当裏面は指押え、軒平瓦の瓦当裏面・下面は横ナデ。丸瓦凹面は縦ナデ、平瓦凸面は粗いナデ。丸瓦凸面・平瓦凹面は縦ナデ。瓦当上端は幅狭(2~3mm)の不明瞭な面取り。瓦当下端は幅狭(2mm)の面取り。	1	(方丈)	
瓦268	軒棧瓦	土坑6623	5期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、下に珠点。脇区に「口之口口口」5文字の陰刻あり(長方形の線で囲む)。唐草文間の下位に、「〇(丸)」の陰刻が4ヶ所あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。凹面は縦ナデ後、横ナデ。棧部分は欠損。瓦当面にキラコ(細粒)付着。	1	(塔頭)	
瓦269	軒丸瓦	4区第2面掘下げ	4期	凸面に「二」の陽刻(丸部分は陰刻)。	凸面は縦方向ミガキ、凹面はコビキB、布目痕、タタキ。			天明火災瓦礫層から出土。
瓦270	軒丸瓦	3区第1面掘下げ	5期	右卷三巴文。珠文は12以上。頭部・尾部は離れる。丸瓦凸面に「御用京大佛瓦師井上三右衛門」を陰刻。「御用」の下に横線あり、長方形の線で囲む。刻印上に斜線(沈線)あり。	瓦当裏面はナデ。丸瓦凸面は縦方向ミガキ、平滑に仕上げる。凹面はコビキB、粗い縦ナデ。釘孔1ヶ所あり。範傷あり。			
瓦271	軒棧瓦	土坑6768	5~6期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、下に珠点。瓦当面に「与」の陰刻(丸の線で囲む)。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は遺存状況が悪く詳細は不明、ナデの痕跡あり。平瓦凹面は横ナデ。瓦当上端に幅狭(2mm)の面取り。瓦当面にキラコ(粗粒)付着。	1	(方丈)	
瓦272	軒棧瓦	土坑6540	5期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、中房は剣先形、下に珠点。中心文と1転目の唐草文の間に、下向き三角形と上向き三角形を組み合わせた鱗形の形状を陽刻。中心文と1転目の唐草文の間に左右2ヶ所の陽刻。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は粗い縦ナデ、離れ砂(中粒)付着。凹面は縦ナデ。瓦当上端は幅広(5mm)の面取り。脇区及び脇区上端は角切り(2面)。瓦当面・平瓦凹面キラコ(中粒~粗粒)付着。	1	塔頭	寺町旧域・御土居跡出土瓦と同範。
瓦273	平瓦	井戸3109	5期	平瓦狭端部に「井上三右衛門」を陰刻。枠なし。	凸面は縦ナデ後、横ナデ、広端部側に横方向の楕目(2単位)。凹面は横ナデ、平滑に仕上げる。凹凸面にキラコ(細粒)付着。			
瓦274	掛瓦	土坑7423	5期	剣垂れに「昆太」を陰刻(長方形の線で囲む)。	剣垂れ裏面は横ナデ、下面はミガキ、平滑に仕上げる。凹面はナデ、平滑に仕上げる。凸面は粗いナデ。剣垂れ表面上端に幅狭(2mm)の面取り。右上端から側縁にかけて幅広の面取り(1面)。			
瓦275	軒棧瓦	土坑5096	5~6期	外行唐草文。右脇区に「十」を陰刻(丸の線で囲む)。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は粗い縦ナデ。凹面はミガキ、平滑に仕上げる。凸面にキラコ(泥状)付着。脇区上端から側縁にかけて角切り(1面)。			
瓦276	軒棧瓦	祖師堂IV	5~6期	外行1転唐草文と子葉。中心文は上向き橘文。左脇区上位に三角形の陰刻。三角形内に布目痕あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。凹面は横ナデ後、縦ナデか、部分的に平滑。瓦当面にキラコ(極細粒~細粒)付着。	2	(方丈)	

番号	種類	遺構名	時期	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	同範瓦の点数	同範瓦出土地点に近接する建物	備考
瓦277	軒丸瓦	土坑9027	2期	左巻三巴文。珠文16。頭部・尾部は接する。尾部は界線状。頭部は丸味を帯びるが、細長く不明瞭な稜あり。頭部・尾部の断面形は上面が平坦で、半楕円形。	瓦当裏面・下面は横ナデ。丸瓦凸面は縦ナデ、凹面はコビキB。	1		本能寺。
瓦278	軒丸瓦	土坑9004	3期	左巻三巴文。珠文16。頭部・尾部は離れる。頭部は円形、くびれは不明瞭。断面形は半円形。	瓦当裏面はナデ、下面は横ナデ。丸瓦は欠損。	1		本能寺。
瓦279	軒平瓦	土坑9034	1～2期	中心文は上向き三葉文。脇飾りに子葉を表現。	三葉文中央の一葉と子葉は断面凹形に表現する。瓦当裏面は横ナデ、下面は欠損。平瓦凸面は横ナデ。	2		本能寺。
瓦280	軒平瓦	土坑9004	3期	外行2転唐草文。中心文は花文、珠点あり。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は縦ナデ。平瓦凹面は横ナデ後、一部ナデ。瓦当上端は幅広(6mm)に面取り。中央部は焼成前の接触によって変形。	1		本能寺。 瓦134と同一の意匠。
瓦281	軒平瓦	土坑9002	3期	外行1転唐草文。中心文は上向き三葉文、下に珠点。三葉文外側の2葉は外傾する。唐草文下に横向きの輪鼓形の形状を陽刻。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。凹面は遺存状況が悪く詳細不明、横ナデか。瓦当上端中央に幅広(8mm)の面取り。	1		本能寺。
瓦282	軒平瓦	土坑9045	3期	外行2転連続唐草文。中心文は上向き七葉文。中央部の一葉が剣先形。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦は欠損。	1		本能寺。 焼成不良で断面は灰色。
瓦283	軒平瓦	井戸9003	3期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文。中心文及び1転目の唐草文は複線で表現。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面は横ナデ。凹面は縦ナデか。瓦当面・凹凸面に離れ砂(細粒)付着。	1		本能寺。
瓦284	軒棧瓦	土坑9004	5期	外行2転唐草文。中心文は上向き三葉文、下に珠点。	瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦は欠損。瓦当面にキラコ(極細粒)付着。	1		本能寺。
瓦285	菊丸瓦	土坑9025	4期	菊花文。凹弁十六弁一重菊。花弁は接する。ボタン状中房、径は大きい。	瓦当裏面はナデ、外縁は横ナデ。差し込み部は欠損。	1		本能寺。

付表4 錢貨観察表

番号	種類	初鑄年	遺構名	外径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
銭1	隆平永寶	796	掘下げ4区第6面			0.15	1.39	
銭2	富壽神寶	818	土坑7818	2.35	0.63	0.15	2.44	
銭3	太平通寶	976	4区第3面掘下げ	2.38	0.65	0.13	2.41	
銭4	祥符元寶	1008	3区第4面掘下げ	2.89	0.62	0.11	2.39	
銭5	聖宋元寶	1011	4区第4面掘下げ	2.37	0.67	0.14	2.84	篆書
銭6	天禧通寶	1017～	1区第3面掘下げ	2.55	0.45	0.11	3.13	
銭7	天聖元寶	1023	柱穴3716	2.53	0.49	0.14	2.88	
銭8	皇宋通寶	1039	土坑7087	2.44	0.68	0.11	2.47	篆書
銭9	至和元寶	1054	石室3813	2.51	0.69	0.15	3.42	篆書
銭10	嘉祐元寶	1056	石列6660	2.33	0.62	0.13	2.32	
銭11	熙寧元寶	1068	石列6400	2.50	0.69	0.13	3.62	
銭12	元豊通寶	1078	4区第4面掘下げ	2.47	0.69	0.14	2.84	
銭13	元祐通寶	1086	庫裡Ⅲ柱穴3058	2.40	0.62	0.13	3.73	篆書
銭14	紹聖元寶	1094	土坑7087	2.32	0.71	0.10	1.58	篆書
銭15	大觀通寶	1107	石室3813	2.44	0.63	0.13	2.42	
銭16	永樂通寶	1408	4区第3面掘下げ	2.50	0.50	0.13	2.65	
銭17	寛永通寶	1637	4区第4面掘下げ	2.41	0.56	0.14	3.39	岡山銭
銭18	寛永通寶	1637	土坑2300	2.49	0.58	0.12	2.67	竹田銭
銭19	寛永通寶	1668	4区第2面掘下げ	2.51	0.60	0.12	3.07	退点文
銭20	寛永通寶	1714	溝5015	2.53	0.58	0.14	3.27	退点文
銭21	寛永通寶	1736	土坑3582	2.31	0.61	0.10	2.43	輪十鑄込
銭22	寛永通寶	1737	土坑5113	2.29	0.69	0.11	2.37	亀戸大字
銭23	寛永通寶	1738	土坑5635	2.36	0.62	0.10	2.17	秋田大字
銭24	寛永通寶	1740	土坑3481	2.18	0.64	0.10	1.79	輪筋違川
銭25	寛永通寶	1741	土坑6452	2.19	0.68	0.10	2.01	細字背元
銭26	寛永通寶	1769	土坑7178	2.86	0.65	0.13	5.01	正字 11波
銭27	寛永通寶		墓7343	2.44	0.61	0.14	3.77	六道銭 古
銭28	寛永通寶		墓7343	2.46	0.53	0.12	2.71	六道銭 古
銭29	寛永通寶		墓7343	2.33	0.58	0.12	2.65	六道銭 新
銭30	寛永通寶		墓7343	2.29	0.65	0.12	2.31	六道銭 新
銭31	寛永通寶		墓7343	2.38	0.60	0.11	2.68	六道銭 新
銭32	寛永通寶		墓7343	2.45	0.61	0.13	2.98	六道銭 新
銭33	文久永寶	1863～	4区第1面検出	2.68	0.71	0.13	3.89	玉字 波
銭34	桐1銭青銅貨	1919	柱穴6496	2.32		0.13	3.67	

付表5 金属製品観察表

番号	種類	遺構名	長さ(cm)	幅・径(cm)	高さ(cm)	材質	備考
金1	皿	土坑6623		10.2	2.1	真鍮	高台付
金2	蓋	土坑6244		4.4	1.6	青銅	
金3	蓋	土坑7087		12.8	3.0	青銅	
金4	飾金具	4区第3面清掃	6.8	6.6		金銅	輪宝
金5	飾金具	土坑6244	2.2	2.3		金銅	
金6	飾金具	4区第2面掘下げ	4.5	1.9		金銅	
金7	飾金具	土坑6586	2.5	3.6		金銅	
金8	飾金具	柱穴3483	3.1	4.0		金銅	
金9	飾金具	土坑6586	2.1	(2.0)		金銅	
金10	分銅	4区第4面掘下げ	1.6	1.0		銅	9.3g
金11	燭台	土坑2003	4.3	3.7		真鍮	
金12	匙	3区第3面掘下げ	9.9	(4.7)		銅	
金13	匙	3区第4面検出	(21.6)	(5.6)		青銅	
金14	煙管	池2004	7.3	1.1		真鍮	
金15	煙管	池2004	7.3	1.1		真鍮	
金16	煙管	土坑9034	9.8	0.8		銅	
金17	簪	4区第2面掘下げ	(7.0)	7.0		真鍮	
金18	簪	土坑6244	(9.7)	0.9		真鍮	
金19	簪	土坑5277	(16.3)	1.2		銅	
金20	火箸	4区排土	16.7	0.6		真鍮	
金21	火箸	土坑2369	(16.4)	0.3		銅	
金22	釘	2区第1面掘下げ	4.4	1.2		銅	
金23	釘	4区第2面掘下げ	(3.4)	0.6		鉄	
金24	釘	4区第2面掘下げ	6.3	0.6		鉄	
金25	釘	祖師堂IV掘下げ	12.5	1.0		銅	
金26	釘	4区第2面掘下げ	10.1	0.6		鉄	
金27	大釘	3区第3面掘下げ	28.9	3.0		銅	
金28	大釘	4区第3面検出	24.1	2.4		鉄	

付表6 石製品観察表

番号	種類	遺構名	長さ(cm)	幅・径(cm)	高さ(cm)	材質	備考
石1	石製鈔具	溝8097	3.3	3.5			未製品
石2	数珠玉	4区第4面掘下げ	1.8	1.9		滑石	
石3	基石白	3区第3面掘下げ	2.1	2.1		石英か	
石4	基石黒	柱穴1072	1.7	1.8		泥質フォルンフェルスか	
石5	角形容器	祖師堂IV掘下げ	5.3	5.4	1.3	滑石	合子か
石6	硯	3区第3面掘下げ	8.0	3.1	1.0	頁岩～粘板岩	小型 線刻「高嶋」
石7	硯	土坑5182	15.6	5.7	2.1	頁岩～粘板岩	軟質・安価
石8	硯	土坑5182	21.4	7.8	2.8	頁岩～粘板岩	やや軟質
石9	硯	3区第3面掘下げ	12.0	9.0	2.1	頁岩～粘板岩	角型 江戸初期か
石10	硯	1区第3面掘下げ	13.3	(9.2)	2.2	フォルンフェルスか	丸型 江戸初期か
石11	石鍋	溝5478		17.7	(5.1)	滑石	
石12	石鍋	柱穴5033		21.5	(5.7)	滑石	
石13	石臼	2区重機掘削		27.4	14.3	花崗岩	
石14	石仏	排土4区		(24.6)	(26.0)	花崗岩	二体仏
石15	墓石	柱穴7157		10.9	(17.8)	砂岩	墓石 寛永三年の銘あり
石16	一石五輪塔	石列6400		14.8	(45.7)	砂岩	墓石 元和四年の銘あり
石17	一石五輪塔	井戸6241		(12.5)	(36.5)	砂岩	墓石 元龜元年の銘あり
石18	宝篋印塔	土坑7087		(12.6)	(41.3)	花崗岩	相輪

付表7 ガラス製品観察表

番号	種類	遺構名	長さ(cm)	幅・径(cm)	高さ(cm)	備考
ガ1	珠	墓7399		0.7	0.3	中心部に孔
ガ2	瓶	池2004		4.0	11.8	「京都牧畜場」銘
ガ3	瓶	土坑6768		4.8	19.3	「森田牧場伊東」「全乳」銘

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	てらまちきゅういき (みょうまんじあと・ほんのうじあと)							
書名	寺町旧域 (妙満寺跡・本能寺跡)							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2016-18							
編著者名	小檜山一良・後川恵太郎・上村和直							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2018年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てらまちきゅういき 寺町旧域	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 おしこうじどおりかわら 押小路通河原 まちにしいるえのきちょう 町西入榎木町 450番1ほか	26100	170	35度 00分 45秒	135度 46分 04秒	2015年9月 8日～2017 年3月30日	5,019m ²	新庁舎 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
寺町旧域	寺院跡	弥生時代 ～古墳時代	流路	弥生土器、土師器、須 恵器		近世初頭から明治 以降の妙満寺の遺 構を検出した。		
		平安時代	井戸、土坑、溝、 石列	土師器、須恵器、灰釉 陶器、緑釉陶器、焼締 陶器、輸入陶磁器、瓦、 石製品、金属製品				
		鎌倉時代 ～室町時代	井戸、土坑、溝	土師器、焼締陶器、施 釉陶器、輸入陶磁器、 瓦器、瓦類				
		江戸時代以降	建物、井戸、土坑、 溝、池	土師器、焼締陶器、施 釉陶器、国産磁器、瓦 器、瓦類、金属製品、 石製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-18
寺町旧域（妙満寺跡・本能寺跡）

発行日 2018年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961